國民編成の討議

（座談會）建大・八教授

藝文

六月號

現代の國生み　森信三

扁桃腺炎
肺炎
中耳炎

感冒

テラポール錠

化膿菌・淋菌のみならず肺炎菌インフルエンザ菌をも撲滅するテラポールの生體內殺菌作用は既に許多・感冒肺炎・氣管支加答兒・扁桃腺炎中耳炎・耳下腺炎等に就く試驗せられて顯著なる治療効率を示したり。

東京市日本橋區江戸橋 第一製藥株式會社
奉天市大和區[illegible]町 滿洲第一製藥株式會社

奉天 柏內化學工業所

美しさ！健やかさ！

滿點の お肌を 創る！

ホノクリーム

新製品

大陸の氣候に
ピッタリ合ふ

ホノクリームは、大陸の風、大陸の陽に荒されるお肌をまもり、日本女性の誇る特有の肌の美を輝かせる、御待望のクリームです。ホノクリームは、深く肌に滲透して、根本から肌を美化、强化する新榮養素を豐富に含んでゐます。

血色のよい、つやつやした、白粉のよくのびる、さつぱりした、滿點の肌をお望みの方に御推奬いたします！

藝文 第一巻 第七號 六月號 目次

扉……池邊青李

現代の國生み……森信三 (6)

思想戰主體としての協和會……田川博明 (31)

興亞の理念と儒教……高遵義 (112)

國民編成の討議 (建大教授團座談會) (74)

鼻を探す文學 (文藝時評)……遠田民夫 (44)

歷史的觀點の意義 (文化時評)……桐天吉 (140)

謝恩特派大使に隨行して……武藤富男 (88)

滿洲の「季」に就て (下)……金丸精哉 (126)

航空の新展望……内海次郎 (160)

◇ロシヤに於ける滿洲研究 (上)……坂口數雄 (60)

◇濠洲の文學と風土……北小路功光 (102)

開拓地の衛生對象……秋月正一 (168)

長白山の歷史……村山釀造 (148)

滿洲のメインテーブルを圍む人々……雅本秀敏 (192)

英靈に捧ぐ……大杉勝美 (101)

成吉思汗と義經入蒙傳說……山本守 (52)

滿洲文學の二十年 (六)……大内隆雄 (180)

俳句 印度洋海戰……梶原寅次郎 (139)

●兵隊の持場……佐藤觀次郎 (94)

DS781 G43 1:7

満洲の「季」に就て（下）……金丸精哉（126）
航空の新展望……内海次郎（160）
◇ロシヤに於ける滿洲研究（上）……坂口數雄（60）
◇濠洲の文學と風土……北小路功光（102）
開拓地の衛生對象……秋月正一（168）
長白山の歴史……村山釀造（148）
滿洲のメインテーブルを圍む人々……雅本秀敏（192）
英靈に捧ぐ……大杉勝美（101）
成吉思汗と義經入蒙傳説……山本守（52）
滿洲文學の二十年（六）……大内隆雄（180）
俳句 印度洋海戰……梶原寅次郎（139）
●兵隊の持場……佐藤觀次郎（94）
●東京の七日間……楳本捨三（174）
辻説法……丸山海介（156）
前線の住民と住居（繪と文）……今井一郎（158）
大東亞戰爭川柳日誌……居平洞學人（128）
節米と糯黍の食用に就て……（183）

文學近事……仲賢禮（125）
映畫近事……高尾憲太郎（155）
美術近事……池邊青李（186）
演劇近事……藤川研一（167）
音樂近事……鳥羽亮吉（187）
寫眞近事……加持正範（181）

—創作—

小説 大淩河……戈禾 大内隆雄譯（189）
小説 鶯……晶埜ふみ（22）

疲勞恢復に

三共 SANKYO

强力ビタミンB劑

オリザニン

疲勞の原因としてはエネルギーの給源たる含水炭素の新陳代謝が妨げられる結果に因ると云はれ、或は體內の糖分が分解して乳酸を生じ之が體內に蓄積するからであるとも云はれてゐる。

ビタミンBの補給は含水炭素の新陳代謝に必要缺く可らざるものであり、又體內乳酸の生成を防止し、細胞機能ノ低下を未然に防ぐことは既に實證せられてゐる。

(末・錠・液・エキス・注射液)

東京・日本橋・室町　三共株式會社

榮養と治療の二重作用

疾病の治療には榮養が決定的な役割を果します。

アミノ酸、グリコーゲン、脂肪、無機質の四大榮養素を始め各種ビタミン、活性酵素を豐富に含む「若素」は、その綜合力により獨特の細胞賦活作用を發揮し、食慾增進、榮養充實、增血殺菌、衰弱恢復の目的を達し、胃腸諸症、結核、姙産婦障碍、小兒虚弱等々著効を奏します。

錠劑 二十五日量
粉末 三十日量
一圓六十錢

若素

奉天市信濃町十七號　若素製藥株式會社

ラジオ聽取皆様の中で
御轉勤、家移りの場
合は水道やガスと同じに移轉通知書を最寄
りの電報電話局、放送局、
ラジオ營業所へ出しませう。また
ラジオを本當に可愛がる
には届けてお聽きになる
ことでは法的にも正しい聽
き方です。

滿洲電信電話株式會社

●東京の七日間……楳本捨三
辻説法……丸山海介
前線の住民と住居（繪と文）……今井一郎
大東亞戰爭川柳日誌……居平洞學人
節米と糯黍の食用に就て……

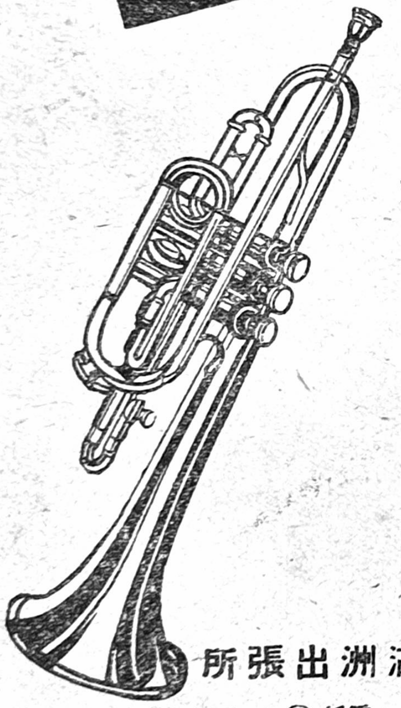
創作
小説 大淩河……戈禾 大内隆雄譯

文學近事……仲賢禮（125）
映畫近事……高尾憲太郎（155）
美術近事……池邊青李（186）
演劇近事……藤川研一
音樂近事……鳥羽亮吉
寫眞近事……加持正範

タナベの吹奏楽器

ブラスバンド
旋律ラッパ隊
信號ラッパ

輸入
管樂器修理
樂譜



株式會社田邊樂器本社滿洲出張所

新京特別市大和通四二　電話③二七九二

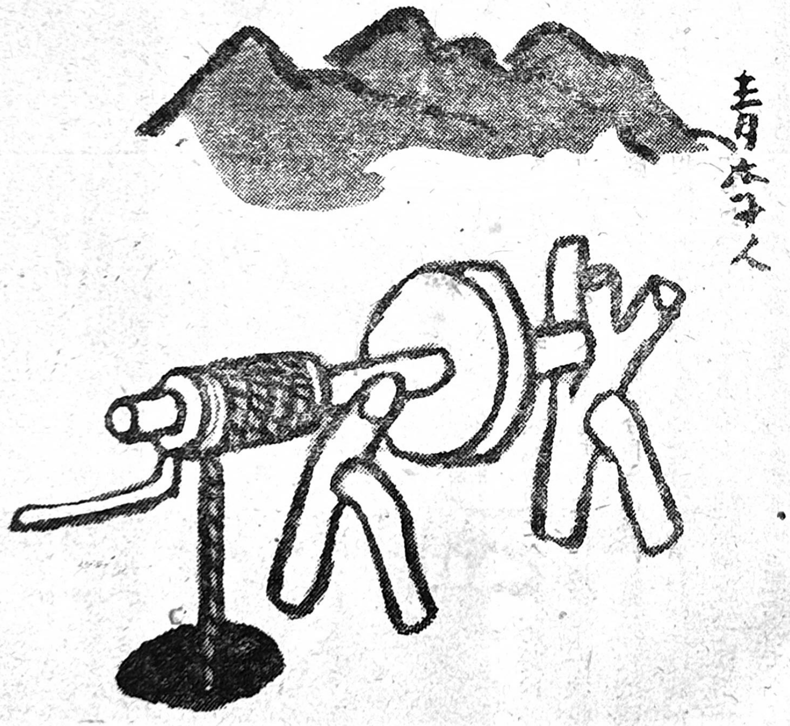
本社　東京市芝區新橋二ノ二　電話銀座一四八〇・四四四一

玉川工場　東京市世田ケ谷區三〇五五

日暮里工場　東京市荒川區日暮里一丁目

臺灣出張所　臺北市建成町一ノ一二一

藝文



第一卷・第七號・六月號

淋疾
横痃・下疳
第四性病
中耳炎
扁桃腺炎
齒槽膿漏
眼瞼炎
皮膚化膿

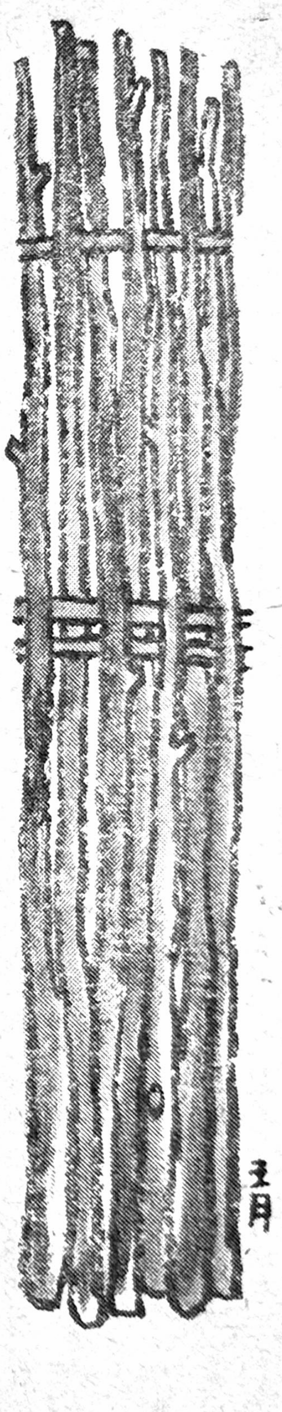
包裝
二十錠
百錠

内服のみで化膿菌を一掃短時日に治癒

淋疾を始め廣汎な各科化膿症が、化學療法劑によつて短時日に治癒を見る、之は正に人類の大きな福祉である。而も數ある化學療法劑中効果的確にして副作用の懸念なきは、獨リアルバジルの特長とするところである

アルバジル錠

製造發賣元 東京・大阪 山之内藥品商會 北京・上海・廣東
奉天市大和區紅梅町二番地



現代の國生み

——滿洲建國原理の究明——

森信三

一　神命世界史觀

思ふに我が滿洲國の出現はこの世紀に於ける最初の眞の世界史的事件といふべきであらう。成程世界史の展開が廿世紀に入つてこの方、地球面上に生起した出來事の數は尠くない。併しそれらのうち我が滿洲國の出現こそはまさにその本質的意義に於ける最初の世界史的事件といはるべきものと思はれる。人或は第一次世界大戰を以て今世紀に於ける最初の世界史的出來事と考へるかも知れない。成程第一次世界大戰も一應の意味に於ては確に今世紀に於ける世界史的事件といふに相應はしき大戰ではあつた。併し乍ら我々は我が滿洲國の出現を以つて少くともその本質的意義に於ては第一次世界大戰に劣らぬ重大意義を內包するものと思ふのである。成程第一次世界大戰もそれが世界史上最初の世界大戰たることに於ては、ひとり廿世紀初頭に於ける重大事件といふのみでなく、或る意味では世界史上未曾有の重大事件ともいへぬことはない。卽ち第一次世界大戰は世界に於ける列國の對峙緊張的關係の進展が今や地上の一地域に於ける戰爭をして單にその地域に於ける戰爭たるに止めないで、その世界史的聯關の故を以つて常に世界大に波及するの必然性の最初の實證としてその世界史上に占むる意義は大きい。

しかも我々は今わが滿洲國の出現を以て之に比する時少くとも我々東方人としてはその內含する本質的意義は第一次世界大戰以上であるとしても斷じてそれ以下ではないと思ふのである。成程その地域よりいへば我が滿洲國の地域はかの第一次世界大戰の波及した範圍に比すれば外延的には確にその幾十分の一にも足りないであらう。しかも之等兩者の包藏するその內包的意義に到つては全くその本質を異にする。なるほど第一次世界大戰は一應之をその波及せる範圍からは之を世界大戰といふに何等の差支へもないであらうが、しかもその內含する本質的意義は畢竟歐洲大戰といふべきである。卽ちそは之を一言にして歐洲文明自身の內包せる自己矛盾の暴露といふべきだからである。唯當時の世界情勢はその矛盾崩壞をして眞に徹底的ならしむるに到らなかつたに過ぎない。然るに我が滿洲國の出現は、なるほどその地域の外延性に於ては前者の幾十分の一に過ぎぬとはいへ、その內含する本質的意義に於ては、まさしく過去百年間世界をその力によつて支配制壓し來つた白人勢力に對する我等亞細亞人の自主的自立の第一步であつた。かくして前者はその波及せる範圍の世界大なるにも拘らずその意義消極的であるに對して、後者の內含するものは世界史に對してより深き本質的意義を有するとせざるを得ない。

如上の意味に於てわが滿洲國建國の意義はまさに語の本義に於ける眞の世界史的事件といふべきであつて、そは本質的には第一次世界大戰に勝るとも決して劣らぬ意義を有するのである。卽ちわが國建國の眞意義はひとりわが滿洲國の建國のみに止まるべきものでなく、その內含する意義は無限の展開性を包藏するものであり、その展開性は窮極には竟に世界大にも及ぶべきものである。只その世界大展開は、かの第一次世界戰爭の如き外延的波及でなくしてまさに內包的であり、そは常に光被としての世界更改の意義を有するものである。而してその事は先づ支那事變としてその展開の火蓋を切つたが、今や大東亞戰によつて愈々その本質的意義を展開實證するに到つたのである。げにわが滿洲國の建國は支那事變

——(現代の國生み)——

を必至とせるものといふべく、而して大東亞戰は支那事變の意義の徹底遂行より來る必然的展開に外ならない。かくしてわが滿洲國の建國は日滿華三國の提携によつて初めて眞の第一歩に歩み入つたのである。しかも支那事變を契機として大東亞戰にまで展開せるもの丶意義は、また單に東亞の天地に止まるべきものでなくして無窮であり、竟には全世界光被にまで到らずんば已まないものである。かくしてわが國建國の意義はかの第一次世界大戰に比してより深大であり、そこには世界史に對する意義の次元的相違がある。

然らば何をか世界史に對する意義の次元的相違といふのであるか。それは前者の發生は所謂西歐文明の內含する內的矛盾の崩壞、即ち之を一言にして自壞作用としての自然的必然であるに對して、わが滿洲國の出現は、かくの如く歪曲せられたる世界史進行の方向に對する更改是正の大業として意志的必定性に基づくが故である。即ち彼を自然的必然による平面的生起現象とすれば、此は意志的必定性に基づく立體的建立の積極的意義を有するが故である。勿論こゝに意志的必定性といふも、そは單なる個人意志の必定性でないことといふまでもない。即ちそは單なる個人意志でなくして國家意志であるが、しかもそは單に相對的なる國家意志ではない。單なる相對的國家意志ならば世界史の進行を更改是正するの力を有しない。眞に世界史の方向を更改是正せしめ得るものは、現象的にはなべての相對國家と等しき國土その他の相對的制約をもちつゝ、その內面本質に於てはかゝる相對的制約を超えて宇宙的生命としての神的生命に直續するものでなくてはならぬ。而して我々は斯くの如き邦國を我が國の「生みの親」としての親邦大日本皇國に見るのであり、わが國の出現は實にかくの如き絕對國家としての親邦日本の世界史的自覺にその端を發するものといふべきである。

かくして我が國の建國は外觀するとき一應之を世界史進行の必定性に基づくものといふべきであらう。即ちこゝに世界史進行の必定性とは單なる自然的必然性の謂ひではなくて、絕對國家としての親邦日本の國家意志が、現實の世界情勢を象面とせるその世界史的自覺に基いて、世界史進行の方向を更改せんとする意志的必定性を意味する。併し乍ら既にも述べたやうに、國家意志はそれが普通の相對的國家の意志に止まる限り、決して世界史そのもの丶方向を根本的本質的に更改するの力はもち得ない。そこに相對普通國家の有する免れ難い制約がある。親邦日本國がよくその世界史的自覺に照らされてこゝに我が國を生むを得たのは、日本國の根柢が普通の相對國家の如く塞されたるものでなくしてその國家的生命は直に無限の根柢たる神的生命に連續してゐるが故である。

かくしてわが滿洲國の出現は之を單に世界史進行の必定性によるといふは未だ十分でなく、それは更に內觀せられてそこに神命の嚮導を內感するに到るでなければならぬ。しかも之等世界史的進行の必定性と神命の嚮導とは別事でなく、そはまさに同一事の內外觀に外ならぬといふべきである。（この事は建國大學研究院「研究期報」の第二輯に「神命世界史觀」として一應の論述を試みた。）かくわが滿洲國の建國を導ける根元力が之を內觀するとき神命の嚮導であるといふことに對しては、念の爲め一應明かにして置くべき事柄がある。そはこゝに神命とは、かの基督教信者などの考ふるが如きこの地上的現實を遊離せる單なる想念の神でなく、歷史を通じて地上にその神的生命を實現しつゝある神的意志をいふのである。即ちそは斯神の肇造し給へる邦國を思ふ人々の至深の眞實に呼應して、その命意と力とが感受せられる神であらねばならぬ。人は神命の響きなどゝいへば、如何にも主觀的信仰の如くに考へ勝ちであるが、そは先きにも述べたやうに何よりも世界史進行の必定性に於て示現せられる。先きに吾人がわが滿洲國の建國を以て第一次世界大戰を超過せる重大なる世界史的意義有りとしたのも、かゝる神命觀に立つての立言に外ならない。否この神命觀の立場、更に詳しくは神命世界史觀の立場に立つことによつてのみ、我々はわが國建國の眞意義を把握し得ると共に、又實にその延長展開としての支那事變より大東亞戰に到る聖戰の眞意義を把握しうると思ふのである。即ちそれが神命の嚮導による世界史の必定的展開たるに於ては、わが滿洲國の出現も支那事變より大東亞戰への展開も全く同一だからである。否わが國の建國より支那事變へ、更に支那事變より大東亞戰への展開そのものが、如實なる神命の嚮導による世界史の必定的展開に外ならぬからである。

さればこゝに神命の內感といふも、そは單に神命を個人の主觀的想念裏に感ずるといふのではなく、神命の嚮導を現實の世界的進行に即して內感するのであり、更には世界史更改の必定性として內感するといふのである。換言すれば世界史進行の方向に對する更改を絕對必定的と感ずるその絕對性の內觀に、神命の嚮導は內感せられるといふべきであらう。斯くして神命の嚮導といふも、そは單に懸空なる主觀的信仰問題ではなくて、最も嚴肅なる世界史的現實の客觀性に依據して之を貫くものである。即ち今や我々東亞人の當面しつゝ

ある世界史的現實の有する意義の嚴肅性にこそ神命嚮導の客觀的示現は存するといふべきであり、これ吾人がこの立場を敢へて神命世界史觀と命づる所である。されば世界史進行の方向更改に對する必定性に徹せざる限り神命の嚮導を内感するとはいひ得ないと共に、又神命の内感を缺いては世界史進行の方向を更改せずむば已まぬ絕對必定性への開展は得られないであらう。而して滿洲事變の勃發は如上の事柄が單なる理論理說としてゞはなく、現實の爆發として燃燒焦點し來つた結果であり、爾來建國進展の諸段階は之を内觀するときその一々の背後に神命の嚮導を内觀し得るであらう。かくして神命の嚮導が、單なる個人主觀の信仰でなくして嚴肅なる世界史進行の必定性を嚮くと共に、之を内にしては建國の幾段階を導き來つた處に、それがよく建國の根元力たる所以があるならば、如何に神命の嚮導といふとも我が國の建國を嚮き更には支那事變を契機として大東亞戰への展開を導き得るものでは斷じてないであらう。

かくして内神命の嚮導と外世界史の進行方向の更改とは相即であり、この兩者は斷じて離し考ふるを許されない事柄である。今わが滿洲國の建國のみに限つてみるも、そは單に滿洲事變勃發の一出來事にこもるのみでなく、それ以後の建國の幾段階を嚮けるものといふべく、執政の就任より　帝位への登極、更には第一次御訪日により親しく日本皇室を訪はせ給ひて日本　天皇陛下の光に照らされ給ひてその精神の一體性を親證し給へることから、第二次御訪日により竟に國の元神として　天照大神を仰ぎ建國神廟御創建のことに到るまで、その悉くが神命の嚮導によらざるはない。そも〳〵至誠眞實の人ならば、たとひそれが個人の歩みであつても、その一々に神明の加護を内感するのであるが、今一新帝國たる我が滿洲國の建國は、その最初の第一歩より今日に到るまでの一切段階が、之を内觀するとき凡て神命の嚮導によるものといはざるを得ない。而して畏多き極みなれどもこの神命の嚮導を最も深く内感せさせ給へるは　皇帝陛下にあらせらるゝと拜察されるのである。蓋し　皇帝陛下におかせられては、御躬を以て三千萬國民の休戚を日夜に軫念遊されてその息ませ給ふ時とてはないからである。されば建國神廟の御創建に卽する國本奠定の御事は、建國十年に垂んとして往時を回顧憶念せさせ給ふて、そこに儼たる神命の嚮導を内感遊されたる結果と拜察せらるゝのである。

如上我が滿洲國の建國を嚮き來つた根元力が、親邦日本國

を肇造したる　天照皇大神の神命であり、しかも斯神の命意は、ひとり個人の主觀的憶念裏に内感せられるのみでなく、國の生命を貫いて世界史進展の方向更改の絕對必定性を示現しつゝこれが實現を導き給ひつゝある。勿論こゝに世界史といふは、かの知性の抽象的普通の一面に拘つて自らの自主性を喪失し、世界史といへば直ちに我れに臨み我を壓し來るものの如くに考へるかの知識人のいはゆる世界史の謂ひではない。なるほど我は外延的には之に包括せられてその一つに居るも、内包的には我れ之を包括して、如何に之に臨み、如何にその進行を更改擔當すべきかは、我れの自主的自己決定に存することを把握確認せる立場における世界史である。かく解せられたる世界史にして、初めて神命が世界史の進行を嚮き神の命意がその最尖端に焦點を結ぶと考へられる所以である。卽ち世界史の必定性とは單に自然科學的必然の如く、外より我を壓して我れに臨み來るものではなく、その進開の方向の決定は我れの自主性に於て保有するをいふのである。而してこの事は理としては一應世界何れの國にもいひ得るとしても、それらの國々に於ては畢竟相對の域を脫することは出來ない。卽ち眞にこの立場に立ちうるものは、その國家肇造を神的命意に受けつゝ、かゝる神的命意がその歷史的展開を一貫して今日に到れる絕對國家としての親邦日本皇國の外にはあり得ない。勿論世界史の進行は、それが世界列强の緊張的聯關裏に展開せられるものである以上、神的命意の實現も現實には時空の制約より遊離することは出來ない。かくいふは勿論神的命意の相對性を意味するものではない。何となれば現實は時空的制約を離れては絕對に有り得ないものだからである。かくして神的命意の實現もそれが實現である限り、諸諸の地上制約の存することはいふ迄もないが、しかも神的命意はその歷史的實現の基體を樞軸として次第にその光被の實現を展開しつゝあることは東亞現前の事實である。

わが滿洲國の建國は最初にも述べた如く今世紀に生起したあらゆる事件中最深の意義を有するものであつて、その本質的意義は屢說の如く第一次世界大戰をも超過して遙かなるものがある。而して西歐人にしてこの我が國建國の包藏する深大なる世界史的意義を最も深く洞見したるものは、かの第一次世界大戰（その本質に於ては歐羅巴大戰）の戰敗後、祖國復興の大業に獻身したる現代の英傑ヒットラーであらう。蓋しわが滿洲國の建國は世界史展開の必定的所產として之を端的にはまさしく「現代の國生み」だからである。けだしわが滿洲國の國生みは、その生みの親たる日本皇國が神命具現

の國として世界に於ける一切邦國中、唯一眞正の絶對國家である處よりして、眞に國生みの語の本義に該當するが故である。否眞に國を生み得る國家は、世界廣しといへども嚴密には親邦日本皇國の外なく、而してその事はいふまでもなく日本皇國そのもの丶國體が最も明かに之を證してゐる。即ち親邦日本は自餘の世界の國々の如く所謂作られたる國でなくして生まれたる國であり、神的命意によりて眞に生まれたる國、地上唯一の絶對國家である。さればこそ日本は現代に於てよく邦國を生むを得るのであり、否今後無限に生むの可能を包藏し、而して我が滿洲國はその生める最初の邦國たるの光榮と責務を有するのである。そも〳〵わが滿洲國が生み出された國であるか、はた又作られたる國であるかは、親邦日本皇國の本質が明かに之を證して居るが、又我が滿洲國自體を見ても虚心にその國相を觀じたならば、それが作られたる國でなくして本質的には生まれたる國であることを窺ひうる幾多の徴表が存すると思はれる。しかしそれらの主要問題の考察に入るに先立ち、我々は飜つて先づ生みの親たる親邦日本皇國そのものの本質に就いて考察するの要があるであらう。

二　日本的世界觀

上述の如くわが滿洲國の建國は、それが「現代の國生み」であるといふ一語によつて最もよくその本質が道破せられるものと思ふのである。勿論このことは今世紀に入つて建設せられた國がわが滿洲國以外にないといふのでは決してない。即ち我々は第一次歐洲大戰の結果、所謂民族自決主義の原理に基づいて建てられた幾多の國々のあることを知らぬではない。しかしそれらの國々は、その立國の根本理念が民族自決といふ一見如何にも理想的なるが如くでありつ丶その實甚だしく抽象的なるものに據れるものであり、隨つて我々は今日これを語の眞義に於て「現代の國生み」とはいひ得ないのである。げに民族自決主義の抽象的無力性は、その母胎としての國際聯盟のそれとその本質を等しうしてゐる。されば自後今日に到るまで、特に最近の第二次世界大戰によつて（これこそはその本質に於ける最初の世界大戰であるが）殆んどその原型を留めぬまでに變化解體せしめられつつある。否民族自決主義はひとり理想に偏した抽象論であるといふのみでなく、之を裏返すとき、それは當時の相手方たるドイツに對する最も辛辣なる壓迫策であつたのである。即ちこの未曾有の壓迫

政策に利用せられた「理想の假面」こそ、所謂民族自決主義と名づけられるものであつたのである。さればドイツの再起による今次の第二次世界大戰によつて、これがひとたまりもなく崩壞しつつあることは現實の免るべからざる嚴肅なる敎訓といふべきである。

然るに飜つて我が滿洲國の建國は、それらとは全く根本よりその意義を異にする。それは地上眞實國家の典範として唯一の絶對國家たる日本皇國の光被のもとに生ひ立つたものであつて、その立國の根本原理は皇道に照らされたる王道とも稱すべく、かの戰敗の敵國をして再び起つ能はざらしめんがために「理想の假面」のもとに、實は民族の我見を利用した所謂民族自決主義の空理によつて作られた國々とは本質的に異るのである。わが滿洲國にあつては、上に皇道に照らされたる王道の光を仰ぐと共に、下萬民の間に民族協和といふ全く新たなる理念を生み出してゐる。この民族協和といふ理念は、世界の邦國史上にも嘗て見ざる處といはなければならぬ。成程事實としては何程かの程度に諸民族を混入介在せしめてゐる邦國は嘗てもあり又現在も尙存しつつある。しかもそこに民族協和といふ理念は嘗て存しなかつたのである。假りに私的德目としては時に言はれることがあつたとしても、我が滿洲國に於けるが如く、それが立國の基本原理の一つとせられた國は世界史上嘗つて存しないのである。而して我々は之を前述第一次世界大戰後に簇生せし民族自決主義國家が、弱小民族の民族的我見を唆かして立てられたるものと比較するとき、そこに絶好の對照を見るのである。されば我が滿洲國は、單にこの一事のみを以てしても、その出現に世界史的意義が賦與せられるといふも敢へて過言でない。即ちそこには邦國の理念として世界史上全く新たなる理念を加へたものであつて、しかもそれは今後の世界秩序の趨くべき方向を内含示唆してゐるのである。

抑々かの所謂民族自決主義なるものを我が民族協和の理念と對比せしむる時そこには實に重大なる本質的相違が窺はれるのである。民族自決主義といふとき、人ともすればそこに一種自然性と純粹性とを感ずるが如くである。しかも注意すべきことは、既に種々なる民族の多數雜居の生活に馴致せられ來つたものに向つて、民族自決の原理に據らしめるといふことは、之を現實には排他分裂の外の何物もないのである。即ちそれは一見如何にも自然的なるが如くでありつ丶、實は必ずしも然らぬのみか、その裏面にはこれら弱小民族の民族的我見を唆かして以て戰敗國獨逸の分裂弱體化をたくらめるものと

いふべきである。その上多年幾多民族の混在し來つた處では如何に民族自決を立國の根本原理にしたとて、到底他民族を容れない純粹の國家創建は不可能であり、さすれば立國の原理が民族自決主義と掲げられるだけ、却つてそこに不和と相互排擠とを招來せしむる機を内含することゝなる。然るに翻つて我が滿洲國に於ける民族協和の理念を顧みるに、それは我が舊東三省の人民構成の如是の實態實相に對する卽應肯定の態度であつて、そこに何等の成心はないのである。卽ちそこに住する一切民族を一視同仁民族相和の原理を掲げることは、まさしく天日の萬物の上に遍照して洩すなきにも似てゐる。卽ちこれこそ大和の精神の地上的顯現の第一歩といふべきである。而してこの世界史上空前なる邦國の理念は、その據つて出づる處はいふまでもなく親邦國體の本質に基くものである。されば我々は翻つて日本皇國そのものの本質を明かにしなければならぬ。

今日本皇國の本質を臣民としての立場より觀ずれば、その全身心を　大君に捧ぐる處に人間としての至上境を觀ずる人生觀に成立するといひ得るであらう。成程他の國々に在つても、一旦國家非常の時に際會すれば、身を挺して祖國防衞の爲めに戰ふといふ事實がないのではない。こは所謂本能的愛國心の爆發として、程度の差こそあれ、世界如何なる國に於ても見られる現象である。併しそは所謂本能的更には生理的激發に過ぎない。卽ちそれらの國々に於ける人民の人生の落着に到つては、多くは自らの屬する邦國とは何ら拘はりなき宗敎によつて個人的救濟を求めてゐる。然るに我々日本國民にあつては、その常と非常とを問はず、その人生究竟の目標は自らの全身心を擧げて　大君の爲めに捧げるにある。卽ち我々日本國民にあつては、君國への忠義獻身は、單に道德としての一德目に止まるものではなくて一切德目の統一であり、そは單なる道德の域を超えて人生觀の大本として歷史を貫く民族の根本信仰となつてゐる。否こは單なる人生觀としての最終的歸趨であるのみでなく、そこには更に世界觀の裏附けさへもある。卽ち我々日本國民の殉皇大義は、その獨自なる世界觀を根柢とせる國體觀、人生觀に基づくものといふべきである。

然らば國民をしてかくの如くにあらしめる日本皇國の國體は如何なるものであらうか。こは周知の事柄であつて今更何等の言あげを要せざるものの如くであるが、しかも我々有限存在にあつては、言に擧げて言表することがその自覺を强め自證を明かならしめる一助たることも亦之を否定し難い。そ

も〳〵日本皇國の國體に就いてその大本を爲すものは、いふ迄もなく萬世一系の　皇室を戴き奉ることである。然らばそは如何にしてよく三千年の歷史的實現を貫いて持續せられ來つたのであらうか。いふ迄もなくそは　皇室が我等民草の大宗家にましますが故である。卽ち國家組織の側よりいへば大君にましますと共に、之を情に卽してはまさに萬民の大御親に當らせ給へるが故に外ならない。所謂義は君臣にして情は父子の如きものあるが故である。然らば　皇室が萬民の大御親にましますとは如何なることであらうか。かくして我々はこゝに我々日本民族に固有なるその獨自の世界觀を明かにしなければならぬのである。蓋し日本國民が身を君國に捧げることに人生至上の意義を觀じ、一系の　皇室を戴き奉るといふことは、畢竟根本的には日本民族の世界觀そのものにその本質的根據を有するが故である。

然らば日本民族固有の世界觀卽ち又日本的世界觀とは如何なるものであるか。之を一言にすれば、我々日本民族にあつては、その國土民人の一切は神の生み給へる處であり、而して皇室はこの國祖神の神胤を一系に承け嗣ぎ給へる處であると仰信し來つてゐるのである。他の國々にあつては、その建國は歷史上或る一定の時期に始まつたものであり、かく歷史上一定の時期に始まつたといふことは、必然それ以前の統治者の存在を豫想する。而して斯くの如きそれ以前の統治者の存在の豫想は、現統治者の統治の權が、その本質に於ては畢竟所謂簒奪に外ならざるを示すものである。堯舜の禪讓の如きは世界史上にも希有なるその除外例であるとせられてゐるがそれすら近時の研究によれば必しも禮讓による道義的禪讓ではなかつたといはれる程であれば、自餘の國々の場合は洵に想見するに餘りがある。然るに親邦日本にあつては統治者たる　皇室の御祖先は遠く國祖に溯り、國祖は同時に又天祖にましまして宇宙の絶對神たる御本質を有たせ給ふのである。かくして日本國の國土民人は共に神の生ませ給ふといふことは、之を理に卽しては歷史の無窮性に卽する統治權の絶對性を含意する譯であるが、しかも日本の神代傳說たるこの國生みの信仰は、單に斯くの如き理の分析を以て悉くさるべきものではない。

思ふに日本民族の國生みの信仰は、その生命體驗の比類なき深さより來れるものと思はれる。抑々國土民人の一切を擧げて凡て神によつて生まれたるものと考へるといふことは、之を約しては所謂所生の信仰であつて、斯くの如きは畢竟自らの個的生命に卽する所生の自覺的體驗がその基底的依據を

爲すものと思はれる。即ち自らの生命の直接的淵源たる父母の生命に即する所生の現實體驗を通してその無窮溯源に到るとき、竟には萬象の眞源に會して、そこにこの國土民人の一切を生み給ふ神に承當し所謂國生みの信仰に達したことは、日本民族の歷史的生命の溯源的自覺の結果する生命必然の論理である。さればこの溯源的自覺による所生の體驗こそは、一切の生命體驗中その至深なるものといはなければならぬ。抑々我々の生命はそれが自己にとつて全的所與であるにも拘らず居常容易にその如實に氣附き難いのであるが、一度父母の死に逢遭し、乃至生命を賭くべき人生の重大事に當面するに到つて初めてそこに自らの生命の全的所與性に目覺めしめられるのである。かくして日本民族がその世界觀として生みの世界觀に立ち、國生みの神代物語を信じて變らぬといふことは、民族としてのその生命體驗の比類なき深さの確證といはなければならぬ。蓋し一人の個的生命すらその淵源に溯るは容易でないが、今全民族を擧げてその絕對根元に溯つて、そこに國生みの傳說としての生みの世界觀をもつといふことは、世界に比類なきその生命體驗の深さを證するものといふべきであらう。

而してかくの如き國家生命の自覺的溯源性は、やがて神恩の自覺となりそは轉じて對他的には慈愛の發動となつて現はれる。而してかくの如き國家生命の自覺的溯源が飜つて無限の太愛慈光として發し來ることを、我等の祖先はいみぢくも「八紘を以て宇となす」の語を以て表現した。而してかゝる絕對太愛慈光の現實的光被が「現代の國生み」としてこゝにわが滿洲國を生誕せしめたのである。されば親邦日本國の世界觀たる「生みの世界觀」は單に親邦自身が神的命意によつて生れたといふのみでない。そはひとり自らが生まれたるのみならず、自らの所生の自覺に即して更に他の邦國をも無窮に生みゆかんとするものである。所生の自覺とは之を內面的にはまさしく所照の自覺といふべく、隨つてこの所生即所照の自覺に即して國祖即天祖の絕對的生命に還へると共に、そこに生々已むことなき神的命意に會して、飜つて現實の地上的混沌の修理固成に向はざるを得ないのである。かくしてわが滿洲國の生誕が「現代の國生み」であるといふことは、その生みの親たる日本皇國の心光光被によるものとせざるを得ない。即ち之を日本國の立場としてはその國初肇國以來の理想たる八紘を以て宇となさむとの大理想の現實的實現の第一步であり、之をわが國としては、斯くの如き親邦、特にその大本に坐します日本　皇室の光被に目覺むる感恩自立によるもの

である。即ちこゝに親邦日本國の歷史的實現を通して光被し來れる神的命意が、わが舊東三州の地に對する能照と、之に對する三千萬民衆の指導階級に於ける所照の自覺との相照照應にわが國の生誕は始まれるものである。

三　現代の國生み

上述によつても明かなやうに、日本的世界觀は、一言以て之をいへばまさしく生みの世界觀といふべきものである。即ちそは自らの生命體驗の至純性よりその淵源に溯るのであるが、しかも日本民族にあつては、その生命の自覺的溯源に於て現實の君父を拔きにしない。否現實生命の根元としての君父を仰ぎ、その自覺的溯源は一度は萬象生命の眞源に會するも直ちに君父の上に返照し來つて、その一如を仰信する。そも〳〵生むとは生命が自己と同質的なるものを出生せしむることである。親が子を生むといふとき、そこに肖不肖の差はあるとしても、その本質に於ては相通ずるものを有つのである。かゝる本質的同質者を出生せしむる働きを「生み」の作用といふのであり、かくの如きが我々日本民族の世界觀であつたのである。而して日本民族のこの世界觀的確信は肇國以來一貫してその歷史的實現を通していやましに確信せられ來つたのである。即ち日本國民が　皇室を一大宗家と仰ぎ奉り、一億國民が一君萬民　陛下の赤子としての自覺に生々世々生き來つたといふことは、その根本に於てこの生みの世界觀に基づく生々觀に立てるが故である。而してこの世界觀の仰信は、必然その歷史的實現に反映して之を強め、又その歷史的實現はその世界觀に反映していよ〳〵その鞏固を加へつゝあるのである。

しかも日本的世界觀の本質は屢說の如く生みの世界觀であり、而してそはひとり自らの國家を生むに止まるものではない。即ち親邦日本國民の世界觀の本質が「國生み」に存するといふことは、單に自國の肇造生誕のみに止まるものではないのである。かくして有史以來三千年、之を神代より數ふれば實に無窮の歲月を經過し來つた日本民族は、今や世界史の進行方向の是正更改の必定性の認識に即してそこに神命の嚮導を內感し、竟ひにわが建國の根本動力として參加した。日本民族が如上わが國の建國に對してその根本動力となつたといふことは、即ち又建國の主動力としてその樞軸的任務を負擔しつゝあるをいふのである。而して建國の主動力となるといふことは、高く建國の理想を堅持することより出で、樞軸となるといふことは國本歸一の至誠を躬を以て範を示すことより生れ

るのである。かくしてわが滿洲國の建國はまさに「現代の國生み」といはるべきであるが、しかも之を導ける力は親邦日本國を生める神的命意に外ならない。抑々國が國を生むといふことは嚴密には從來嘗てなかりしことである。けだし現實に國を生み得る國家は、何よりも先づそれ自らが神的生命の地上的具現であり、内に神的命意の嚮導を内感しつゝあるものでなくてはならぬ。既述の如く第一次世界大戰の後には一時群小國家の簇生を見たが、しかしそれは決して國が國を生んだといふものではない。成程一應國が生まれたかの如くであつたが、しかも之れを生めるものは如上神的國家でなくして、國際的詐謀の團體ともいふべきかの國際聯盟であつた爲に、それらの國々は今や何れも崩壞の危機に直面しつつあることは敢へて怪しむに足りない。眞に國を生むものは國でなければならぬ。否眞に邦國を生み得るものは眞正なる國家、即ち神的生命の地上的顯現として自らの歴史的實現の進行に常に神的命意の嚮導を内感しつゝあるものでなくてはならぬ。

抑々國家に於て第一義的なるものはその生命でなくてはならぬ。即ち國家的生命である。而してかゝる國家的生命の中心を爲すものは、まさしくその國家精神即ち國の心である。されば國家を論じて未だその生命に觸れざるものは眞に國の實體を把握したものとはいひ難いと共に、國の生命を論じて未だその心に觸れないものは未だ國家の眞髓に觸れたるものとはいひ難い。心なき人々は國といふ時之をその構成要素たる箇々の國民乃至はそれらの集合としての漠然たる全體觀を主張するに留まるが、併し斯の如きは眞に國家の本質を把握せるものではない。眞の國家は自らの生命をもてるものでなくてはならぬ。而して自らの生命をもつとは、自らの意志即國家意志を内含すべきを意味する。既に個人的生命すら内に個人的意志を包藏してゐることは我れ人共に内に自證内觀しつつある處である。併し乍ら國家的意志が單に國家的意志としてその相對性に留まる限り、共國家は眞に國家の本來を全現せるものとはいひ難い。即ち又眞に「生まれたる國」でないと共に、又他を生むこと能はざる國家といふべきである。かくして眞に國を生みうる國は何よりも自らが生まれたる國であり、而して自らが生まれたる國であるといふことは、その國家がその國家的意志を單に自らの意志とするのでなくして、まさに神的命意として内觀自證するものでなければならぬ。

今かくの如き國家にあつては、その國家構成の要素が國家的統一以前に先在して國家は力による之が構成的統一と考へらるゝが如きことなく、その一切要素は神的生命よりの所生

と觀ぜられる。即ち國土民人の一切が神の生む處と仰信せられるのである。而してかくの如き國家生命の統一的全現を得てゐる國にあつては、國民各自は自らを國家生命の分身として自覺するに到るは必然である。かくして國家の本質は、畢竟するに國家的生命がその根元としての神的生命と連續關係に立つや否やにありといふべく、そは又國家肇造の精神が、その歴史的實現に於て如何の程度の一貫性を具するかにあるといふべきである。かくして又國家の眞髓の把握は畢竟生命の問題といふべく、而して生命の把握は畢竟するに身心を擧しての獻身の問題である。されば國家の論究は單なる口舌理説の業でなくして、常と非常とを問はずその至心なる獻身によつてのみ把握せられる。が同時に獻身は必然その對象を要とし、而してそはいふまでもなく現實具體なる自己所屬の國家的生命に外ならぬ。生命は生命によつて生命となる。即ち生命は自らを獻ぐることによつて眞の生命となると共に、國家的生命は分身的生命のかくの如き獻身によつてのみその眞諦を相續するを得るのである。而して我々は今かくの如きものの典範を親邦日本國家に於て見るのである。かくして國家の存在相續に於て最も本質的なるものは、如是の自覺、即ち分身者が國家的生命への獻身を通して自ら神的生命との直續を得るとの自覺である。この自覺の絶對基準より遠離するだけ、それだけその國家は相對國家の域に墮するのであつて、よし一應國家的形態は具すとしても嚴密なる意義に於ける眞正國家とはいひ難い。

いま國家の本質を斯くの如くに考へ來るならば、現代の國生みとしての我が滿洲國の建設に於て最も根本的なるものは國の元神を　天照皇大神として仰信し給へる　皇帝陛下への忠誠の至心を通して、國家建立の絶對根元力に歸向することでなくてはならぬ。即ち單なる國心といふも十分でなく、たとひ建國精神といふも、この根本の一點を閑却しては未だ眞實とはいひ難い。成程一つの國の建國には種々なる方面が必要であつて、或る意味では地上一切の營爲の統攝を要とするといへるが、しかも單にそれのみでは未だ眞の國作りとはいひ難い。眞の國作りは竟に國作りを超えて國生みにまで到るでなくてはならぬ。即ち作りの人作を超えて生みの天然にまで歸入するを要とする。しかも眞の國生みは國民の一人々々に國心が兆し初めるでなくてはならぬ。而してこゝに國心とは單に個我を肯定したまゝの國家建設への積極的參加でなくして、國光光被の所照の自覺に基づく獻身によるものでなくてはならぬ。心を生むものは只心あるのみである。我が滿洲國の

給へる神命が、日本民族の世界觀の本源としていのちを生むいのちでありいのちの光だからである。而して生まれるいのちからは生命の生誕は只所照の自覺に卽してのみ行はれる。自らの國の生命を無窮に生み來つた親邦日本國の生命は、こゝに改めて一新國家の生命を生み出し今やこれをおほし育てんとしつゝあるのである。

かくして滿洲建國が「現代の國生み」であるとせられる本質は、日本國家肇造の神的生命が現代の世界史的現實に卽して國生みの大行として發動したるものである。然るにわが滿洲國にあつては、その國民の大部分を占むるものは漢民族であつて、これらは從來の歴史的傳統に於て國心といふものを十分には持たざりし人々である。成程これらの人々にとつて家の心は強くその傳統を爲して來たことではある。併しわが一身はもとより更にはわが一家の凡てを君國の爲に捧げて悔いない國心の體驗に到つては、それらの人々の從來十分には保有せざりし處のものである。かくしてわが滿洲國の建國に當つて我々日本國民の貢獻すべき第一義は、その傳統的國心を以て建國の中心動力たるべき點にある。勿論現實に於ける箇々の日本人は、その本質を實現するに於て千差萬別が存すしても、その實現に到つては偏へに後天的なる努力に俟たねばならぬからである。さればもし日本人にして、徒らにこの先天の本質のみを誇負してその實現錬磨の努力を怠るならば、そは決して建國の中心動力となるものではあり得ない。日本民族がその數的少數にも拘らず指導的任務を帶びて建國の中心動力を爲しうるとすれば、そはその傳統的本性たる殉皇大義の一點に存するといふべきであつて、勿論箇々の日本人に於てこの本性の實現が如何樣であるかは人によつて千差萬別といふの外ない。

さて如上の意味に於て滿洲國の國生みに於て最も本質的なるものは現　皇帝陛下が執政より帝位に登極あらせられたといふ一事である。抑々國心といふも、その本質を爲すものは國民を戴き國君に歸一し奉るといふことの外ない。なるほど地上の現實としては國君と稱すべきものを有たない國家も存しない譯ではなく、又かゝる國家にあつても全然國心といふものがないとはいへない。併し乍ら國家の本質が國家生命の自覺的統一である以上、眞の國心とは能統の首座に坐す國君への供奉献身に窮ることは明かである。國民に忠誠の芽生が催し出づる爲には先づその歸向すべき國君の君臨を要とする

この意味に於て　皇帝陛下の帝位御登極こそはわが滿洲國の國生みに於て根本の定礎たり大本の確立たる意味をもつ。而してこは親邦日本國がその無窮の國初より一貫持續し來つた處であつて、親邦日本國の世界觀人生觀はまさにこの一點に歸趨朝宗する。隨つて又我が滿洲國の建國が「現代の國生み」とせらる根本も、この大本確立の一點に存するといふ可きである。そも〳〵生むとは生命に於ける第一義的現象であつて、國家が眞に至上の生命國家であるか否かは、その國生みの可能と否とによつて分れるともいひうるであらう。げに如何なる國家が嘗て世界史上に現實の國家を生誕せしめたといひうるであらう。げに生命を生むものは生命であり、國家を生むものは眞實の絶對國家卽ち神的命意の具現としての「神國」でなければならぬ。而して親邦日本が神國といはれるのはその君が日本國肇國の國祖神以來一系の皇統にましまして現人神に坐すが故であり、隨つてわが滿洲國が親邦日本國家生命による現代の國生みといはるゝ根本は、日本　皇室の光被によつて　帝位の創生成立せる點にその中心首座がある。

併し乍ら生みは同時に育てを豫想し、否これを必然とする。既に漢字に於ても生育と熟するが如く、生むことは必然に育てを豫想する。育てなき生みは忽ちにして死を招來して生みの意義を全うする事が出來ない。抑々生命の生命たる所以はそれが生まれると共に無事に生ひ育ち、更にその生育と自らの所生の自覺が内含する所照の自覺が、他の新たなる生命の生誕に對して主要媒介となることでなくてはならぬ。今これを我が滿洲國に就いていへば、それが單に無事に生長するといふのみでなく、更にはその生長が他の新たなる國家生誕の主要契機となる處まで行かねばならぬ。而してこの事は今や大東亞戰の開始と共に、單なる理念の要請の域を越えて東亞の現實、否世界史的現實とならんとしつゝある。而して我々滿洲國民は、飜つて自らの國家が親邦日本國家を貫く神的生命の現代に於ける國生みの第一着手、卽ちその嫡子的意義の自覺を忘れてはならぬ。かくして我が滿洲國が民族の協和を以つて建國の一基本原則として、謂はゞ東亞の縮圖的意義を有することは、それ自身既に今や建設せられんとしてゐる大東亞共榮圈建設の典範的意義を有するものといふべきであらう。

四　國生みと國作り

我が滿洲國の建國に就いてはそれが國生みといはれると共に、又時としてそは國作りともいはれる。然らばこの二つの概念は如何に異り又如何に聯關するであらうか。斯くの如き

ことは一見現實の國家建設の重大事に對しては如何にも閑事業の如くでもある。併し乍らそれが現實の國家建設の理念に關はる限り、そは決して無關係ではあり得ないであらう。否單に無關係でないのみか、それが理念として國家建設の方向を指示するものである限り、そは實に重大なる現實的意義を有するものである。さればわが滿洲國の建國の本質を國生みと考へるか、はた又國作りと考へるかでは、將來重大なる差違を來すともいひ得るであらう。然らば、この問題は之を如何に考ふべきであらうか。今は論旨の易解の爲め端的に結論よりいへば、吾人はわが滿洲國の建國は國生みであると同時に國作りであり、國作りであると同時に國生みたることを思はしめらるるのである。而してわが國の建國が單なる國作りとのみ考ふべからざることは上來の所説によつても一應は肯かれることかと思ふ。併し乍ら一歩を進めて生むことと作ることとの間には如何なる關係が存するであらうか。

そも〳〵生むことと作ることとの間には、そこに生命の連續性に於て重大なる相違があると思はれる。即ち生むとは既にも述べた樣に、そこに生命の本質的連續を豫想し、しかもかかる本質の連續性は單なる觀念の域に留まらずしてその具現を爲す。然るに作るといふことは作る者と作られる者との間に如是の生命の本質的連續が見られない。即ちそこに見られるものは單なる意匠の賦與であり、そは畢竟觀念の連續性否觀念の模寫的移入に過ぎない。しかしその連續性は決して生命の具體的連續性ではない。かくして生むとは生命自體が自己の直接的第一次的分身を行ふことであるが、作るとは生命が自己に包藏する觀念の物界への移入投射の域に留まるものである。勿論作るといはれる以上そは觀念の物界への移入投射であるとはいつても、そは單に存在する事物に對する靜止的反射でなくして觀念の投入によつて成される事物の新たなる組織の成就である。隨つてそは又之を統一の賦與ともいひうるであらう。即ち事物に對する一新形態の創生的賦與作用である。されば作るといふ働きもその物に對する關係、特にその新たなる形態の創生賦與は、凡て作るといふ働きを通してのみ可能だからである。かくしてこの現實界が單なる生命存在のみでなくして無量の物的存在を介在せしめてゐる以上、この作るといふ作用を輕視することは絕對に許されないことである。

然らば今我が滿洲國の建國に於てはこの生みの概念と作りの概念とは如何に交涉聯關するであらうか。既にも述べたやうに、我が國の建國は國生みであると同時に國作りであり、

又國作りであると共に國生みでなくてはならぬ。即ちわが滿洲國の建國は之を單に國作りとのみ見ることの、その本義を逸するの虞れあることといふまでもないが、同時に又そは單に國生みといはるべきものでもないのである。然らばそは何故であらうか。けだし若しわが國の建國を單なる國作りと見るならばそは畢竟するに建國の大業を單にその外側から見るものに過ぎない。確かに建國の大業も之を外側から見たならばそこに作りとして觀ぜられる面の存することは明かである。殊にこの事は我が滿洲國の如くその長き時の經過に於て殆んど一度も完全なる國家形態を成せしことなきものが、現代に到つて突如として建國せられ、一躍現代國家としての體制を賦與せられんとしつつある國に於ては然るのである。されば今この急激なる變化建設の面を見たならば、そはまさしく國作りの語の應はしかるべきを思ふのである。

併し乍ら我が國の建國を單にこの程度に理解するに止まるならば、そは洵にいみじき誤謬といはなければならぬ。既に前節にも述べた樣に、眞の國家の本質は單にその外的形態の具備に盡きるものではなく、そこに國家的生命の具現がなければならぬ。而してここに國家的生命といへるものの本質は、その分身的存在たる民草の國の大本への歸向としての國心の發現現成に外ならぬ。即ち之を具體的には國家の各成員が自らの分身的自覺を通して國家建設の意志を自覺分有するの謂ひでなくてはならぬ。否更に嚴密には一己箇身の分に於て國家建設の爲めその大本首座たる　國君に自らを供捧せんとする獻身の行に於て、我々は國家的生命の眞の充周顯現を見るのである。しかもこの境域に到るとき、その自覺に於ては最早單なる國作りとはいふべからざるものとなるのである。勿論斯の如きをも一應之を國作りといつていへないわけではない。併し作りの概念はすでにも述べたやうに外的組成の態度であつて決して生命分身の自覺ではない。げに國生みの自覺は、之を箇身に於ては分身の自覺を通してのみ與りうるものである。かくして又我々は、事苟くも國家、特にその生誕建立に拘はる場合には、嚴密には作りの概念の拒否せらるべきを知らしめられるのである。即ち「國作り」と呼ぶ場合にもそは本質的にはすでに「國生み」の意義を內含せることを知らなければならぬ。蓋し生命は如何なる意味に於ても之を作るとはいひ難いからである。箇の生命にしてすでに然り、況んや國家的生命に於てをやである。

併し乍ら同時に現實に於ける國生みには、單に生むといふのみに留まり得ない面の存することも亦事實である。この事

は特に「現代の國生み」たる我が滿洲國の建設に於て然りとする。抑々國生みとはすでにも述べたやうに國家建設の大業をその内面より見たるものであり、隨つて又之を時間に即しては、國生みはその國本の定礎に於てより妥當する概念といふべきである。即ち之を一言にして國生みとは國家建設を内觀する生命自證の立場といふべきである。併し乍ら現實の國家は單に内のみあつて外なきものではあり得ない。そは儼たる客觀的實在として内外の相即一如に成立するものでなくてはならぬ。即ちそこに國礎の措定と共に、更にその生命の外延的分支展開の整備が期せられなくてはならぬ。現實國家に於て統治と共に經營の輕視すべからざるはこれによるのである。かくして一新國家の建設は、一面その形態の整備進捗の要せらるべきはいふまでもないが、同時に又之と伴つてその内面固成の業が進められなくてはならぬ。そも〳〵一箇邦國の存在は、單なる事物的存在の如きには比すべくもない深い根柢をもつものでなくてはならぬ。而してわが國の根基は本質的には屢說の如く親邦日本國肇造の國祖神の命意に存すると共に、之を現實には、わが國民の一人々々の胸奧深くこの自覺の映照する處までゆかねばならぬ。かくして初めて國家の基礎固しといふを得るのである。如何なる大木と雖單に直根のみによつて成るものはなく、そこに無量の分根を要とする。大木が强風にも自若として動ぜぬのは地底深くゆき亙つてゐるこれら無數の細根の力ともいへるのである。

同樣にわが國の根柢も本質的には神的命意に存するのであるが、しかもそれが現實の力となるには國民の一人々々の心にその根を下すの外ない。而してこれ上來屢述の國心の謂ひに外ならない。されば國家の根柢をかく民心深く根を下さしめる努力は、之を努力といふ面からは確に國作りの努力に屬するが、同時にこの努力は國民の各自をしてわが國成立の根元力がその神的命意に存することの自覺の徹底であるが故に、その努力の進めば進むだけそこに國生みの自覺を生じ、而してこの自覺の明かとなり來るとき、國作りの努力はそのまゝ國生みの大業といひうるのである。かくして國作りの至心徹底は、やがてそこに國生みの自覺に貫徹し來るを覺ゆるのである。即ち人間努力の至心徹底は、おのづから人作の底を透脫して神的命意に承當するのであり、之を箇身に於ては「みづから」の努力の至心徹到は、やがて箇の底を透過して「おのづから」の境域に出づるのである。而して箇身の努力の至心徹到は、實はそのまゝ神的命意に直接するものといへるが、只その直接が境膜を撤して直通に到るには、神的命意

の歷史的實現を介する自覺的把握を要とする。即ちこの歷史的自覺を缺く限り、如何に至心の努力といふも未だ箇心の底を透脫することなき主觀の直接態の域を脫するものではあり得ない。

而してこの事はわが國の建國に當つては特に重大なる意義が存すると思はれる。親邦日本國の如きは、天神の召命がその儘國生みとなり國作りとなつたのであるが、しかもかくの如き第一次的生誕樣式をとれる唯一國家である日本國にあつてすら、そこに幾多の國難の存したことは天岩戶隱れを始めとして幾多神代傳說に窺はれる處である。況んやわが國の如く、現代に於て突如として生誕したる國にあつては、國家建設の困難と努力とは實に言語に絕するものがあるといふべきである。何となれば建國の根元力はなるほど屢說の如く神的命意に存しはするも、その發現は神代でなくしてまさに現代のこの世界史的地盤の上に於てだからである。即ちその根元力は「神ながら」即ち神命の「おのづから」によりつゝその發現の時代は「みづから」の時代としての現代であり、しかもこの「おのづから」より「みづから」への展開は純粹に自らの展開でなくして親邦の歷史的展開を介するものだからである。わが國建國の困難性の一切は本質的には實にこの一點に歸するともいひうるであらう。げにこの意味からは又わが滿洲國の歷史は過去十年間に日本の全歷史を壓縮せるに近きものがあつたともいひうるであらう。それを想へば過ぐる十年の歲月に於て、この國の建設に參與し來つた人々の努力には、その本質に於てまさに親邦日本國に於ける國作りの神々と相通ずるものが存したともいひうるであらう。勿論私人としてはそれらの人々も一箇凡夫の境域を脫し得なかつたでもあらうが、しかし公人として身命を捧げた或る瞬間にはおのづから神明と相通ずるものがあつたといひうるであらう。

かくして時間的には國作りは國生みの延長であり發展であるといひうると共に、又之を内外に即しては國作りとは國生みの大業を外觀せるものであると共に、國作りの努力も之を内觀すれば國生みといふべきである。否内面的なる國生みは必然外に顯はれて國作りとしての國家建設の積極的活動となるのでなければならぬ。されば國作りを伴ふことなき國生みなるものは、本質的に存し得ない譯である。但し單に外的なる國作りに留つて内に國心の入魂を得ない國家建設、即ち國生みの本質にまで到らない外的形式的なる國作りはありうるのであり、今日わが滿洲國の最重要問題は實にこの點にあるともいへる。國生みの基礎と大本とは既に萬代に搖ぎなく

置かれたのであるが、しかもその大本は未だ十分にその細毛を國民一人々々の心の奥底にまで下してゐるとはいひ難いものがあるであらう。樹は植ゑられたのである。しかし根を生ずるには時の經過とそれに卽する人間の努力とがいるのである。かくして國作りの努力とは畢竟國生みの根本精神に徹するの外なく、國作りの努力は之れが眞に徹到するときいつしか人作を超えて天地神明にも通ずるに到るであらう。否天地の心たる建國嚮導の神命に通ずるのである。これ實に國生みの根元力に承當するものである。かく努力の極努力を忘れ、人爲にしてしかも至誠眞實よく人爲を超える處に國作りにして同時にその儘國生みたるの實は擧るのである。しかも眞にこの境に到るには尙遙かなる道があるであらう。

五　修理固成

上述の如く我が滿洲國の建國にあつては國生みは國作りに展開しなければならぬが、しかも如何に國作りが展開してもそはその根本に於て國生みを離れてはならぬのである。國作りが國生みを離れて單なる國作りに墮するとき、建國は外形的にはよし如何に發展するとしても、本質的には退步であり頽落である。併し乍ら眞の國生みは單に生れたといふでなくして育たねばならぬ。凡て生あるものは育たねばならぬ。そこに生命あるものゝ道がある。かくして又國作りとは謂はゞこの育ちの道といふも可である。特に現代に於てその生誕を見た我が滿洲國は、生誕と同時に現代國家たるの形態と實質とを具ふべきことを要請せられてゐる。さればわが滿洲國にあつては國生みと國作りとは直接してをり、隨つて國生みそのものすら國作りと考へられるのである。勿論今日に於ける一切の建設的努力も之を內面的にはすべて國生みといはるべきであるが、旣にその生誕を見たるものゝ育生進展は又之を國作りといふを妨げない。然らば國作りとは如何なることであり、その本質は如何なる邊に存するとすべきであらうか。

吾人は國作りの本質の如何なるものであるかは、やはり書紀に見ゆる修理固成の語が最も端的に之を示してゐるかと思ふのである。卽ち漂へるものを作り固めなすといふことである。卽ち國作りとは未だ國としての十分なる形態を具せざるものに對して國家的形態を賦與することでなくてはならぬ。こゝに形態の賦與が固成の意義をもち來ることはいふまでもない。さて問題となるのはこの形態の賦與といふことである。形態は出現し形成せられて始めて形態となるのであつて、成形以前に形態はないともいへるであらう。併し乍ら又形態は

それが單なる自然的生命體でなくして人的努力を要するもの、特に國作りの如き場合にあつては、單に自然發生乃至自然生長的に形成せられるものでなくして、そこに形態の構想とこれが實現としての形成への努力を要するといへる。而してかゝる成形への努力は必然或る種の形態の先想を豫想する上からは、國作りは又之を國家形態の賦與ともいひ得るであらう。蓋し國家は單に自然生長的なるものでなくしてそこに人的努力を要とするが故である。かくして國作りとは畢竟國家的形成の謂ひであり、換言すれば又國家的形態賦與の問題である。併し乍ら形態を賦與するとは果して如何なることを意味するのであらうか。

一見すれば形態の賦與と成形乃至は形成とは異るやうでもある。併し乍ら成形乃至形成とは如何なることであらうか。形を成すといふ爲めには成形以前成形者の想念裏に何らかの程度に於ける形態の先想が豫想されねばならぬ。而してかく先想されたる形態が現實の質料を通して自己を實現する處、そこに形成があり成形がある。然らば形成と形態賦與との間には何ら本質的相違はないともいひ得るであらう。かくして問題はむしろ成形と形態賦與との異同になくして、成形者卽ち之を詳しくは形態賦與者にあり、成形乃至形態の賦與とは成形者乃至形態賦與者に於ける如何なる作用であるかを明かならしむる點に存するといふべきであらう。而してこのことは今個人の個物的成形としての制作の場合にもその中心を爲すものとして十分の意義があり、かの技術論の本質は或る意味ではこの一點に存するともいひうるであらう。併し乍らこの事は一度それが國家の形成卽ち建國の大業に關はる場合、實に至重の意義を有し來るのである。殊にわが國の如く現代に於て生誕し、現代にその歷史的始源をもつべき國の場合に於て然るのである。卽ち我が滿洲國の建設に於てもその建設は、國家形成としてそこに國家の形態が理念として一應之に與る人々の心裏に內在すべきことを認めなければならぬ。蓋し何ら心裏に存在しないものが實現形成せられることはないからである。卽ち成程實現せられるものは、少くとも理念としては之を實現せんとする者の心裏に先想內在せるものでなくてはならぬ。而して茲に國家建設に於ける國家理念の重要性があるのである。

抑々國家に於てはその形態はその理念を離れてはなし得ない。否一步を進めては國家形態が其儘國家理念といはるべきでさへある。蓋し內外は相卽一如であつて國の相がその儘國の本質としての國心の表現具現といひうるからである。尤も

この事はひとり國家のみ然るのではなく、實存するものはなべて斯くの如くである。卽ちすべて內なるものは自らの本質を外に示現する。否內なるものの外への示現は、實は內なるもの自身の自己充實である。かゝるが故に我々は、又外なるものを通してよく內なる本質を窺ひうるのである。今國家に於てはこの理は最も深奥に妥當する。蓋し國家は一切現實存在中最も深奥なる存在だからである。かくして國作りは之を外からは上述の如くこれを國家形態賦與の問題といふべきであるが、しかも國家形態の賦與は、前述の理によつてまさに國家本質の具現の問題である。而して玆に國生みの深意は存するのである。卽ち國を作るとは一見單に國にその形態を賦與して國としての形を具備せしめることのやうであるが、しかもそはその內面本質に於てはそのまゝ國の本質實現の根本問題なのである。而して玆にも我々は國作りがその根本に於て國生みと內面的に連續し、翻つて又國作りが國生みの展開といはれる所以を見るのである。されば國作りの深意を聞くことなくしては建國の深意も之を知ることは難いであらう。

如上國作りとは畢竟國相の成形そのものに外ならず、而して國相の成形が實はその儘國心の實現に外ならぬのである。然らば一步を進めて國相卽ち國の形態とは如何なるものをいふのであらうか。國の形態がその儘國の本質の具現であるとされる時、國の形態の本質を爲すものは、之を國家的秩序といふべきであらう。されば國作りとは畢竟國家的秩序の賦與といふの外ない。隨つて又かの修理固成といふも、その實質に於ては秩序の賦與、換言すれば國家組織の形成の外ないであらう。蓋し現實に存在するといふことは一箇の統一體としてあることであり、而して統一體とは畢竟秩序を內具する秩序體といふに外ならぬからである。而して國家は現實に存在する一切存在中最も强固なる組織體であり、又最も深奥なる秩序の具現である。わが國がその建國以來治安に政治に經濟にはた又文教にそれ〳〵營爲しつゝあるものは、之を一言にして畢竟國としての秩序賦與の外ないのである。治安は何が故に要とせられるのであるか。これ秩序賦與の地盤の淸掃なるが故である。以下政治といひ經濟といひ文教といひ要するに秩序の現實的賦與の謂ひに外ならない。經濟が生產配分領域に於ける秩序の賦與整齊であるならば、政治は之を基底とせる國家諸領域の秩序の動的總體的整齊といひうるであらう。之らに對すれば文教は謂はゞかくの如き國家秩序そのものの理念的確立竝に之が教育による人心への扶植といふべきであらう。

然らば一步を進めて如上國作りとしての國家組織の形成に於て最も重要なるものは如何なるものであらうか。我々は之を本質竝に現實實現の兩面に分つて考へうると思はれる。その中本質面に於ける重要事とは、秩序は秩序としてそれが統一をその本質とする限り、そこに於て最も根本的なるものは能統所統の關係であるといふことである。卽ち秩序の秩序たる所以は、この能統所統の關係の確立明辯に於て初めて成立するのであつて、若しこの一點にして曖昧ならば、本質的には一瞬にして秩序は秩序としての自己を喪失する。而してこの能統所統の關係とは、之を我が國の現實としては　皇帝陛下の御位置の絕對性をいふに外ならない。この意味に於て　皇帝陛下の執政の御位置より帝位への御登極は、我が滿洲建國に於て眞に特筆すべき重大意義を有つのである。而してこの帝位御登極の有する本質的意義は、更に帝位繼承法の制定によつてその萬古の不動性が確立せられたのである。而して之れに對し更にその根柢を絕對的に固成せしめたものが卽ち建國神廟の御創建である。玆に國本としての元神が奠められ、國の萬古不動の根基は置かれたのであつて、秩序固成の根基として最早これ以上に要とせられるものは存しないのである。

併し乍ら現實國家の建立としての秩序の建設に當つては、ひとりかくの如き本質的側面のみに留まらず、更にその如實實現の側面をも重視せられるでなければならぬ。而してこの實現の側面に於て第一義を爲すものは、總て眞の秩序は單に外より與へられるものでなくして、現實そのものゝ中から生れ出づべきものだといふことである。勿論組織の成形は、事實に於ては若干の卓越せる人々の頭腦の中にそれが理念として構想先想せられるでなければならぬ。卽ち全國民の凡てが等しくこの組織の構想に與るといふが如きは、事實に於て全く不可能事であり又實にこの點に組織そのものゝ特質があるともいへるのである。併し乍ら同時に組織はそれが國民自身の中に謂はゞ潛在可能態として內含先在せるものでなくては眞の力を有し得ない。この點からは組織の成形實現は、單なる構想の賦與でなくして國家の成素たる國民各自の素質本性の光被洞察に卽する步々現成步々實現でなければならぬ。卽ちそは現實より毫も先走ることなく、又一步たりとも停滯することなく常に現實の進行を嚮導すべきである。そも〳〵現實の中心は常に人にあり、之を國家としては常に民心にある。隨つて眞の國家形成は常に民心の奥底を照破する爲政の大才の明知によつて、恰も春草の萌え出づるが如く步々現成し步

歩實現せられゆくが眞の理想である。即ち爲政の大才の至心の努力が、民心をしておのづからなる開發へ向はしめ、そこに些の人爲を覺えしめぬにある。しかも斯くの如きは現實に於ては決して容易でなく、現實の施政にあつては構想せられたる組織の施行はともすれば現實と齟齬を生じ易く茲に又現實界の現實界たる所以があるともいへる。

而してこの事は特に我が滿洲國にあつては然るのである。蓋しわが國に於ては、周知の如くその構成成素たる國民が單一民族でなく、その言語風俗習慣等を異にする複合民族より成り、かてゝ加へてその困難性を加重せしめるものは、現代に生誕せる國家として建國直ちに現代國家たるの形態を世界史的現實から要請せられてゐるといふことである。この謂はば內と外なる二重の難點は、わが國の國家的形成をして困難ならしめること大なるものがある。しかもなべての困難性と等しく、この場合に於ても眞の困難性は外になくして內にある。即ち國家的組織の建設が、國民の心底に本具內在せるものを基底として、それに卽して顯現自發の趣を呈するに於て困難性を有つのである。恐らく今後わが國の爲政上最も重大なる點はこの側面に在るであらう。わが滿洲國の國作りは、その秩序の本質的側面に於ては今や餘す處なきまでにその大本が確立せられるに到つたが、しかもこの大本が國民各自の內奥にまで如何に照徹浸透するかはまさに今後の問題である。民心の洞察は爲政の第一義である。今や刻々に展開しつつある世界史の進行を大觀する時、建國の業は脚下を照顧してこの內面固成の方向に更に一段の努力を加ふべき秋であらう。

（筆者建國大學教授）

體力强化
疲勞恢復
胃腸强化
神經痛
脚氣
强力メタボリン錠は大人一日のビタミンB1必要量一ミリグラムを僅か一日二錠で補給します
最强力ビタミンB1劑（一錠中VB1含有量〇・五ミリグラム）
强力メタボリン錠

思想戰主體としての協和會

田川博明

目次

第一 思想戰一般及滿洲國思想戰の基本的諸問題
一 消極思想戰と積極思想戰
二 積極思想戰の立場より滿洲建國運動の樣相を觀る
三 積極思想戰的對策の骨子
第二 積極思想戰主體としての協和會
一 現代國家機能論
二 滿洲國家體制と協和會の任務の本質

第一 思想戰一般及滿洲國思想戰の基本的諸問題

一 消極思想戰と積極思想戰

思想戰なる用語は、最近漸く滿洲國に於て一つの流行語化し來つた觀があるのであるが、その概念規定に關しては、筆者寡聞にして未だ必ずしも明確なるものあるを聞かない。

私は自己の職務上日頃この問題に關する一定の確固たる所見を確立することに種々と努力し來つた者の一人であるが、未だ不敏にして理論的に觀て一定の精密なる概念を構成し得ないでゐることを頗る遺憾に感じてゐる——だが、この問題に關する自己流の見解だけは持つてゐるつもりである。以下

私は極めて粗笨なこの見解を御紹介に及び、讀者諸子の御批判を仰がんとする次第である。

私は思想戰なるものを消極・積極の二種に分つて概念してゐるものである。これら二種の思想戰の概念に就き、私は今左に極めて要約的な説明を試みるであらう。

(一) 消極思想戰

1. 意義

(イ) 對内的意義――國家の既存法益の侵害に對し、國家が行ふ强權的手段を以てする彈壓統制工作(これは國家の諸機能中、吾人の所謂「國民統制の機能」に屬するものである――後述「現代國家機能論」を參照せられたい)。

(ロ) 涉外的意義――敵對國家間に於て行はれる他國民心の攪亂工作乃至斯かる工作に對抗する爲夫々の國家が行ふ防衛工作。

2. 主體

(イ) 近世國家成立以來第一次大戰頃迄の列國の例を見るに、政府機關が斯かる思想戰の主體であつた。

(ロ) 現在に於ける若干の强國の例を見るに、黨指導部の實質的直轄領導の下に活動する特殊機關(ゲ・ペ・ウ乃至ゲシユタポの如き)が斯かる思想戰の主體を爲してゐる。

3. 對象――消極思想戰の對象は、一般常態の人々乃至その行動ではなくして、國家生活の安寧秩序に對する破壞攪亂行爲乃至敢てこれを爲せる者である。今これを比喩的に表現するならば、既に罹病せる者であつて、患者をして患者たらしめるその劣弱なる體質乃至黴菌の存在それ自身ではない。

4. 轉向工作に就て――轉向工作は謂はば思想的罹病者に對する矯正・保護・監察工作であり、未だ消極的性格を脱することを得ないのであるが、本工作に到つて、消極思想戰は次に述べる積極思想戰と密接なる關聯を持つものである。

(二) 積極思想戰

1. 意義

(イ) 對内的意義――確固たる一の世界觀、これに導かれる生活原則を全國民の日常生活に弘通せしむると共に、國家目的の遂行に關し國民中の可及的多數を自發積極的に參畫協働せしめんとする工作(これは國家の諸機能中、吾人の所謂「國性向上の機能」に該

當するものである――後述「現代國家機能論」を參照せられたい)。

(ロ) 涉外的意義――他國民をして自國民世界觀の信奉者たらしめんとする工作乃至は信奉者たらしめずとも少くともその贊成者たらしめんとする工作。

2. 主體

(イ) 近世國家成立以來第一次大戰頃迄の列國の例を見るに、概ね政府機關が斯かる思想戰の主體であつた。

(ロ) 現在に於ける若干の强國の例を見るに、同志的結社としての黨組織それ自體が斯かる思想戰の主體を爲してゐる。

3. 對象――積極思想戰の對象は、一般常態の人々の思想的動向である。これを比喩的に表現するならば、一應の健康體であり、人々をして罹病の機會を與へざるやう平素より强盛なる體力を錬磨維持せしむること(積極的世界觀鬪爭の氣魄の培養)乃至は罹病の半面の要因を爲す所の黴菌の勦滅を敢行することと(正常なる生活環境の造成)にその志向が向けられるのである。

以上が消極思想戰及積極思想戰に關する私の所見の大要であるが、以上の説明を以てしては、思想戰に關する極めて重大な問題が何等解決せられずして殘つてゐる――(一)眞にその名に値する思想戰とは以上二種の思想戰中の孰れを指して言ふのであるか、(二)以上二種の思想戰は如何なる關聯を有するものであるか、といふ二箇の問題、即ちこれである。これ等の問題に對し、私は端的に次の如く答へる。

(一) 眞にその名に値する思想戰とは積極思想戰である。消極思想戰は積極思想戰の補助的機能を果すに過ぎないものである。

(二)

1. 積極思想戰が本であり、消極思想戰は末である。積極思想戰を前提とせざる消極思想戰の展開は、强力なる敵對思想の攻擊に對して絶對に勝利を博することを得ない。

2. 積極思想戰は、謂はば患者を發生せしめる黴菌にも似た人々の生活環境に對する不斷の革新是正を必須の要件とするが故に、それは必然に、現狀維持勢力に依つて擔當せられること殆ど不可能に近きものであり、革新的勢力に依つてのみ效果的に擔當せられるを常とする。

3. これに反し、消極思想戰はその本質上防衛的なものであるが故に、現狀維持勢力の頼らんとする思想戰の形態として正しく恰好のものである。

以上を以て私は思想戰に關する卑見の大綱を論述したつもりである。玆に本節の記述を終るに方り私は、二十世紀の偉大なる政治的天才ヒットラー總統が、その著「マイン・カンプフ」の第一卷、第五章に於て、思想戰の本質乃至積極思想戰と消極思想戰との關聯に就き、極めて示唆に富む論説を展開してゐることを特に指摘し、讀者の注意を喚起して置きたい。私は玆にその内容を紹介し、この種問題に關する讀者の理解に資したいと熱望するのであるが、紙幅の都合上、今はその自由を持たないことを、まことに遺憾とするものである。本稿の讀者諸子にして、未だこの天才の所見を検討する機會に惠まれざる人あらば、斯かる人々に對し私は、須く速かに原書なり又は石川準十郎氏著「マイン・カンプ研究」なりに就き、眼紙背に徹してその眼目を味讀すべし、と叫びたい。

二　積極思想戰の立場より滿洲建國運動の樣相を觀る

本節に於て私は、前述したやうな意味に於ける積極思想戰の立場から滿洲建國運動の樣相に就て、一應の反省的觀察を下してみたいと思ふ。以下覺書的に記述するところは、筆者日頃の省察の要約的論斷であつて、必ずしも讀者諸子の充分なる理解を得るに足らないものであるかも知れないが、これが詳細の論述は他日の機會に讓り、今はこれを以て滿足して戴くことゝする。

（一）形象的（形而下的ではない）に觀察した場合、滿洲國は自然に出來た國家ではなく造つた國家であると言はなければならない。從つて滿洲建國運動に於ける思想戰的工作は、決定的に重大なる役割を演ずべき必然性を有するものである。

（二）滿洲國は多民族國家であり、而もこの國に於て指導的役割を演ずべき日本民族の國内人口構成上に於ける比重は極めて小である。

（三）滿洲國を構成する諸民族中には、過去に於て、國家生活に慣れない民族が多かつたのであるが、今日に於ては、その母國的部分に於ける近世的民族國家建設運動の氣運に刺戟せられて、是等諸民族の民族主義的情熱が漸次昂揚しつゝあることは、否み得ざる現實の事實である。

（備考）中國共産黨乃至重慶派國民黨の對滿宣傳工作が、正にこの急所に集中せられてゐることに關しては、深甚の注意が拂はるべきである。

（四）滿洲建國運動は右のやうな客觀的諸條件に制約せられて展開されつゝあるものであり、加ふるに建國後日尚ほ淺いといふ事情に依つて、その國體の固成は、今日遺憾ながら未熟である。

（五）從つて國體の表現たる國家精神は、今日未だ廣く國民大衆に弘通してゐない。

（六）然るにこの根本的缺陷を克服する爲の緊要なる工作、即ち國家思想（國家精神の理論化されたもの）の確立・深化並にこれが普及の爲の國家的努力は、今日までのところ遺憾ながら極めて不十分である。

（七）而して滿洲國を構成する諸民族中の最優秀者間に緊密なる建國運動の同志的關係を確立するが爲には、敵性勢力の世界觀に比し、より優越せる、より確固たる世界觀に導かれたる國家思想及これを要約的に表現する建國運動綱領の存在を必須の要件とするものであるが、この點前述の如き狀態に在ることは、我等の日頃極めて遺憾とし來つた所である。

（備考）斯かる必須的要件の缺如せる場合は、本項に所謂「同志的關係」は遂に確立せられずして、單純なる「友人關係」が成立するに過ぎないことを、豫め我々は充分覺悟してかゝらなければならない。

（八）加之、滿洲國を圍繞する敵性勢力の對滿謀略工作は、極めて老獪・巧智なる術策（我が方の民族的・社會的・經濟的諸間隙を狙つた）を以て遂行せられつゝある關係上、彼の意圖する我が國民心の攪亂が、その效を奏したるもの皆無なりと爲すことを得ないのは、まことに遺憾に堪へざる所である。

（九）事情斯くの如きを通觀すれば、滿洲國に於ける積極思想戰展開の緊要なること、今日より大なるはない、と言はざるを得ないであらう。

三　積極思想戰的對策の骨子

前節に於て摘記したやうな諸問題に對する解決の方途は、種々の立場から究明策定せられ得るし又せられなければならない。私としては、これ等の問題に關する對策を、積極思想戰的立場から年來深刻に省察し來つたのであるが、今私は、本稿の性質上、これが詳細の論述を他日の機會に讓り、左にその骨子を述べ、これを以て次章に展開する論述の伏線的豫論の役割を果さしめんとするものである。

私は讀者諸子が斯くの如き意圖を念頭に置きつゝ、左記各項を活眼を開いて吟味せられんことを切望する。

（一）滿洲國政の指導中樞部が、積極思想戰展開の絕對的に必要なる所以を確認すること。

（二）確固不動の建國運動綱領（國家思想の要約的表現）を確立すること。

（三）右綱領を忠實に實踐し、且つこれに依つて國民大衆を啓蒙指導する積極思想戰主體としての協和會の地位を確認すること。

（四）協和會機構に於て民族的契機を十全に活用して民族問題の合理的解決を圖ると同時に、各民族内に新進氣鋭の優秀なる思想工作員を育成し、是等の人士をして協和會運動に於て展開する思想工作の推進力たらしめ、斯くして多民族國家＝滿洲國に於ける思想戰主體たる協和會の完成を圖ること。

（五）開拓農業經營の形態を全滿農村に推擴する目途を定め相當長期に亙る計畫を以てこれを實施に移すことに依り、滿洲國が合理的な食糧・農業戰線を構築する意圖あることを農民大衆に理解せしめ、以て積極思想戰の經濟的・社會的基礎を鞏固ならしむること。

（六）特殊會社の經營形態に改變を加へ、これ等を勞務者をもその構成員とする如き公社的性格の企業形態へと轉換せしむること並に國民總服役制度を創設斷行することに依り、合理的なる企業・勞働戰線を構築し、以て思想戰の經濟的・社會的基礎を鞏固ならしむること。

（七）前二項の運營に關し卓拔せる企畫・指導性を具備する國家的經營指導機構を構築し、以て思想戰の國家的背景を造成すること。

第二　積極思想戰主體としての協和會

一　現代國家機能論

以上述べた所に依つて讀者諸子は、積極思想戰——その擔當者たる協和會に關する筆者の考へを漠然ながら一應は了解せられたであらう。だが斯かる問題に關する明確なる認識を得んが爲には、今日に於ては、一般の人々にとり稍々難解事に屬する現代國家の理論（構造論及機能論）に關する基礎的知識を持つことが、必須の前提要件となるものである。然しながら、現代國家論を展開することは、本稿の如き一片の論稿が企及し得べき所でもないし又直接本稿に與へられたる任務でもない。依つて私は、以下の論述に於ては、積極思想主體としての協和會の本質を理解する上に是非とも必要なる知識と思はれる現代國家論の一分野を極めて要約的に解明する

——（思想戰主體としての協和會）——

に止める。茲に述べられる所は、讀者の一部にとつては極めて難解なものがあるであらうから、その平易なる解明は、他日の機會に於て物すべきことを一言御斷りして置く。

由來私は、國家は一般人間と同樣、獨立の生活主體であると觀るものである。從つて以下私は、かやうな見地に立つて、先づ國家の意志活動が如何にあるべきものであるかといふことを識る便宜の爲に人間の意志活動の基本的態樣を觀察し、次に近代國家の意志活動との比較に於て現代國家の意志活動の態樣を論じたいと思ふ。

先づ人間の意志活動の態樣を觀よう。

本來意志とは目的を實現する力であるが、斯かる意志活動は通常三箇の形態に依つて行はれる——（一）欲求統制（二）性格向上（三）目的經營、即ちこれである。

第一の欲求統制とは、目的に照して箇々の欲求を統一し規制することであり、これには前階段に於て盲目的なる衝動を一定目的の下に制御し、後階段に於て意識的なる欲望を同じ目的の下に按排すると謂ふ二樣の調整があるのである（作田博士著「國家論」參照のこと）。

第二の性格向上とは、人間の性格を自然性より意志性へ、更に高度の意志性たる精神性へと向上せしむる意志活動の一作用である。斯くの如き人間の意志性の高度化に從つて、一面に於ては分身的自覺に到達せる共同的大人生活主體である所の國家人が現れ、他面に於ては高度の生活趣向としての創造主義の生活を營む創造者が現はれる。

第三の目的經營とは、一定性格の主體が、統制の下に、目的實現の仕事を發起し、計畫的に遂行し、その成果を收むることである。これには從來のままに行ふ因襲と尙ほ良きものを造り出す創造との二樣がある（作田博士著「國家論」參照のこと）。

而して我々は、これら三者の關聯を、次の如く謂ふことを得るであらう。

即ち、統制なきときは經營の步調を整へることを得ないと同時に、經營なきときは目的實現の進行を見ないのであるが、これら兩者は更に當該意志活動主體の性格の如何に依つて、基本的規制を受くものである、と。

以上が、人間の意志活動に關する私の基本的觀察であるが、獨立の生活主體である所の國家の意志活動に於ても亦、これらの三態に相當する三機能が存在する。但し歷史的存在としての國家に於ては、斯くの如き三機能は、その意志的性格の成長の低度なるまま、未だ十全の展開を見ないまでである。

私は今問題解明の便宜上、先づ現代國家に先行する近代國家の意志活動に就て、その態様を檢討するであらう。

(一) 近代國家は、その自由主義時代に到つて、國民團體に於ける極めて廣範圍に亙る個人主義に立脚する社會人生活を許容し、唯僅かに最少限度の法的統制の機能を保持するに過ぎなかつた。近代市民社會の爛熟は、人々をして、國家固有の統一全體意志的統制それ自身の存在をも否定せしむるに到り、そこに存在するものは、社會的國家に過ぎずと觀念せしめたのである。夜警國家觀・階級國家觀等の一聯の多元的國家觀の存在は、これを證明する。

(二) 近代國家は、自由主義時代に到つて、その國性の向上に關し、殆ど無關心なりしものと謂ふも敢て過言ではない。如何となれば、近代國家に於ける學校教育は、殆どその目標を個人完成に置きたる結果、國家人層の意識的造成と謂ふが如きことは當初より問題とならざりしものである。のみならず近代市民社會の爛熟、從つて又資本主義の風靡と謂ふ現象は、斯くの如き國民教育の結果を更に劣惡化して、個人主義的功利主義を基調とする個人營利主義の横行となり、國民的生産の推進力たる創造精神は擧世滔々として地を拂ふに到つた。斯くて近代國家は、功利的小人層の横行闘歩に對し、教化的・政治的統合を行はんとする殆ど何等の意識的措置を講ぜざりしものと謂ふも敢て過言ではない。更に斯くの如き功利的小人層の私的利益を代表する諸政黨の軋轢抗爭(個人主義に立脚する民主主義的議會政治の一特徴)が、所謂「黨派國家」を生み、國家意志の分裂現象を露呈せしめたのである。

(三) 近代國民團體に於ける前述の如き個人營利主義の制覇は、本來國民の富の生成歸着に關し企畫指導を行ふべき國家の意志活動を牽制して、國民生産組織を殆ど全く資本主義生産企業を根柢とする自由主義組織のまゝに放任し、そこには殆ど國家の固有する統一全體意志に依る統營主義の組織は見られなかつたのである。斯くの如き狀態は、獨り經濟のみに限らず、文教・厚生等の領域に於ても同樣である。但し軍事に關しては、軍令機關が軍政機關と併立して、日本及獨逸に存在したることは、注目すべき事實である(中野登美雄氏著「統帥權の獨立」參照のこと)。

近代國家の意志活動は、要説すれば前述の如くであるが、國民團體は、斯くの如き自己否定的狀態に永く假睡するに忍びず、それ自らの統一と興隆とを所期して今や現代國家形態を生み出すに到つてゐる。その然る由來を論述することは極

めて肝要ではあるが、玆にはこれを省略し、今直ちに私は、斯かる現代國家の意志活動の到達すべき態様を、極めて要約的に左に記述するであらう。

(一) 國民統制の機能

玆に國民統制と謂ふは、國民生活に對し國家の行ふ所の强權的な窮極的な統制である。詳言すれば、國民生活に對し窮極に於て國家權力に依る强制法規範の定立執行となる所の司法・法政・警察・財政・軍政等の機能である。これらの領域に於ては、國家目的は單に間接的の方法を以て實現せられるものであり、これらの領域に於ける國家の意志活動は、ハンス・ケルゼンの所謂「宣法としての行政」乃至「間接國家行政」たるものである。私は斯くの如き「間接國家行政」の機能を玆に便宜上國民統制の機能と稱する。而して從前の行政機關が擔任したる所謂「直接國家行政」の領域は、これを後に述べる國家的經營機構の擔任する業務中に移讓包括せしめ、新に縮編せられたる行政機關と、概ね舊來の機構を保持する司法機關とが本項に述べたる機能の遂行に當ることとする。

(二) 國性向上の機能

玆に國性向上の機能と謂ふは、國民の自律的なる共同的創造主義生活精神の振起興隆を期する所の左記の如き教化的・政治的一元歸一機能を指稱する。

(1) 國民中の自律的なる共同主義的創造者層(國家人たる創造者層)が、國民中の他律的なる相互主義的功利者層(社會人たる功利者層)に對して行ふ所の啓蒙指導機能。

(2) 前項の機能に依つて漸次に向上せる性格の持主となる所の國民が、國家經綸の決定遂行に關して參畫協働する國家經綸輔翼の機能(此の場合、國家經綸意志決定の方式は、從前の衆議數決制を超克せる合議統裁制である)。

斯くの如き教化的・政治的一元歸一機能の發揮こそ、正しく、近世デモクラシーと現代獨裁政治とを止揚する全く新たなる政治形態を實現する。かくて斯くの如き新たなる政治形態により到達すべき窮極の目標は、全國民が高度の意志性を保有する國家人たる創造者となり、これらの共同生活態としての大精神國家が造成せられることに外ならない。而して斯くの如き機能を發揮する國家的機構としては、(1) を擔任すべき國民啓蒙指導機構と、(2) を擔任すべき國家經綸輔翼機構との一元歸一的組織體の存在することを必要とする。

(三) 國民統營の機能

玆に國民統營と謂ふは、從來行政法學上、保育行政又は事

業行政と稱せられ、ハンス・ケルゼンにあつて「直接國家行政」と稱したるものを、更に積極化し高度化したる機能を指稱する。詳言すれば、國民生活の內容に關し、その進展向上を目指し、統一的企畫指導を行ふ國家の意志活動及びこれに呼應する直接の企業主體の公的經營を總括する所の國民一體的經營を、私は今茲に便宜上、國民統營の機能と稱する。現代國家は時代の要請に導かれて、前二項に於て述べたる如き法的統制の機能並に敎化的・政治的一元歸一の機能を發揮するを以て足れりとせず、經營國家としての體制を整備する必要上、國家的經營機構を創設して、國內に於ける敎學・經濟・厚生等の諸領域に亙る國家の經營活動力を旺盛ならしめ、斯くして遂に因襲に囚はれることなき眞の創造活動を展開すべき、必至的運命を有するものである。斯くの如き意味に於ける國民統營の一部の機能は從來、日本及獨逸に於ける軍事に關する軍令機關の獨立に於て之を見たことは、嚮に一言せる如くである。又例を日本にとれば、鐵道省・遞信省の所管業務又は各種學校敎育等は、その本質上國民統營の機能に屬すべきものであり、これらは裁判又は警察業務の如き國民統制の機能に屬するものとは明かにその性質を異にする。私は斯くの如き意味に於て、近代國家の統治・經營未分化の狀態は、現代國家に於ては可能的速かに超克せられて、國家的經營機構の分化獨立へと轉換せられなければならぬことを確信するものである。更に私は斯くの如き國家的經營機構は、國民生活の夫々の領域內容に對し、專門的に企畫・指導を行ふ所の國家機關たる各種の「營府」と、其の指導の下に、經營を直接に擔任する企業主體（營所）となる所の、官營の「營所」並に公法人たる各種の「公社」とを以て組織せらるべきものであると思料する（「公社」に關しては滿洲經濟康德七年三月號所載の作田博士提唱「公社創設論」參照のこと）。

而してこれら三箇の機能は、次の如き關聯を以て、現代國家經綸の最高目的を實現する。

即ち法的統制たる國民統制の機能は、國性向上の機能の一成果たる共同主義精神の振起興隆を母體的精神として、全體國家の固成を結果し、國民統營の機能は、國性向上の機能の一成果たる創造主義精神の振起興隆を母體的精神として創造的經營の開顯を結果し、斯くてこれらは、一元統合力たる國性向上力（國體固成・國運開顯の母體的精神力）に統合歸一せしめられて、遂に崇高隆麗なる全體的創造主義生活を成滿する。これ現代國家經綸の最高目的の實現に外ならない。

(註)全體的創造主義に就ては、作田博士著「國家論」を味讀せられたい。

二　滿洲國家體制と協和會の任務の本質

嚮に述べたやうに、滿洲建國運動は極めて困難なる客觀的諸條件に制約せられて展開されつゝあるものであるから、前節に於て述べたやうな現代國家體制の所期する成果を擧げることは、蓋し至難事に屬するものではあるが、それ丈益々强力にして且つ卓越せる國家的指導を必要とすることは、自明の理である。茲に於てか我が滿洲國は、其の意志活動を全面的に發動せざるを得ないものであり、このことは換言すれば、前節に於て述べたやうな現代國家的機能の十全なる發揮及びこれを負荷する國家體制の整備を必須とすることを意味するものである。

斯くて私は、滿洲國家體制が將に左記の如く編成せられなければならぬと確信する。

(一) 前述の如き意味に於ける國民統制の機能を擔任すべきものとしての司法府・行政府（官署機構）の存在の確認。斯くの如き認識に立脚する現行機構の改組整備。

(二) 前述の如き意味に於ける國性向上の機能を擔任する左記の如き二機構の一元歸一的組織體としての協和會機構の確認。

(1) 國民中の自律的な共同主義的創造者層（國家人たる創造者層）が、國民中の他律的な相互主義的功利者層（社會人たる功利者層）に對して行ふ啓蒙指導機能を擔任する所の協和會機構（各級本部及分會中核）。

(2) 前項の機構の運營に依つて漸次上質の性格を具備するに至つた國民の協働に基く國家經綸輔翼機能を擔任する所の協和會機構（各級聯合協議會機構）。

斯くの如き認識に立脚する現行機構の整備。

(三) 前述の如き意味に於ける國民統營の機能を擔任すべきものとしての國家的經營機構を確立すべき必要の確認。斯かるものとしての「營府」及び「營所」（官營の「營所」及び公法人たる「公社」）の創設。

(四) 國家機能分化の一元的統合

前三項の國家機能は、もと國家の一體的意志活動の三態を、特に抽象し、便宜的に分化獨立せしめたものであるから、これらは必ず、一元的國家機關により一體的に統合せられることを要する。然らざれば、具體的なる國家の意志活動は圓滑なる進行を見ないことは自明の理である。而して我が滿洲國に於ては、諸種事情の考慮に基き、國家機能分化の一

元的統合を行ふべきものとしての國家經綸最高輔翼機關たる協和會會長＝國務總理大臣を存置し、これをして、機務を宜奏し、旨を承けて、國家最高經綸の方向を指示し、前記全國家機構を統督せしむることが、最も機宜を得た措置であると思料せられる。

（五）國民生活基盤組織一元制の確立

市民社會的乃至植民地的性格を有する現行地方團體制度を改廢し、一定地域毎に國民隣保組織を結成し、これが中核として、建國理念の實踐に相應はしき獨自の自律共同體（敎化的・政治的、經濟的行動主體）たる協和會分會を育成する如く措置する。此の場合當該地域に行はるべき官治行政の一部は、之を當該分會長に委任することとする。尚又、既存の社團乃至組合は、可能的に、職場分會を中核とする各種の「營所」（官營の「營所」又は公法人たる「公社」）に改組する。

前段に於て我々は、滿洲國家體制を檢討しその一機構たる協和會が擔當する任務を見た。然らば斯くの如き協和會の任務は如何なる本質を有するものであるか。

惟ふに凡そ國家なるものが、單なる法的乃至權力的統治の機構のみを具備するに過ぎざる場合は固より、これに前述の如き國民的統營の形式的機構を兼備する場合と雖も、國民生活を指導すべく定立せられたる生活原則に呼應して國民の現實活動が行はれなければ、それは生命無き單なる形骸的國家に過ぎざるものである、軈て崩壞の一途を辿るべき運命を有すべきは自明の理である。

抑々國の生活を指導すべく定立せられた生活原則の實效性を確保しその進展向上の原動力となるものは、この原則を支持しこの原則の目指す所に向ひ協和統合する多數國民の統合的現實活動力である。卽ち斯かる統合的現實活動力の底礎に依つてのみ斯かる生活原則はその實效性を發揮するものである。而して斯くの如き實效性は、消極的には强制法秩序を支柱とするものであるが、積極的には上述の如き國民の統合的現實活動力を地盤とするものであると言はなければならない。惟ふに國家を政治的動態に赴かしむるは、上述の如き生活原則を周つて國民の不斷の統合的現實活動が行はれ、この現實活動が一種の力となつてこの原則を弘通せしむるが故に外ならない。國家の一隅に占據する對抗理念に對し、斯る生活原則が能く克服統一の政治活動を營み得る所以のものは、一にこの原則を支持運載する國民の統合的現實活動が存在するに因るものである。茲に於て我々は、生活原則が現實活動力と結びつき、生活原則に依つて指導せられた現實活動力、現實

活動力を背景とする生活原則が國の全生活の原動力となることを識る。如何に崇高雄健なる生活原則と雖も、斯くの如き力に依る支持を缺く場合は、畢竟するに一の空理空文に過ぎざるものである。

現在世界の全體主義諸國が、近代民主主義諸國に於ける如き强制法規範の定立執行を主たる任務とする官僚組織のみを以てする統治機能に滿足せず、特定の世界觀——これに導かるる特定の生活原則の貫流する强固なる國民團體を結成せんが爲に、國民の自覺的結合力を培養すべき極めて廣範圍に亙る國民組織を結成し、斯かる組織の中核體として國民中の自律共同層を以て組織する思想的・敎化的・政治的・經濟的實踐組織體の活潑なる活動を展開し、これに依つて國家所屬員全員の國家經綸輔翼の道を開かんとしつゝあるは、主として斯かる理由に基くものであり、我が滿洲國と雖も亦その例外を爲すものでは無く、斯かる組織體として協和會を有するものであるが、今日のところ遺憾ながら斯くの如き實力を有しない。

上述の如き理由に依つて組織せられたる協和會は、滿洲國の生活原則たるべき惟神の道に導かるゝ全體的創造主義に呼應する所の國民の自律共同主義的生活精神竝に創造主義的生活精神の振起興隆を期する、敎化的政治的一元歸一的實踐組織體（經綸體）として、滿洲國に於ける國體固成・國運開顯の原動力たる所謂「精神的母體」たるの役割を果すことをその任務とする。斯くの如きものとして始めて協和會は、嚮に闡說せし如き意味に於ける積極思想戰の主體たる地位に立つものと言ひ得べきものである。

私は茲に確信を以て斷言する——現代世界史進展の事實に鑑みるに、以上縷々として說き來れる如き意味に於ける思想戰主體を具備せざる國家の存續は、現代の世界生活に於ては、正しく拒否せられつゝある物なるが故に、斯くの如き主體の確立强化の問題こそは、現代國家政治に與へられたる最大緊要の課題であり、幸ひにして斯くの如き物たるべき萌芽としての協和會を有する滿洲國に於ては、これが强化擴大に全力を傾注すべき物である、と。

（筆者は協和會參事・特別思想工作班長・建大講師）

割烹 香蘭
新京梅ヶ江町

鼻を探す文學（文藝時評）

遠田民夫

ちかごろゴオゴリの小説「鼻」のもつ偉大な諷刺性に考へさせられることが多くなつた。この小説のことは私などがいふまでもなく、宇野浩二の言葉でいへば「實に風變りな然も實に奇想的な（變な言葉であるが）小説である。」で、私が思ふのに、若しゴオゴリの他の小説や戯曲を一つも讀んでゐないで、この「鼻」だけを讀んだとしたら、その餘りにも奇想的なのに呆れて、讀者は架空の物語りとして或ひはこの小説の持つ深い諷刺性に氣づかずにしまうのではあるまいか。これは矢張り、死せる魂や、檢察官や、外套や等々の勝れた小説や戯曲と一緒に考へてみて、つまりゴオゴリの作風を一通り理解した上で、更に讀返してみると實に感銘が深まるのではあるまいか。私にはどうもそんな氣がするのである。

さてゴオゴリの「鼻」は――といつても私はこの小説の紹介をすることが目的ではないので、私がいひたいと思ふ考への必要の限度に止める外はないのであるが、ざつとこれだけはいつておかなければなるまい。

ペテルブルグの理髪師イワン・ヤコウレヰツチが三月二十五日の朝、パンを食べようとすると、そのパンの中から人間の鼻が出て來た、といふ奇妙きてれつな話からはじまるのである。そして其の鼻といふのは、同じペテルブルグに住む八等官のコヴリヨフ氏のもので、在るべき鼻を紛失して顔の眞ン中がすべ／＼と平面になつてゐることに吃驚仰天したコヴリヨフ氏は、見るも憐れな悄れ方で八方鼻を探し廻るのである。

で、もう少しこの「鼻」について述べることにして此處では宇野浩二の「ゴオゴリ」の中の言葉を藉りて説明することにしやう。

「鼻」は前に述べた三つの小説（ネフスキイ通り。肖像畫。狂人日記のこと――筆者）と同じ頃に書かれたもので……この時代のゴオゴリが好んで書いたペテルブルグの役人が主題になつてゐる。「鼻」は鼻を道具に使つて、役人生活を諷刺的に、然も寫實的に書いてゐるので、それ自身が立派な作品になつてゐる（そこで、この小説の鼻がなくなつてゐるのに仰天した八等官のコヴリヨフの人柄についてはこんな風に書いてゐる）八等官のコヴリヨフはさつそく著物を著かへて、警視總監の所へ駈けつけたのであるが……コヴリヨフが道を歩いてゐる間に作者（ゴオゴリ）は、八等文官にも、學識に依つて資格を得た者と、コオカサス地方で成上つた者とふた通りあつて、コヴリヨフは、その成上り者の方で、然も八等官になつてから二年にしかならない。と説明してゐる。その説明によると、コヴリヨフは、ロシアの官吏によくある一種の虚榮家で、自分に威嚴をつけるために、自ら少佐と號し、決して八等官とは名乘らない。そこで、彼は、町で胸肌著を賣つてゐる女に會ふと「僕の家はサドヴヤ通だ。あの邊で、ゴヴリヨフ少佐のお宅はと聞くと、直ぐ分るよ」と云ひ、樣子のいゝ女だと、何か耳打ちして「ね、コヴリヨフ少佐のお住ひはと云つて聞くんだよ」と附け加へた。作者ゴオゴリは、かういふ人物を好まないらしく、併し又、そんなに憎むといふ程でもないらしい。

さて、以上の説明だけで「鼻」についての私の考へを述べると、をかしな云ひ方ではあるが、鼻は實に人間にとつて大切なものだといふことである。いや、そんないひ方をするよりも、この小説に即していふと、八等官コヴリヨフは自分の肩書の八等官に威嚴をつけて少佐と自稱する程の勝れた身分（彼コヴリヨフは少くともさう自負してゐる）でありながら彼には、その人間にとつて一番大切であるべき鼻を持つてゐない、といふことである。少し滑稽な話かも知れないが、試みに讀者諸君は自分に鼻がなく、「顔の眞ん中がすべすべと平面になつてゐた」といふやうな場合を考へてみたら笑ふであらうか、恐らく笑ふにちがひない。私もゴオゴリの「鼻」を讀むまでは鼻のない自分などを夢にも考へてみたことはなかつ

たから。

然し、これを人間として持つべき一番大切なものを、われわれは果して持つてゐるであらうか、と考へてみたらどうであらうか。こゝへくれば、「鼻」といふゴオゴリの小説を離れても、われ／＼のテーマとして考へさせられるものを持つてゐないとはいへまい。われ／＼は八等官コヴリョフ氏のやうに人間として最も大切なもの（鼻）を持つてゐないやうな者にはなりたくないのだ。これをいひ換へれば、われ／＼が文學する態度も、人間として最も大切なものを探すためだといへないこともない。だから文學はこの人間にとつて一番大切なものを發見しやうとする態度と方法の中にあるので、ゴオゴリの「鼻」のモチーフは奇想でもなければ架空でもないのである。この深刻な諷刺性の中に、われ／＼はゴオゴリの天才を想ひ「限りなく恐ろしいゴオゴリの笑ひ」に感嘆の聲を放たずにはゐられないのである。

人間として持つべき一番大切なものとはどのやうなものであらうか。誰も答へることは出來ない。それでゐてこの問題はわれ／＼に極めて切實である。われ／＼はこれを具體的に摑まぬ以上は滿足しないのだ。

そこでこの一番大切なものを發見するために何らかの手懸りを求めざるを得ない。われ／＼はこの手懸りを歴史の中に探りながら、自分と時代の現實との對決の中に見出さうとするのである。

私は文學とは時代の良心のことだといへると思ふ。われわれが文學精神とか作家精神とかいふ場合には、それは時代の良心をもつて貫いた頂點を指標してゐなければならない。時代の旋風の前にも動搖のない確信の姿勢が作家の良心でないならば、藝術の不滅の思想などは假想であり空しいものである。

私は思想と時代の激突する渦卷きの中に敗殘した老思想家が「社會の進歩の邪魔にならないやうに」との今後の心構へを吐露した心情に打たれる。情熱を傾けて來た思想が時代の流れの中に架空の烙印を押されて葬り去られねばならなかつたとは、何んといふ皮肉な報酬であらうか。私は理論的斷定の空恐ろしさが身に沁みて感じられるのである。

今では轉向作家も、さうでない作家も文學活動といふ面から見ると少しも變りがない。たゞ轉向作家といはれる一群の文學者や思想家の中には信仰的な回歸と思慕によつて、新たな生活の支柱を打樹てやうとしてゐるやうに思はれる。これ

は思想の轉向の行方を單的に示唆してゐるのである。嚴密にいへば思想の轉向は、曾つて自分が抱懷してゐた思想の誤謬を、新たな思想の體系を打樹て、それによつて克服して始めて成立つのである。これ以外にあるはずはない。所謂思想の轉向は、專ら政治的な意味でしか考へられてゐないので、それで自他ともに許容されてゐるのは日本の有難さである。

私は轉向作家といはれる文學者や思想家は思想家的に僞裝してゐるのだとも、時代の權門に追隨してゐるのだとも云はうとは思はないが、しかし曾つては理論の鬪士として唯物的必然以外には歴史の眞理と運命を認めなかつた人々であることを思へば、今日の轉向を思想の轉向といふのに不思議な氣がするのである。勢ひ曾つて彼等が抱懷してゐた思想は、思想ではなくて諳誦した公式であつたと考へざるを得ない。だが公式であつても彼等はその公式的思想に支配され大きな影響を兎にも角にも與へて來たのである。現在の激流のやうな時勢の前には、肚の底から思想の自らなる轉回を成し遂げる機緣を與へられたとしても、しかしそれは彼等の思想的轉向以後の感激である。曾つての理論的思想の空しいことを悟らしめたものは――その心情の奧の方には人間的な弱さが底をついてゐたのである。この人間的弱さが信仰的な回歸へ赴かしめたのである。彼等が神を悟つたのは理論的克服などによるのではない。さう考へたら彼等は以前の傲然たる公式諳誦へ還つたのである。轉向者が轉向を何か理論的な言葉にしていはうとしてゐるうちは、斷じて轉向は成就しないのである。

矢崎彈は「轉向の日本的特性」といふ文章の中で「轉向が急激で反射的であるから信じられないとか、轉向者の日本愛を保身術の巧みな操作としか眺められないのは、日本精神の傳統について不忠實のゆゑの迷ひである。日本の血の傳統を見誤るものゝ謬見なのである……」と書いてゐる。さうして矢崎彈は、轉向者の轉向こそ思想の日本的性格であることを證明するために、石坂洋次郎の「麥死なず」と山田清三郎の「耳語懺悔」の二作品をあげて分析を試みてゐる。私がこの文章に今もなほ興味を覺えるのは、社會的制約や時代の一般性格も考慮にいれるが、同時に、そこに沈澱する日本的特質にも忽ちにできぬ重要性を認めた――さういふ立場から書かれたといふ點であるが、しかしこの思想の轉向の日本的性格とか特質とかいふものが、日本的思想の性格や特質と混同されたら、そこから由々しい間違ひが生ずるのである。

窪川鶴次郎は「文學の思考」といふ本の跋の中で「文學的思考」といふ言葉は、今日では或る響を持つてゐる。文學を

通じての思考、この思考といふ性質が、今日では、文學についての私たちの意識の中で特に私たちを強く捉へてゐる。そこに一つの示唆、文學と時代との觸れ合ひについての示唆がないだらうか。」と書いてゐるが、これは非常に面白い言葉である。われ／＼が日本精神をいふ場合も、これと同樣に或る響きと示唆を持つてゐる。つまり日本精神とさへ云へば、日本精神とはこれこれの崇高な思想を內包してゐると特にその解明を待つまでもなく、それが自覺され示唆されるのである。日本精神であれば間違ひはないといふ自信。これはわれわれ日本人でなければ理解の出來ない國柄の有難さだといへるのである。

轉向の日本的特性は、轉向者の思想追求の方法が、肚と精神で行はれてゐなかつたといふところに今日の幸ひがあつたのである。思想が論理の公式と感奮だけで立つてゐて、日本人としてはそれが最も人間的感情であるべき國民的感情によつては把へられてゐなかつたといふこと、このことは思想性といはれて來た問題が從來非常に曖昧であつたことを深く考へさせるのである。今日の時代は思想よりも强烈な精神と肚が要求されるときである。思想を空しいものとすることと、思想の輕視とは勿論別問題であるが、これまでのわれ／＼には、輕視すべき思想も珍重すべき思想もなかつたのではないかとさへ思はれる。

日本愛の積極面に伸び上つたといはれるのは敢へて轉向者ばかりではないが、なべて思想でばかり立つてゐられると考へて來たわれ／＼は、自分が國民としての人間であることを忘れてゐたのである。日本愛が言葉として頻繁にいはれる時代になつて來てインテリの思想が影をひそめたといふことの中には、曾つての思想が架空なものであつたといふこと以上に、思想といはれて來たもの〻運命を考へてみなければならないところまで來たのである。確かり立つてゐられたはずの思想がぐらぐら搖らぎ、どうにも立つてゐられなくなつたときに摑んだ支柱は、新しい思想でもなんでもない。轉向者を含めての一般のインテリが、曾つての思想を揚棄し新しく自分を支へる思想を發見するに至つたのだと考へたら、それは自慰と傲嚴のさせる業である。時代の激しい振幅の前に立つては思想は空しく形骸をさらすに過ぎない。思想そのもの〻崩壞時代。思想はもう駄目になつたと考へる自覺から、新しい歷史を造つて行かうとするところにしか道は開かれてゐないのである。

この激動する時代との對決の中で、私たちは文學精神とか

文學的思想とかの問題を新しく考へ直し道を拓くべきだ。思想の萎つたところにわれ／＼の文學が光輝を放つとみるのは誇大妄想であらうか。

思想が空しい形骸として底をついたとき、われ／＼に生氣を與へるものは文學のもつ人間的情感でしか有り得ないのだ。

文學を他の一般の思想と區別させるものは何んであらうかいろ／＼の思想や理論を學んで來て、それが今日空虛に感じられるのは、思想や理論では最早どうにもならなくなつたものが露出しはじめたからである。思想や理論の絕頂に立つてもう其の先きには行き場所のないところに、文學が情感において訴へて來る强さがある。今日の時代が正に要求しつ〻あるものは、この情感において訴へて來る文學獨自の表現である。われ／＼が今戰ひつ〻ある運命の聖戰も、理論的思惟によつて納得せしめられるやうなものではなくて、この文學的情感の極限においてのみ、光輝ある表現を獲得するのではあるまいか。（ここの言葉の一部は曾つて滿洲日日新聞の學藝欄の短評に書いたことがあるが、私はこ〻に愛國心の振動を考へてゐるので、今日私はその確信を益々强めてゐる）

われ／＼は、この情感の極限において毅然として立つてゐなければならない。

さて私は、ゴオゴリの「鼻」をすつかり忘れてゐたやうだ。なんとかこの拙ない文章にも鼻をつけて締括りをしなければならない。

私は先き程「人間にとつて鼻は實に大切なものである」といふやうないひ方をしたが、この大切といふ意味が判るのは在るべきものが八等官コヴリョフ氏のやうになくなつたときに實にはつきり判るので、さうでないと大切な意味を忘れてゐることが往々ある。私はゴオゴリの「鼻」から、お前は人間として持つてゐなければならない一番大切なものを持つてゐないのではないかと一本きめつけられたやうな氣がしてゐる。またこのやうなものと解してゴオゴリの「鼻」は特別の面白さがあるのだと思ふ。

私が思想の轉向者のことを書いたのも、實は轉向者には鼻がなかつたのではないかと思出したからである。奇矯な言のやうであるが、荒唐無稽ではないと思ふ。いや、轉向者でなくても矢崎彈のいふ「西洋流の合理主義や實證主義」だけを思惟の本源的なものと考へ、傲然としてゐたのは、われ／＼に足りないものが慥かにあつたのである。われ／＼は曾つて

さういふ思想に取憑れた時代から今日の時代へ來て、はじめて眼がさめたやうな氣がしてゐるのである。この思想のずるずるべつたりの轉換といふ點では敢へて轉向者でなくとも冷汗三斗に値ひする。

それで私は、この時代のインテリには鼻のなかつた時代、つまり日本人として一番大切なものを見失つてゐた時代だといふのである。日本人として鼻がなかつたといふことは慥かに痛烈に反省されてよいのである。

ゴオゴリの「鼻」は有名だから詳しい説明は抜きにして話の續きを進めるが――八等官コヴリヨフ氏の許へ警官が鼻を持つて來て呉れた。そこでコヴリヨフは夢かとばかり喜んで早速醫師を迎へ、鼻を元の位置につけやうとするが、それがうまくつからない。コヴリヨフは絶望の悲鳴をあげるが、醫師の方では他人のことだといはぬばかりにこんな面白いことをいふのである「鼻はアルコールの瓶詰めにして置いたらいゝでせう。おゝそうだ。もつとよい事があります。それはその瓶の中へきつい火酒（ウオツカ）と溫めた酢を食匙（さじ）に二杯入れて置くのです。さうすれば貴方は相當金儲けが出來ますよ。若しも貴方があまり高いことを仰しやらなけれ、ばこの私がお引受けしませう。」ところが其の鼻が四月七日のことであつた。（理髪師のイワン・ヤコウレキッチが自分のパンの中から鼻を發見したのは三月二十五日だから、その間ちやうど十三日ばかりコヴリヨフには鼻がなかつたことになる）突然何喰はぬ顔をしてコヴリヨフの頬と頬との中間に姿を現はしたのである。

そのときのコヴリヨフの喜び方は……こんな風にうまく書いてある。

「ひへえ！」と、コヴリヨフは言つた。そして喜びのあまり跣足のまゝで部屋中を踊り廻らうとした。けれども、そこへ這入つて來たイワン（召使の名）に妨げられてしまつた。彼は直ぐさま洗面道具を持つて來させた。そして顔を洗ひながら、もう一度鏡を見ると――鼻がある。タオルで顔を拭きながら又も顔を見ると――鼻がある。

私がこゝのところを抜書きしてみたのは、こゝのところはインテリ世代の思想轉換の過程に特別にぴつたり當嵌められるものがあるのではないかとさへ思はれる程の興趣があるからである。私には鼻がコヴリヨフの許へ自然に返つて來たといふ話が面白いのだ。しかも醫師にさへどうにもならなかつた鼻がである。ゴオゴリが日本のインテリ世代の思想を諷刺するために「鼻」を書いたのでないことは判りきつた話であるが、それが百年以上も後に今われ／＼が諷刺されてゐるやうな氣がしてならないのである。

インテリが曾つての思想によつて日本人としての誇り（鼻）を自ら踏みにじつてゐた時代から、今日の轉向へ來た。その間の心的な經過は、所謂轉向者ではない私にも判らないことではない。私がいひたいのは、轉向は曾つての誤つてゐた理論を理論的に克服したものでもなければ、思惟と稱さるべきものでさへないのだ。謂はば單なる思情であり、日本的な激しい情感のためである。それはまことに奔る急流の如き現實を前にして、鼻がコヴリヨフの許に或る日何んの前觸れもなく突然返へつて來たやうに、自然に返つて來たのである。これでいゝのであらう。理論で語れない轉向。これにあれこれと説明をつけたがるから可笑しいのだ。

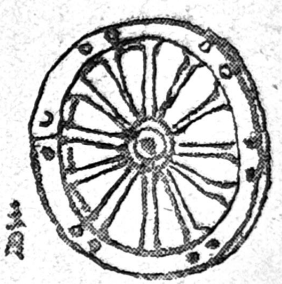
コヴリヨフの許へやつて來た醫師は、鼻のウオツカ漬なら買つても好いといつた。デヤーナリズムの物好きは鼻の代りに轉向の獄なら買ひたがつてゐたやうである。デヤーナリズムに賣渡された轉向物語りが、概ねわれ／＼に擱らなかつたのは、極限の心情を傾けて告白してゐるやうに見えながら、何か轉向をすら／＼と説明するだけに終つてゐる物足りなさがあつたからである。いや、轉向を傲然と誇示するやうな態度さへ、私たちは時に見せつけられさへもするのだ。

人間に鼻がなくなるといふやうな不思議な光景も、ゴオゴリのやうな偉大な天才によつて諷刺されるとき、現實以上の眞實をもつてわれ／＼に迫つて來る。ゴオゴリは「鼻」の末尾で、こんな誰が考へて見ても、でたら目らしい物語りも「けれども、さうだ、不思議が一つも存在してゐない所とは一體どこにあるのだらう?。さう考へてみると、しかし、この事件の始終の中には何か存在してゐる。誰が何んといはうとも、このやうな出來事は世の中にあるのである――稀にではあるが、あることは確かなのである。」などと書いてゐる。

「ゴオゴリは現代の社會をよく知つてゐるといふ點で、正にプーシキン以上である。即ちゴオゴリはより一層社會的な詩人であり、從つて、より一層時代の精神に立つてゐる詩人である」とベリンスキーはゴオゴリを評してゐる。

私は思ふのである。眞實の中の虛構を、虛構の中の眞實をそれを抉り出して行くのが文學精神である。そして其の文學精神を裏附けるものは時代の良心である。作家にはその精神の闡明が要求されてゐるのであると。

（四月二十二日）



成吉思汗と義經入蒙傳說

山本守

一、はしがき

昭和十二三年の交かと思ふが、滿洲日日新聞は、源義經の墓が公主嶺に發見されたことを報じ、これを契機として「義經入蒙說」を再燃せしめたことがあつた。先日の滿洲新聞にも、興安北省の或る廟から、鎧を着けた成吉思汗の像が現れた事を報じ、成吉思汗と義經を別人ならしめることに、未練がましい口吻をもらして居た。今回藝文社が、「史實より見たる成吉思汗」に就いて執筆する樣にと小生に依賴された動機も、亦こゝに在るものと忖度し、意を加へて題目を變更したのである。順序として成吉思汗の史實を略述し、以つて義經入蒙說に及ばうと思ふ。

二、成吉思汗の傳

(イ) 祖先の家系　蒙古の太宗オゴタイの十二年（西紀一二四〇年）七月、大クリルタイに會して、ケルレン河中島なるオルダに於いて書き畢へられた、モンゴルン・ニグチヤ・トプチヤン（蒙古の祕史）なる書物がある。全十二卷中初の十卷は既に太祖の時代に作られたもので、後の二卷は太宗の十二年に補はれたものである。本書は蒙古の古事記とも稱すべきもので、蒙古の古代史に關する限り、最も信憑すべき根本史料と考へられて居る。本書の記す所によれば、成吉思汗の祖先にボルテ・チノア（蒼き狼）と、その妻なるゴワ・マラル（慘白き牝鹿）なるものがあつた。それより十一世の孫に、ドブン・メルゲンなる者が有り、彼にはアラン・ゴワなる美しい妻があつた。アラン・ゴワは夫ドブン・メルゲンの在世中に、ブグナタイとベルグナムㇿの二人を生み、夫の死後更にブグハタギ、ブカトサルヂ、ボドンチヤルの三人の子を生んだ。ボドンチヤルの子バリンシイラト・カビチ、その子はメネンドトンと言つた。メネンドトンにはカチチユルク外六人の子があり、カチチユルクの子ハイヅ、ハイヅの子バイシヨンゴル・ドクシン、その子トンビナイ・セチエン、その子カブル・カガン、カブル・カガンには七子あり、その第二子はバルダン・バツールなるものであつた。このバルダン・バツールにはモンゲト・キヤン、ネグン・タイシ、エスゲイ・バートル、ダアリタイ・オチギンの四子があつた。第三子なるエスゲイ・バートルの長子に生れたテムヂンこそ、後の成吉思汗その人である。ドブンメルゲン以下の系圖を示せば次の如くである。

系圖

ドブン・メルゲン―ボドンチヤル―バリンシイラト・カピチ―メネン・ドトン―カチチユルク―ハイヅ―バイシヨンゴル・ドクシン―トンビナイ・セチエン―カブルカガン―バルタン・バートル―
　├モンゲト・キヤン
　├ネグン・タイシ
　├エスゲイ・バートル―テムヂン（成吉思汗）
　└ダリタイ・オチギン

斯く見來る時、成吉思汗の家系は眞に整然たるものであるが、然しアラン・ゴワが夫無くして子を生みたるが如き記事、荒唐無稽信を置き得ずと爲し、蒙古の史實として信じ得べきは、ガブル・カガン以後なりとなす學者も多い。アラン・ゴアの記事とは如何なるものであらうか。今元朝祕史の譯本である成吉思汗實錄の名文を左に掲げて見よう。

かく住める程にドブン・メルゲン無くなれり。ドブン・メルゲンを無くなしたる後、アラン嫂は男無きに三人の子を生めり。ブクカタギ、ブカトサルヂ、ボドンチヤル・モンカクと言へるなりき。前にドブン・メルゲンより生れたるベルグナタイ、ブグナタイ二人の子は、その母アラン嫂の背處にて言ひ合へらく「この我等の母は兄弟なる房親の人〔夫の兄弟〕無く男（外夫）無くありつゝ、この三人の子を生めり。家の内に獨マアリク・バヤウタイの子あり。この三人の子は、彼のなるぞ」と母の背處にて噂し合へるをその母アラン嫂覺りて（中略）彼

等の母は言へり。「汝等我二人の子よ。我を『この三人の子を生めり。誰の何の子なるか』と疑ひ合ひて噂し合へり。汝等の疑ふも是なり。夜ごとに光る黄色の人、房の天窗の戸口の明處より入りて我腹を摩りて、その光は我腹の內に透るなりき。出づるには日月の光にて黄狗の如く爬ひて出づるなりき。輕率に何ぞ言ふ汝等。これにて見れば明かに彼の「光る人の子」は皇天の御子なるぞ。黒き頭の人〔黎民又は黔首〕に比べて何ぞ言ふ汝等。カムクン・カト（普き君）とならば、民草ばそこに覺らんぞ」と言へり。

斯の如く宇宙の靈威に感じて天の子を生む所謂感生帝王說話は、扶餘・高句麗等古代滿洲族の間に見られるものと、同一性質のものであるが、かゝる說話の起るには起るだけの必要性が存するのである。抑々古代の滿洲蒙古族の間に於ける開國說話には、契丹民族の間に於ける如き同祖傳說と、前述扶餘、高句麗更には滿洲族の間に於ける如き、感生傳說の二種が存することに注意しなければならぬ。同祖傳說は、同族意識を有する範圍內に於ける統合原理であるが、異種族を包括して、これを統合する必要ある場合には、常人以上の性格を有するものを必要となし、こゝに所謂感生傳說、即ち「天の子」思想が指導精神として要求されるのである。この觀點に立つて、蒙の狼と牝鹿の交配傳說を見るに、これ明に同祖傳說であり、それより十世を經たアンゴアに至つて、感生傳說が生れて來たのである。思ふに古代蒙古に於ける如き氏族社會に於いて、ボドンチャルの時代に至り、「蒙古」民族が一大飛躍を遂げ、始めて異氏族をその內に包括するに至り、從來の同祖傳說を以てしては、充分な統一を爲し得ない段階にまで進んだものであることを、暗示して居るのであつて、元史がこのボドンチャルを以て、蒙古の祖と爲すのも故なきことではないと考へられる。更に現在に於ても、蒙古人が自己の家系を遠く且つ廣く諳誦してゐることは驚くべきもので、かかる家系をば敢て荒唐無稽として斥くべきものではあるまいと考へる。

（ロ）成吉思汗の誕生　蒙古部は初め金に隷屬してゐたのであるが、成吉思汗の曾祖父カブルに至つて稍强大と爲り、獨立して始めて蒙古部に可汗を稱したのである。汗の孫のエスゲイはオノン河に鷹狩に行つた時、メルキト部のエケ・チレドなる者を襲ひ、その妻ホエルンなる女を奪つて、己が妻と爲したのである。後エスゲイが近隣のタタール部を征して、その酋長テムヂン・ウゲ等を虜へて歸つて見ると、妊娠中であつたホエルン夫人が、オノン河のデリウン・ボルタクに於いて、一男兒を出產した。「生るゝ時右の手に髀石の如き血塊を握りて生れき。タタールのテムヂン・ウゲを率て來つる時生れたりとテムヂンの名を與へた」ることが成吉思汗實錄に記されてゐる。このテムヂンこそ、後に世界を震撼し、今日

——（成吉思汗と義經入蒙傳說）——

までも不世出の英雄と謳はるゝ成吉思汗その人である。然らばテムヂン出生の年は何年であつたかといふに、遺憾ながら記錄が一致しない。回敎徒の史料には一一五五年〔皇紀一八一五・久壽二年〕となすものあれども、元史蒙古源流、ドーソン蒙古史・ハワース蒙古史等、何れも七年後なる一一六二年〔皇紀一八二二・應保二年〕のこととなつてゐるのに從つておく。

（ハ）苦難の少年時代　テムヂン九歳の時、父エスゲイは息子テムヂンを伴つて、ホエルンの外家に息子の嫁を探しに出掛け、オンギラット部のデイセチエンの娘で、當時十歳であつたボルテと婚約を結び、息子を殘して家に歸る途中、タタールの民の筵會せる處に出會ひ、渇を醫せんが爲に飲物を求めた所、タタールの民等、昔日の恨を晴らさんものと、卑怯にも乳に毒を混じて與へたのである。三日の後エスゲイは、その毒に當つて遂に歿してしまつたのである。エスゲイの歿するや、部衆は彼の年若き寡婦と、幼き者共を棄てゝ離叛した。かくて彼等親子の上には「影より外に伴なく、尾より外に鞭無き」苦難に充ちた孤獨生活が始まり、凡ゆる窮乏と不幸を嘗めるに至つたのである。

ホエルン夫人はエメ・メルゲン（女丈夫）に生れて、幼き子どもを養ふに、きりりと身拵へして裾紮げ、帶締めて、オノン河を上り下り走りて杜梨山櫻の實を拾ひて晝夜喉を養へり。膽ありて生れたる母夫人は福ある子どもを養ふに檜の木の鍬を執りて人參チ、ギナ（草名）を掘りて養へり。

とホエルンの苦勞を成吉思汗實錄は述べてゐる。かくして成長したテムヂンは、或時は一族タイチグット部の爲に襲はれて、森の中に逃げ匿れしも、武運拙なく囚はれ桎梏を嵌められて、家から家にと廻されて、監視される身と爲つたが、遂に監視者を打倒して遁れ去り、オノン河に身を頸まで沈めて夜を待ち、或は夏の最中羊毛の中に匿まはれて、敵の魔手を逃れ、ソルカンシラ親子の情に救はれて、九死に一生を得、漸く母の許に歸ることが出來た樣な事もあつた。

（ニ）テムヂン帝位に卽く　エスゲイ歿してより、十年の歳月は瞬く間に過ぎ去り、テムヂンも十七歳の若者と爲つた。九歳の時婚約して以來、絕えて再會の機會の無かつたボルテを、我家に迎へ取ることになつた。かくてテムヂンは彼の盟友にして、最初の臣たるボオルチュをも召び寄せ、彼の心中漸く孤獨感から脫却して、自信を有ち始めたのである。彼は妻が母の引出物として持ち來れる、黒き貂鼠の裘を携へて、父のアンダ（盟友）たりしケレイト部のワンハンを訪れた。ワンハンはアンダの子等を鄭重に迎へ、その獻上物をいたく悅んで、彼に助力を惜まない事を約した。テムヂンは更

に己が少年時代のアンダジャムカをも、自己の陣營に引き入れることに成功し、こゝにテムヂン永年の苦勞も、漸く報いられようとして來た。先づ兩者の援助を得てメルキット部を敗り、先に掠められた妻を取返すことが出來た。然しやがてテムヂンとジャムカの二人は袂を分つに至つたが、これを契機として、各氏族は續々と彼に投じ始め、全氏族は廬帳を擧げて彼の側に宿營した。彼等はテムヂンの人物才能に惹付けられた。彼等の眼には理想的な草原戰士として、貴族的氏族の頭首に立つて、彼等に勝利の榮光と、豐饒な牧地家畜を與へるであらうと考へ、更に或者はテムヂンは、蒼天より大君主たるべく、運命づけられて居るものと信じて疑はなかつた。遂にテムヂンは衆に推されて蒙古氏族に可汗と成り、チンギスの名が與へられたのであつた。蒙古源流によれば、時に己酉の年にして、テムヂン二十八歳の時であつたといふ。

その後十年草原貴族にふさはしい爭鬪の日が續き、一日として安らかな日はなかつたが、一二〇二年成吉思汗四十一歳の年、遂に强敵タタール部と決戰の日は來た。彼は我家の宿敵剿滅を決意し、タタール人虐殺を決行し、殘存者をば各氏族、各部族に分配した。爾來タタール部は部としての存在を失つたのである。チンギスはタタールの美女イエスイとイエスゲンの姉妹を容れて后妃（ハトン）と爲した。

成吉思汗はタタール部を敗つて著しく權力を增大したが、やがてワンハンとの間に隙を生じる時が來た。かくてワンハンの金帳（オルド）に筵會が催され、何等の警戒なき旨の報告を受けた彼は、强行軍を敢行して、ワンハンの宿營を包圍攻擊した。奇襲を蒙つたワンハンはつひに敗績し、その子サングンと共に逃亡したが、ワンハンは間もなく殺害された。蒙古第一の有力なる支配者を覆滅したる成吉思汗は、こゝに自らがその地位にとつて代つたのである。

一二〇四年成吉思汗四十三歳の四月、彼はナイマン部出征を開始した。ナイマン部のタヤンハンとクチュルクは、蒙古軍の爲に一敗地に塗れて、タヤンハンは落命し、その子クチュルクはアルタイ山深く遁走した。

一二〇五年前年に打ちもらしたナイマンのクチュルクと、メルキット部のトクトアを遠くアルタイ山脈を越えて剿滅した。この勝利の結果、成吉思汗は全北方蒙古の主となり、蒙古部族はあげて彼の支配下に入つた。唯ヂャムカのみが殘されたが、萬人に見放された彼は、終にその從者の手によつて成吉思汗に引渡された。成吉思汗は嘗て自分とアンダであつた友誼を思ひ、血を出すこと無しに、彼の生命を絕つてやつた

のである。かくして彼が累年抱いて來た夢が實現する時が到來した。彼はオノンの河原に大クリルタイを召集し、普く蒙古に皇帝たることを宣言したのであつた。時に一二〇六年成吉思汗四十五歳の時であつた。

三、義經の入蒙傳說の展開

成吉思汗の家系竝に彼自身の經歷は、上述の如く、至極明瞭なるに拘らず、成吉思汗は源義經の後身なりとの說が流布され、眞面目に之を信じて居る人もある樣である。然し源義經の事蹟はこれ亦明らかであり、その最期に關しても、文治五年（皇紀一八四九年南宋孝宗淳熙十六年 西紀一一八九年金世宗大定二十九年）閏四月三十日、奧州衣川館に於いて自殺せしことは、吾妻鏡玉葉、百錬鈔、北條九代記、鎌倉大日記、尊卑分脈等に明記せられる所によつて、疑の餘地無きものの如くである。然るに後世義經衣川に死せずして、蝦夷に逃れたりと言ひ、更には大陸に渡つたといひ、遂には成吉思汗は義經なりといふ說まで生れるに至つたのであるが、今この傳說の發展過程に關する金田一博士の所說（「成吉思汗は源義經に非ず」所收）を次に紹介しよう。

義經の一代物語である「義經記」にも、またその最期を物語る「高館の草子」にも、等しく衣川に死んで居る所を見れば、室町末期から德川初期には、まだこの說は中央には現れて居なかつたものと見える。然るに寬文年間に林春齋の本朝通鑑に「或曰く衣河之役に義經死なず逃れて蝦夷島に到る。其の遺種今に存す」と記されるに及んで、始めて中央の學界讀書界に義經入夷說が紹介されたのである。蝦夷地には古くから古淨瑠璃の「御曹司島渡り」がはいつて、アイヌ人にまで知られて居たのである。元祿以後の新淨瑠璃にのみ馴れた、江戶末期の役人や旅行家が、これ等の忘れられた古淨瑠璃の內容を、アイヌの口から聞いて大いに驚き、事新しく內地に逆輸入したのである。

義經入夷說の第二期は少し降つて、正德享保時代である。この時代有名な馬場信意の「義經勳功記」二十卷（正德二年）があらはれ、義經が衣川を逃れ出で、蝦夷に渡海し、蝦夷共が大いに尊敬したこと、夷（エビス）等義經を神に崇め「ヲキクルミ」と號して尊んだこと、義經は島の王と成り賜ふたのみでなく、限り無き長壽を保つて、殊に子孫永く蝦夷の棟梁と成つたこと等を記して居る。然るにこれが更に加藤謙齋の「鎌倉實記」（享保二年）に至つて大發展をなした。彼は勳功記を敷衍して、義經が蝦夷地より更に滿洲に渡つたことを言ひ出したからである。これ近江の澤田源內といふもの「金史別本」

なる僞書を作成し、その中に義經滿洲に渡りて一子を設け、その子が金の範車國大將軍源光錄義鎮と呼ばれてゐるかの如く見せかけたものに、誤られたのであつた。本書は新井白石、と安積艮齋によつて僞書なることが看破されたが、一時はこれ等碩學も惑つた程で、この說が諸書に影響したのである。發展の第三期は幕府の蝦夷地經營が始まつて、蝦夷の踏査のやかましくなつた天明寛政の交である。この時期に入つては、讃岐の森長見の「國學忘貝」が、義經滿洲に入りて清朝の祖と僞りし如く言ひふらし、圖書集成の中の圖書輯勘に、清帝自ら序して「朕姓源、義經之裔、其先淸和に出づ。故に國を淸と號す」の文句があると言ひ出した。

第四期は明治の初年で、その先驅は明治十三年頃の「溫故集談」にあらはれた、吉良義風といふ人の義經の話、それから十八年に、阿波の人內田彌八譯「義經再興記」なるものが現はれ、本書に於いては遂に義經は成吉思汗にまで發展を見た。本書の原本は、一八七九年（明治十二年）ロンドンに居た末松謙澄氏が、英文にて書きたる「偉大なる征服者成吉思汗と、日本の英雄義經は同一人なり」といふものださうである。然しこれ等諸說に對して、重野安繹、星野恒の兩博士等の嚴正なる批判が有つて、その虛妄は遺憾なく解消した筈であつた。

次に大正十三年、小谷部全一郎の「成吉思汗は源義經なり」の著述が發表されたのが、その第五期である。本著者は强い信念の下に、遠くシベリヤ、滿蒙に親しく遺蹟を探訪して、實證されんとしたが、牽强附會に終始して、何等有力な資料を提供して無いのは遺憾である。翌大正十四年には國史講習會より「成吉思汗は源義經に非ず」といふ一書が刊行されて、これに反駁して居る。金田一博士の所說は以上の第五期を以て終つて居るが、更に前述の如く昭和十二三年の交、舞臺は移つて滿洲國內に於て、この問題がまた〳〵喧傳せられた、これその第六期とも稱すべきものである。

四、偉人不死傳說

扨て上述の如き義經傳說は、抑々何が故に發生したものであらうか。古來洋の東西を問はず、英雄不死の傳說が存するのであるが、殊に源義經の如き人氣者が、かゝる悲劇的な最期を遂げたる事に對する世の同情は、遂に語り傳へて、義經を蝦夷に更生させ、更には大陸にまで發展させ、遂には成吉思汗と成つて、歐洲にまで令名を轟かせるに至つたのである。支那に於ける明の建文帝遜國の傳說は、正に義經傳說と軌を一にするものである。即ち明實錄によれば、建文帝が叔父永樂

帝に攻められた時、宮中に火を放ち、自分もその火中に投じて焚死したと傳ふるに對して、明史紀事本末には、宮中に火を放ち焚死と見せかけて、自分は剃髮して僧の姿となり、水關より遁れ出たと記してゐる。而も非常の期に臨んで開けよとて、殘し置かれた遺策に從つて、逃亡して居る事まで、建文帝と長谷部氏の祖母より聞いたといふ話とが、符合してゐるのも面白いことである。和田淸博士は「明一代の間頗る小說綺語が流行した中にも、建文遜國の一事は最も世人の同情心を刺戟し、種々の臆測を逞しうせしめた。そこで世に行はれる建文遜國逸書、致身錄、從亡隨筆の類が生じたものであるが、建文帝に對する敵役の永樂帝についても必ずや之を抑損誹謗する意味の小說が出來たものであらう。さうして明末に及んで建文帝一黨に對する禁諱の弛むと共に、諸說叢起してやがては實錄と小說との區別がつき難くなつたものであらう」と述べて居られるが、義經入蒙傳說に就いても同じ事が考へられる。義經傳說は前に述べた如く、蝦夷地から輸入されたと同樣に、建文遜國說が、蒙古から明に輸入されたと思はれる節の有ることも面白い符合である。義經入蒙說が過去數回に亙り、その史實に非ざることが論證されながら、尙且根强く傳へられるのは何故であらうか。これ實にこれが傳說なるが爲に他ならぬ。傳說が人々に傳承される所以は、人々がその儘を事實と信ずるからの事である。信仰が傳說の內容なのだからである。

五、結　び

重ねて言ふ、義經入蒙說の如きは、何處までも傳說であつて史實では無い。史實でないからといつて、その傳說の存在まで否定されなければならぬ筋合のものでは無論ない。殊に德川末期から、對ロシヤ問題が漸く重大となり、世人の注意が大陸に向けられ始めて以後、大陸は日本人の重大關心事であつたに相違なく、海外發展を希求しながら果し得ざりし當時の人士が、國民的崇敬を受ける義經の大陸經營物語によつて、僅にその鬱勃たる雄志を滿足させてゐたことも、蓋し事實であつたであらう。然し今や日本人は現實に大陸に發展し始めた。「惟神の道は八紘に遍し。」今更義經を滿蒙に更生させる必要も有るまい。義經は日本の英雄であり、成吉思汗は何處までも蒙古の民族的英雄である。何を好んで蒙古の民族的英雄を橫取する必要があらうか。東亞共榮圈の指導者たる吾人は、今やそんなけちな、さもしい氣持を一擲すべき時ではあるまいか。（四月十九日稿）

（筆者は建國大學助教授）

ロシヤに於ける滿洲研究（上）

坂口數雄

一、ロシヤ・滿洲學の概念

こゝで云ふ「ロシヤ・滿洲學」とは、フランスの支那學が「フランス・支那學」と呼ばれてゐるやうに、ロシヤの滿洲學 Manchology を指すものであるが、なによりもまづこの滿洲學とは一體なんであるか、即ち「滿洲學」そのものの解明、あるひはまたその概念の規定づけが檢討されねばならない。しかし「滿洲學」は支那學や蒙古學そしてエジプト學などとともに東洋學の一環であり、一分野であることはあきらかなるゆゑに、孤立的に滿洲學を滿洲學だけとしてつかみあげることは困難であり、無理であることを知る。かくて迂遠ではあるが、諸外國における東洋學の發展過程を歴史的に認識することによつて、滿洲學のなにものたるかを間接的に解明しやうとするのである。

東洋學　有名な支那經濟學者であるウイツトフオーゲルが自らの支那研究の過程を回顧して、「支那に關する關心は最初はロマンチツクなものであつたが、暫くして支那の言語の研究に進み、それから漸次に轉じて社會＝經濟の方向に向つた」(1)と述べた言葉が、いみじくも諸外國における東洋學の發展過程、そこにおける東洋研究史を最も簡潔に表現し、特徴づけてゐる。

確かに先進諸國における東洋研究は、ロマンチツクな或ひはエキゾチツクな關心を以て宣敎師たちによつて始められた。それが商業資本の强烈な東洋進出とともに前進せしめられ、未知のそして奇怪の東洋を掠奪し、それと不等價交換をいとなみ、いはゆる野蠻な非文明諸民族をキリスト敎徒に改宗せしめるといふ崇高な目的は、東洋に關する知識即ち歴史、地理、言語、人種、風俗などを知ることを緊急事たらしめたのであり、それがまた彼らのエキゾチシズム、ロマンチズムとからみあつて、研究心、探檢心をあふつたのであつた。そしてこれらの諸部門のうち一つ或は數

簡を研究することが「東洋學」であるとされはじめたが、このとき既に今日における東洋學の概念の曖昧性、内容の雜煩性を胚胎したのである。

このやうに當時の東洋關係者にとつて必要不可缺であり、東洋地理乃至は東洋案内であつた東洋學は、その擔當者が依然として宣敎師が主要分子であつたので、そこに彼らは宗敎家である故の一つの制限がよこたはつてゐた。それにしてもその最も初期の商業資本のガイド的な役割をはたした東洋學は、その知識の普及、イギリス、フランスにおける產業改革や百科辭典派の活動とともに、そのアカデミツク性を强めてきたのであつた。

けだし「この時代の支那研究は支那專制主義、官僚的支配の特殊性、その父家長制的性格、儒敎的觀念及び典禮、習俗の社會的役割、支那社會の停滯性、政府の治水事業其他重農政策の物質的根據等後世の科學的支那研究に缺くべからざる重要な概念を明かにし、又少くとも後世の研究に課せらるべき問題を明かにしたのであつた」(2)が、東洋的デスポトの讃美が「古代東洋の偉大なもの」の認識へと偏寄し、儒敎、典禮、習俗のデレツタント的研究が時代の歩みにとりのこされ、現在われわれがあまりにもアカデミツクであるとの印象をうけとるがごとき衣裳をもつた東洋學が押しだされたのである。

だが、ヘンリー・メインの「東洋と西洋における村落共同體」（一八七一年）の研究を要求し、リヒトホーフエンの「支那」（一八七七—一八八三年）、さらにすゝんでワグナーの「中國農書」（一九二六年）の出版を要請するときとなつては、以上のごとき骨董的な香り高き東洋學は、現代東洋を理解する道ではなかつたし、白人種の侵略的および經濟的活動の目的に合致するものではなくなつた。こゝに東洋經營、西洋文化の普及といふプラグマチズム的な角度からの現代東洋を研究しようとする經濟學者、比較法學者、社會學者の一つの傾向、換言すれば一學派が勃興した。かくして「東洋學」は「東洋問題の研究」あるひはまた「現代東洋研究」といはれるものに轉化し、席をゆづるのである。

彼らの東洋研究の歴史は、かくして概觀されたが、帝政ロシヤの東洋學もまたこれと類似の運命をたどつてゐる。たゞこゝで注意しなければならないのは、初期の東洋學の分野においては、帝政ロシヤ自體のもつ後進性が反映され、そこではオランダ人、フランス人などの參加とその研究達成の援助を必要としたが、現代東洋の研究にいたると、歐米諸國においてみられない獨自性と現地性をもつてくることである。

このやうにおくれては出發したものの、十九世紀中葉から、二十世紀にかけて急速な發達をとげたロシヤ・東洋學は一七年を劃期として、その面貌を一轉しはじめる。そしてまた「東洋學」そのものゝ名稱にも、彼ら獨得の形容詞を附する。かつての「東洋學の中心點は言語學であつた。經濟や哲學は勿論研究の對象とはならず、もつぱら言語と文學がこれらの民族の具體的な社會的、歴史的生活と分離せられて研究された」(3)との批評がなされるに至つたのである。

滿洲學　諸外國そしてロシヤにおける東

洋學の概念、その内容 認識方法の變化は、そのまゝロシヤ・滿洲學にあてはまるであらう。とすればそれはつぎの三つの發展段階を經たことになる。

1. 滿洲學
2 現代滿洲研究
3. 新滿洲學

だが、さきにも一言したごとく、封建的なそして半封建的なロシヤの滿洲研究は決して先進諸國の東洋學のごとき順調な發展過程をたどつてゐない。それにしてもロシヤ・滿洲學もまた時代の進みとともに變轉し、それぞれの滿洲學において、それぞれの主要對象、認識・方法を異にして、滿洲における諸事象即ちその社會を研究し、歴史、地理 言語、經濟を調査してきたのである。されば我々はこれらすべてを便宜上非常に廣い意味における「ロシヤ・滿洲學」のうちに包括する。即ち時代と內容を超越して、ともかくもロシヤにおける滿洲研究を「ロシヤ・滿洲學」として、如何にロシヤの滿洲進出、非法的な滿洲占領とむすびついて發展させられてきたかを以下敍述の對象とする。

註(1) 平野、宇佐美譯「支那社會の科學的研究」（岩波新書）五頁
(2) 島恭彦「東洋社會と西歐思想」五五頁
(3) 安藤英夫「ソ聯の東洋研究二十年」「蒙古」八卷一號八〇頁。なほ平竹傳三「シベリヤ經濟地理」昭和十四年刊、石濱純太郎「ロシヤ東洋學」（東洋史研究一ノ六）參照。

二、帝政ロシヤの滿洲研究

このロシヤ・滿洲學の變貌とその發達を考慮にいれて、永い間の彼らの滿洲研究の歴史をより具體的に見るにあたつて、嘗つて滿洲が支那邊遠の一地方であつたごとくに、ロシヤ・滿洲學はロシヤ・支那學の亞部門でありそれと密接不離なものであつたことを忘れてはならないのであり、そしてまた先進諸國において「滿洲學」Manchuology の名稱をみいださないが、ロシヤにおいては早くから「滿洲學」Mandjurovedenie なる言葉があり、つとに大きな研究對象となつてゐたことを指摘されねばならない。

まづ封建ロシヤの滿洲學から始める。コサツクが毛皮税（ヤサーク）を求めてシベリヤを踏破し、太平洋岸に到達したときから、食料基地をもとめての滿洲への南下が問題となり、アルバジン戰爭それにひきつゞく一六八九年のネルチンスク條約となつて、正式の露支交渉の端緒がひらかれた。それは十七世紀後半のことに屬する。

爾來、一七二七年のキャフタ條約によつて在北京ロシヤ傳道團の設置が正式にみとめられて、有名な北京近郊のアルバジン村を根據として主として宣教師、語學生による支那研究をすゝめえたが、十九世紀中葉に至るまでの約二百年間シベリヤ開拓に急であつて、支那及び滿洲への貿易的進出が、封建ロシヤの性格に規定されて振はず、かつまた「啓蒙思想」の洗禮を殆どうけないために、支那研究はおくれてしまつた。そのためこの間は滿洲に關する限りでは斷片的報道の時代であり。それはあまりにもみじめな水準のものであつた。たとへば、その間において、一六七五年

のエヌ・ゲ・スパフアリーの支那使節が滿洲の西部地帶を縱斷して、滿洲に關する知識をもたらし、またロシヤに數年滯在したエヌ・ウイツセンは一六九二年にアムステルダムで「東北韃靼」を刊行した。そしてそこには當時のロシヤの滿洲認識の粹がくみとられて述べられてゐる筈だが、それはいまでは問題にするに足りない。

在北京ロシヤ傳道團員著作集 十八世紀以降において傳道團員の學術的活動は滿洲に關するともかくもやゝまとまつた知識を提供しはじめた。ア、レオンチエフの「大清會典」三卷（一七八一—一七八三年）「八旗通法」十六卷（一七八四年）の飜譯がペテルブルグで刊行され、エル、ステパンの「滿洲語入門」が一八三九年に石版でだされたりした。

「支那、支那及び滿洲文學の研究は、ロシヤでは十九世紀の前半、專ら在北京傳道團員及びその隨員によつて行はれた。この方面で最も多く貢獻したのは、第九回傳道團（一八〇六—一八二一年）の團長であつた神父イアキンフ・ビチユーリンであつて、主として地理學及び歴史學方面の多數の著作物を支那語から飜譯した。前にも述べたやうに、在北京傳道團はその宗教上の任務の外、外務省の仕事もした。外務省は北京滯在時代に舊傳道團員が得た見聞の重要性を、傳道團の幹部よりも高く評價してゐたのである。又神父イアキンフ・ビチユーリンを含む傳道團員の多くは、支那から歸つた後、一八一九年に設置せられた外務省アジア局以外にはその知識を役立てる場がなかつたのである」(1)

必要のないところにおいて發展する可能性はありえない。このやうにして封建時代のロシヤ・滿洲學は遲々としてすゝめられ、みるべき成果はすくないのである。

しかし、十九世紀中葉のロシヤにおける農奴解放の名稱でしられてゐる近代的ロシヤへの轉成とムラヴイヨフ、アムルスキー伯を主謀者とする再度の黑龍江地方への進出、ウスリー地方の占領は滿洲研究を本格的に必要とするに至つた。一八五二—一八八六年に刊行された傳道團員著作集四卷はこの時代の波にのつたものであり、ロシヤ全體としての東方進出的要請に答へんとするものであることが明かであらう。この著作集についての詳細は石堂清倫氏の貴重な勞作(2)にゆづるが、その目次だけを借用して示しておきたい。

第一卷 一八五二年刊

1. 滿洲朝の興起と初期の事業（ヴエ・ゴルスキー）
2. 現在君臨する清朝の祖先と滿洲族の稱呼（ヴエ・ゴルスキー）
3. 支那人口調査の歴史的研究（イ・ザハロフ）
4. 支那人の墨、白粉、臙脂の製法（イ・ゴシユケヴイチ）
5. 佛陀傳（カ・パラデイー）

第二卷 一八五三年刊

1. 支那における土地所有（イ・ザハロフ）
2. 古代佛教の史的概觀（カ・パラデイー）
3. 支那の算盤（イ・ゴシユケヴイチ）
4. 支那における佛教徒の誓と入信の儀式（グーリイ）
5. 支那の醫學（ア・タタリーノフ）
6. 支那西藏交渉史（イラリオン）

第三卷　一八七五刊年

1. 明朝滅亡の時期における諸事件（エム・フラポヴイッキー）
2. 支那における鹽の製造（ペ・ツヴエトコフ）
3. 諸稍の栽培（イ・ゴシユケヴイチ）
4. 皇帝の米或は香米（イ・ゴシユケヴイチ）
5. 支那人の用ふる手術における鎭痛劑及び水治療法の使用（ア・タタリーノフ）
6. 長崎についての一支那人の覺書（ペ・ツヴエトコフ）
7. 支那におけるキリスト教（ペ・ツヴエトコフ）
8. 七世紀における景教碑（ペ・ツヴエトコフ）
9. 支那人の家庭的風習（ペ・ツヴエトコフ）
10. 天津上海間の海上交通（カ・パラデイー）
11. 香港（イ・ゴシユケヴイチ）
12. 養蠶業（イ・ゴシユケヴイチ）
13. 道教について（ペ・ツヴエトコフ）
14. 紙幣に關する委員會の報告（エヴランピイー）

第四卷　一八六六年刊

1. 成吉思汗に關する蒙古語古傳説（カ・パラデイー）
2. 西遊記（カ・パラデイー）
3. 支那回教徒について（カ・パラデイー）

これらの諸勞作のうち、ヴエ・ゴルスキー「滿洲朝の興起と初期の事業」エム・フラポヴイッキー「明朝滅亡の時期における諸事件」は滿洲史學の事實的資料としての價値をうしなつてをらないが、とくにザハロフの「支那における土地所有」は、「革命後のロシヤにおける支那の農業問題の研究にとつても……一つの出發點をなし(3)てをり、ゲ・サフアロフによつてもまた「ザハロフは已れの勞作を前世紀の四十年代に書いた、彼の嚴肅な寫實主義はこれによつて説明される。彼は素朴な粗粗しさと簡單さとで事件を描いてゐる。彼は無用且つ虛僞の書物 La Prodriete en China を書き、後に支那農業史の大家とされた輕調子のフランス公使ユージン・シモンよりも比較にならぬ程すぐれてゐる」(4)と高く評價されてゐるのである。

ところでさきの著作集の目次によつて、一方では滿洲に關する論文は僅か二、三篇にとどまり、他方ではその研究はすでに「アカデミツク東洋學」の色彩を濃厚にしてゐることを認めざるを得ないのであらう。後者の傾向をとくにつよめたのは、一八六〇年の北京條約によつてロシヤ外交官が北京に駐在することになり、爾來傳道團は政治的そして外交的任務から解放されて、布教と支那・滿洲研究に專心しうるに至つて、ロシヤの政治外交と遊離したことである。

滿洲誌　だがロシヤの先進國に追ひつかんとする東洋進出の努力は、アカデミツクなものであれ、この滿洲學の一應の成就さへもみせないうちに、早くも軍事的、商業的な滿洲の實態調査を必要とし、それに支那學者、滿洲學者を動員したのであつた。そしてこれは松花江航行に關聯するのである。

「一八六四年汽船『烏蘇里號』によるクロポ

トキン、ウソルツエフ等の地理學的河流探檢隊が吉林まで來てから漸く露西亞の商人も一層容易に松花江を航行するやうになつた」(5)のであるが、一八七二年の商人ベルグ、シエルコフニコフ、ブルスエンなどの商業的目的を以ての松花江溯航には地理學者で陸軍大佐のオ・バラバシユや、さきにのべたところのかつては傳道團員であり、一八七五年に「滿露大辭典」を刊行した滿洲語學者でもあるザハロフも參加してゐるのであつた。そしてまた在北京傳道團の大司教で、一八五〇年から一八五九年までおよび一八六五年以降傳道團をひきいてゐて、一八七八年に死んだ最もすぐれたいはゆる支那學者の一人であり、のちにペ・エス・ポポフが增補刊行した露支辭典「漢俄合璧韻編」の著者であつたカフアロフ・パラデイーも一八七〇年の夏に滿洲を旅行してゐる。彼は北京を出發して奉天、チ、ハル、墨爾根を經て愛琿まで歩いてゐるが、語學、人種學、歷史、地理に關する調査をし、その成果をロシヤ地理學協會通報に發表してゐる。

このやうに滿洲の現地調査がすすめられたが、十九世紀の末に近くなるほど、たとへば一八九五年のマチユーニンの調査、一八八八年のプチヤータ大佐の旅行などにみるごとく多くの軍人が「特別の軍事的觀點から自然的及び經濟的關係を明かにするために黑龍江地方の參謀本部から派遣された」(6)ことによつてロシヤの滿洲研究は特徴づけられるのである。そしてこれらの實體調査の諸成果は露國大藏省から刊行されたデ・エム・ポズドネフの「滿洲誌」（一八九七年）によつて集大成されたことを指摘しておかねばならない。

なほこの書物は當時の大藏大臣ウイツテの命によつて編纂されたこと―こゝにロシヤの滿洲進出の指導性が奈邊に移つたか、そしてそれは如何に非武力的進出を强調したものであつたかを示す―と、日露戰爭の陣中において我軍によつて飜譯され、明治三十九年に中野二郎、山縣文夫共譯「滿洲通誌」として東亞同文會から發行されたことは興味ぶかい事實であらねばならない。また民間では文豪二葉亭四迷によつてもよく利用されたのであつた。彼が明治三十八年の一月に大阪朝日新聞に執筆しはじめた「滿洲實業案内」の種本はとりもなほさずこの「滿洲誌」であつた。彼は「案内」の緒言に、「材料を主として露國大藏省の命を奉じて調査したといふポズドネフの「滿洲誌」に採り傍ら其の他の諸書に及ぶ。所謂糧は敵に由るといふもので、かうなると露國は我が國のために露拂ひしたやうになる」(7)と述べてゐる。こゝでわが國の先達が當時のロシヤ、滿洲學に非常に明るかつたことを知り、かつロシヤの滿洲研究の進んでゐたことが明瞭となるのである。

註(1) ヴエ・バルトリド「歐洲殊に露西亞における東洋研究史」五三〇―五三一頁
(2) 石堂淸倫「在北京ロシヤ傳道團の業績」（大連滿鐵圖書館「書香」昭和十六年九月）
(3) 前掲一頁
(4) G. Saharof; Ocherki po istorii kitaya. 邦譯　五九頁
(5) E・アーネルト「滿洲の探檢と鑛業の歷史」九六頁
(6) 前掲　一〇一頁
(7) 二葉亭四迷全集　岩波版第八卷　五十三頁

三、滿洲占領と研究機關

われわれはロシヤ・滿洲學の第三期に移らなければならない。ロシヤの近代化は前世紀の末から非常に急速なテムポをもつて進展し、奇型的に獨占的段階にはいりつゝあつた。このとき日清戰爭後の日本の滿洲における權益を排除し、以て滿洲の軍事的占領の野心をとげんとしたロシヤは、一八九九年にウラヂオストックに東洋學院を設置した。さらに國家的事業としてのシベリヤ鐵道および東支鐵道の建設、ひきつゞく滿洲占領に關聯して本國におけるペテルブルグ大學東洋語學科など研究機關を擴充し、現地においては滿洲經營の根據地ハルピンを中心として鐵道沿線の資源開發的調査をすゝめたのであつた。そして日露戰爭後も北滿を勢力範圍とする彼らは、ともかくも理論ぬきの、現代滿洲に關する經營的見地からの雜多な知識を必要として、ハルピンのロシヤ・オリエンタリスト協會を一九〇八年に創立させ、爾來のアカデミックな滿洲學と現代滿洲研究をならび進めさせた。

東洋學院

ところで東洋學院とロシヤ・オリエンタリスト協會は血緣關係をもつてをり、現地機關ではあるが、ロシヤにおける東洋研究機關のうちでも主要な地位をしめてゐた。前者は蒙滿・露佛語辭典（一九〇一年）の編者として名の知られた東洋學者ア・エム・ポズドネフを初代院長とし、東洋における學術研究機關、商業に從事するものゝ養成を目的とした四年制の專門學校であり、支那・日本部、支那・朝鮮部、支那・蒙古部、支那・滿洲部の四部より成つてゐた。別に出版部をもつてゐて、東洋學院報や歷史、地理、經濟に關する出版をおこなつたが、こゝでは歷史關係のア・ルダコフの「吉林通志」の飜譯（一九〇三年）や「義和團と最近の遠東諸事件におけるそれの意義」（一九〇一年）、歷史的經濟調査の資料として價値あるア・ツエーリン「呼蘭副都統區旅行の成果」（一九〇二年）、ペ・シユクールキン「呼蘭城」（一九〇一年）、エス・ゴリヤイノフ「布特哈副都統區調査資料（一九〇三年）」をあげておくに止める。

こゝでとくに、ロシヤ人が掠奪したのであらうと注目されねばならないことは、こゝの圖書館の「滿洲文庫」には、われわれをしておそらくは滿文檔案であらうと推察させるところの、淸朝時代の滿洲地方行政史を明かならしめるといふ三萬葉以上の寫本公文書を有してゐることである。

ついでながら、學院のア・ルダコフを班長とし、ペ・シユミツト敎授、東洋史家のエヌ・ヴエ・キユネルの錚々たるロシヤ東洋學者と學生三名の一行が一九〇一年にウラヂオストックから派遣されて奉天文溯閣の四庫全書を調査し、その結果を「奉天における支那皇帝の宮殿と文庫」の題名で機關誌に發表したとの事實(1)を知り、義和團のさいの北京におけるロシヤ軍の掠奪を思ひあはせるとき、モスクワの公共圖書館に「十世紀から十七世紀までの古代ユダヤ語の文獻、支那語及び滿洲語の地理歷史に關する文獻も多く、殊に注目すべきは二千册以上の四庫全書を有する」との謎が解けるように思へるのである。

ロシヤ・オリエンタリスト協會

この東洋學院とペテルブルグ大學との卒業生であるオリエンタリスト達が、ハルピンにおいてロシヤ・オリエンタリスト協會を結成したのは一九〇八年であり、そして翌一九〇九年から不定期にヴエストニック、アジイ（亞細亞時報）を發刊した。その後において本協會はロシヤ本國における東洋學協會、一九二二年に同じくハルピンに設立された東省文物研究會などとの合併問題、變革後の財政的窮乏などの諸困難のうちに存在をつゞけて、機關誌もまた一九二九年まで續刊されたのであつた。

なほこの亞細亞時報第五十三號（一九二六年）に載せられた、協會の歷史的槪觀なる記事によると、同號までの主要論文數は約二八〇、そのうち支那關係一二〇、滿洲關係三〇日本關係四〇、蒙古關係三〇である。これらの諸論文のうちとくに述べておかねばならないのは、滿洲學の範圍外ではあるが、ウエ・ア・リヤザノフスキーの「蒙古民族の慣習法」(2)である。これはそののち「蒙古慣習法の研究」(3)として結實したが、一方では法學者のこの方面の進出は、ヘンメリ・メインの古代印度研究との關聯、比照においてロシヤ、東洋學の顯著な進步を示すものであり、他方では滿洲のおくれた民族の調査、とくに歷史學の分野における明末淸初の滿洲族社會の研究に大きな示唆をあたへるといふ點において、ペ・ヤウラヂミルツオフの名著「蒙古社會制度史」（一九三四年、邦譯昭和十一年）とともに忘れてはならないものである。

註(1) 布村一夫「四庫全書と露西亞」（收書月報、昭和十四年二月號）參照

(2) 亞細亞通報　五十一號及び五十二號（一九二三—二四年）

(3) 本書は「蒙古法（主として慣習法）」一九三一年版の譯である。東亞經濟調査局刊　昭和十年

（未　完）

—（ロシヤに於ける滿洲研究）—

謝恩特派大使に隨行して

武藤富男

一

この度謝恩特派大使に隨行を命ぜられ大使に隨て拜謁を仰せつけられ御陪食を賜ると云ふ破格の光榮に浴した。これは私にとつて一代の榮譽であり永遠に子孫に傳ふべき事柄である。しかしこの光榮に浴したのは私に特別な功績があつた爲ではない、又私の地位がこの榮譽にふさはしい爲でもない。唯たま〳〵選ばれて隨員になつたと云ふことの爲に一世一代の榮譽を擔ひ得たのである。さうしてみるとこれは滿洲國のお蔭であり、祖國日本のお蔭であり、又日系官吏と云ふ地位のお蔭である。つまり私の浴した光榮は滿洲國日系官吏全體が浴したところの光榮であり更に推しひろげて言ふならば在滿日本人全部が浴したところの光榮である。だからこの度の訪日の大略、殊に宮中參內の模樣はさしつかへない限り人々に告げ知らせなければ濟まないと思ふ。

二

三月十六日朝春雨のけぶる中を特派大使一行は東京に着いた。沿道には學生生徒市民が傘をさしかけつゝ旗を振つて出迎へた。宿舍は帝國ホテル、屋上高く滿洲國旗がひるがへる。十六日は翌日の參內を控へて行事なく一同齋戒沐浴する。

午後宮內省より接伴員にして、式部官たる京極子爵が見えられ拜謁の仕方について懇切丁寧に我々に說明される。その大要はかうである。一同參內すると西溜の間に控へる、拜謁を賜るお部屋は鳳凰の間である。先づ李駐日大使にお召があり拜謁を賜り次で特派大使にお召がある。御前に進み、李大使より特派大使を御紹介申上げる。特派大使は恭しく御親書を捧呈し來朝の趣旨を言上した後隨員を御紹介申上げる。此の時迄に隨員は西溜の間を出て鳳凰の間入口お廊下に一列に並び、式部官の誘導に從つて一人づゝ鳳凰の間入口に到り、お敷居の前にて一度敬禮し、お敷居を越えて一度敬禮する。すると特派大使がその隨員の官職氏名

を奏上し通譯官が之を御通譯申上げる。その時四步進んで御前に最敬禮をなした後四步退いて敬禮、お敷居を越えて敬禮、後退する。各隨員この順序によつて拜謁を賜るのである。

京極式部官の說明を聞いて滿系の或る隨員はほと〳〵感心してしまつた。曰く式部官は私共に對し宮中の禮儀作法儀式を敎へると云ふ態度はいさゝかも見せず、拜謁の際はかく〳〵するのでありますと云ふ工合に自ら之を行ふて私共に示され、しかも細いところ迄氣を配り一同に落度のない樣に導かれる。私共は宮中のことは皆目わからぬ故何となく不安であつたが說明を聞いて誠に心の安らかなるを覺える。又式部官の私共に對する說明には敎へてやるとか命令するとか云ふところはいさゝかもなく、やさしい態度を以て私共の心をなごやかにして吳れる。こゝにも宮中の有難さがにじみ出てゐる。これは滿系のみならず日系も感じたことであつた。

三

明くれば十七日は陽光うらゝかな春日であつた。午前十一時半特派大使李大使及隨員一行は宮內省さしまはしの溜塗(ためぬり)の自動車十數臺に分乘し二重橋を渡つた。沿道には學生生徒一般市民が日滿兩國旗を振つて大使を迎へた。

西溜(にしたまり)の間に控へた一同は光榮の瞬間を前にして緊張した。特派大使の溫顏もこの日は嚴かに引き緊まつてゐる。待つこと暫しにして李大使にお召があり參進、やゝあつて特派大使御親書を捧持して參進した。高等官以上十六名の隨員は肅然として襟を正し整列してゐると、やがて式部官の合圖あり、鳳凰の間入口お廊下に導かれた。阮交通部大臣を先頭にして十六名は一列に並び時の至るを待つ。特派大使が來朝の趣旨を奏上する聲が森嚴なる靜けさのうちに聞えて來る。やがて一瞬の靜謐に歸ると阮大使が鳳凰の間に進み拜謁を賜はる。特派大使が御紹介申上げる聲が聞える。程なく阮大臣は退下される。次は馮協和會委員、次赫中將、次は松木次長、次は三浦次長、次は植田副局長、次は羅處長と云ふ順序に參進する。八番目に私の番が來る。鳳凰の間のお敷居の外に恭しく立ち式部官の指圖に從て步を運び、お敷居の前にて敬禮、お敷居を越えて敬禮する。特派大使は私の官職氏名を奏上し通譯官之を通譯申上ぐ。微賤より身を起せし草莽の臣、聖上の御前に氏名を奏上せられて恐懼極まるところを知らず、四步進んで最敬禮申上ぐる。咫尺の間に龍顏を拜し感極つて何物も見えず、唯神々しき御姿の耀き給ふこと眼に映ずるのみ、何人の侍立し給ふや、鳳凰の間とは如何なるところなるやも辨へ知ることが出來ぬ。莊嚴神聖なる氣にみちて御前を退下する。

かくて十六名の隨員は事務官に至る迄一人一人拜謁を賜り恐懼感激云ふところを知らず一旦西溜の間に退下する。次で特派大使及隨員一同は桐の間に於て、皇后陛下に拜謁を賜る。之も鳳凰の間と同樣の順序である。國母陛下の御姿を拜し深き御慈愛に浴し奉るかの感を受ける。

それより特派大使及簡任官以上隨員は李大使と共に千種の間に導かれる。御先著あらせられた高松宮殿下同妃殿下に一同拜謁を賜り、東條首相夫妻、東鄕外相夫妻、松平宮相夫妻、その他湯淺內大臣、松平式部長官等顯官に挨拶し、一同整列してお待ち申上ぐるや、程なく兩陛下お揃に

て御見えになり、一同最敬禮するうちを豐明殿にお入りになる。特派大使及李大使夫妻は顯官及夫人等と共に御後に隨はれ私共もその後について豐明殿に入る。

楕圓形の御食卓御むかひ合せに兩陛下御著座になり、張特派大使は畏くも　皇后陛下の御隣りに席を賜り、私共九名の隨員も夫々顯官及夫人等の間に席を賜る。御料理は洋食であり、御食事中　皇后陛下におかせられては張特派大使にお言葉を賜る有難き御樣子を屢々拜する。宴終て兩陛下兩殿下は牡丹の間にお入りになりお席におつきになる。

聖上陛下の御傍に張特派大使は御席を與へられる。李大使夫妻阮馮兩隨員も御傍近く席を賜る。私共はお隣りの竹の間にあつて洋酒、コーヒー、煙草など頂く。竹の間より牡丹の間を拜するに　聖上陛下には張特派大使と種々の御物語せらるゝ御模樣である。その日の豫定によれば午後二時宮中退下となつてゐたのであるが、午後二時十五分迄御物語があつたのである。而して畏くも　聖上陛下には殆んど張特派大使とのみお話し遊ばされた樣に拜せられたのである。

四

感激に頰を紅潮しつゝ特派大使一行が宮中を退下したのは午後二時二十分であつた。紅の絨氈を敷きつめた御所の廊下を歩みながら植田副局長は私に向つて「もうこれで死んでもよい、死んでもよい。」と感慨をもらされた。植田副局長は年若き頃不治の病にかゝられたが鬪病の後之に打克たれた。一昨年吉林省次長をされてゐる當時直腸癌にかゝられ再起不能を傳へられたが再び病に勝たれ、健康をとり戻して此度隨員一行の中心として日本を訪れたのである。幾度も死病と鬪はれた後生命を全うしてこの光榮の時に逢はれ感極つてもう死んでもよいと述懷された植田副局長の心の中さこそと察せられるのである。退下の際私と一緒に車に乘つた或簡任官が、二重橋を渡る時、私に向てしみじみと言はれるには「今迄自分たちが拜んでゐた二重橋を今宮內省の車に乘せて頂いて渡るとは何と云ふ光榮であらうか、これから先再び二重橋を渡ることはもう私の一生にはあるまい。今日と云ふ日は私の生涯において最も記念すべき日である。」この感想を抱いたものは獨り同簡任官ばかりではない。一同の均しく感じたところであつた。

退下の途中薦任官の隨員七名と合流した。この七名は宮中別室において晝餐を賜つた。その席には女官を御差遣になり一同と卓を共にせられたさうである。この女官は奉天に永く住まはれた軍人の夫人でたへんよい滿語を話され、滿系の隨員とも色々な話をされたさうである。御陪食の方は夫人方も列席される故座は賑かであるが、薦任官の隨員の方は男ばかりであるから座が固くなり勝ちである。そこで女官を御差遣になつたものと拜されて有難いことである。或る滿系の隨員が私に向て感想を洩したところによると、「宮中に參內すると唯々恐多くて固くなつてしまふが、宮中におかせられては、私共の固くなつた心を解きほごしやわらげて下さる爲に細かい處迄も御心をつかつて下さる。御賜餐の時に女官を御差遣になつたのはこのことの一つの表れであると拜察する。日本の皇

室の有難さ辱けなさがしみじみとわかる。」と云ふのである。

五

宿舍に歸るや張特派大使は直ちに新聞記者團と會見した。大使の相貌はさながら靈感を受けたかの如く輝いてゐた。記者團に語る調子は聲低くつゝましやかであるが嚴かな響をもつてゐた。話されたことの內容は概ね次の通りである。

天皇陛下に拜謁を賜り有難きお言葉を頂き感激に堪へず、大東亞戰爭における皇軍の赫々たる勝利は御威德の然らしむるものなることを今日如實に體認した次第である。又皇后陛下に拜謁を賜りその御慈愛に溢れたる御姿を拜しこの御方こそ東亞全民族の母にてあらせらるゝとの感を深うした。本日種々の御下問があつたがそのうち一二についてお話する。第一は統制經濟が强化され滿洲における國民の生活は如何であるか、困難はないかとの御下問があつた。之に對しお答へ申上げたことは目下東亞全民族の復興の爲大東亞戰爭の遂行中であり、我國民は皇帝陛下の渙發せられた御詔書の御趣旨を體し親邦日本に全力を擧げて協力せんことを誓つて居りますが故に生活に幾分の困難がありましても、一致團結して之を突破して行く覺悟でありますから何卒御心を安んじ給はんことを、と言ふのである。第二に日本開拓民の入植後原住民との折合は如何であるか、摩擦はないかとの御下問があつた。之に對しお答へ申上げたことは、滿洲は未開拓の土地廣く日本開拓民が入植して之を拓かんことを國民皆待望して居るのであります。而して原住民と開拓民との關係については政府當局も常に心を用ゐて居り、兩者は相親しみ、相協力しつゝ業にいそしんで居りいささかの摩擦もありませぬ故に宸襟を安んじ給はんことをと云ふのである。

特派大使のお話を承り、聖上陛下には滿洲國の國民の生活に大御心を用ゐさせ給ふこと並に日本開拓民と原住民との上に深き思召を垂れ給ふことを知り今更ながら聖恩の有難きを思ふのであつた。

六

訪日中受けた感銘深い印象は數多あるが、その中一二を拾つて述べて見よう。

宴會は數々あつたが、張特派大使主催建國功勞者招待宴は最も劇的であつた。招待に應じ參集せられた來賓は凡そ百五十名、本庄繁將軍を始めとして初代總務長官駒井德三、前參議筑紫熊七、田邊治通、前總務長官遠藤柳作、星野直樹等建國當初の元勳より最近迄滿洲に職を奉じてゐた人たちに至る迄一堂に會しなごやかな晩餐の宴を張つた。宴酣なる時張特派大使は立つて挨拶した「今夕御來臨の閣下各位はいづれも滿洲建國に參畫せられた方々であり、或る人は滿洲事變の當時、或る人は建國の時、或る人は建國後の建設時代と云ふ風に夫々時は異るが、滿洲にあつて建設に力を致されたのである。私は各位の一人一人に付思出をもつてゐる。今各位にお目にかゝり往時を回想するに建國の歷史腦裏に浮び來つて恰も建國十年史の繪卷物を見るかの如くである。否今夕の會合は生ける建國十年史であ

（謝恩特派大使に隨行して）

る。」と云ふ敍情詩的な句から始まり、「滿洲國今日の隆昌はこれら功勞者の功績によるものであり今後も陰に陽に滿洲建設の爲援助せられんことを請ふ」と云ふ言葉を以て結んだ。

特派大使の挨拶に對し本庄將軍は立つて來賓を代表し太くしかも朗々たる音聲を以て答辭を述べた。

「唯今特派大使は本日茲に集まつた私共を指して生ける滿洲建國十年史であると云はれたが、我々は建國十年の歷史の一齣一齣を成すものであり、我々一人一人が爲した仕事は滿洲建國の一斷片であるに過ぎない。然るに張特派大使は滿洲事變より建國、建國より建國後の建設と云ふ樣に今日に至る迄終始一貫滿洲建設に力を盡され來つた方であり今日建國十周年に當り皇帝陛下の思召を體し謝恩の爲日本を訪れられたのである。されば張特派大使こそ一身以て建國十年の歷史を貫かれた方であり、これぞ正に生ける建國十年史である。故に張特派大使が我々の一人一人につき深き思出を有たれるが如く、我々一人一人も亦張特派大使につき夫々思出をもつてゐる。今夕茲に大使に會ひ往時を追懷する時一同深き感慨を禁じ得ない。」と冒頭し滿洲國の隆昌を祝し特派大使一層の健闘を祈る旨述べたのであつた。

宴會の挨拶は概ね形式的なものが多く、御馳走を前にして長々とやられると聞いてゐる方では早くやめればよいと云ふ氣になるものが屢々あるが、この宴會における主客の挨拶の美しさには滿場唯恍惚として醉へるが如く時の經つのも知らざる有樣であつた。私はこの樣な美しい宴會を今迄經驗したことがなかつたのである。

滯京中特派大使は皇軍傷病兵全體に對する慰問と感謝の意を表するため、東京の陸軍病院を訪問した。雨天體操場に恢復期に近い數百名の傷病兵が整列して一行を迎へた。大使はこれら白衣の勇士たちに對し東亞建設の爲特に滿洲國防衞の爲尊き犧牲を捧げられたことに對し深き感謝の意を表し折角養生の上一日も早く全快せられ皇國の爲再起奉公せられんことを祈る旨の挨拶を述べた。傷病兵を代表して隻脚の勇士答辭を述べた整列せる人々を見渡すに最前列に並ぶは悉くこれ隻脚に義足をはめた人々である。中には兩脚に義足をつけた人もある。私は淺はかにもこの整列の仕方について不滿をもつた。特に隻脚の勇士たちを選んで前に出し特派大使に見せなくともよささうなものをと心中に思つたのである。ところが答辭がすむと私の考へ方の淺はかであつたことが忽ちわかつた。次の瞬間隻脚の部隊は行進を開始したのである。隊長は隻脚の勇士である。號令一下二列橫隊の隻脚部隊は床を踏みとゞろかす力強き步調を以て特派大使の前に分列行進を行つたのである。その力強さ、その壯烈さ、一度脚を失ふも義足を以て立ち上り、再び皇國の爲に盡さずんばやまざるその烈々たる氣魄、如何なる不運不幸をも突破して雄々しく生きぬかんとする強く逞しき生命の力、これぞ日本人である。日本精神である。この力強き行進を見て泣かずに居られようか。涙滂沱として頰を下つて止むる術を知らぬ。ちらと特派大使の方を見やれば、大使はハンカチを取出して眼を拭ふて居られる。隻脚の勇士は或は自轉車を運轉して荷物を積んだリアカーを牽き或は實戰さながらの銃劍術劍道の試合をなし或は手に汗握る角力をとる。兩脚なき勇士亦力強き行進を行ひ或は、鮮かな機械體操をなす。この有樣を見ると人類は果して脚を必要とするや否や疑はしくなるくらゐである。さるにても皇軍の傷病兵に對する手厚き處遇かくの如きかとほと〴〵と感じ入つたのであつた。

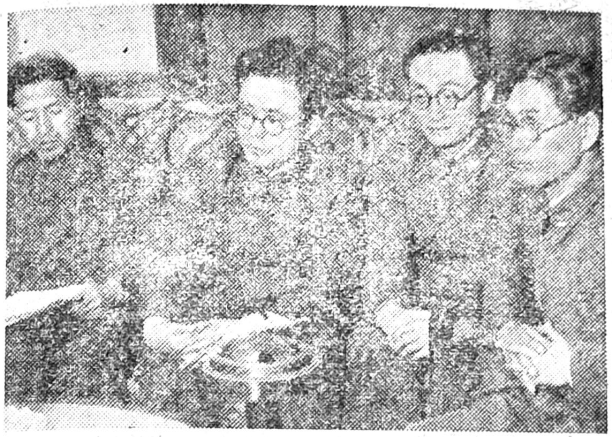
日本各地の歡迎は熱誠を極めた。日系の隨員が祖國日本へ行き歡迎を受けるのは少々こそばゆい感なきにしもあらずであつたが、公式の歡迎はもとよりのこと何等指令も命令も受けてゐない町家や農家の人々が歡迎の至情を示してくれるのは實に嬉しき限りであつた。東京、京都、大阪、神戶と町々を車をつらねて走る時、家の門の前に主人夫婦から子供女中に至る迄立ち並んで禮をしてくれる。多摩御陵參拜の途次畑に働く農夫は鍬をやすめ笠をとつて禮をする。橿原神宮に詣でての歸途年老いし夫婦は私共に向つて御苦勞樣ですと云つて頭を下げた。伊勢より京都に行く途中、汽車が田の中を通る時、線路傍で遊んでゐた數名の子供は、互に知らせ合つて線路の方に走り寄り皆々膝に手をおいて特派大使の列車に向つて敬禮した。この樣な人情に厚い國民が世界何處の國にあるだらうかと思ふ。そしてこれは日本國民が人情に厚いばかりでなく、滿洲國そのものに對しもつてゐる愛情の自らなら發露であるのだ。

七

謝恩特派大使一行は四月四日新京に歸任した。四月五日は日曜日に當るので大使は四月六日參內することになつてゐた。然るに皇帝陛下には四月五日特派大使をお召しになつて此度の模樣についてお尋ねあり大使より種々奏上したとのことである。陛下には餘程お待かねであらせられたものと拜察する。大使は歸來記者團に語られるには「この度自分が滯りなく使命を達成し得たのは日本皇室と滿洲帝室との御交りの深きによるものである。」と回鑾訓民詔書に「精神一體ノ如シ」と仰せられ國本奠定詔書に「天照大神ノ神庥、天皇陛下ノ保佑ニ賴ル」とある御言葉の意味は謝恩特派大使に隨行して有難き經驗を積みはつきりとわかるのである。日本皇室と滿洲帝室とは道義と情愛とによつて結ばれてゐる。これ日滿一德一心の基礎であり東亞全民族の仰いで以て鑑とすべきものである。

新京特別市西四道街二
株式會社 滿洲演藝協會
電話② 七七六六四四七六番
支社 東京
出張所 奉天・大連・哈爾濱・安東・營口・錦縣
駐在員 北京外國內主要箇所

國民編成の問題（座談會）



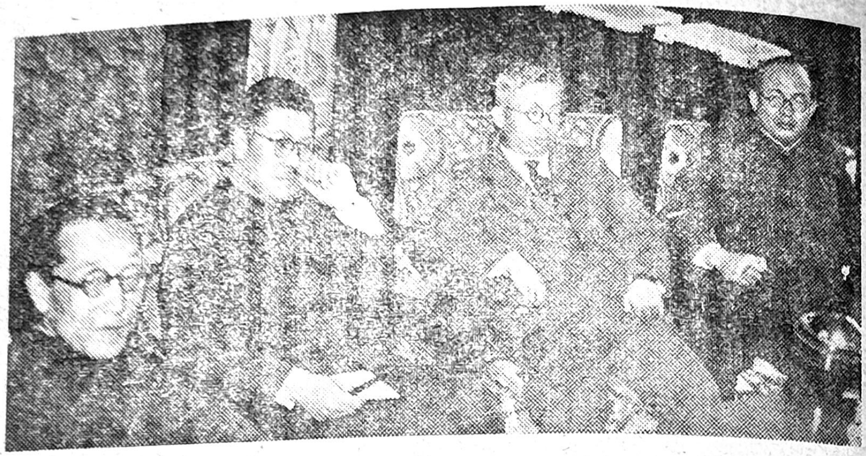
小原　本日は御多忙の所わざ〳〵御出席下さいまして厚く御禮申上げます。滿洲國は本年建國十年を迎へまして、其間の飛躍的な成果に就いては私が今更申上げる迄もありません。今日第二建國への新しい發足に當り、偶々大東亞戰が勃發致しまして、滿洲國の國家的な役割は特に重大な意義を持つ様になつたのであります。この未曾有な難局に處しまして、日本を指導とする東亞諸民族は一致團結してこの歷史的な聖業に邁進すべき時に當り、我々の覺悟又責任と云ふものが殊更に重大になると思ひます。それでこの爲めには從來の國民の凡ゆる社會部面なり組織部面につきまして、茲に再編成をして、言はゞ締直しをして、この難局打開、聖業達成の爲めに邁進しなければならぬ時期に遭遇して居ると思ふのであります。

それで滿洲國としては國家の當面のこの根本

建國大學教授　大山彥一
同　教授　瀧川政次郎
同　助教授　高橋匡四郎
同　教授　中野清一
同　教授　宮川善造
同教授（司會）　村井藤十郎
同　教授　村敎三
同　助教授　山本守

（五十音順―敬稱略―）

本社　小原克己・石河潔
日時　康德九年四月二十三日午後五時
會場　新京特別市「日滿軍人會館」



問題に就きまして各先生方に專門の立場から御敎示を仰ぎ、併してそれを廣く讀者一般に讀んで頂きまして、これを浸透させたいのでございます。この座談會は言はゞ新しい型の大學のエキステンションと致しまして、國民一般にこの問題の重要性と、問題の所在とを明かにして頂きたいと思ふのであります。どうか、この主旨を諒とせられまして、それぞれ御專門の所をお聞かせ願ひたいと思ひます。ついては司會を一つ村井先生にお願ひ致しましてお話を進めて行きたいと思ひます。

「組織」「訓練」「奉公」

村井　主催者側の御希望もありますので、都合で私がこれから此の會の進行係をさせて頂きます。本夕の問題は、國民編成問題でありますが、これは恐らく目下の國際的、國內的情勢にありましては、滿洲國にとりまして、最も根本的な且つ重要な問題の一つでありませう。御承知の通り、現代は「組織」と「訓練」と「奉公」の時代でありまして丁度「自由」「平等」「博愛」の近代思想と對應する新しき行き方を必要とする時代であります。高度國防國家の體制も要するにこの「組織」と「訓練」と「奉公」の體制だらうと思ふのであります。獨り國防的な見地からのみならず、廣く文化一般に就いて考へましても、矢張り「組織」と「訓練」と「奉公」といふ新しい原理によつて結ばれた國民の編成乃至は國家の體制を確立すべき時代であります。これを基礎と致しましてこゝに新しい時代の新しい文化が生れて來る、又生れて來なければならぬのであります。そして、これが世界史の新たなる回轉となるのであらうと思はれます斯う言ふ風な意味合に於いて今や大東亞戰爭遂行のため北方の據點として立つ滿洲國の國防目的達成のためにも、又新しい文化を生む母體として發展してゆくためにも一刻も早く有力な鞏固な國民編成を此處に確立する必要があると思ふのであります。これは國を憂へる者の均しく思ひをいたす點でありませう。國民編成の問題はまことに、滿洲國に取りまして、滿洲國が現代國家として生き拔き、その世界史的使命を全うするが爲めに、非常に重要な國家的問題であると考へるのであります。併しながら、この問題は重要であるだけ、それだけ又非常に困難な問題であります。殊に滿洲國の國柄、その國民の構成要素、構成形態と云ふことから考へると非常に困難な問題であります。しかし、また、ひるがへつて見ればこの時代の要請に基

寫眞＝座談會々場＝左より中野教授、村井教授、瀧川教授、大山教授、村教授、高橋助教授、宮川教授、山本助教授

きましてこれを解決する根據もたしかにあるのであり、こう言つた樣な問題につきまして、色色皆さん方の專門的な御所見をさしつかへない程度で此處に出して頂き度く思ひます。先づ指名的で失禮ですが、法制的な――法學的な乃至は國家論的な立場から村先生にお話を願ひます。

國民編成と國家學

村　國民編成と云ふ問題は近世の法治國家の建前から當然に出て來ないものであつて、矢張り全體主義體制國家とか、或は國防國家と云ふ樣な建前から出て來る樣に思ふのであります。エリネック、ヤケルゼン兩教授の著書に於きましては重要な問題として取扱れて居りません。ナチスが勃興致しましてナチス黨によつて全體主義體制の國家を組織すると云ふ樣なことが、現實の必要となつてからシュミット、ケルロイター、フーバー諸教授などがドイツに於ける國民編成と云ふ問題を國家學的に取扱つて居ります。私は國民編成と云ふ樣な問題を考へる場合には一應その問題の周邊に於ける理論的な關係をも考へて置く必要があると思ふのであります。一應國民編成問題の上位には國家機構の再編成の問題をおくとか、國民編成の問題と國家機構の問題とに跨つて物資の生産・分配に關する經濟組織の再編成をおくとか、或は國民編成問題の下位に國土制度の再編成と云ふ樣な問題をも併はせて考へなければ國民編成の問題は國家學上、其の位置がはつきり解らない樣に私は思ひます。國民編成の問題としてどう云ふ問題を取扱ふべきかといふことは、これから東洋でも西洋でも考へて行く問題でありませうが、私は大體二つの大きな對象の把握の仕方があるのではないかと思ひます。

國民編成の基礎的問題

一つは國民編成の基礎的問題とでもいふべきものです。これは例へば民族、階層などの立場から國民構造を眺める。或は人口職業と云ふ樣な方面から國民構造を觀察してここから國民編成に着手すると云ふ樣な仕方の場合です。このやうに現在あるがまゝの國民狀態を基底として其構造の再編成を企圖して將來あるべき國民編成の問題を見て行くと云ふ樣な問題が國民編成の基礎的な問題と言ひ得るのではないかと思つて居ります。

國民編成の上部構造の問題

それからもう一つの問題は國民編成の上部構造とでも謂ふべき問題です、これは國民編成に於て上部構造として出て來る所の組織が國家組織或は國家體系と云ふ問題に於てどう云ふ地位を占めて來るかと云ふ問題であつて、假にドイツの國民組織の例などを見ると、ナチス黨が國家に於てどう云ふ位置を占めてゐるかといふ問題です。具體的に言ふと、國家と黨との關係、それからその內部の問題として、黨と政府の關係、それから黨と軍部の關係、或は黨と國民との關係、と云ふ樣な、斯う云ふ問題を一應國民編成に於ける上部構造の問題とか或は中樞的な問題として見ることが出來るのではないかと思つて居ります。

日本に於いては御承知の通りに、國民組織とか或は國民編成とか、國民再組織と云ふ言葉が現實政治の前面に現はれて來たのは、第一次近衛內閣の末期であつて、新體制の聲明には御承知の如く『日本現下政治上の重大問題の處理は一に國民組織の確立に俟つべきである』と云つて居りますが、この前後あたりからこの國民編成に對する問題が學問的にも亦政治的にも非常な重要性を持つて來たのであります。

國民編成とは何ぞや

それで最近の國家學と云ふ立場から見てそれでは國民編成と云ふのはどんなことかと云ふ

と、其定義は難しいのでありますが、私は假りに國內組織と云ふ點に着眼して見ると國民編成と云ふのは全體主義國家、又は協同體的國家に於いて國民の社會的な多元的な結集狀態を政治的一元性の統合組織に再組織することである。それからまた同じ樣なことであるが、政黨國家に於ける國民の社會的な分裂を克服して國防國家の要請に應じて、全箇一體的な國民組織にすることであるといふことも出來るでせう。抽象的な言ひ廻しでありますが大體こんな定義にすることが出來るのでないかと思ひます。

村井　要するに國家が唯權力の主體として法治國的に外面的に開展しただけでは、現代的の歷史的要請を充たして行けないので、國家の內面に於いて下から盛上る國民の結成、村先生のお言葉によると全體主義的な國民統一が出來て、之れが、國家機構とピタッと合體して、初めて本當の國家總力、國民總力を生み出す現代の國家體制が出來る。斯う云ふ風に考へるべきであるといふやうに承つたのでありますが、國家論或は法制の立場から大體問題の意義が明かとなつたと思ひます。さて更に立場を變へまして社會學的な方面からどう云ふ風に見たらよいものであらうか、どう云ふ所に滿洲の國民組織の問題の所在、その解決の困難性、或は特異性と云ふものがあるかと云ふ樣なことを承はり度いと思ひます。中野先生御專門の立場から何か……

國民編成の社會學的課題

中野　只今村先生からお話がありました國民編成の問題を二つに分けて見る點でありますが、私共も大體これと同じ樣な考へ方を致して居ります。私が使ひ馴れて居る言葉に直しますと、先づ第一に村先生がおつしやつた上層的な問題としては、一定の國家理念に向つて國民編成を編成して行く、その方面が一つある譯でありまして、もう一つとしては村先生がおつしやつた基層的な面にあたる譯でありますが、斯う云ふ國家理念に向つて國民を編成して行く場合に何處から着手して行くかと云ふ事が問題になると思ひます。理念がどんなに良くてもそれを生かして行く現實、それを擔つて行く地盤が適當に發見されませんと云ふと、理念が實際に現はれて行かないと云ふ樣に考へるのでありまず。私が專ら勉强して居るのはこの基層的な面でありまして、滿洲に於ける國民編成を滿洲國家の持つて居る理念に從つて生かして行く場合に何處から手をつけたらよいかと云ふ具體的な問題の方に專ら方針をおいて色々と思案して居る譯であります。大體のことだけを申しますと一番先に斯う云ふことに氣がつくと思ふのです。

滿洲國の國民構成の現狀

他の國の場合ですと、國民編成が出發する以前に編成すべき國民社會、言ひ換へると作田先生のおつしやる國民構成が既に與へられて居るのですが、滿洲の場合ですと、國民編成が出發し樣にも編成し直さうとする肝心の實態がある意味に於いて無い樣に思ひます。言ひ換へますと、國民構成がないと云つては語弊があるかも知れないが、滿洲では他の國に於けるよりもはつきりした形に於いて現はれて居ないと思ひます。さうすると云ふと問題はその國民編成が出發すべき前提としての、編成し直すべき、再組織すべき最初のもの、さう云ふものを何處に求めてかゝるべきかと云ふことが一番肝心の問題ではないかと思ひます。

でその點で少し考へて見たことがあるのですが、少しお話申上げる範圍が稍々一般的に廣くなる傾きがあると思ひますけれども念の爲めに僅かばかりその點に觸れて見たいと思ひます。一般に滿洲國がその中に含まれて居ります東洋的な社會と、それからヨーロッパ的な社會を比較して見る時に一番大きな差異が何處にあるかと云ふことについては、色々な方面から色々な解釋が與へられると思ひますが、私共が社會學

の立場から斯う云ふ點に重點をおいて區別をつけて行きたいと思ひます。

東洋の社會に於ける集團相互の結合狀態

つまり、何と云ふか一つの部分的な集團があると致しますと、その部分的な集團相互の間にこの部分的集團を結ぶ纖維的な結合、斯う云ふ纖維的な結合が一つ一つの部分的集團の間に行き亙つて居りませんと云ふと、幾つかの部分集團の間から全體的な社會と云ふものが出來上つて來ないと云ふ樣に、社會學の方で申します。

ヨーロッパ社會に於ける集團相互の連繫

所がかういふ觀點を持ち出して考へて見ると、ヨーロッパの方では部分的な團體相互の間にそれをつないで、さうして一つの連帶的なものに作り上げて行く纖維的な結合が非常に強く與へられて居りますが、東洋的な社會に於いてはこれが缺けて居ると思ふのです。唯、日本だけは例外でありますが、日本を除いた他の東洋的な國家や民族の場合に於いては一つ一つの部分が非常に鞏固に結合されて居りますけれども、全體的な團結を作る纖維的な結合、さう云ふものが著しく缺けて居ることに氣が附きます、何故缺けて居るかと云ふ問題は此處では解決すべき問題ではないと思ひますが、さう云ふことが言ひ得ると思ひます。

その例は、例へば漢民族の場合ですと、家族制度が非常に鞏固に昔から今まで續いて居ると申しますが、一つの家族だけを取つて見ると、その家族の團體的な持續は鞏固でありますが、家族から家族へと結ぶ纖維的な結合が殆ど無い。それから家族集團は血緣團體でありますが、村落協同體の樣に地緣的な團體を取つて見ても、一つ一つの村落協同體では團結が鞏固ではあるが、幾つかの村落共同體の間の纖維的な結合と云ふものが殆どない樣に思ひます。

里甲、保甲の構造

漢民族の特有の社會的な體制であると言へる里甲、保甲と云ふ樣なあゝ云ふものを取つて考へて見ても、その實際の社會的なファンクションから見ると、村落から村落への架け橋と見る事が出來ないと思ひます。少し話が飛びますが蒙古でも例へば中世に現はれと言はれる、それは後に山本先生にもお伺ひしなければならぬと思ひますが。

蒙古のオトク、アイコク

血緣的なオトクや、地緣的なアイコクと云ふ樣な社會體制を取つて考へて見ても、そのオトクの範圍、そのアイコクの範圍に於いては團結が鞏固であるが、相互の間の連繫と云ふことになるとあやしいのではないかと考へられるのであります。蒙古の場合は後から山本さんからお教へを頂かなければならぬと思ひますが、——さう云ふことが言へると思ひます。

所でかやうな點からみると日本だけは例外であると云つたが、その理由は、御承知の樣に非常に古い昔は分りませんが、少くとも鎌倉幕府以後になると云ふと日本の家族と家族、村落と村落、地方と地方を連結するものとして（適當な名前が見附からないで閉口して居りますが）俗に言へば「義理」一種の「義」の世界、「義」の原則が貫いて居ります。

日本に於ける義の結合

その「義」の原則に隨つて家族が違つても村落が違つても「義」の連繫が出來て行く、さう云ふ「義」の原則の別の現れとして大義名分と云ふ言葉に現はれて居る樣な「分」の原則と云ふものが非常に大きな力をもつてゐたと思ひますが、何れにしても「義」の原則とか、或はそれの結果とも考へられる「分」の原則と云ふものが貫き通つて居る所に多くの家族や部落が各々分裂せずに日本全體へと統一的に結びつく事が

出來たのではないかと思ひます。西洋と日本を除いた東洋との間の差違をさう云ふ所に求めることが出來ると思ひます。

ではその次に來る問題として何故東洋に於いては小さな部分集團相互の間の纖維的な結合が發達しなかつたかと云ふことが考へるべき問題として現はれて來るのであります。その點については積極的な意見を持ち出すことが出來ないのでありますが、若干具體的な事實の中から思ひ附きを申上げて見たいと思ひます。

集團相互間の生活文化の浸潤

大分昔に、ヨーロッパの中世の經濟史の勉强をして氣が附いたのでありますが、それは御承知の樣に、中世ではヨーロッパの色々な地方に割據主義が行はれたのでありますが、その割據的な分散を乘越えて、私の言ふ意味での生活文化の接觸と云ふものが非常に普遍的に行はれて居つた樣であります。封建諸侯と封建諸侯が對立して居つても、その相互の間に封建的な身分を表現するに必要なる裝飾文化を他から遠慮なく持つて來る、それから食べ物でも、封建的な對立を越えて持つて來る。儀式でもさう云ふ生活の一番基礎的な文化、さう云ふ面では封建時代であると言はれる西洋の中世でも全ヨーロッパ的な普及とか浸潤と云ふものが見られたのであります。

所が東洋の方ではさう云ふ生活の一番卑近な側面、生活の基礎的な文化に於ける相互の浸潤浸透作用と云ふものが充分に行はれなかつた樣に思ひます。何故行はれなかつたと云ふことは別に考へねばならぬ問題であります。

シロコゴルフの「北方ツングースの社會構成」

シロコゴルフの「北方ツングースの社會構成」をみますと、北方ツングースが滿洲人に對して滿洲人は非常にをかしな匂ひのものを食べる、だから嫌ひだと云ふ例を上げて居ります。又北方ツングースがロシヤに對して毛嫌ひをする場合の一番根本の理由として、ツングース人は獸の皮を着ることが出來るが、ロシヤ人はそれが出來ないと云ふ樣な例を上げて居ります。さう云ふ例を通觀すると云ふと、生活の一番基礎的な我々の日常生活に卽した文化の側面で相互の浸潤が出來なかつたと云ふ事情、さう云つた樣な事情が生活單位である部分集團と、他の部分集團との間の纖維的な結合を容易に發展させなかつたと云ふことになるのではないかと思ひます。もう少し皆さん方のお話を伺つた上で又何か述べさしていたゞきます。

村井 只今中野先生は、支那滿洲などでは集團と集團との間に生活文化の相互的浸透と云ふことがどうも行かないと云ふことを御指摘になりましたが、大山先生、如何でございますか、滿洲の諸民族の宗教なり、或は習俗、或は家族制度なりさう云ふ風な方面でお互ひに一つに結集し難い事情、それから、また、この障礙をのり越えてゆく可能性如何といふことについてお考へをお洩し願ひたいと思ひますが……。

大山 國民編成に關する私の考へ方についてはこれは實は『藝文』誌の五月號に『道義國家と民族協和—國民編成の理念』と云ふ題で短いものを書いて置きましたので、それは玆では餘り申さないことにしますが、結論的に言ふと共同組織を確立せよと云ふことであります。

共同組織の確立

私は共同組織には自立的共同組織である國家的統治的組織の確立を擧げ、從屬的共同組織には、外的組織としての協和會組織の確立擴充、內的な從屬的共同組織として、宗教と家族制度（文化、教化）の面の滲透擴充を擧げて居ります。

內的從屬共同組織の具體的な面である、家族制度の方は今、玆では觸れないことに致しまして、私としては宗教と家族制度の聯關の面を申

上げて見たいと思ひます。要するにこの滿洲に於いては諸民族が統一的國民組織、國民社會的な統一になつて居ないと云ふことが第一の問題であると思ひます。即ち各民族毎にブロックが出來、而も各民族に於けるブロック相互間に連結が薄く、或ひは無いのであり所謂ゲゼルシャフト的なのでありますが、併しその各ブロック內に於ては一つ一つ所謂ゲマインシャフトが出來て居る譯であります。これを國民的統一體に迄持つて行くには私は、宗教、敎化によることが最も妥當であると考へて居ります。

東洋的社會の宗教的特徴

『東洋的な社會の特徴は極めて宗教的である』點にあります、宗教の中に凡ての彼等の信仰、世界觀、哲學の本質的なものが入つて居る。宗敎の面から諸民族の生活の中に共同組織を確立して行くと云ふことが共同組織の確立の道として最も早い道の一つではないかと思ふのです。具體的に申しますと、まづ漢民族でありますが、漢民族に於いては宗祧をまつる外に從來の古い宗教として民間宗教としての、土地廟とか娘々廟とか云つた道教系の古い面があつて、之に更に佛教が滲透してゐるのであるが、私が今こゝで言はんとするのは、最近漢民族社會に社會的勢力をもつて働きつゝある宗教團體乃至信仰結社であつて、其の第一に擧ぐべきは道院紅卍字會、在裡敎、在家裡と云ふ様な、彼等自身が自律的に組織して居る所のゲマインシャフトであります。これが彼等自身の單なる宗教的なゲマインシャフトに止まらずして、彼等の家族制度に內部に迄浸透して居る。即ち宗教世界に於いては共同的紐帶が漢民族の中に出來上りつゝあると云つてよいのであります。よく世間で、漢民族はエゴイストであるといはれますが、宗教の世界に入るとエゴイストではない面があらはれてくることが解るのであります。私の經驗では、例へば道院に於ける範圍では漢民族はエゴイストではないと思へるのである。漢民族が世間でエゴイストの様にいはれるやうになつたのは、苛烈なる自然條件と無慈悲的なる從來の治亂興亡の嵐に揉み拔かれて來たゝめであらうと考へられます。從つて宗教の世界に於いては、彼等は決してエゴイストではない。宗教の面に於いて共同人である。少くとも宗教團體の內部に於いては共同人であると云ふことが言はれるのである。又、「家產」を中心とする家族生活に於ては小份子を持つことは罪惡とされて居る位であつて、家族內部に於ては又彼等が共同人であることがわかる。

漢民族の家族制度

私は漢民族の家族制度を調べて見たのでありますが、彼等の家族制度に於ける習律の嚴なること、恰かも日本人の國體に於ける如きものあるを感得したのであります。

共同組織の問題では、宗教の面と家族の面に於いては共同の道が緊通されてゐる。我々はそれを國民的連繫の面に迄持つて行くと云ふことが大切であると考へるのであります。だから、私は學問的研究と云ふ觀點からばかりではなくて民族の研究では、共同組織の確立てふ形成的立場から考へて行かなければならぬと思ひます。

これは漢民族の場合だけではなくて、回々でも然りであります。回々では教長を中心とする嚴密なゲマインシャフトが形成されてゐる。回回同志であれば親身になつて扶け合ふ。そのゲマインシャフト精神と云ふものは極めて强烈なものであります。冠婚葬祭一切が教長を中心に回々村落共同體に於て行はれて居ることは、回回村落の實態調査によつて解るのであります。茲にも宗教の世界と家族制度と云ふものが、緊密な紐帶、共同組織を持つて居る。

固有滿洲族の家祭

それから固有滿洲族でありますが、此は順序としては一番初めに言はなければならなかつたのですが、固有滿洲族に於ては其家祭に就て、

其社會的背景にまで掘下げて見る要がある。即ち旗人固有の薩滿教的家祭を中心にして、彼等の家族制度が、一見崩壞せるものゝ如く見えて、しかも大家族制度的背景が常に再現すると云ふこと、即ち彼等の生活に於ては、常に大家族的背景と云ふものが、アンテナの如くゲマインシャフトの網を形成して居ると云ふことである。又、家祭たるや、薩滿教に於いては敬天崇祖、所謂東洋的な、日本的な共通なものがある。茲にも、つまりイデオロギーの點から言つても同じものがあると云ふことであります。斯う云ふイデオロギーの面に於いても彼等の共同の意識を作興すると云ふことは國民共同組織の作興として必要ではないかと思ひます。

蒙古族の鄂博の祭

それから蒙古族でありますが、私の關係した範圍では鄂博の祭ですが、この鄂博の祭りと云ふのは矢張り民の祭りであり、又、天の祭りであり、薩滿教の系統と思つて居ります。この祭りを中心にして、祭りは「まつりごと」に轉ずる。これが民族結合の契機となり、これを中心として彼等のゲマインシャフトが高揚される。これを中心としてお互ひに民と民が、一見連繫がない様にみえて居るが、連繫は現れ、强化される。競馬祭の行事、角力と云ふ様なことで連繫は强化されゲマインシャフトは高揚される。平常はさう云ふ様なゲマインシャフトはない様にみえるが、祭の際にはあらはになる。而もその鄂博たるや、東洋固有のイデオロギーに立脚するものであると云ふことが言へると思ひます。

ロシヤのエミグラントと教會

ロシヤのエミグラントであるが、エミグラントでも矢張りさうであります。エミグラントは教會を中心にしてゐる。エミグラントは毎日曜日に教會にお參りをして居る。彼等は一つには、教會を護持せんが爲めに、教會を中心とする傳統的舊生活を共同に守護せんが爲めに、ソヴエートの政權にも反對をして居るのであつて、本質的にロシヤが嫌ひなのではないのであります。教會に如何に彼等は執着して居るか！而もロシヤは『宗教は阿片なり』として斷壓し様として居る。滿洲國としては彼等の宗教を、教會をいよ〳〵誘導しなければならぬと云ふ點が注目されるのであります。

宗教と家族制度を通じての統一

以上長々と言ひましたが、宗教と家族制度を通じて、統一的社會が出來て居ない所に、國民的統一社會が形成されて行く。政治に於ても此點は特に考慮を促したいのであるが、イデオロギーとしてもこの面を强調する必要があると思ふ。それから暮しを樂にしてやることは大切です。要するにこのことは「政治を良くする」ことによつてもたらされることです。

街村・合作社・協和會の三者の結合

ついでに、農民の立場から、一言し度い。彼等は三つの面を感じ、又接する。農民は先づ行政の末端組織としての街村、又は屯公所に接觸する、第二には合作社と接する、第三には協和會と接觸するのであります。そこで此三つは、統一的綜合的な力を以つて農民に働きかける必要があると思ひます。合作社の運動は、協和會の運動と一緒になつたら、協和會はもつと强化されるのではないでせうか？此點については餘程研究を要するでせうが。

私は下部行政組織末端たる所の屯公所もう一つは協和會の所謂基礎組織となる隣組制度の擴充、それに街村に於ける擴充、これは國民編成の直接の問題であるがこれも早く確立强化擴充する必要があると思ひます。それから、協和會は今、配給の面を受持つて居るが、同時に金融

の面をも受持つたらどうでせうか。これには合作社と提携する。さうすれば農民の一層の信頼を得ることが出來ると思ふのであります。

村井　大山先生から國民組織を確立するにつき有力な手懸りとなるべき點につき御話を伺ひましたが、この點につきまして何か御意見がありましたら……。

宗教の對立面

中野　一寸お尋ねしますが、東洋の各民族毎に異つた宗教がある場合に、宗教的な對立と云ふものが、宗教の教義に於ける對立ではなくて宗教的教義に伴ふ儀禮、言ひ換れば生活文化におけるお互ひの背反が問題なのではないかと思ひます。外國では宗教そのもので對立して居る樣に思ひますが、こちらでは專ら外部に現はれた儀禮的なものゝ對立が根本の問題で……信ずる神が違ふと云ふこと――神が違ふと云ふことは言へますけれども、それで對立するのではなくて、違つた神を宗教的に表現する儀禮の點でお互ひに嫌惡感を持つて居るのではないかと思ひます。と云ふのは各民族の智能の程度を考へて見ても理解が出來る樣に思ひますが、ヨーロッパの樣に、各民族の文化が高まつて居ると云ふと、神の解釋如何の點での對立はあるけれどもインテリジエンスの低い民族の間ではお前の持つて居る神と俺の神が違ふと云ふことで打つかり合ふと云ふことが割合にない樣に思ひます。

山本　私は支那の古い時代に於いては相當さう云ふ神が違ふと云ふことで、對立して居ることがあるのではないかと思ひます。

大山　祖先神である場合は明かに違ひます。それによつて對立する場合がある樣に思ひます。

村井　宗教の面に於きまして、對象たる神が違ふために對立が生ずるのが、宗教儀禮といつた樣なところの相違から感情的に對立するのかといふ點はその位にしておきまして……、集團と集團との連繋といふ問題は如何でせうか。

高橋　支那の村落と村落との結合連絡がないと云ふことゝ、これから此方の原始的な民族、例へばオロチヨンとか、ダホールとか、ヤクートとかさうした民族間の連絡がないと云ふことと意味が違ふだらうと思ひます。

支那の村落と滿洲の原始民族の村落

支那の場合に於いては歷史、政治的な要因から連絡がないのぢやないかと思ひます。それは後で述べたいと思ひますけれども……支那のは政治構造から考へることが全部とは言へないけれども、非常に强力な面と思ひます。

中野　反面から言ふと纖維的な結合がないからデスポスティックな政治が出來たのだとも思はれますね。

支那の政治に於ける村落の地位

高橋　支那の中の自然的結合で出來た村落の內面に必ずこれに浸透して行政的、政治的に結合された組織と云ふものが搾取構造になつて居る。これが保甲とか里甲なんですが、保甲とか里甲と云ふものが自然的に結合した村落と云ふものを制約するに非常に强い力を持つて居る。相互の村落の連絡をとると云ふことを制約する力を持つて居つた譯です。この政治的に組織附けられた所の制約が支那の村落に一つの性格を與へた。これはどう云ふことかと云ふと、中央政權から省縣に到る迄はこれは一つの治者の機構なんです。それから下の保甲とか里甲は被治者の組織であつて、この兩者には斷層があると思ひます。がつまり中央政權から省縣までが一系列であつて、保甲、里甲との間に斷層がある俗に保甲以下を自治體とし前者を治者行政組織としてゐるのですが、この治者の行政組織が保甲と保甲の横の連絡を意識的にさせないのです。つまりその中央政府の治者の一つの非常な意識的なやり方だつたのです。それは何故かと

云ふに、保甲とか里甲と云ふ樣なものを一つの警察組織として考へる事と、それ以上に背後に隱されたものは、徵税と賦役なんです。税金を取り立てる所の組織であり、それは飽く迄も中央政府以下省縣迄の治者階級の一つの手段としてあるのであつて、それだけに村落と村落の横の連絡と云ふものが綱の目の樣に張られることが恐しいことなんです。徵税するためには横の連絡があることが、寧ろ邪魔なんです。これが保甲制度にはつきり現はれて居ります。これに反して寧ろ縱の組織は何處迄も縱の組織として嚴格に壞れないものにして行くが、併し横の組織は始めから意識的にも省られなかつた。それがつまり支那の專制君主政治の政治の性格なんです。それは究極に於ては自然的な原因に制約されて行くでせうが、支那が歷史時代に入つてから以來と云ふものは、さう云ふ政治的な長い傳統の爲めに、部落と云ふものが非常に內部では鞏固でありながら、横との連絡と云ふものがつかなかつたのだと思ひます。保甲などの組織は、村落が省縣等に對して税金を納めたり賦役をしたりするところの機關であつて、農民達自身の政治機關ではないのであります。さう云ふ所に例へ保甲組織等があつても横の連絡、卽ち纖維的な連絡がつかないと云ふ大きな原因があるのではないかと思ひます。其他にも理由はあるでせうけれども。

支那の秘密結社の性格

中野　横の連絡が意識的に設けられなかつたのですが、何かの形でそれが必要な場合には、秘密的な警察的なものが出來たと云ふことで、自然に秘密結社の形をとつて連絡がつけられたのですね。

高橋　官治的な縱の組織を强化せられるのに對して對抗する意味に於いて自然發生的に秘密結社が出來たと云ふ樣に見た方がよいと思ひます。

各宗教の對立の種々相

山本　先刻の宗教の 問題に一寸もどりますが、同じ東洋人でもキリスト教とか、回々と云ふものを信じて居る人は割合に理論と云ふものに對する對立があるのぢやないかと思ひます。儒教とか佛教道教と云つた樣なさう云ふものは儀禮の相違による對立があるのぢやないかと思ひます。支那の歷史上でも、儒佛道三教の間に往往對立が見られ皇帝の前に出て議論をやつたことがある。併し道教などでもその理論中には佛教思想など取込んで居るのです。つまり外の教理を入れて居るのです。それでゐて對立して居る。これから見ると理論の對立ではなくて、儀禮の對立ではないかと思ふ。併して二教だとか、景教と云ふ樣な要素から來たものを信じて居つたものには理論的なものの對立があるのではないかと思ひますが……

中野　回々教と漢民族との間の對立なんですが、それを突止めて居る間に出て來たのですが、アラーの神を信ずるから對立して居るのではないかと一見思はれるが、よく檢べて見ると、何方かといへば外面的な事情、例へば豚を食べるとか、酒を飮まないからだとか云ふ樣なことが對立の原因になるらしいと思はれたものですから……

山本　回々教は特殊なものの樣に思ひますね

村井　宗教の面に於いては、崇拜の對象が違ふためか、儀禮が違ふためか、何れが主として對立の原因になつて居るかは議論の存するところとしても何れにしろ宗教には對立があることは明白であると思ひます。それではこの對立が一つの國家に於いて容易に融解出來るものでせうか、若しこの對立が克服せられ得ないとした場合、別の生活面に於いての統一によつて、國民の結成が出來るでせうか、さういふ點について御所見はありませんか。

宗教的對立の解決

大山　相當に長い年月かも知れませんが、そ

れは日本に於いても、凡ゆる宗教が結局は天照大神に歸一し奉る樣に、相當の年月でありませうけれども、滿洲國に於いても結局は其處に落着くのでせう。國の元神として奠まりたまふた上はその御光を國民の間に浸透せしめると云ふことは一つの努めなければならぬ問題であると思ひます。共同の目標として、共同の導きの神として、天照大神の御光は、建國のイデーでもありませう。

滿洲國の建國精神

國の原理、建國の本義は此御光たる理念から生れるのではないかと思ひます。其處に各民族を歸一させると云ふこと竝にさしあたり横の連繋よりも縱の線に向つて共同組織を確立し行くべきであると云ふことであります。

宗教統一と政治的經濟的統一

高橋 回教の樣にそれ自體が政治的色彩の强いものを別にして、佛教、薩滿、道教その他のものはそうではないから、必ずしも宗教的なものの統一に據らなくても、國民編成を强化するにはもつと政治的經濟的なもので一つの統一體を作るのは可能の樣に思ひます。回教は――支那に居る回教徒はまだしもですが、イラン、イラーク、トルコ、インド地方に居る回教徒は强靱な政治的な性格を持つてゐる。これは宗教と政治と云ふものがさう切り離して考へられないが、他は必ずしも宗教的一元化と云ふことは必要でないとは思ひますが、勿論理想と原則としては結構ですが、現實の段階に於てはこの宗教一元化の急激な運動は大東亞共榮圈建設運動を反つて混亂に導く恐れがある樣な氣がします。

國民宗教と民族宗教

宮川 國家の宗教は各民族の宗教とは、次元の異つた宗教ですから、最初はその間に摩擦はあつても、國家の强烈な推進力と各民族宗教の內部で高め、淸めて行くことによつて統一は可能となると言ひ得ると思ひます。

高橋 私は宗教は回教徒以外は、餘り喧しく言はなくても政治的、經濟的なもので編成が出來ると思ひます。

漢民族の國家觀とその改造

國家と云ふものに對して漢民族の民衆は、國家は自分達のものではなくて、自分達を搾取する徵税機關である、税金を取り、又賦役を課する所の機關であると云ふ風に考へてゐる。これは長い歷史によつて形成されて來た觀念であります。そこへ急に「王道樂土」たる國家を作ると言つても、民衆の頭からは、直ぐさう云ふ考へ方が拔けるものではない。だから、これに對して國家の具體的な政治が自分達のためのものであり、具體的な經濟政策が自分達のためのものであると云ふ觀念を與へる樣な純乎たる政治をとる、又一方では精神的な諸運動を上からも、下からも、横からも浸透せしめて行くと云ふことが結局手つ取り早い、細い技術的な編成の諸方策を考へるよりも、その方が結局氣長の樣で根本的で而も早い道ではないかと思ふ。そのために矢張り一大啓蒙運動を起す必要がある。併し幾ら啓蒙運動を起した所で、實際の政治が掲げる言葉と喰違へば、どうしたつて彼等の目には國家は租税と賦役を課せられる機關としか映じなくなるから、掲げた看板には裏も表も、種も仕掛もない純粹なものでなければならぬ。

大山 一般に滿洲が半植民地的封建的と言はれ、こゝに來て居る連中が出稼ぎ根性だから良くならないのだと思ふ。その根本の問題を考へなければならぬと思ひますね。

國土と國民編成

村井 今問題にしてゐる國民編成の根據、方策といつたところを方面をかへて、こんどは宮

國民編成の問題

川先生にお願します。

宮川 私は政治地理が專門ですからその立場から……。滿洲には種々な民族が住んでゐる。民族學的に言へばいろ〳〵違ひも拾へるでせう。然し滿洲以外の土地に居る日鮮滿、滿蒙露の相異に比較すれば滿洲に居るものはお互ひ非常に近いと思ひます。滿洲の土地も同じことです。アジアにはモンスーン・アジアと乾燥アジアと、寒濕アジアとの三つの地文區があつて、これがずつと西や南の方から東北に集つて來て、その接觸複合するところが滿洲です。印度や南洋とアラビアと西シベリアとを比べたら隨分違ふが滿洲の國土の中に入つて來た場合のモンスーン型と乾燥型と寒濕型とは非常に近い。私は興安嶺と長白山脈とを境にして、內滿と外滿とに分けて居りますが、外側には今言つた樣なシベリア型、蒙古型、朝鮮型、北支型の氣候區が伸びて來て居ます。內側の方は滿洲型であつてこれは北支型の延長といはれてるで實際は可成り蒙古型、シベリア型を含んだもので、歷史的に見ても滿洲人も漢人も蒙古人も住んで居つたし、ロシヤ人も新しく入つて來たし、日本人、朝鮮人も住んで居る。さう云ふ內滿と云ふ滿洲の大部分を爲して居る一つの大きな地域が色々な民族を一つの國民に結成して行く上に適當な地盤になつて居ると思ひます。

風土の同一性と國民親和

そこで同じ風土の上に立つて居ると云ふことから、第一にお互ひの間に近隣の關係から、親しさが湧いて來る。それから土地に對しては、同じ土地から養はれて居ると云ふ土地の生產性に對する依存と云ふことから有難さと云ふものが出て來るし、それから自分も自分の子孫も或は自分の先祖もこゝで暮すのだと云ふことから懷しさが出て來る。さう云ふ親近の感情と產土といふ感情と鄕土的感情とから段々お互ひの氣持が似たものになつて來る。それに長い歷史の時間をかけると、段々色々な民族の根が近くなる。其處から自然に起つて來る一つの動きは斯う云ふことであると思ひます。風土に段々身體も心持も馴れて行くと云ふ――これを馴化と云つて居りますが――

民族同化と邦族への結成

ことが起つて來て、大陸的になつて來る。それから各民族の文化の間に同化作用が起つて來る。或る强い力を持つた文化に同化して行く。また近い所に暮して居ると云ふことから段々と種族間の融化作用、卽ち混血が段々行はれて來る。この馴化と同化と融化と云ふ働きが起つて段々近いものになつて行くと云ふ自然の傾向がある。放つて置けば段々と近いものになつて行く傾向があるが、滿洲國の場合ではそれを放つて置く譯には行かないので、建國の精神に添つて新しい理念に添つて固めて行かなければならぬ。……そこに滿洲の國土の上に各民族が共同で新しい國民文化を作り上げてゆくといふことによつて一つに固められてゆくといふ作用がある。この意志的作用を造化といつてもよいと思ひます。滿洲國では統合政治と云ふ樣なことをやるには、國土といふ地盤がそう悲觀したものではない。日本の島と云ふものはあれだけの國體を作り上げるには最もよい地盤になつて居つたが、滿洲でもこの國土の上でこれから長い年月をかけて、然も國家が强力に造化作用をやつて行けば國民を固めると云ふことが可能だと私は思ひます。

早い話が宮廷府の造營と云ふ仕事、あゝ云ふ所に各民族の青年を動員して皆が汗を流してそれを作り上げるとか、或は建國廟の勤勞奉仕と云ふ樣な體驗を通じて段々と同じ意識を持つ樣になる。然もこの事業は歷史的に長い年月を要するだけに、着眼する所は若い國民で、各民族の青年層を狙つて、それを數十年の時間を掛けてやつて行くことが肝心です。今現在滿洲國の國固めの中心になつてるのは日系ですが、これが先程大山先生が話された樣に、他の民族が土

地に根附いて親も子も此處に暮して居るのに對して、日系だけが土着して居ない。土着の肚が決つて此處で自分も自分の子供も暮すのだと云ふことになると、思想も政策も變つて來るし、土着民からも親しまれる。ほんとの中核になれる。國民編成が成功するか否かは結局日系の土着の問題に係るといつても過言ではないと思ひます。

大山 それの一つとして良い墓場を作つてやると云ふことです。日系のために……。私は年來考へて居ります。非常に荒唐無稽かも知れませんが、此處で骨を埋めてよい樣な墓場を作つて置くことは必ずやつて貰ひたいことですね。

宮川 新京郊外にも出來る樣に聞いて居りますが、もう實行して居るんぢやないですか。

山本 漢人に於いてはお墓と云ふことゝ土着と云ふ事とは違ふ樣ですね。彼等の中でも良い階級の者は凡て關內に持つて行く樣ですね。

宮川 併し二世三世ともなると餘程變つて居ると思ひますね。

高橋 餘程變つては居りますね。此方で生れて此方で墓を持つて居ると云ふ傾向がありますね。

山本 その傾向は無論ありますがそう言ふ人等は現實に土地を持つて居る人達ですよ。

大山 人々が此處に墓場を作る樣になつたら如何でせう。墓場を作るといふことは大切ですが……

宮川 それには土地を與へなければならぬ。國土計畫の聚落問題がぐんと出て來て、畑も家も與へるといふことにならなければ、此處で居附きません。

高橋 墓場の話も結構ですが、土着する爲めにはそれよりも寧ろ官吏層、サラリーマン層と云ふものは此方で官を止めても一職を止めても生活が立つ樣な一つのアトモスフエアーが出來なければならぬ。會社員を止めたり官吏を止めたりすると、始め幾らこの滿洲に埋骨すると云ふ氣持で來ても、こゝで生活する地盤がなくなるために、結局居附かれないと云ふ人がある。だから根本は我々の心構へと生活の形態を土につけたものにすること、その根本が立ちさへすれば後の問題は自然形附いて行くのだと思ふ。

東洋各民族の相近性

中野 さきほど東洋では各民族が割に近いと云ふお話がありましたが私も實際さうだと思ひます。ヨーロッパを一括して考へ、それに東洋を一括して較べると近い側面がでてきます。私は先刻生活文化の對立と云つたのは、東洋だけの中でと云ふ意味なんです。

高橋 生活文化の方から云へば、支那の方も横と横の連絡は歐洲とは劣るものではないと思ひますね。儒教、道教その他共通の文化と云ふものに根ざして支那の生活文化は北方も中部も南方も可成接觸して居る。

中野 ヨーロッパに對立がなかつたと云ふのではなくて、對立を貫いて居る聯關が割合にはつきりして居ると云つたんです。

東洋の場合には東洋だけをみるとその中での區別の面が强く浮んでくる。だから區別があつた場合にどうして行くかと云ふのに、東洋を一括してヨーロッパに對照してみると近いものがあると云ふ、その意識を東洋の人々の間に植附けると云ふことが必要であると思ひます。啓蒙運動を具體的に行つて行く場合に、東洋の多くの民族は世界全體への着眼が乏しいので、さう云ふ所に目を附けさせれば、東洋に於ける相違からくる不統一感が消えて行くと思ひますね。それから又東洋全體がよしその中で細かな差異があつたにせよ、西洋から共同に侵略されて居つたと云ふ共通の運命を徹底的に自覺させるといふことも考へられますね。

宿緣共同體の觀念

高橋 宿緣共同體と云ふ觀念、つまり緣を共にして居ると云ふ觀念ですね。

大山 啓蒙運動と言へば、それは先づ青年層に向けるべきである。

民族學としての新課題

宮川 今は青年運動はやつて居りますよ。ところで、啓蒙運動としては民族學の方に註文があるんです。從來は近代的學者の風として個性とか特殊性とか相異點にだけ目をつけて、それを學問の主なる內容として居つたが、この同類だといふ點を——つまり同じ緣のある所を取り上げて貰ひたいと云ふことです。民族協和の民族的基盤ですね、また高橋君が書いてる樣に、滿洲の諸民族は過去に於ては抗爭をつづけて來たが、どうしても鬪爭をやめて協和して行かなければならぬと云ふ理由を敎へることゝ、その上に新しい時代の展開と世界の大勢を敎へて、青年の頭を作り上げて行くと云ふことが大事です。私は國土の問題も國民を結成してゆく地盤が出來てゐるといふ風に解釋をして敎へて居りますが。

村井 蒙古青年の敎育と云ふ樣な問題も併せて、山本先生、滿洲國國民編成に於ける蒙古民族の地位と云ふ問題について御話願へませんか。

滿洲國國民編成と蒙古族

山本 蒙古民族を中心にして申しますと、蒙古人自身が昔からの歷史的な宿緣で、どうしても漢民族と合はない、若し又蒙古民族の團結といふことになると他の地域の蒙古人とも一緒にならなければならぬ、さう云ふ感情が强い樣です。若し團結してと云つたら他の國の蒙古人とも一緒になり度い、ならなければならぬと云ふ樣なことが、一番大きな難しい問題だと思ひます。

國民編成に於ける民族的と地域的との關係

宮川 興安蒙古が、地理的にどうしても滿洲國に入らなければならぬと云ふことを言ふより他に仕樣がない、民族的には大蒙古で行きたいだらうが、滿洲の國を地理上から見て、現在の樣な形で興安嶺、ホロンバイルを此方に含んだものでないと工合が悪い……沿海洲やシベリヤの問題も併行して考へられるが、これも資源や民族の問題ではなくて、地理的位置の問題です。それが國防に關係して來る譯です。一つの國を作る時には國土の問題があると思ひますね。この點は分割される蒙古人にはどうも納得行き兼ねるかもしれません。然し朝鮮人や漢人でも同じことですし內地人が島國から此方に來て永住せねばならんと云ふ場合でも同じ樣に、割り切れないものがあると思ひますね。

山本 蒙古人はまた土地には愛着を持つて居ない民族で、民族的な感情によつて結ばれて行く民族ですからね。

高橋 蒙古族は宗敎的な生活文化的なもので結びつくものであるから、東亞の他の諸民族と運命を共同にしてゐると云ふ敎育、それも次代の敎育がどうしても必要である。

宮川 滿洲に居るものは皆本國を隣りに持つて居る、だから此處に本國を打立てる爲めには皆がそれぞれ割切れないもの を感ずるのである。

各民族の共同植民地

高橋 東亞諸民族の共同の植民地であると云ふ觀念を持つて能く說いて居る人達があるが、近代流の考へ方から言ふとそれは植民地と云ふものが搾取とか帝國主義の侵略的な結果と云ふことになるが、さう云ふ意味ではなくて、もつと新しい面から歷史的に見て來た場合に、東亞諸民族が鬪爭して來たのを克服して、即ち諸民族の對立地帶を克服して、皆が安住する——各民族が即ち朝鮮民族でも、大和民族でも故國を持つて居る、漢民族にしても故國を持つて居り、蒙古民族も持つて居ると云ふ意味での植民地であつて、帝國主義の對象としての概念ではなく、自然的發展の概念での植民地と云ふ意味なら私も贊成です。

歴史的に言つてもさう云ふことが言ひ得ると思ひます。これをずつと遡つて行くと、滿洲は滿洲民族のもの丈とは言へない。東北部及び東部滿洲は大體ツングースの故地と見てよいが、西部滿洲は蒙古人、ツングースの混血種の故地南方は朝鮮とツングース、渤海灣地帶には早くから漢民族が入つて來て居るが、これもツングースが早いか漢民族が早いか疑問がある。又その各々が相對的安定を保つてゐる時期に於ても必ずその中核になる民族がある。契丹民族が中核となつた事もあり、又女眞民族がヘゲモニーを執つたこともある。漢民族がヘゲモニーを執つたこともある。此處に來て居ないのは韓族だけである。併しこの民族はツングースと融合して今の樣な朝鮮民族になつて來て、東南滿洲に自然的發展をしてゐる。後に來たロシヤ、日本は近世の要素であるが、皆故國を持つた者同志が集つて、對立を克服して國を作ると云ふ意味なのであつて、植民地と云ふ言葉で表現するのは誤解を受けるが……

山本　滿洲と云ふ所は土地を中心に考へた方が善い樣ですね。今宮川先生が言はれた樣にこれだけの土地が滿洲國であると云ふことにして。――民族を建前にして行くと云ふと色々な問題が起る。國土を基にすると云ふと誰が先に入つたと云ふ樣なことがなくなる。

村井　大分、皆さんよいお話になりましたが、こゝらで瀧川先生何か御教へ願へませんでせうか。

瀧川　大變皆さんよい御意見を吐かれて何れも御尤だと思つて居ります。滿洲國の歴史を書かうと云ふ時に、日本ならば大和民族を中心に書くが、滿洲では地域的にその中に入つて來た民族の活動を書くより外に仕樣がない。宮川先生が言はれる樣に地域的なことを强調すると云ふ點御尤と思ひます。一番大切な問題は大和民族と漢民族との協和と云ふことであります。これは調和的日本人の長い努力によつて巧く行くと思ひますが、所が漢民族と蒙古民族との融和と云ふことは絶對不可能とは言へないでせうけれども、とにかく千年二千年の間お互ひに仇同志になつて居たものを、此處で纏めて行かうと云ふのは餘程困難な問題であると思ひます。此間建國の座談會で興安省の參事官の人が大分見えたので、色々蒙古人の問題を伺ひましたけれども、仲々むつかしい事情があります。一つの民族が一つの國家を作つて行く、それには家族制度と云ふものを基にするとか、或は宗教的なものを基にして團結を固めると云ふ樣なことは色々ありますけれども、異つた民族同志の間に結びをつないで行かうと云ふのはこれは仲々難しいので、さう云ふ國家は從來餘り歴史上例がない。

契丹の民族協和的國家體制

あるとすれば私は契丹位のものかと思ひます。契丹は始めは―終ひには何ですけれども―始めの時には二重の體制を取つて居りまして、契丹民族は契丹固有の部族の制度で組織を作つて行き、それから漢人は漢人固有の、つまり郡縣の制度を布いて治める。官制も最高行政官廳たる樞密院を南と北の兩樞密院にして、さう云ふ樣な體制を取つて治つて來た。此處ではさう云ふ樣なこの五重體制でも取つてさうして當分の間やつて行くと云ふことも一つの方法でせう。今度民法を起草するに當つて、矢張り五族に共通した民法と云ふ樣なことになると實際出來ないことです。大體の共通點を取つて一般的規定を作り、さうして皆夫々逃げ道を作つてあります。即ち當分の間何々の事は日本人は日本の民法によつてやるとか、何々の場合は別に蒙古人の間に特殊の慣習があればそれに從つてやると云ふ樣に皆逃げ道が作つてあります。結局五重體制の樣なものを取つて居ます。當分の間はそれより他に仕方がなからうと思ひます。勿論それで滿足すべきではなくて、矢張り一元的なものを目標にして進まなければならぬと思

ひますね。

高橋　その場合に生活形態の一樣化がなければ完全な一元化が出來ないと思ひますね。

瀧川　それから宗教の一元化、これは五代六代すれば一元化出來る樣になると思ふ。それから先刻宮川さんがおつしやつた樣な、宮廷府の御造營をするのに各民族が極邊境からでも勞働奉仕に繰出すと云ふことによつて、國家意識を持たせる樣にと云ふことも必要であると思ひます。

支那朝廷の宮殿造營

さう云ふことは支那の朝廷ではやつて居つた。北京の宮殿に布いてある大理石は、雲南から持つて來た。あの近くにもあるが、近くの大理石を持つて來たんでは面白くないので、帝王の威力を示すと云ふ意味で、雲南から持つて來る。さう云ふものがエンヤラ〳〵と石を運ぶことによつて人民は皇帝とのつながりを感ずる。昔はそれが一つの政治だつたと思ひますね。時代は違ひイデオロギーは違ひますが、國家を實感させることをやらなければならぬと思ひますね。唯國民編成の運動は珍らしくも何でもないが、さう云ふ異民族の集つた國家に於ける國民編成は本當に契丹位しか前例がないと思ひますね。

元でも清朝でも異民族の集合より成つた國家でありますけれども、國民編成といふことで參考になるのは遼くらゐのものしかないと思ひますね。

山本　清朝は異民族に對して恩威竝び行つただけで、編成と云ふ樣なこと迄考へたのですか。

瀧川　清朝は漢民族の家に婿養子に行つた樣なものですね。その點民族意識のしつかりしたのは契丹だけであつたと思ひますね。これも人數が少いものですから、しまひには漢化して終つた樣ですがね。多少とも參考するに足るものといへば契丹位のものではないでせうかね。要するに時間を長くかけなければ不可能ですね。これが若し簡單に行く樣なものならば日本の國も有難くないわけです。

日本は二千六百年の歴史をもつてゐるので今日のやうな立派な國家になつたのです、これは一朝一夕で眞似が出來る樣なものではないのです。當面の方法としては契丹の二重組織の樣に、複合的な方法でやつて行くより他に仕樣がないと思ひますが、理想としては、單一なものにする樣に努めなければならないと思ひます。又大山さんの言はれる墓を作るといふやうなことは突飛でも何でもない。死を安んずるは生を安んずる所以であります。

蘇州義園

支那の會館には義園と云ふものが附屬してゐます、即ち蘇州會館と云ふものがあれば、蘇州義園と云ふものが附屬してゐる、故鄕を遠く離れた北京で働いて死に、誰も棺桶の引取り人もゐない場合には、蘇州の人がそれを引取つて義園に葬つてゐます。斯ういふ所があるので蘇州の人は思ふ存分北京で働けるのであります。滿洲にきてゐる日本人の爲めに墓場を作り永久に眠る土地を與へてやらなければならぬと思ひます。大體皆樣の考へられてゐる見當はよいと思ひます、さう云ふことを皆で考へればよいのですよ。さうして縱横十文字に、中野さんの言はれる樣に、横の色々な連絡が宗教の面からも、職業の面からも、同業組合の樣なものが出來て居れば、宗教團體も出來ると云ふ樣なことでそれが長い間蓄積されて大きな日本國民の樣な、又日本國の樣な立派な國民編成が出來るのではないかと思ひますね。

山本　時間と教育の問題ですね。明治以後の教育がそのよき例であり、支那の三民主義も徹底した教育にあつたと思ひます。

高橋　支那でも新生活運動以來の支那と云ふものは違つて來て居る。

瀧川　人間の頭は非常に變るものです。私が

支那に旅行したのは大正五六年頃でしたが、その時は決して排日思想なんと云ふものは全然なかつたですね。

アメリカの民族問題

中野 アメリカなども民族の問題は、滿洲程複雜ではないけれども、その間から統一的なアメリカ國民が出來上つたのには、映畫が非常に與つて力があつたと云ふ事ですが大事な事ですね。良い映畫を作つてそれで統一的な模範的な生活樣式を敎へてやり地方的な人種的な相違を無くしてゆく事も一つの手近な方法ですね。

大山 敎化機關としては、新聞、雜誌。ラジオですが、敎化の擴充といふ上から滿洲國に於ける敎育者一般、特に普通敎育に從事する人の待遇は改善する必要がありますね。

國民組織の三大課題

村 色々皆さん方から伺ひましたところによつて滿洲國內外の歷史的、民族的、地理的方面からの構造が非常に複雜であると云ふことについては非常に敎へられるところがありました。國民編成と云ふ概念が國民組織とか國民再組織と云ふ樣な言葉と同じ樣な意味を持つて居ると前定致しますと洋の東西に於て諸國家が、何が故にこの國民編成を必要とするに至つたかと云ふことを考へて見なければならぬ。この國民組織に對して近衞さんの聲明によると「是非ともこれだけ包含して處理して欲しい」と云ふ問題が三つ提供されてゐる、それは御承知の通りに、統帥と國務との調和、それから政府各部內の統合とその能率の增進、それから翼贊議會の確立であります。隨つて何等かの意味に於いてこれらの三問題に觸れて、これらの問題を解決することの出來る國民編成でなければならぬと思ひます。國民組織の問題を考へられるに至つた政治的な原因と云ふものは私は日本に於いては政黨が解消したので、議會制度を通して國民が國家機構に結ばれて居つた從來の連鎖が一應切れた樣に思はれた。それで再び國民の組織と國家の機構に結び附けて行く必要性の認識が政治の面に於ける國民編成の動機とみなければならぬ。他面に於いてドイツ等が何によつてあの戰捷を獲得し得たか。更にドイツなどがヨーロッパ新秩序圈を建設して行く場合に、ドイツの國內政治に於て國內體制のどこが其の建設力となつてゐるか、斯う云ふ所を見極めたい希望が、國民編成の問題を國民としても政府としても本當に考へ出した根本の原因ではないかと思ひます。單的に言へば土豪劣紳とか財閥に集つて居つた國家の生產力を一應出來るだけ國家機構の方面に向けたい。卽ち國家は平時に於いても戰時の準備をなし國家總力體制をとり、戰爭や事變が起れば、何時でも外敵を破り、戰ひつゝ同時に廣域經濟を建設し得る樣な國內體制をとらなければならぬと云ふところに國民編成が持出されて來たと考へられる。斯う考へると云ふと滿洲の國民編成問題は國內だけの事情からだけではなくて、國外政治から國內政治を見直さなければならぬ。隨つて國防國家に於ける問題は民族とか土地とか歷史とか云ふ樣な面からのみ出發すべきものではなくて、滿洲國の國土の周邊に於ける國際危機と云ふ條件が國內體制を特徵づけると見なければならぬ樣に私は前から思つて居ります。

國民編成と國際危機

さう云ふ風に考へると、國民を編成して行く所の根本の考へは私は滿洲の土地ではなくして多數民族が集つて外敵侵入を防衞しなければ滿洲のこの土地に於ける諸民族が生存してゆけぬ。現代戰に於ては原住民族だけの力では或は滅亡するかも知れないと云ふ觀點から防衞力に對して運命協同體の地位に立つて居ると云ふことが國民編成を現在强調しなければならぬ大きな原因と思ひます。

もう一つの問題としては民族と民族との協和の面は純粹な形から言へば異れる血と異れる血

との關係と思ひますが。

國民編成と職能組織

これを平面的對立的二元に於いて捉へる場合には其解決は困難であるが、これに職といふもう一つの元を入れることによつて、血と血の二元關係を血と職と血との三元關係の融合を考へる時に其處に民族協和の理論的な着眼點が出て來るのではないかと思ひます。具體的に言へば、民族複合狀態を國民的全一體的組織にするには國民的職能組織によらねばならぬと思ふ、職能組織の問題に入つて行くのは複雜でありますが、簡單に言つて、經濟組織に於て各民族としても各個人としても其環境とか才能に應じてそれ〴〵の職分に就き其職分に安住することを通じて、組織的に各民族各個人が夫々所を得て渾然たる國民編成の結果を擧げるといふことです。この職能組織を通すと協和會組織と云ふものが、國內に於ける政治機關として重要な活力を持つて來て、これが政府の眞の裏の機關となると共に、國民の隅々に迄、それ〴〵組織をもち、其處に上意の下達と下情の上通が生きて行はれる樣になると思ひます。

村井 今、村先生から國民編成について大變適切な話がありましたが、さう云ふことについてまた、別な面からお考へがあればどうぞ。

宮川 私は對外的な防衞の面を取上げて國民結成の契機とすると云ふことには同感ですが、たゞその場合は文化の進んだ日本やドイツの場合は全國民をこの問題で動員出來ますが、滿洲國に於いては一部のインテリ層だけは之を對外問題に向けることが出來ても、大部分の農民は無知識無關心だといふことです。それには二面的な政策をやつて行かなければならぬと思ひます。

國家問題に對する滿洲國農民層の無關心性

何れにしても大部分の農民層と、少青年層とに對して二面的政策を採つて行かなければならぬと云ふ所に滿洲の違つた點があると思ひますね。

村井 どうですか一般は無關心ですか。

山本 大部分は無關心の樣ですね。

宮川 討匪工作が段々役割を果して、後は政治的なものになり、厚生政治が取上げられ、民衆の生活を樂にする方に力を入れて貰へれば、農民に對する工作が大いにやりよくなつて行くと思ひます。また上層や青少年には啓蒙運動を大いにやりそれを倂せてゆくと國民編成もらくになりますが、それには長い時間でじつくりやる必要があると思ひます。

厚生政治と國防目的

村 私は國防國家の要請に應じて國民編成を考へて行かなければならぬと思つて居ります。滿洲國に於ては現在防衞の方の要求と云ふものが、王道政治の領域にどん〳〵入つて來て、王道政治に於て當然なさるべき厚生政治施設が蠶食されて行く、王道政治工作が完了して後に防衞國家の要求が入つて來ればよかつたけれどもさうではなくて、王道政治の幟を掲げてまだ緖に就いたばかりで滿洲國はいきなり國際危機に入つたので、玆に滿洲國の國民編成は自然的敎化的な發達を待つことが出來ずして、政治政策的に國民編成をやらなければならぬ樣になつて來たと思ひます。今迄の皆さん方の御意見は時間と敎育の力によつてその成果を待つべきであると云ふ議論でありましたが、當然それには數十年、長くは數百年の年月が必要であると思ふが、滿洲國が今當面する問題はそれ位の時間をかける餘裕がない、極めて短い年月に於いて何等かの方法で國際危機を通り拔ける國內體制を取らなければならぬ。それは自然的發達からみて無理であるが、どうしても實現しなければならぬ。玆に滿洲の國民編成の難しい所がある。勢ひ滿洲國民編成としては國內外の防衞と民族の協和問題を時に考へなければならぬ。防衞の

絶對性は國政の全面に大きな影響を與へないでおかない。さうした國防と云ふ制約が王道政治の中に、又民族協和の中に又經濟組織の中に現はれて來る。政府内部の問題としてはこれは結局官界の新體制とか官僚問題とかになる。滿洲に於いては協和會組織がなんといつても國民編成の中核體とならねばならぬ共榮圏内の國家の政府は國外に對し例へば、防衞とか外交とか實域經濟といふところに其主力を注ぐ。將來國内問題の政治的企畫には協和會が中心になつて進んで行かなければならぬと考へるのであります。これ位の問題を一應問題として加へ込まないと云ふと、國民編成の問題の焦點が一寸ぼやけて來るのではないかと思ひます。

協和會の危機

大山 それと關聯するが、協和會が國内政治に當ると云ふ以上は、客觀的な立場から言ふと協和會が一奮發しなければならぬと云ふことが問題になると思ひます。

高橋 もつと根本的な問題は協和會と云ふものゝ國家的地位と云ふものが、政府よりも或る意味に於いて、現實に於いて、何等かの意味に於いて弱い、さう云ふ所から、色々協和會の無力からして集る人も自然に質的な低下を齎すと云ふこともあり得るのであつて、根本は、協和會のメンバーをよくしなければならぬと云ふことも事實であるけれども、もつと國家的な立場から協和會を如何にするか、政府に對して如何なる地位を持たせるか、表面上の言葉だけではなくして、現實に如何なる力を與へ得るかと云ふ現實問題が解決されなければ駄目であると思ひます。大政翼贊會にしても、國家的地位の問題からして色々な議論が起るのであつて、協和會でも政府との關係さへはつきりして來れば、協和會のメンバーの質的低下はあり得ないと思ひます。さう云ふ問題を解決さへすれば質的低下の問題は自然に解決すると思ふ。

國民編成の中核體の確立

宮川 少し結論めいて來ますが、國民編成にしろ政策の遂行にしろ國民を結成して行く上には中核體が要る、難しく云ふと自律共同層ですが、これは日本人だけではなくて、他の民族出身者にもこの中核體に入つて來なければならぬ。現在それを養成して居るのが建國大學で、學生が卒業し各民族の出身者がそれ〴〵の民族を率ゐ、而も共同して行く所に國民編成の實が擧る、其處に建國大學の使命があると考へる。

村井 時間も大分たちましたし、大體方向も明確になつたと思ひますから、一應締括りをしたいと思ひます。

要するに國民を如何に組織し直すべきであるかと云ふ問題は目下の滿洲國として非常に重大問題であるが、滿洲國が民族複合國家であり、各種の生活要素が多元的に出て來てゐる國家であるがため、色々各方面に難しい解決の困難な問題がある。併し乍らそれは或は地理學的な見地からすれば、國土の共同といふことから或は民族その他の方面の立場からするならば、文化の相互浸透を圖つてゆくといふことから、其處に解決の契機が見出だされ、或は又政治の方面に於いては、基底的構造、上層的構造の兩方面に亙つて、其處に「職能」的結成といつた新しい契機が見出されると云ふこと等を一わたり伺つて參つたのであります。そして、そこには當面の問題として是非急速にやらなければならぬものと、それから更に根本的に恆久的な問題として考へねばならぬものと二つがあると云ふことも大體明かになつた樣に思ひます。恆久策としては固より教育教化を徹底せしめ一つの邦族として共同の運命に立つて居ると云ふ意識を各民族の間に強く植附させる、この土地を愛し、この土地の上に共同の生活を築いて行くと云ふ樣に「土」に卽した所の生活の實態を打ち建てて行く、政治の方向を其處に持つて行くと云ふ樣に考へられるのであります。

この國際危局に立つて當面の緊急事として要求されて居る所のこの國民編成につきましては鋭意その根據をたづね、又根據を與へてとにかく應急の處置を講じなければならぬわけであります。それには非常に高度の政治的經濟的な判斷と强力なる實踐力とを必要とするわけでありまして、國民の結成團體として協和會を考へるにしても、それと國家との結び附き、それから又國家の政治に於ける政府と協和會との分擔の再檢討を必要とするといふ風なことが、大體の結論として出て來た譯であります。さう致しまして國民結成の中核體の確立については各民族の代表的な人物が出て、其處に强き基礎を積み重ねて行くと云ふことを我々は念願もし又現にその方向に努力しつゝある。斯う云ふことになつたかと思ひます。

以上の諸點を更に具體的にどう打ち出すかと云ふ樣に問題を進めますと、尙ほ色々の對策が出てくるのでありますが時間が遙かに豫定を越しましたので、本夕の話はこれ位で打切りたいと思ひます。

小原 どうもありがたうございました。

（文責在記者）

卸商

煙草・酒・飲料水・食料品

化粧品・石鹼・諸雜貨

滿泰洋行

新京中央通り一六番地

電話長③三三五一・③四三四四・③五一五一・③六九二七

電略シンキヨウマンタイ

振替新京六〇番

支店

大連市吉野町二二

天津日本租界花園町二七

北京地安門西板橋大街三五

濟南市二馬路青年會館西

兵隊の持場

佐藤観次郎

一

私にはこんな面白い經驗がある。九江に駐留してゐた頃である。當時衣糧廠にゐた三宅少尉から「內地から冷凍魚が着いた。君の部隊も南昌へ出發するといふから一つ甘いものをあげよう」といふ。久しく魚にも餓ゑてゐたので、しめたと思ひ小宮軍曹をつれて自動車で出掛けた。三宅少尉の好意で蝦一梱、鰯二梱を貰ふことになつた。私が話をしてゐると、間もなく小宮軍曹があわてて

「主計殿、大變なことをやりました。なんとも申譯ないことをしでかしました。……」

ほうほうの態で平あやまりをする。何をしたんかときくと、

「いや、とんでもない事で申譯ありません。船から自動車へ泉上等兵とあげてゐる中に一番大事な蝦の一梱をとられてしまひました。なんとも……」

「ええ、折角賴んだ虎の子を。炊事班長が出陣祝ひに天ぷらにするといつて、油まで沸かして待つてゐるのに…そりや困つたことをしたなあ」

と、あいた口がふさがらず、笑つてしまふより他なかつた。

小宮軍曹は、盛岡で大きな紙屋の主人をやつてゐる男であつた。入隊以來、部隊長にも信任が厚く、同僚にも誠にうけがよかつた。中隊にゐた兵隊だつたが本部で勤務させ、公平を要する給與掛に命ぜられた。年輩も相當だつたし、物に對する分別もあり、下士官としては誠に優秀なものだつたので凡て信用してゐた。この出陣といふのに甚だ意に滿たない所もあつたが、

「だつてをかしいよ。三梱を二人で積むのなら、先づ一梱を泉上等兵にかつがせ、殘つたのを一つづつ持つてくるのが立前ぢやないか。しかも一番始めに鰯を二つかついで、大事な蝦を殘しておいたのが、この不覺だつたと思ふなあ、僕はお前だから、まさかこんな手ぬかりがあらうとは思はなかつた。無論盜んでゆく野郎は惡い。しかしこの戰地で盜まれる事位考へないのは、甚だ迂闊ぢやないかと思ふ……」

「全く辯解の仕樣がありません。なんとも申譯ありません。まさか盜まれるとは夢にも……」

「そらさうだらう。僕もそれだけ注意しなかつたのが惡い。兵隊は蝦の天ぷらだと待つてゐたやうだが、貰へなかつたことにしてなだめるさ」

「そんなにさせていただきます。今後注意しますからお宥し下さい…」

といふ。平素から勸勉な小宮であつたから、これ以上咎める必要もなかつた。

この小宮軍曹の場合にもさうであるが、凡て軍隊には階級があつて責任の所在が明にされてゐる。將校には將校として、下士官は下士官としての責任と役目が決つてゐる。年の若い分隊長でも年長の兵隊を指揮しなければならぬ。召集された兵隊の中には、會社の重役もあれば、問屋の若主人もゐる。その種々雜多の職業が渾然と一體になつて結合してゐるのが、日本の軍隊である。それは嚴然たる階級によつて統御されてゐるのである。僕が小宮軍曹に對して考へてゐたことは、相當分別盛りの男であり、紙屋の主人をしてゐるといふことを過大に評價した錯覺であつた。彼も僕が一緒に來てゐなかつたら恐らくこんな過失は冒さなかつたかも知れない。

これは、作戰に大影響を及ぼすやうな問題でもなかつたが、指揮官の責任といふものは場合によつて非常に責任の偉大であることを考へざるを得なかつた。

二

それは、襄東作戰を終へて吾が部隊が應城に駐留し、安陸へ軍需品輸送をしてゐた時であつた。朝早く、安陸から電話があつて、吾が渡邊隊が敵に襲擊されてゐるといふ急報である。部隊長は、この隊が一度も敵と交戰したことがないのでいたく心配された。よく調べて見ると相當の敵が來襲し、しかも渡邊隊長がこの日、出動してゐない事が解つた。部隊長は、たいした損害のない事もわかつたが、部隊本部にじつとゐたたまらず、早速一個分隊の警備兵をつれて、現場へ赴かれた。その頃は、この街道は餘り敵も出なかつたのでこの日、渡邊隊長も左程に思はず、小隊長を代理に出したのであつた。都合の惡い時は仕方のないもので、小隊長は負傷するし、兵三名の重傷者があり、相當こちらも苦戰した。幸に部隊には一名の戰死者もなかつたが、同乘した渡邊軍醫大尉は銃彈のために即死された。この渡邊大尉は、この出動の先頭にたつた貨車の助手臺に乘り合はせた。敵は山嶺の中から、部隊の行動を見屆け猛射したのだからたまらない。その一彈が操縦手の隣りにゐた渡邊大尉のこめかみに命中した。操縦手は反輪する餘裕のないことを知つたので、六七十粁の急速力で前方へ推進した。夢中であつたらう、隣りの渡邊大尉の倒れる頭がハンドルを握つてゐる左手にふれたからたまらない。貨車はもんどりをうつて、この街道から眞逆さまに顚覆した。車諸共に田圃のクリークへ乘つてゐた十數人の兵隊が落ち込んだ。狙はれてゐた自動車も、この顚覆のお蔭で猛射を免れた。しかもかすり傷一つもうけなくつて、皆無事だつた。誠に妙な話で、この場合もさうであつたが、貨車を操縦してゐる兵隊には滅多に彈丸は中るものでない。隣りの助手臺に乘つてゐるのが、こんな場合よく即死してゐる。これは、敵が恐らく操縦者を

狙つてゐるだらうが、脇目にもふれないで緊張してゐるので、仲々彈丸が中らないのかも知れない。これは餘談になつたが、この渡邊隊の不測の襲撃は、色々な示唆を與へた。戰場に於ては絶對に油斷のならぬこと、責任のある將校が必ず出動せねばならぬことなど色々なことが體驗された。

總して部隊運行には、各自の役目があつて、聯隊長にはその聯隊の長としての責任があり、小は分隊長に至るまで部下をもつてゐる者の責任がある。それは責任の所在が一であつて、決して二でない。戰爭は絶對面にたつてゐるのだ。一度あつて、二度あることを期待することは出來ない。チャンスは一度しかない。その瞬間を最善に利用せねばならぬ。それには、各自の持場を死守する以外に何にものもない。しかも軍隊に於ては、地方における如何なる履歷が物をいふのでない。軍隊における現在の立場こそ、尊重すべきである。小宮軍曹の小さい事故についても僕自身が彼を軍曹として取扱つたら過誤がなかつた筈である。「君も紙屋の主人だからまさかそんなへまはやるまい……」と思つた所に私の錯覺があり、部隊としては軍曹の資格に於て取扱ふべきであると思つた。恐らく兵隊の場合にしてもそんなに考へてゐるのであらう。將校がゐられるから安心だ、大丈夫だと思つてゐるのだらう。時々ひどい行動の場合小休止をしてゐる時でも、兵隊は疲勞し切つてゐるので、如何に前面に敵がゐても、すぐ子供のやうにすや〳〵と寢てしまふこともある。まさか間違つたら大變だが、この兵隊達は指揮官や將校を信頼し、その部隊に安心立命の氣持を持つて休んでしまふのである。この事は兵隊達が凡て上官を信じての安易な氣持からである。從つて、命ぜられた歩哨や衞兵がその部署を充分に看視する必要があるのだ。そこに寸分の間隙があつてはならぬ。そこに日本軍隊の透徹した一線がある筈である。

三

最近のニュース映畫の中で、最も感動をうけたのは、メナド攻略の落下傘部隊である。これは勿論日本の最初のことであり、その劇的であつたといふことも銘記しなければならぬが、あの死生の巷にあつて、各自の持場を固守して、しかも從容としてゐることである。五、六百米の高度から落下する兵隊の氣持、底知れぬ敵がゐる渦中へ突入する氣持、悲壯といはずして何んぞやと思ふ。古來如何なる勇壯な戰爭と雖も、このやうな凄壯な氣概はないであらう。單にそればかりでない この兵隊を落下させる航空操縦士の心境、母の陣痛に勝る以上の苦惱があらう。「よくやつてくれた! 俺は降りて行つて戰つてくるよ」と無言の中に下降するのであらうか。「おい大事に落下して行けよ。無事に着いて活躍してこいよ。必ずあとから又援軍をつれてくるから、安心して潔よく降りて行つてくれ」こんな氣持で、あの機體から落下させるのであらう。落ちて行く兵隊の悲壯、降ろして行く操縦士の氣休めの心、各自の持場を果たして大きな仕事を成し遂げる姿こそ、これ以上の美觀はないと思つた。僕は、この落下傘部隊の映畫を見てゐると、涙が出て恥しい位であつた。

このメナド攻略は、豫想外の大成功で、一人の犧牲者もなかつたが、あの高度から降りてゆく兵隊達の役目は、近代戰に於ける花形であらう。それだけに人間の生命力を驅使してゐるともいへる。當事者になつて見なければ、地形とか天候といふものかゞこの大難事業の成果に如何に影響するかはわからないが、スクリーンに出てくるこの落下傘は誠に綺麗なものであり、裕々としたものであつた。若し地上に數丁の機關銃があつたならば、その損害は推して知るべきであらう。私はこの攻略の成功を只單に賞讃しやうといふのでない。この一つの動作の中に、國に奉じた兵隊の複雜微妙な心境がよく窺知出來たからである。戰爭はスポーツでない。只單なる修養道場でもない。死か生かの絶對面に對峙するのである。ここには虚僞が封ぜられ、凡ゆる眞實が露呈されてゐるのである。その絶對の境地の中で、各員の役目を忠實に實行するのである。若し落下傘の飛行高度の高さに一つの狂ひがあつたり、速度に不規則があつたら下降する兵隊は難澁をきはめるのである。またそれが爲に大きな事故となるであらう。寸分の隙があつても、この決行には支障を來すのである。それだけ、各部署の役目といふものが重要になつてくるのである。

されば「戰陣訓」にも責任について、

任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業一務忽せにせず、心魂を傾注して一切の手段を盡くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。

責任を重んずる者、是眞に戰場に於ける最大の勇者なり。

と適切にいつてゐるのである。戰爭が複雜化して行く毎に、各自の責任は一層重要となり、その職分に精魂を捧げねばならぬ。

ドイツの落下傘部隊にそれ程感激をもたなかつた自分が、この最初の攻略戰に以上の強い感動をうけたのはなに故であらう？これは映畫に出てくる人々が同胞であるといふばかりでない。こゝには前者に比して更に飾らない眞實が露はれてゐたからである。この眞實以上に強いものがあらうか。僕はこの情況を回想して　幾多の美しい聯想を回顧したのである。偉なる哉！人間の研讚と努力の賜物は。………

四

兵隊の持場が重要なことは、それが勝敗を一瞬に決定する場合に遭遇するからである。斥候にしても、傳令にしてもこの役目を果さなければ、その結果から生まれて來るものがないからである。從つて、その與へられた持場については、如何なる環境にあつても、必ず成し遂げればならぬ。若しそれが行はれねば、部隊の死命を制せられ、その報告が次の作戰に決定的な要因を作るからである。從つて上官も重要な傳令にはその人柄に信頼をおかねばならぬのだ。

丁度南昌攻略戰に、臨口街附近で不意の夜襲をうけた時である。泥濘膝を沒し、部隊本部と後方との距離がうんと離れて、連絡に事缺いでゐた最中である。夜の九時頃襲擊されて交戰し、後方の損害程度が判らないので、部隊長は石井軍曹を傳令として現場へ連絡に出された。始めての土地であり、山が幾重にも重なつて道が迂廻してゐたので、どれ位離れ

てゐるかわからない。後方からの遞傳によると、距離五、六百米の後方に敵襲ありといふのだ。砲彈の音や迫擊砲の炸裂する火花を見ると、ほんの近くにあるやうに思はれた。石井軍曹は一走りの積りで出かけて行つたが仲々歸つて來ない。本部の方では「どうしたんだらうか？歸りがおそいがどうしたらう……」と色々と心配してゐた。もの丶三時間位もたつて、石井軍曹はやつと歸つて、現場を逐次報告した。それを終つてホットした顏で僕に向つて、

「主計殿、全く驚きました。私はせい〴〵五、六百米、遠くて一粁位と思つて出て行きました。それがこの隊伍から相當離れて隨分歩きましたが仲々現場が見あたらないのです。相當行つてから色々と考へましたよ。……」

緊張した顏をしていふので

「どうした。それから……」

と尋ねると

「前に想像したのと違つて、あの眞暗の中をひた走りに走つても仲々現場へはつかない。時間から考へても、少くも二粁は歩きました。あの靜かな山間ですから、屹度敗殘兵がゐるだらう。大體の想像で部隊長に報告しても、さう見當の外れた報告にはなるまい。こんな所で案外やられるのかも知れないと思ふと、正直寂しくなりましたよ。餘り見當が違ふので引返さうかとも思ひました。ええ……」

「それでどうした」

「その時、もう一度考へ直しました。こゝで歸つて行つては部隊長に嘘の報告をしなければならぬ。目算の違つたのは自分が惡い。いくら遠くたつて現場へ行かなければ使命は果せない。もうこれで最後かも知れぬ—ただ鐵砲を一挺持つてゐる自分一人だけでは或はやられるのかも知れない。よしやられても仕方がない。命令を守つて戰死してもそれは運命だ何んでも出てこい。私は目的を完全に果さうと、もう一度バンドをしめ直し、銃を握りしめて歩き出しました。それから妙に氣が落着き度胸が出來て足なども輕くなりました。敗殘兵が來たらこの一發でたゝきなほしてやるといふ勇氣が出ました。相當それからありましたが現場へ行つてそのありのまゝを報告しましたが、流石に使命を達成して氣持がせいぜいしました。もうあの時は正直駄目だと思ひましたよ……」

と、しみ〴〵僕に話したが、日本の將兵が如何に自分の持場について強い責任觀をもつてゐるかゞ肯けると思ふ。この場合誤魔化しても、その場は或は過ぎてゆくかも知れぬ。しかしその命令をうけて、飽く迄も成し遂げねばならぬと決心し、それを決行するには、男らしい氣慨と度胸がゐる。話をきいてみればなんでもない事でも、實際の場合に遭遇してみると、その使命を果すことは仲々容易なことでない。こんな場合は紙一重の差であつて、假りに現場を見なくても、想像と判斷で報告しても、また餘りに遠距離だから歸つて來たといつても、部隊長はあの場合咎める事はなかつたと思ふ。それを自己の責任に於て成し遂げねばならぬと感じて決行する所に小さい事のやうだが、日本の軍隊の生命がある

のだ。この強い責任とその精神のない軍隊は、烏合の衆といふべきであらう。

海軍の猛訓練が相當のものであることは平出海軍大佐からかねて色々な機會にきいてゐた。昭和十五年八月、東京灣南方に於て演習中の出來事である。潜水艦にとつて何より大事なことは、急速に一分間以內に百フイトももぐることであるといふ。それがこの演習には荒波のためにうまくゆかず、空氣拔けをひらいて海水が恐ろしい音をたてゝ入つてくると共に、艦橋にゐたものが艦內にもぐりこみマンホールの蓋をするのだが、不幸にもその時これがおくれてしまつた。その蓋をしめる役目をもつてゐたのが、成瀨正雄兵曹である。

この瞬間、若し成瀨兵曹がマンホールの蓋を中からしめたら、艦は沈んでしまふ。その危急を考へ、この蓋を外に出てしめた。その正しい判斷と臨機の處置は艦を救つた。その機敏の動作は持場を知つて自己を忘れてゐるのである。しかも自分の死を顧みず、外へ出てこの蓋をして自らは荒波にもまれて殉職したのである。この正しい判斷と自分の役目を果たした沈勇と犧牲的精神は、なんとしても忘れ難い記憶であらう。軍人魂として、全く自己の犧牲を顧みず、この尊き潜水艦をたすけ、自らは大海の藻屑と消えたのであつた。その重要な役目を實行したことの尊き氣持は、人間業とは思はれない莊嚴なものがあると思はれてならない。この尊き犧牲心は何にも勝る氣概であり、實に立派な態度であると思ふ。

五、

古來、吾が國では「斃れて後已む」といふことが武士の至情となつてゐた。「死して名を殘す」といふ思想も甚だ立派な言葉であつたが今日では、死して後已むやうな消極的な仕業でなく、更に如何なる難事業も成し遂げて、然る後意を決しなければ武人の本懷とはならなくなつた。前の成瀨兵曹のやうに、潜水艦の安全確保の爲に、先づ適確な處置を成して、然る後犧牲となつたこと、それが本當の武人となるのだ。この判斷は、かゝる一瞬の間に即刻決定するので、平素の訓練なくして常日頃の嚴格な修錬がなくしては容易に實行出來ない事なのだ。

吾々は今回更にこの海軍の不屈の魂を、眞珠灣を攻擊した「特別攻擊隊」の偉勳によつて看守することが出來る。

岩佐中佐以下九勇士の忠烈武勇は古今の歷史にも未曾有のことであるが、その勇敢な行爲にまして考へられることは、如何に大難事業完成の爲に隱忍自重したかといふことであつた。

大本營の發表によれば、この計畫が既にこの九勇士によつて企畫されその完成のために生きてゐたことである。されば眞珠灣に入つてもよく敵情を判斷し、味方航空部隊の戰果を確認し、月の出を待つて、敵の旗艦アリゾナ號を擊沈するまでの苦心は、人間業とは考へられない、眞に藝道に打込む神技に等しく、その態度の眞劍なると、その變化に應ずる即妙な攻擊は到底一朝一夕に教育された藝當でない、長い傳統に育まれ

況ゆる百戰錬磨の中に體得された賜としか考へられない。その行動の徹通、その標準の適確、しかも味方への最後の信號に至る迄、一つの無駄ごとの一點もないことである。

「君のため何か惜しまん若櫻
散りて甲斐ある命なりせば」

と歌つた軍神の魂と氣魄を思へば……三十歳に滿たない若い勇士の熱烈なるこの魂が、東亞大戰爭に現はれたことを國民の一人として、心から感謝せねばならぬ。

義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕し、といふ孔孟の訓へは、武士の信條となつて、吾が日本の歴史に幾多の光彩を放つてゐるが、今度の特別攻擊隊の如き完全無缺なる行爲は誠に希有のことに屬するのだらう。世界の最大强國を相手にして戰ひつゝある皇國の前途に、この立派な軍神の現はれたことは百萬の援軍よりも絶大な精神力のあることを考へねばならぬ。これらの九勇士が自らを誇らず、自己の技能才幹にも誇らず、默々としてその行爲を成し遂げ、敢て何等求めることなきを思ふ時吾々日本人は何人も首を垂れざるを得ないのである。しかも自らの持場を死守し、自ら安易な道を擇ばず、味方の航空機の自由な活動を水中に莞爾として見とゞけ、夕闇迫る頃自らの一大事業を成し遂げて從容として死に赴いた處置は、鬼神も泣かしむるものがあつた。吾々國民としてこの尊き信條の萬分の一も學ぶ所がなくてはならぬ。

抑々軍隊は嚴格なる統帥の下に、一個の魂となつて、一つの行動に移るをもつて、その念願とされてゐる。部隊長から一兵卒に至るまで、その職分が既に規定されてゐる。この嚴格なる役目は、死生の巷に於て最大に發揮されねばならぬ。中隊長は中隊長として、分隊長は分隊長として、兵卒は一兵卒としてその持場を完全に死守しなければならぬ。その持場を守らずして、その役目を果たさずしては濫りに他の批判を差し控へねばならぬ。只しかし部隊が敵と遭遇し、上官を失つた場合にはその次に位するものがこれに代らねばならぬ。この交代する指揮官と雖も、自己の役目を完全に果たし得ない人が、上官の代りになれる道理があり得ない。吾々は稍もすると、今迄の生活に慣れて、軍隊の眞髓に時にふれない過失を決して冒さないといへない。それは現役を離れて在郷に歸つて再び召集される多くの兵隊にその例を往々に見る。

私が最初に例をあげた小宮軍曹に對する錯覺も實はこの反映に他ならぬものであつた。兵隊の身上を調査して、各員の經歴や性格を知ることは、上官として最も必要なことである。況して生死を誓つて親子以上の環境に入る軍隊生活にとつては、その調査も必要であらう。只そこに考へねばならぬ事は、軍隊は上下の階級から成つてゐる一つの組織體であることである。しかもこの組織體なるものは常に流動し、百戰百度常に敵といふ狀況の變化を伴ふものと對抗しなければならぬこと、これである。

僕は兵隊の持場について、幾多の苦しい經驗をもつたので、この機會一つの題目として考へてみたのである。

英靈に捧ぐ

大杉勝美

此の日快晴、靖國神社臨時大祭、共に苦しみ倶に泣き、ともに喜び、肩を叩き合ひて勵まし戰友の幾人かは、此の日護國の神と仰がれて靖國社頭に永遠に鎭座まします。此の時我北邊鎭護の大任を負ひて、東滿の片隅にあり。大東亞戰下の今日、軍隊に入りて既に四星霜を經て、更に未だ戰鬪場裏に臨み敵彈下を進むの榮を擔はず。武運拙しと云はんか、今戰友の祀らるるの日に逢ひて感慨無量、此の身の餘りに平穩なるを悔ゆるのみ。

友びとの祀らるる日をおほらかにわれ北邊に恙くゐる

此の日戰友達と共に在れば、過ぐる日、豫備士校にありて共に勵まし合へる戰友K少尉の話となりぬ。彼、北支戰線を馳驅すること二年、勇名を轟かしつゝ惜しまれて散りぬ。

「幸運な奴だよ、Kは。日本人として晴の死所を得たんだからなあ。本望だよ。俺達はどうだ、軍隊に入つて四年、而かも支那事變、大東亞戰爭と此の時局下に彈丸の下も潜つたことのないみじめさ、運が悪いのか、前世で餘程悪いことでもしたのか、ともかく俺は、Kの奴が羨しくてならん」

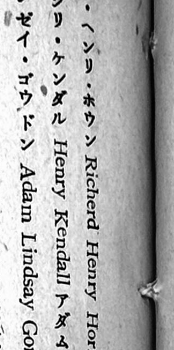
此の身に較ぶれば何となく美しく感ぜられて、いまは護國の神となれる戰友達を偲ぶ。

友びとの祀らるゝ日を兵達と肩叩き合ひつ羨しがりゐる

然し情勢は混沌として豫斷を許さぬ。我等亦何時〇〇の大命を拜するやも計り知れぬ。近き將來に於て我ら亦護國の神となるの日を心中に期す。此の日四月二十五日朝、外に出でて國境の空を眺むれば、山の峯をかすめて雲の趨るあり。あゝ、その雲のかげに「早く來れ」と叫ぶ戰友の微笑の泛ぶ。

友びとの祀らるゝ日を北邊にゐて征きて討つ日の近からんと祈る

濠洲の文學と風土



北小路功光

濠洲には考古學的な古代と新しい文化とが同時に存在してゐる。もつともその古代は急激に「現代」の追擊を受けて、殆んど影を沒しようとしてゐるけれども、五萬五千人或は七萬人と稱せられる原住民族の存在が卽ちその古代の名殘である。

考古學者は、濠洲の原住民族は三萬年の歷史を有するといふ。しかも現在でも殆んど石器時代の生活を營んでゐて、地球上最も古い種族の一と謂はれてゐる。かくも古い濠洲は又實に新しいとも言へる。それは文明人たる和蘭人が濠洲の北部を發見したのが一六〇六年であり、英國政府が始めて總督アーサ・フイリップ Archur Phillip を派遣し、英領を宣言し、新植民地に移民の第一團を送つたのが僅かに一七八七年であつたからだ。

最初の移民は一七八七年五月十三日に英本國を出發して、一七八八年一月十八日、今のシドニーの南方數哩のボタニー灣 Botany Bay に着いた。軍艦二隻、運送船六隻、其他計十一隻に、男四五百二十名、女四百九十七名、軍人官吏船員其他二百九十名、計千餘名を乘せ、三箇年分の食糧、穀物、植物、家畜（羊二十九頭　馬七頭、牛六頭、豚二十頭、兎五匹）等をもたらして來た。濠洲人は囚人の子孫だといはれるのはこれからだ。まさか總てが囚人の子孫であらう筈はないのだが、濠洲人自身もこれを National Sheleton といつて濠洲の國恥だと思つてゐる。ボタニー灣には今でも囚人のための砦が殘つてゐる。灣は淺く、波が靜かで、大きな池のやうな感じだ。今はシドニーの郊外になつてゐて、休日などシドニーからのよい散策地である。囚人の移民團は、やがてこの地を引上げて、すぐ北方のポート・ジヤツクソン Port Jackson に植民地を經營した。これがシドニーである。現今のシドニーは美しい近代都市で人口も百二三十萬を擁する。

このやうに新しい國土だから、その文學も濠洲人のものの考へ方同樣、到底未だ英本國の影響を脫するわけに行かない。しかし、濠洲の風土や生活を描くことによつて新しい濠洲文學を樹立しようといふ傾向は近年非常に活潑となつて來てゐた。そして國民文學或は國民藝術運動は、特に各都市の大學を中心に行はれつつあつた。かくてチヤアルズ・ハアパ Crarles Harpur（1813—1868）リチヤアド・ヘンリ・ホウン Richerd Henry Horne ヘンリ・ケンダル Henry Kendall アダム・リンゼイ・ゴウドン Adam Lindsay Gordon 等の詩人の名は、若い濠洲文學の第一頁を飾ることゝなつた。又著名な文人が濠洲に取材することも漸く盛んにならうとしてゐた。しかし今はこれ等濠洲初期の文人や世界的に著名な作家には觸れない。この一文の意圖する所は、濠洲の謂はば地方的作家の作品の中から、濠洲の文學として特長ある部分を抽出し、それに若干の感想を附することによつて、濠洲の風土或は生活を觀ようとするにある。從つて各作家の文家的傾向やその世界觀には言及しない。ただ各作家の小傳を述べたのは、濠洲文學の發展過程と、その基底となるべき社會相をいくらか暗示し得ると思つたからである。又こゝに選び出した作品には、殆んど都會生活の描寫がないし、風土を概觀するやうなものもない。が、濠洲の都會は、大抵歐洲や米國の近代都市の概念の裏に在るものだから、わざと省いた。それに風土氣候を概觀するためには幾多の案內書がその役割をつとめてくれるだらう。こゝには、狹いけれども出來るだけ性格的な視野を得ることに重點をおいた。これ等作家は殆んど濠洲生れか、さうでないにしても長く濠洲に住みついた人達で、且我々と同時代人である。又作家としての所謂 Cosmopolitan を避けて「濠洲的」な人々のみを選んだ。

海の章

濠洲北端、木曜島の海である。熱帶の海は輝かしい。一九〇一年、濠洲に移民法が設定せられ、有色人種の入國が禁止された。白濠主義 White Australia とはこの移民法を指すのだ。濠洲全體の人口は、東京市と大體等しい七百萬であるが、その九十五％は英國系である。この高率な英國系市民をあらゆる點で維持し、混血を避けるためこの嚴重な移民法が行はれ、白濠主義は全く國民的信仰となつてゐる感がある。その濠洲人が神聖とさへ思つてゐる白濠主義にもかゝはらず、唯一の愉快な例外がある。卽ち木曜島に於けるわが日本人の眞珠採貝業者である。日本人の優秀な潜水夫と競爭出來る白人がないので、仕方なくこの例外を認めざるを得なかつたのだ。但しこの小說には日本人は出て來ないが木曜島といふとこれを想起しないでは居られない。

ランドルフ・ベッドフオウド Randolph Bedford（作家、新聞記者。シドニー生れ。初等學校の教育しかない。濠洲、ニウギニイ、伊太利、地中海諸國の鑛山で勞働してゐたことがある。濠洲は廣く旅行してゐる。後、濠洲の各新聞雜誌に寄稿するやうになつた。）「クエタ暗礁の底深く」Fourteen Fathoms by Quetta Rock）より。

『椰子の葉がそよいでゐる。眞夜中近く、陸からの風が強くなつて、紅素馨の香を吹き飛ばしさうだ。月に照らされた椰子の樹は空中に聳えて、葉をそよがせてゐる。海につき出た棧橋の赤ランプが紫がかつて見える。

木曜島のグランドホテルは酒場を閉めた。最後までねばつてゐたトレス海峽の水先案內達もやつと寢に行つた。ところが、ヴエラン

ダでは跣足の男が二人、夕方から始めたパンドラ號難破の話をまだ續けてゐる。モレスビは、船と共に沈んだ二萬磅の眞珠が諦め切れないでゐるのを、ピボンがなだめにかかつてゐる（中略）

午まへに木曜島を出帆した。火曜島とホウン島の間を東に眞直、吃水の淺い曳船に曳かせて、アドルファス島を東に、珊瑚礁を南に縫つて倚南に針路をとると、黄玉の淺い海から青玉をとかしたやうな深海に出る。ブシュビ島の南から珊瑚礁を東に越え、北へ行つて西へ轉じる。それからは蛇行する。翌日、遂に複雜な珊瑚礁の上にかかつた。海底に素晴しく大きな黒いものが沈んでゐるあたりを鱶が悠然と泳いでゐる。パンドラ號だ。殆んど船底を水平に、八十四呎の深さに沈んでゐた（下略）』

小說の筋は、二萬磅の眞珠を難破船パンドラ號から上げようとして、金の問題でいろいろの事件が起り、結局熟練した潜水夫が僅かな不注意から失敗する話だ。

この短い引用から興味があるのは先づ「グランドホテル」である。木曜島のグランドホテルは、ペンキ塗の粗末な木造の建物に過ぎない。いかめしい名だから反つて逆の效果があるのだ。この邊の海は珊瑚礁が、見た目には萬華鏡のやうに五彩の輝かしい色で自然の美しさに人を驚嘆させるが、航海は困難で、必ず水先案內をとらなければならない。その水先案內の集合するのが木曜島である。珊瑚礁の島が實に多い。それに難破船も多く、この邊を通る船はその航路に一つや二つ淺瀨に乘り上げた船を必ず見受けるのである。澄み切つた輝やかしい海や島の間に鐵の銹の出た難破船を見るのは一種の凄さを感じる。珊瑚礁は木曜島から濠洲の太平洋に並行してはるかに南下し、シドニーの北で終つてゐる。これを Great Barrier reef といふ。船は太平洋の荒波には直接觸れず、海岸とこの大珊瑚礁障壁との間を通ふので、海は靜かであるが船員には油斷が出來ない所だ。海岸には所々非常に大きな、高さが五六米もあらうといふ蟻の塔を見る。又鱶は名物で、毎年多くの人命が失はれる。

河の章

（ヘンリ・マケンヂ・グリイン Henry Mackenzie Green Bathurst の All Saints' College とシドニー大學で敎育を受けた。歐洲へ二箇年留學。辯護士になつたが實際の經驗はない。シドニーで新聞や雜誌の編輯をしてゐるうち、詩によつて大學文學賞を二回、その他の文學賞を獲た。一九二一年以來、シドニー大學フイシャ圖書館長となつて今日に及んでゐる。近來文學評論もやつてゐた。歐洲の文人達に交友が多い。大學內で英本國から來た敎授達が牛津或は劍橋訛りで學生を感化しようとする中で、背の低い赭顔の彼は、野性的に濠洲訛りで立向ふ。「ホークスベリ河のレアンドロス」(A Leander of the Hawkesbury) より。（註。Leand r は希臘神話のレアンドロス。アフロデイテ神殿の尼僧ヘロを愛し、夜毎にヘレスポント卽ちダアダネルス海峽を泳ぎ渡つて逢ひに行つたが、嵐の夜溺死した。ヘロはそれを悲しみ自らも海に投身した。）

(濠洲の文學と風土)

『ホークスベリ河に沿つたバラロンでは、河は、幾哩も續いた山なみを背にした沖積層の平原を流れる。穀物はすべて黄に、果樹は綠に、平原は、河岸に細い帶のやうに竝んでゐる柔かい樹皮のテイの樹の茂みや細長い川の草のそよぐのに沿つて擴がつてゐる。數知れぬ果樹園には桃がなり林檎が實る。河から遠く離れた酪農場は矢張り果樹園の數ほども澤山あつて、牛乳やクリームやバタを作る。穀物や小麥やベーコン。人々は罐詰工場や鐵道や電燈の噂を始めた。バラロンは今やいろいろな生產品の集散地にならうとして町らしい樣子を整へて來た。昔はほんの五六軒、板葺の家と、雨露をしのぐ一軒の宿屋があつたのみだつた。鐵道まで八十哩離れてゐた。郵便物はめつたに來なかつた。來るにしてもあてにならなかつた。シドニーまではるばる出かけて行つた者は、いくらか尊敬された位だ。此邊の河幅は半哩ある。增水期にはもつと廣くなるが、海の鹽水がこゝまで逆流して來る。對岸の平原となだらかな丘の上に町があるが、その先の河岸は荒れたまゝになつてゐる。そのあたり、水際から切立つた丘があり、やせた叢林（ブッシュ）がある。叢林といつてもひよろひよろしたユーカリ樹とまばらな下草が生えてゐるだけだ。獸は濠洲小熊がユーカリ樹の上に巢を作つてゐる外は見えない。こんな風で、河の兩側にはいくらも人の住まぬ荒地があつたが、村の下と、半哩ばかり河を下つた淵のある邊は割合によく、河の曲がる所に僅かに沖積層があり、こゝにシア所有の桃の果樹園があつた。』

ホークスベリ河は、ポート・ジャクソン卽ちシドニー市が面してゐる灣に注ぐ大河である。ジャクソン灣は入江が極めて多く、それがシドニーの環境を美しくしてゐる要素の主たるものだが、その入江の一つが、何處までも奧深くなつたやうなのがホークスベリ河である。船ではるかに溯航することが出來る。溯航するのは船ばかりではない。鱶もゐる。兩岸には、絶えずユーカリ樹が見られる。これを Gum tree といふ。この樹は最も性格的で、濠洲の自然を寫眞にとつたらこの所謂ゴムの木の入らない所は少いであらう。

Bush の章

Bush の適當な譯語はないと思ふ。密林でもなければ叢林でもない。それ程濠洲のブッシュの林相は特殊である。

ある濠洲の大學生が日本の建築を知りたいといふから、林泉と茶室の寫眞などを見せ、日本建築のうち特に住宅や茶室は庭園と切離すことが出來ないと說明した。すると彼は庭園をつくづく眺めて、これは日本の Bush かと尋ねた。濟度し難い。苦笑の外はなかつた。

Bush には典型的なユーカリ樹の密林もあれば Wattle と稱する薄黃色い、小さな化粧刷毛のやうな花の咲くアカシヤ屬の叢林もある。眞赤な火焰樹の林もある。背の高い灌木の叢もある。何でも Bush だ。しかし、奧地のそれは中々凄い。その凄さがブッシュの眞の姿である。

（ヘンリ・ハアツバアグ・ロウソン Henry Hertzburg Lawson (1867—1922)（濠洲の代表的作家及詩人である。すべての濠洲人に敬

愛せられ、彼の作品は、國民文學の最高なるものと評價されてゐる。又濠洲の文化人で現在世に最もよく知られてゐるのは、歌手のメルバと作曲者のグレインジヤと、このロウソン位なものであらうか。一八六七年六月十七日 Grenbell Goldbields で生れた。父は Peter Hertzberg Larsen といふ諾威人で、母は New South Wales 州生れの濠洲人、處女名を Louisa Albury といつた。彼は初等學校を出ると、農夫であり請負業をやつてゐた父の手傳ひをした。十七歳の時、シドニーへ行つて、馬車にペンキを塗る商賣を覺えた。一八八七年に始めて詩を書いた。以來文學の仕事を繼續したのである。それと共に濠洲の諸州 Queensland, New South Wales, West Australia や New Zealand を放浪して、種々な職業に從事した。そして彼の作品は漸く Sydney Bulletin にあらはれるようになつた。一九〇〇年から三年間ロンドンに居たが大した收穫はなかつたようである。晩年は貧困と不幸の連續であつた。一九二二年九月二日 New South Wales 州の Abbotsford で死んだ。彼が文學的に認められたのは死後のことで、生存中は彼の文學を認める如き社會的雰圍氣が何處にもなかつた。）「家畜商人の妻」（The Drover's Wife）より。

『丸木と板と木の皮で出來た二間きりの家である。家の床は節だらけの板で張つてある。大きな樹の皮で出來た臺所が家の一方に附いてゐる。家そのものより臺所の方が大きい。ヴェランダもある。

周圍はみな叢林だ。——平なところだが、どこにも地平線が見えない。見とほしがきかない。この叢林はやせて枯れさうな野生の林檎の木から成つてゐる。下草も生えてゐない。殆んど水のない小川の上に何本かの櫻の木がある。その深い綠だけが辛うじて目を慰めてくれる。文明の香をかぐには、近くも九十哩は行かなくてはならない。——それとても街道にそつた銘酒屋にすぎないのだが。

家畜商人は、もとは牧場を持つてゐたが沒落して、今は羊を追つて、それを賣りに廻つてゐる。妻と子供等がこゝにとり殘されてゐた。

襤褸をまとひ、かさかさに乾からびた顔の子供が四人、家の傍で遊んでゐる。突然、子供が叫ぶ。

「おつかあ！蛇だ、蛇が出て來たよ。」

如何にも叢林の女といつたやうな、日燒してみすぼらしい母親が、臺所から飛び出して來て、地面を這つてゐる赤ん坊をひつたくつた。赤ん坊の尻を掌に乘せて、棒切れを持つてきた。

「どこにゐる？」

「こゝだ、薪の山の中へ這ひ込んだ。」

答へたのは十一になる長男の腕白小僧だ。

「おつかあ、待てよ。俺がつかまへてやる。そつちへ行つといで。乞食蛇は俺のもんだ。」

「トミイ、こつちへ來ておいで。咬まれたらどうするんだ。こつちへ來いつていつたら來ないかねえ、この野郎は。」（中略）

日暮れ近く、雷が鳴り出した。子供達を家へ入れなくてはならないのだが、母親はためらつた。蛇が家の床下へ入つたのを知つてゐるからである。節穴だらけの床板では、いつ

なん時蛇が出てくるか知れない。母親は薪を腕一杯かゝへて臺所へ行つた。そして臺所へ子供達を連れて來た。臺所には床板がないからだ。——あつても土の床だ。叢林のこの地方では、この床のことを洒落れて、「土間」といつてゐる。（中略）

もう午前一時か二時であらう。たき火の焔が微になつた。鰐といふ仇名のある犬は、前足に頭をのせて寢そべつてゐる。そして壁を見守つてゐる。どう見ても餘り綺麗な犬とはいへない。火の光で、犬の身體至るところに傷のあるのがわかる。そこだけ毛が生えてゐない。およそ、地面の上だらうが下だらうがこの犬にとつて怖いものは何ものもない。蚤をとるのと同じ氣輕さで牡牛にも飛びついて行く。ありとあらゆる他の犬はみんな嫌ひだ。カンガルウ犬は別だが。又この家の家族の、友達とか親類に至つては限りなく憎んでゐる。しかし、彼等はめつたに來やしない。この犬は時々、遠くから來た見知らぬ人が好きになる。蛇は大嫌ひだが隨分澤山殺した。この犬も何時かは蛇に咬まれて死ぬだらう。蛇とり專門の犬の最後は大抵定つたものだ。

（中略）

母親は鷄などをねらふ烏や鷹とも戰ふ。彼女の戰略は甚だ原始的だ。子供達が「おつかあ、烏だよ。」と叫ぶ。母親は箒を持つて飛出して來、鐵砲と見せかけて、狙ひをつけながら「バン！」といふ。烏は急いで逃げる。烏も狡いが、母親の方がずつと狡いといふものだ。（中略）

蛇の番をしながら、母親は火の傍でまんじりともしない。そして、ほんの僅かの樂しいことを考へる。來る日も來る日も似たりよつたりだが、日曜だけはちがふ。日曜の午後になると母親自身めかし込み、子供達や赤ん坊まで身綺麗にする。そして叢林の中を通ふ寂しい小道を、古い乳母車を押しながら散歩する。母親は、日曜ごとにさうするのだつた。

（中略）

もうぢき朝だらうに、時計は住居の方にあるのでわからない。蠟燭が大方とぼり切つてしまつた。蠟燭を買ふのを忘れてゐた。もつと薪を持つて來て、火を絶やさぬやうにしなければならぬ、そこで、母親は犬を家の中に閉めこんで、薪を積み上げたところへ急いでやつて來た。もう雨はやんでゐた。棒をとつて薪の山をつつくと、どさり！大きな音がして、薪の山がすつかり壞れ落ちてしまつた。

昨日のことだ。黑人が迷ひこんで來て、薪を安くするからと賣りに來た。値切つて買つた母親は丁度牝牛がどこかへ行つたので、さがしに出かけた。一時間程も留守にしてゐたらうか。黑人はその間、よく働いてゐた。母親が歸つてみて驚いた。煙突の傍に、薪を可成大きな山に積み上げてあつたのだ。だから、煙草を餘計にやつて、なまけないでよく働いたことをほめてやつた。黑人は禮を言ひ、頭をもちあげ胸を張つて歸つて行つた。彼はある種族の最後に殘つた男であり、王樣であつた。ところが、その積み上げた薪の山は、周りはあるが中がすけて空つぽだつたのだ。

母親は癪にさはつた。卓の傍に腰かけると、くやし涙が溢れでて來た。ハンカチを出して涙を拭かうとした、が。代りに指でもつて涙をこすつた。ハンカチは穴だらけだ。親指が穴

から出た。人さし指も他の穴から出た。

それが、をかしくなつて笑ふと、犬がびつくりした。母親はをかしいことには、非常に非常に敏感なのである。時々、叢林をくぐつて來る男にいろんな話をして笑はすのである。

こんな風にして母親は樂しんでゐるのだ。ある日のこと母親は椅子に腰かけて、ゆつくり、滿足が行くまで泣いてゐた。ところへ、古くからゐる猫が、母親の着物に身體をこすりつけに來た。母親は猫に言つた。「お前も泣いておくれよ。」又、それが自分でをかしくなつて笑ふのであつた。

いよ〱夜明けらしい。部屋は大へん空氣がこもつて、その上火があるので暑い。鱷(犬の名)は、相變らず時々壁を睨んでゐる。急に、犬が緊張した。板の割れ目の方へぢりゝぢりゝと忍び寄つて、全身を昂奮させてゐる。頸の後の毛が逆立ち、黄色い目が戰鬪意識に燃えた、何が起るかよく解つたので、母親は鐵の棒を持つて待伏せた。板の割れ目の兩側に大きく口を開いた所がある。その穴の一方から、南京玉のやうな、氣味惡く光つた眼が見える。蛇だ。——黒蛇が一尺ばかりも、そろりと出て、頭を上げ下げしてゐる。犬は、矢張り身動きしない。母親も魅せられたみたいだ。蛇は尙一尺も出た。母親は棒をふり上げた。蛇は危險をさとつて、もう一方の穴へ首を入れた。そして尾がする〱と滑つた。犬は飛びついて咬んだが、やりそこねた。鼻が邪魔になつたのだ。蛇の身體は、板壁と床との角になつたところに、うまくはまり込んでゐる。蛇の尾が少しゆらいだのを犬が咬んだ。今度は大丈夫咬んだ。犬は又一尺七八寸も引張り出した。ばたん、と母親は地面の上に鐵の棒を振り下した。鱷は又引つぱる。ばたんばたん。鱷が又、ぐいと引くと、とう〱蛇が全身を現はした。五尺もある黒い物凄い奴だ。蛇は頭を上げて突進しようとするが、犬が頸をくはえてゐる。犬は大きく重いがテリアのやうに素早い。まるで人間が怒心頭から發したと思はれるやうに、蛇を振廻した。一番上の子が起きて來て、棒を持つて寢臺から下りようとしたが、母親は自分の持つてゐる鐵棒の握りで、子供を寢臺に押し戻した。ばたん、ばたん。蛇の背骨は數箇所で折れた。ばたんばたん。——頭がくぢけた。そして犬は鼻をすりむいた。

母親は、目茶苦茶になつた蛇を棒の先に引つかけて、火の中に投げ入れた。それから薪をくべて蛇の燃えるのを見てゐた。男の子も犬も見てゐた。母親は犬の頭の上に手を置いた。犬の黄色い眼には、恐ろしい怒りの火はもうすつかり消えてゐた。他の小さい子供達も騷いでゐたが、今は靜かになつて又眠りついた。シャツ一枚の、きたない足をした男の子だけ、しばらく、火の燃えるのを見てゐた。子供はふと顏を上げて母親を見た。母親の眼には涙が光つてゐた。それに氣附くと、母親の首に腕を卷きつけた。

「おつかあ——俺あ、おつかあを置いて羊を賣りに行つたりしないよ。もしそんなことをしたら、俺をなぐつたつていゝや。」母親ははだけた胸に子供を抱いて、接吻した。そして、二人一緒に腰かけながら、叢林(ブッシュ)の上の空の、無氣味な夜明けを眺めてゐた。』

ロウソンのこの短篇は、叢林の中の一軒家へ、ある一夜、毒蛇が床下へ逃げこんだ、それだけの出來事を書いたものである。叢林の生活が、よく描けてゐると思ふ。ロウソンの文章は粗野ではあるが、題材とよく調和してゐる。この短篇だけ少し長く引用したのは、これで説明なしに叢林の性格がわかると思つたからである。全部を譯したかつたが紙數の關係で殘念だ。これは While the Billy Boils といふ短篇集の中にある。

都市の郊外の章

メアリ・シンプソン Mary Simpson (Victoria 州 Stawell の生れ。兩親はデヴォンシャとコウンウォールの出。Victoria州立學校で教育を受け、あとは家庭教師についた。專らユウモラスな文學を得意とする。喜劇一幕物等も書き、Australian Literature Society によつて演出された。筆名を Weeroona (註。濠洲土語)といふ。)「サンタ・クロウス」(Santa Claus) より。

『始めて彼に會つたのは、暑苦しいクリスマスの晩であつた。メルボルン市の郊外であるシドニー街に電車が止つてゐた。私は終點で電車の引返すのを待つてゐた。彼は、カーニヴアルのサンタ・クロウスであつた。——ええ、カーニヴアルでござい。町よりはお安うござい。——通りの向ふ側にクリスマスの物を賣る店がある。店はクリスマスの飾り糸や綺麗なもので一杯になつてゐる。籠入りの小熊、キユウピイ、綿の雪。

一日中、北から烈風が吹きまくつてゐた。夏になると例年幾度か襲つて來る風である。埃の渦卷、帽子、紙屑などを町の方角に吹きつける。そして、あたりはひどく荒らされる。サンタ・クロウスはこの風と心配とで弱りはてゝゐる。風を胸に受けたり、横に外らしたり、町をあちこち、元氣なくさまよふ。押しかける筈の客がこの風で一人も來ないのだ。

私はこの男が可哀さうになつた。日蔭で華氏の九十八度。木棉の外套を着てゐるさへたまらないのに、綿入の赤いフランネルをまとつてふくれ上つてゐるのだ。彼の着てゐるものはどの位の重さがあるだらう。フランネルの上着、大きな尻と袖、袈裟のやうなもの、袋を背負つて。みな赤いフランネルだ。その上、白兎の毛裏だ。(下略)』

言ふでもなく濠洲は南半球なので、季節は北半球とは逆である。クリスマスが夏になるわけだ。赤道が北にあるから北風が暑い。ここに描かれてゐる熱風を Heat wave といふところだ。クリスマスを七八月の冬に持つて來ることが出來ないので暑いクリスマスをやる。人々は汗を流しながら　飾窓の中の綿の雪を見、夏服で七面鳥を食ふ。クリスマスの宴會のあとは、海水浴をやる。こんなにまでしてクリスマスを習慣で祝はなければならぬのは、いくらか滑稽である。しかし、この熱風は長くは續かない。すぐ涼しい南風(サザリ)が吹いてくるので助かる。夏は都會ではいい芝居などはない。しかし、丁度歐洲とは季節が逆なので、歐洲のシーズンが終ると、一流のよい興行が、音樂でも芝居でも、南半球へ來ることになつてゐる。

田園の章

レイモンド・マクグレイス Raymoud Mc Grath.（New South Wales 州 Gladesville の生れ。parramatta, Freshwater, Gladesville 等の初等學校で學び、Fort Street Boy's High School に移り、シドニー大學の建築科を卒業した。極めて穩健な經歷である。大學で好成績だつたので、Cambridge 大學の Clare College で更に建築學を專攻した。傍、詩や散文を書き始めた。そればかりではない木版やエッチングや水彩も描き、幾度も展覽會に入選したといふ器用な男である。大抵の濠洲の作家が——といふより英國の影響を受けた作家がリアリスティックであるのに、この男だけ目立つて空想的なのは一寸面白い。）

「ヂョウヂャに住む男の旅」（The Journey of a Joeadjau.）より。

『そのむかし、私はヂョヂャに住んでゐた。父と母とそして美しい二人の妹も一緒だつた。一人の妹の髮の毛は晝のやうに明るく、うねつてゐる毛は、ワンパラルの岸にある砂のやうに濡れて金色に輝いてゐた。もう一人の髮の毛は、夜のやうに暗く、黑い玉に似た髮の下には、星のやうな青い眼が輝いてゐた。（中略）

考へてみればヂョヂャは奇妙な所だつた。青みがかつた山の靄の中に底深く沈んで、擂鉢の底に、小さな綠の谷が隱されてゐると思へばいゝ。こゝへ來る道もこゝから出る道も、およそ道らしいものは何もない。たゞ羊が通ふ石だらけの小徑があるのみで、これも雨が降れば瀧を落し、さもなければ砂地へうねりつゝ迷ひこむか、崖の羊齒類や大百合の間を這ひながら、この「沈めるリオネス」（註。マロリのアアサ王やテニスンのアアサ王の死の物語にあるリオネス。コウンウオルとシシリ島の中間に在り。今は『千尋の海底に沈んで（full forty fathouns under water）』ゐる。アアサ王最後の戰場で、王は此處で戰死した。）へやうやくにして降りて來られる。ヂョヂャは高い山々に圍まれてゐる。山々の青い頭は、森が被ふてゐる肩の上にうなだれ、山々の霞んだ眼は考へ深さうに、この寂しい町を眺めてゐた。ヂョヂャの存在理由は、石油を含んだ頁岩にあつた。丘の下、谷の傍に、父や鑛夫達の住む小屋が竝んでゐた。もう幾年となく山を掘つてゐたのだ。洞窟は地下の森林だ。叢林から數千本となく切り出した林木で天井を支へてゐる。今やこの山全體が、地下の森林によつて、しつかり支へられてゐるのだ。（中略）

水の澄んだ小川がヂョヂャの眞中を流れてゐる。小川は、草や牛や男や女や子供や歌ふ鳥や數匹の羊をうるほす。こゝの谷は地味がこえて黑く、大きなオレンヂの樹や葡萄や林檎や血のやうに紅く又天鵞絨のやうに黑い罌粟や濃紫の花の咲く樹、その他名も知らぬ樹が生えてゐる。その上、神の榮光を示す教會があり、教室が一つしかない學校があり、少年少女は喜んで、この兩方へ通ふのであつた。

この眠いやうなヂョヂャではあるが、私だけは、叢林の中をさ迷ふ野犬のやうに野蠻だつた。私はユーカリ樹の枝をゆすぶり、頭の上に被さるアカシヤの幹をゆり押した。又、美しい斑のある蛇が、水ぎはの繁みに繁つた草の中を素晴しい樣子で滑つて行くのを、夢中になつて見とれてゐた。蛇は、自分の從姉のクレオパトラの王冠よりも優雅な頭を上げて、小川を泳ぎ、どこへか姿を隱す。私は天鵞絨の頭をつけた草をとつて王杖にする。小川を傳はつて崖へ出ると、そのあたり、ユーカリ樹やサラフラスの間に鞭鳥（註。鞭を振つて風を切る時のやうな音を出して鳴く。）や琴鳥（註。尾が立琴の形になつてゐる美しい鳥。鞭鳥と共に濠洲特有の鳥である。）がゐる。私は帽子も上衣も着ない。鑛夫達がよく眠つてゐる夜中、口笛を吹きながら夜の明けるまでワラビ（註。小さなカンガルウの一種。）を追つかける。（中略）

この谷は、幅一哩、長さは數哩にわたつてゐる。時に、實際想像を絶する、全く素晴しく靜かな朝を經驗する。三哩も向ふの犬が吠えるのや馬のひづめの音や材木の倒れる音が、まるで自分の足もとの出來事のやうに響く。そんな時、地面に耳をつけてゐると、草ののびる音や地蟲の這ふ音が聞えるやうな氣がする。（下略）』

こゝには濠洲の植物や動物の記述があるので引用した。しかし、このやうなものは繪でもないと一寸觸り難い。Fauna や Flora などこの國でも面白いものだが、さういつた圖鑑を見て樂しむ程度で、自分にはそれ以上の知識はない。それにしても、濠洲のそれ等は、自然科學者には非常に興味が持てるものではないかと思ふ。陸上ばかりではない。海の珊瑚の種類などは素晴しいのだらう。天文では例の南十字星があるが、それの出てくる文學を、今はさがし得なかつた。彼等には餘り珍らしくないからかもしれない。南半球の星は我々の見てゐるのとは全く違ふ。とにかく、自然の記述は切りがないのでこれで止める。

要するに、濠洲文學の片鱗をこゝに觀た。濠洲文學の將來はどうなるか、輕率な判斷は許されない。それにつけても、この文化の大轉換期に際して、われ等日本民族の文化に對する役割を想ふ時、限りない責任を感じないはで居られないのである。

創立 康德九年
資本金 壹億四千萬圓

東邊道開發株式會社

取締役社長 島田利吉
常務取締役 池田卓一

本社 通化省通化市二道江區
新京事務所 新京特別市大同大街四〇六

—（濠洲の文學と風土）—

興亞の理念と儒教

―孔子祭に現れた支那社會思想―

高　澄　義

一　支那古代の敬天思想

市村瓚次郎博士は其の著「東洋史統」(卷一)に於いて「原始民族は自然力を崇拜するのが常である。天を仰げば日月星辰が出沒し地に俯せば山嶽江河が流峙する。時ありて雷鳴り風烈しく、時ありて雨霽れ虹見え、或は日蝕あり、或は月蝕あり、その中に神靈の働ありとしこれを畏怖崇敬せるのみならず、人間には靈魂ありとし死後身體は消滅しても靈魂は猶存在すると考へた。これが即ち原始民族の間に宗教心の起れる由來であらう。支那の太古の民族もやはり同樣の狀態にあつた。これ彼れ等が天神・地祇・人鬼に對して畏敬崇拜し、その祭祀祈禱をなすに至つた所以である。」と述べてゐる通り、詩經には

「天生烝民。有物有則。民之秉彝。好是懿德。」
(天烝民を生ず、物あれば則あり、民の秉彝、是の懿德を好む)

烝民とは衆民である。秉は執ること、順ふこと、彝は常である。秉彝とは此の常務の性に順ふを謂ふので、懿德は美德である。此の詩に依れば、蓋し天は萬物を生ずる、而して萬物は天の本質の表現であるから、人間も、物質も凡て天から生れ、而かも天から自然の法則を分賦され、具有することが

出來る。これは「天命」と謂ふ。この天與の法則を倫理的に表現すれば、道德儀禮となるのであり。人間が道德の常法を順行するのは、彼等の本性の中に天賦的法則を具有して居るが爲めである。これが萬人の所有する秉彝の性質である。人がこれを有してゐる爲めに、その常行すべき美德を好み、此の道德禮儀を行ふのである。これは最も古い哲理となり、即ち天と性と道德との關係を說明したもので、後に支那社會を支配する凡ての哲學の基本理念になつたものであると思はれる。天の思想に關聯して天子の語も生ずるに至つた。支那の帝王を天子と云ふのであるが、蓋し地の主宰者たる帝王は天の主宰者の代表となるべきもので、これを天子即ち天の子と看做し、天の命令を受け國土を治める人と云ふ意味である。論語には

「天降下民、作之君、作之師、惟曰其助上帝寵之、四方有罪無罪、惟我在、天下曷敢有越厥志」
(天下民を降し、之が君と作し、之が師と作す。惟れ其の上帝を助くると曰うて之を寵す。四方の罪有り罪無きは、惟我在す。天下曷ぞ敢て厥の志を越ゆること有らんや)

と、王者は上帝即ち天を助けて人民を牧養し、之に依つて恩寵を受け、天意を奉じて四方の諸侯を監察し、天に代つて賞罰を行ふのである。書經にも

「天視自我民視、天聽自我民聽」
(天の視るは我が民の視るにより、天の聽くは我が民の聽くによる)

と、これは周の武王が暴君商王を討たんとする時、民衆に對して誓つた言葉であつて、即ち民の意志は天の意志なりとの意味で、帝王が自らこれを是認し、深いイデオロギーとして後世に傳つたものである。

但し、帝王は唯、精神的指導者ではなく、又、生產者の領袖にならなくてはならぬ、農業國家にとつて、旱魃も、洪水も、五穀の豐穰も、一にかゝつて天の意志によることは當然であらう。高田眞治博士はその著「支那思想の研究」に於いて地理的環境の見地より氏は「故に支那上代に於ける敬天思想の發生は、支那上代民族が廣漠たる黃河の流域に住居し、屢々黃河の氾濫に遭ひ、自然現象の影響を蒙ることが最も多くして、偉大なる大自然に對する崇敬と恐怖との感情より生じたといふ地理的關係に由來することが、最も大なるものがあると謂はねばならぬ。例へばヴントがトーテミズム的文化の三大圏の一として擧げたマレーポリネシア文化の天上神話が、此の地方に於て比類の見ない程發達したのは、羅針無き航海の際、星に依つて方角を定める爲め、天上の世界に注意と興味とを集注するが爲であるが如く、支那に於いても、廣

漠たる黄河の流域に農業生活を營む民族が、天界の現象に支配されることが多大であつたが爲に、自ら此の方面に注意と關心とを集注したが爲であると謂つて良い。」と闡明された通り、帝王も最もこのことを重大視し、故に禮記には

「天子親耕、粢盛秬鬯、以事上帝」

（天子親ら耕し、粢盛秬鬯、以て上帝に事ふ）

と、上帝の恩惠に依つて作ることを得た農作物へ稷と酒とを上帝に獻じ、上帝を祭つて、人民の感謝を表すもので、而もこれ天子の親ら耕したのは、如何に農業民族が上帝即ち天に對して關心されてゐたかを窺ふことが出來るであらう。

こゝに至つて我々は、支那古典中の帝王は天の代表者であり、國家は神權の表現であると解され、「天命」、「天意」、「天志」等は、行政者に賦與した權威であり、方針である。以上を總攬して武内義雄氏は「彼等が主權者を目して天子と呼んだのも之れがためである。故に天命に從つて生民を治めるべき天子の職責は、第一に民を率ゐて彼等の始祖である帝を祀ること、第二に常に天意を忖度して之に逆はぬやう民を導くことであつた。この目的を達するため祭祀と龜卜が行はれ、龜卜はやがて自己内省となり、天の命に隨從すること即ち自己の本心を眞感し、親子の愛情と兄弟の友情とを以て、道德の根本とをなす孔子の道德觀へと進展して行くのである」と「支那思想史」に於いて結論を附けられてゐる。

二　孔子の實際主義と老子の虚無主義

支那古代の思想を支配するものは、孔子派と老子派であることは周知の通りであらう。彼等が何故にかゝる偉大なる思想を創造したかといふことは、固より彼等の生れた社會の環境の支配であることには疑を容れないことである。

支那が長い原始時代を過ぎて周の中葉に至れば、社會上、思想上に激しい動搖を來した。その時革命思想家老子と、古代思想保守派孔子とが殆ど同時代に太陽の如く現れたのである。

老子は三代の迷信思想を全部打破し、極端に他律的倫理說を罵倒し、人格神的觀念を根柢から拔出して、「道」の觀念を以て代へた。孔子は只古代の諸說を解釋して、人間をして適材適所的に調和する事が彼の倫理の根本思想となつたのである。

老子の根本主義は、虚無哲學である。彼の有名な「道德經」は極めて神祕的であり、超絶的であり、また汎神的である。

彼は宇宙に於ける絶對的な根本生命は「道」であると云つ

て、其の思想の重點は自然を愛し、無爲を以て政道の極となし、謙讓を以て處世の要諦とする主張であつた。が、彼は別に功名富貴を憎みはせぬ、唯之が爲めに身を全うすることの出來ぬのを憎んだのである。故に努めて己を卑うして人と爭はず、よく柔に、よく弱に、以て其の終りを全うとしたのであるが、彼は常に

「弱之勝强、柔之勝剛」（弱は强に勝ち、柔は剛に勝つ）

と云ひ、また

「罪莫大於可欲、禍莫大於不知可、咎莫大於欲得、故知足之足常足。」

（罪は可欲より大なるはなし、禍は足るを知らざるより大なるはなし、咎は得んと欲するより大なるはなし、故に足るを知り、之足るは常に足る）

と、以て老子は一般の物欲を擯して、精神修養に重きを置き、最善最後の勝利を得るを訓へて居ることが判るのであらう。彼が遂に人を警戒して

「五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵令人心發狂。」

（五色は人の目をして盲せしめ、五音は人の耳をして聾せしめ、五味は人の口をして爽はしめ、馳騁田獵は人の心をして狂を發せしめる。）

と、謂はしめたのである。以上は、唯、自治的に所謂虚無主義を以て當時の民衆を教育したのであるが、但し、この「無」の主觀に依つて當時の諸侯相爭ひの時代を觀察し來り、遂に一種の革命的政治哲學を作り出したのであつた。彼は

「大道廢有仁義、智惠出有大僞、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠臣。」

（大道廢れて仁義あり、智惠出でて大僞あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣ある）

と、提案すれば、又、その原因として

「天下多忌諱而民彌貧、民多利器國家滋昏、法令滋彰盜賊多有。」

（天下忌諱多くして民は彌〻貧、人利器多くして國家は滋〻昏く、法令滋〻彰れて盜賊愈〻多し）

と、此の老子の言を以て觀るに、老子は甚しく時勢に激し、其の全體の思想は偏へに憤激に基いたものと解釋される。換言すれば、老子の全思想は繁文縟禮的時勢に對する反抗から起つたもので、時勢が愈々繁文縟禮的であれば、之に對する反抗は愈々激烈であつたと考へられる。故に老子は

「絶仁棄義民復孝慈、絶聖棄智民利百倍、絶巧棄利盜賊無有。」

（仁を絶ち義を棄つれば、民孝慈に復り、聖を絶ち智を棄つれば、民利百倍し、巧を絶ち利を棄つれば、盜賊あることなし）

と、極端的破壞主義を主張して、國家政治に對して遂に

「天高皇帝遠」（天高く皇帝遠い）

とか、又、

「太上不知有之」

（太上は之あるを知らず）

等と說いて、古來の「天命」「天意」「天志」の思想をすつ

かりくり返し、政府の存在迄も否認するやうな說を立てた。これは當時の封建社會に於いては當然實行出來ないことで、傳統的に見れば極めて道德義禮に害がある言行として、老子の道が異端として卻けられる所以は此處にあるのである。

さて、老子の虛無主義に對し、孔子の根本思想とは何であるか、孔子は王道衰微し、道心墮落の春秋戰國の時代に處したが爲め、其の道義は一に實際社會を匡救しようとする目的の上に組み立てられた。

孔子と其の學徒との問答錄が卽ち論語である、論語一卷は實に此の聖人の日常の俤を窺ふべく、又東洋倫理、東洋哲學の源を汲むことが出來るのである。

論語を通觀するに、孔子は「天」或は「天命」を廣く扱ひ、其の實行に「仁」を以て表現された。論語の李氏篇には

「孔子曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言」

（孔子曰く、君子に三畏有り、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。」

その條の註に朱子は

「天命者、天所賦之正理也」

（天命とは、天の賦する所の正理なり）

と解して、卽ち天命を天道の流行とか天の正理とかに解して孔子はこれを最も畏れ守つたのである。彼の求道的精神は誠に

「朝聞道、夕死可矣」

（朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり）

との如く熾烈であることは窺ふことが出來る。孔子は實に一生の實歷は、道（天命或は仁）に志し、道を修め、道を行ひ、道に樂しむことに終始してゐるので、遂に彼は自ら

「五十而知天命」

（五十にして天命を知る）

といふ語を發見した。是は誠に孔子の道德的天命思想の現れであると解釋することが出來るのである。孔子の天下周遊といふ社會救濟の實際的活動が、五十にして天命を知つた後に始つたのである、この自覺された天命、自信された天命は何であるかと云ふと、卽ち道を行つて天下の蒼生を救ひ、天下の爲めに太平を致すと云ふ使命を天が我に與へたのだ。我は天命を奉じてこの道を天下に行はなければならぬといふのである。これは實に孔子の道德的修養と救世的活動と天命の自覺とを言明してゐるのである。

彼の所謂「道」卽ち道德の實行方針は、常に「仁」となつて反映した。而も其の時と處とに依つて孔子の謂ひ表し方が違つてゐる。例へば「剛毅木訥は仁に近し」と云へば、「仁は難きを先にす」とも云ひ、又、「身を殺

して仁を成す」とか、「仁を爲すは已に依る」と云ふ類で、恐らくキリストの「愛」と佛陀の「慈悲」と呼ぶのと同じ意味で、彼の「仁」は衆德の總名であるかの觀があると思ふ。後世に程明道は

「仁者以天地萬物爲一體」

（仁は天地萬物を以て一體と爲す）

と、仁の天地萬物一體觀を述べて、天地生育の恩に報い、一視同仁、人物共存の道を盡し、天地と同德に至ることを述べてゐるが、一層支那古來の敬天思想より、孔子は忠實に運用して、これを以て

「修身、齊家、治國、平天下」

（身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平げる）

といふことは、當時の封建思想にふさはしいものであるのみならず、保守的な彼等を永遠に支配するにも無理ならないことであつた。

孔子と老子を比較して見れば、西村眞次博士は其の世界古代文化史に「孔子の思想は北方的で、堅實な人生觀を示し、老子のそれは南方的で、幽玄な宇宙觀を表はしてゐる。前者は後に儒教となつて支那二千年の文明を支配し、後者は後に道教となつて支那の民間信仰を支配した。老子の說は印度思想の影響を受けてゐるといはれるが、孔子の說は純粹の漢人思想であるといへよう」と云ふ通り、南方には次の節に取扱ふ所の反儒教的な思潮があるにも拘らず、北方には一貫して孔子は歷代の王朝の尊敬の的となつたのである。

三　儒教は國教

孔子の一派には、顏子、子思、孟子などの逸才が出でたに對し、老子の後繼者には、莊子、墨子が生れた。前者の著作には「大學」「中庸」「論語」「孟子」所謂「四書」と云つて、その考察の範圍には何れも實際的、道德的、倫理的方面に限られ歷代思想の中樞になつたが、後者は、洸洋自恣にして覊束するところなく、さながら天馬の空を行くが如き概があると謂はれ、大體に於いて超絕的だといふことが出來る。

歷史は、循環的なものであると云ふが、先秦時代には善であれ、惡であれ、さまざまな學者が輩出し、幾多の學術を創造したにも拘らず秦の始皇帝が出れば、たちまち焚書坑儒の悲運に會ふことになつた。つまり、始皇帝は天下を統一する威力はあつても、これを治める策がなく、遂ひ僅か三世四十一年で滅亡されたことは、文化史的に見れば誠に焚書坑儒による自殺であるとも云へよう。

漢の武帝が卽位するや、勵精治を圖り、道德を以て國策とし、郡國から孝廉を擧げれば、賢良を招いて意見を徵した。時に董仲舒の對策は正心を說き敎化を論じ、更に思想統一の必要を述べて、儒家の學說を以て分裂した思想界を整理すべしと主張したが、漢書の董仲舒傳には

「春秋一統を大とするは、天地の常經にして古今の通誼である。今、師は道を異にし人は論を異にし、百家方を殊にして指意は同じでない。是を以て上はよく一統を持するなく、法制屢變じ、下は守る所を知らない。臣愚以爲らくすべて六藝の科、孔子の術でないものは、皆その道を絕つて竝び進ましめないやうにしたい。邪僻の說息んで然る後統紀一にすべく法度明にすべく、民は從ふ所を知るやうにならう。」

と、言ふのである。六藝卽ち禮、樂、射、御、書、數は固孔子の敎育方針である。董仲舒の提言は丁度武帝の所願に合ひ、武帝は前より既に儒敎に傾いてゐたから、益々その方面に進み、儒敎の經典たる詩、書、易、禮、春秋の五經博士を置くに至つて、民衆は官吏となるは勿論、社會に立つにも是非ともこの關門を經ざれば立身出世も覺束ない有樣となつた。この風は天下は風靡して、遂に儒敎を以て統一せられるやうになつたのである。斯くて儒敎を國敎とし玆に漢の國家は初めて完全な統一を見、遂に儒敎は歷代の政治道德の標準となつたのである。

さて、支那の社會に何故儒敎が適當であるか、と云ふと市村博士は「東洋史統」に於いてこれを

「第一に儒敎は歷史的根據を有して居る。他の學派は一家の理論と一派の主張とに過ぎないが、儒敎は別に經典を有して居つた。その經典は歷史的材料を基礎としたもので、設令中には假託のものがあるとしても單純な理論や主張ではない。これが最支那民族の思想と不可分の關係がある。

第二に儒敎は中庸の意見を主として居る。他の學派は或は理に偏し或は實際に捉はれたものであるが、儒敎は理論に偏せず實際に捉はれず各派の中で最穩健中正に近い。而して特に仁義禮樂を重んずるが故に、社會の秩序を整へ安寧を圖るに適し、國家統治に應用して最都合のよいものと認められたと思ふ。」

と闡明されてゐる通り、支那のやうな廣汎な地域にわたる農村社會では、武力によつては治まらない、德政と敎化によつて社會秩序を整へ、人間諸關係の規定が自ら遵守され、進んで君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友などの自然的人間關係が道德的規範となつて、一種の自治が生れ、道德的自然法の中に生存するのである。かゝる諸條件に依つて、孔子の集大成せる儒敎は漢の國敎になつてから道敎と佛敎との間に幾多の衝突が生じ、多少の伸縮があつたけれど、始終歷代王朝の尊崇を得、殊に隋、唐時代から科擧制度が定めてから彼等の四書、五經を試驗の範圍となし、これが又支那文化統一に多大

な功績を與へたのであつた。

四　民國初年の西洋哲學と儒敎との衝突

社會は環境によつて支配されるが、思想は社會の反映である。故に環境は思想を支配するのである。

支那社會は阿片戰爭以後西洋資本主義社會の勢力に侵入されて、支那固有の封建的社會は日に沒落し、新社會は旭日昇天の勢で現はれた。支那社會に斯樣な變動が起れば、當然古い思想は、新しい社會新しい環境には適合することは出來ない。故に新思想と古い思想との衝突が起る。

過去二千餘年來支那の思想を支配したものは、戰國時代の諸子、西漢時代の道敎、晉時代の老莊、唐時代の佛敎、宋明等の理學はあつても、その思想の深さ、影響の大さに於て到底孔子には及ばない。故に新しい西洋思想を受けた思想家は先づ封建的思想を代表する孔子の思想に反對した。

當時最も激しく儒敎打倒の旗幟を擧げたのは、その時の靑年層に最高の指導地位をもつてゐた「新靑年」誌であつた。就中編輯者である陳獨秀が先づ「孔子の道と現代生活」「憲法と孔子敎」等を發表すれば、李大釗も「經濟上より中國近代思想變遷の原因を解釋す」なる一文を公にし、今でも支那思想界から尊崇されてゐる魯迅が、彼の最初の名文「狂人日記」に「私が歷史を繙いて調べて見ると、この歷史の每頁に皆仁義道德の數文字が書かれてゐる。私は半夜仔細に讀んで、やつと文字の間に文字を、本全體に二つの文字の書かれてあるのを發見した。それは『喰人』である」と。吳虞はその刺戟を受けて「食人と禮敎」『禮論』『孝論』『儒家の階級制度主張の害」を發表し、遂に胡適は「孔子屋打倒」のスローガンを擧げるに至つて、今迄神聖視し侵すべからざる孔子の思想は深刻な打擊を受け、根本的な動搖を惹起したのであつた。

この思想革命の暴風雨が又二つの附隨的な問題を起させた、一つは孔子の思想を庇護する古史と經典の再檢討で所謂「擬古思想」であり、もう一つは古代思想を打倒するには迂晦艱澁な文體文を覆して、明瞭通俗な白話文を提唱しようと云ふ「文學革命」である。前者の領袖は錢玄同と顧頡剛であり、最も有名なコレクションは顧氏の「古史辨」であるが、後者は八大主義を提唱した胡適博士の「文學改良芻議」と「建設的文學革命論」及び陳獨秀の「文學革命論」が一瀉千里の勢で支那の各社會層に浸潤した。

その後、十教授の「中國本位文化建設宣言」もあれば、梁漱溟の「東亞文化及びその哲學」といふ折衷主義のやうなものも出現したが、併し文化の波は絶えず新陳代謝し來つたのである。

五　孔教復活と王道政策

「文化の建設は經濟的基礎と密接なる關係がある、封建の經濟基礎がなければ、千人の孔子が出るとも封建思想は生れない。同樣に資本主義の經濟的基礎がなければ、千百のルソーやモンテスキューも亦資本主義の學說を建てることが出來ない。現代支那の社會は資本主義の侵入によつて極めて大なる變化が起つてはゐるが、支那民族はまだ資本主義の使命を完成してゐない。ゆゑに孔家の店は粉微塵に打ち碎かれても猶ほ盛んに營業してゐる。」と、陳高傭氏著「現代の支那文化」に於いて云つてゐる。

若し環境が思想を支配することが正しいとすれば、外來文化を受け取るには、曾國藩や李鴻章の洋務運動時代のスローガンである「支那の學問を體とし、西洋の學問を用とする」のは正しいと思ふ。勿論、胡適等はかの思想革命期に於いて斯樣な極端な態度が必要かも知れないが、併し支那固有の文化を全部棄て去り新しい西洋文化を以て支那を再建設するとすれば、支那をして希臘時代まで逆行させねばならないだらう。これは不可能なことである。

外國人は孔子、孟子を知らないがしかし仁を崇び、義に依り信を誓ひ、知を尙び、禮を守ることは知つてゐる。又五常の道は知らないが、これを成就するのを常だといふことは知つてゐる。つまり過去の西洋文化によらずとも、東洋に於ては孔、孟の哲學思想によつて、新しい東亞の建設は可能である。その實證として、建國十年の滿洲國の現實を我々は知つてゐる。

即ち滿洲國が建國せらるゝや、先づ建國宣言には「當に禮教を是れ崇び王道主義を實行し、云々」と述べ、又執政宣言には「人類は必ず道德を重んぜよ」、「人類は必ず仁愛を重んぜよ」、「王道樂土、當に諸の實事と見るべし」等を以て順天安民の王道政治を論じ、特に尊孔に意を用ひ、其の祭祀は春秋兩季に定めて盛大に行はしめ、銳意之が復活に努め、一時衰退を極めた儒教は再び其の黎明期を現出したのである。

六　孔子祭

孔子を最初に祀つたのは、周の敬王四十二年即ち孔子の薨後の翌年である。時は魯の哀公が「尼父」と誄してその舊宅に廟を建てゝ孔子を祀つたが、又毎年孔子墓を祀ることを命じた。戰國時代が終りを告げ、漢の高祖は「馬上天下を取るも、能く馬上天下を治むるものなし」と深く信じ、大いに儒者を登用し、その十二年、魯を過ぐる時、太牢（牛、羊、豚）を獻げて孔子を祀り顏回これに配饗をした。東漢の明帝に至り、郡縣の學校に命じて孔子を祭らせ、十五年、帝が魯を過ぎる時、孔子竝びに七十二の弟子をも從祀された。後、北齊、北魏、北周の各朝は各々數回孔子を祭り諡を改めたが、殊に隋の文帝になると帝は國子等に詔して毎年春秋仲月に先聖（周公）先師（孔子）を釋奠し、鄕飮酒禮を行はしめた、これが即ち陰曆二月と八月の最初の丁の日に行ふ丁祭の濫觴である。唐の高祖武德二年には孔子廟を立て、太宗貞觀二年に周公の祭りを停止して孔子を「先聖」と稱し、四年に郡學に命じて皆孔子廟を建立せしめ、十一年に「宣父」と尊稱し、二十一年に天下の文廟に詔して孟子、顏子を配饗し、丁祭を盛大に普く執行せしめた。降つて宋の徽宗の朝には孔子の牌位を祭る宮を「大成殿」と命じ、明の世宗の朝には「至聖先師孔子」と改謚をした。清朝に至つて、順治帝は教化の根元とし、尊孔の念殊に篤く、康熙帝もまた孔子の故鄕曲阜に行幸して、至聖先師を祀るに最高の禮拜たる三跪九叩の禮をもつてした。乾隆帝もまた奉天の文廟に詣で、先聖を祀り、或は曲阜に釋奠の禮を行ひ、また全國孔廟の祭器、舞器の補修を命じ、國樂も復興し、更に北京の孔廟の祭器を曲阜に送つて祭祀を莊嚴に執行された。滿洲熱河の文廟に乾隆四十四年五月、帝の親臨の釋奠に使用する爲め、特に北京內府所藏の周代の寶物十件を頒たれたことは、今國寶として珍重されてゐる。

光緒帝は孔子の祭典を國家の大祭とした。滿洲建國なるや大同二年に執政親臨し給ひて釋奠を行はれて今日に及んだのである。唯、康德六年秋丁、奠釋鞠躬禮に改められた。

さて、今日の孔子祭は、前に述べた歷史的傳統により毎年春秋兩季に分ち、舊曆二月の上丁日を「春丁祀孔」と云ふに對し、八月の上丁日には「秋丁祀孔」と云ふ、これをまた普通「丁祭」とも云つて全國一齊に擧行するものである。

祭りは、當日早朝六時から始まる、その前に先づ孔子の牌位を祀る大成殿內苑の周圍に整へられた獨得な古樂器に夫々の樂生が着き、中央牌位に向つて四十人程の舞生が二組に別れて位置に着く。何れも揃ひの紫に模樣の入つた古裝に薄い角帽を戴き、手には鷄の尾羽と丸い細長い棒を持つてゐる。牌位の前の俎上には、小牛を中央に左に小豚、右は小羊の生けるが如き生贄が供へてある。之が天子の禮を以て行はれる所謂太牢である。式の開始を合圖する一際高いすき透る三百

六十聲の太鼓と鐘の聲が森嚴な聖域に鳴り響くと、全員が七つの鐘と石磬のリズムに合して低い二部合唱を歌ふ。舞生もこれに從つてテンポよく舞を進める。かくするうちに主祭官が參拜するのである。祭祀は約三十分に過ぎないが、古式に則る崇嚴な神氣は、單純な調子と素朴な踊りであつても、よく神域の靜肅と神祕とが感ぜられ、千古聖賢の業績を充分に偲び得られるであらう。

祭祀の順序と樣式とは何處でも大同小異であるが、こゝに近年來最も正式な、最も代表的な式典を、大同二年の「上丁祀孔親行釋奠禮節」の概要を抄錄してみよう。

大同二年九月二十八日秋丁に際し執政親しく先師に釋奠せられ、其の儀甚だ莊重にして最も嚴肅を極む。豫め新京文廟を蠲潔せしめ、廟庭、祭器及び樂舞、歌上を整備し、三日前、執政に呈請す。執政其の間齋戒を爲し給ひ、參列の各官亦二日前より齋戒す。文教部は恭しく祝版を執政府掌禮處に送り、授禮官は之に祝詞を敬書し、翌日、執政の御署名を呈請し、禮官を遣はし、先師廟內の祝案に安奉す。祀孔祭の前日文教部次長は宰牲を省眡し、宰人に牲の毛血を廟垣の東坎に瘞めしめ、各官の演禮を行ひ、廟具を陳設し、執政府大禮官は大成殿及び兩廡、崇聖祠に詣り、辨位を周眡す。當日に到れば前引官、後扈官等は卯正（早朝六時）を待ち、執政閣下の宮城御出門に隨行す。御輦の文廟に到るや輦引、對引官は豫め分獻官、陪祀官と門外に恭迎し、御休憩室に御案內す。やがて分引、預引、分獻の諸官は左右の門より入り、陪祀官は東西各所定の位次に其の對侍すれば文教部鄭總長、許次長行禮を奏請す。玆に於て、執政出御に先だち盥洗を訖へ、贊引、對引官恭導の下に大成門の中央より入らせらる。

此の時司戶、闔戶は升階進殿し、中門に正面して立ち、前引官、後扈官は檐下に、侍從武官、侍衞官及び扈從の各官は階下に立止し、東西の陪祀官は均しく階に面す。通贊が執事の各官其の分掌を執り、贊引官に就位を傳奏するや、執政閣下は拜位に就き、分獻官、陪祀官は均しく、北面して就位す。

迎神司戶は戶を啓き、典樂迎神は贊擧し、昭平章を奏し、司麾は麾を擧げ鼓を打ち、樂其の間やまず、對引官は、執政を恭導して先師案前に詣り、司香官は香を跪進す。

『上香』 執政柱香三上し、復あらせらる。分引官は各分獻官を率ゐ、進んで配位、哲位、兩廡の先賢、先儒の位前に到り、上香して復位して訖る。執政三跪九叩の禮を行はせらるれば分獻、陪祀の諸官均しく跪拜して後興ち、司麾を偃き、樂士は敔を戞き、樂止み、止みては戞く。

『帛爵奠』 樂士宣子章の樂を奏すれば、司節は節を擧げ、羽籥舞を舞ひ、司帛官は篚を奉じ、司爵官は爵を奉じ、順位に進み案の左右に立てば、執政先師位前に至り、司帛官の篚を跪進するを受けさせられ、拱擧して左の司帛に授け、案に奠し、司爵、又官爵を跪進すれば、執政之を受けて再び拱擧し、左の司爵に授け、墊中に奠して復位せらる、分引は分獻官を引導し、各帛爵を式の如く奠して復位す。

『讀祝』 司祝官は祝案前に至り、跪きて三叩し、興じて祝版を奉じ、案の左に跪き、樂暫止すれば、執政亦跪いて群官皆之に倣ふ。司祝官は祝詞を讀み、畢れば興きて祝版を奉じ、先師位前に詣り、跪きて篚內に安置し、三叩して興ち、退けば樂を作す。執政群官を率ゐ三拜して興たせらる。

『亞獻』 典樂官は亞獻秩平章を奏し。舞を作し、司爵官は爵を奉じ、案の左右に進立すれば、執政先師の案前に臻り、爵を受け、拱擧して司爵に授け、左に奠ず。分獻終れば、執政を恭導して復位せしめ樂止む。

『終獻』 典樂官は終獻樂を擧げ、敍平章を奏し、樂と共に舞を作し、司爵官は爵を奉じ、案の左右に進んで立ち、執政を恭導し先師案前に詣る。執政の爵を受け拱擧し、之を司爵に授け、右に奠すること分獻又は亞獻の如くして復位せられ終れば樂は止む。

『福胙』 司福胙官二人は案より起ち、先師位の左旁に進み拱擧し、執政拜位の右に跪き、接福胙官二名は左に趨きて跪き、執政亦跪きて右の司福官の進むる爵を受け、拱擧して左の接福官に授け、左右の福胙官は咸退き、執政は三拜の禮を行はせられて興つ。

『撤饌』 典樂撤饌祭を擧げ、懿平章を奏す。

『送神』 典樂官は德平章を奏し、執政群官を率ゐ、三跪九叩の禮を行へば、樂は暫く止み、司祝、司帛、司香、司饌の順序に詣り、先師位前に跪き、祝、帛、香、饌を奉じ、興つて門より出で燎所に赴むくを恭送す。

『望燎』 執政拜伏の東旁に轉立、西向して燎を望ませらる。司拜褥官は褥を撤し、祝帛の過るを待ち再び拜褥を布く、執政復位せらるゝや樂を作し、禮終る。贊引、對引官は執政を恭導し、大成官中門より出で、前引官、後扈官、侍從武官、侍衞、門引之に隨ひ、執政啓鑾あらせられ、警蹕扈從し、鑾府門に到れば樂を作し、扈從官は退く。

尙、同日には崇聖祠祭禮を行ふが、前と大同小異であるから省略するのである。

祭事既に終れば又「分胙」と云つて、つまり祭壇の犧牲は

牛一頭、羊十二頭、豚十二頭を執政に牛首一、全羊全豚各一頭を贈り他は參與せるものに分胙するのであると云ふ。

以上の諸條は何れも滿鐵弘報課編纂の「滿洲宗教誌」に依るものである。

尙、同書に「滿洲現在の文廟の概數を擧れば、舊省名奉天三五、吉林一七、黑龍江一五、東省特區一、熱河省八、興安各省その他を加へ、計七十八廟である」と記されてゐるので、尊孔の盛んなことは想像出來るであらう。

七　興亞の理念と儒教

「春秋戰國時代に於ける漢民族の難問題は、夷狄の侵攪と生活資料の缺乏とであつた。夷狄の患は前と變らないものであつた、が當時の生活資料の缺乏は決して自然資源の缺乏に因るものではなくして、諸侯が割據して戰爭ばかり續けてゐた爲、民衆は安んじて生活出來なかつたからであつた。孔子は目のあたりにかゝる情景を觀て、奮然として起ち周室を尊び、夷狄を攘ふことをもつて終身の理想とした。所謂「大」と「剛」の精神はかくして造成されたのである。ゆゑに孔子は嘗て、「大なるかな、堯の君たるや、巍々乎たり。たゞ天を惟れ大なりとす。たゞ堯これに則る」と感嘆し、又「吾れ未だ剛なる者を見ず」と說くことを觀るも、彼は如何に「大」と「剛」の精神を重視してゐたかがわかる。蓋し當時の諸侯は利慾に心を薰らせ、相互に仇敵視し、城を爭ひ、地を爭ひ干戈を交へてやまず、周室の尊嚴を顧みもしなければ、夷狄の侵擾に何の防禦もしなかつた、恰かも現今の封建閥の姿そのまゝであつた。孔子はかゝる情勢を觀て、先づ支那內部を統一し、力を協せて夷狄を防禦しようと思ひ、專ら「大」と「剛」の精神を提唱したのであつた。「大」の精神によつてのみ、よく己に異なるものを同化し包容することが出來、「剛」の精神によつてのみ、よく私慾に克ち外侮を抵禦することが出來る。所謂「仁」の一字は箇の「大」と「剛」の精神を總括したものである。」

と、陳高傭氏が「現代の支那文化」に於いて說いたものであるが、若し歷史の循環的な法則に從へば、今日の東亞の現象は春秋戰國時代の漢民族と類似するではないか、その難問題である夷狄米英は既に打倒されても、矢張り孔子の根本たる「仁」の精神は必要であつて、これによつて「滅私奉公」が出來、「協和萬邦」が出來よう。今や大東亞共榮圏完成の理念を契機として、歐米心醉の惡夢に毒されつゝあつた東亞固有の儒敎の思想は、此處に新しき時代の脚光を浴び、赫耀たる復興の光芒を輝き出さんとしてゐるのである。

文学近事

たとへば、かつての縣參事官の悲願について、藝文家はふかく想ひをひそむべきだとおもふ。福田一氏の『樺川閑記』(「北窓」)をよんで、弘報處編の『殉公烈士傳』や「宣撫月報」にのつた諸參事官の手記などを回想し、ここまできたはるかな歩みをおもひ、感慨をあらたにした。こんにち、第二建國などいふことばを耳にするとき、語呂あはせに類する輕薄さを感ずるのである。もとより、藝文の十年の道が、國つくりの本義からそれるものだつたとはおもはない。林房雄氏が古丁氏との對談(「藝文」でどのやうにいはうとも、私たちは「內地から偶然流れて來た」とされるやうな心情のまづしさ、いやしさにはゐなかつたはずである。しかしまた、未成未熟が建國の壯大をうけきれずにゐたとはいひ得るであらう。縣參事官の悲願とならぶものを、あげてさすことができぬのである。

とはいへ、十年の沈潛は、何ものかを孕んだはずである。宮井一郎氏の『都邑物語』(「作文」)は、序詞だけが發表されてゐるが、この長篇の意圖と構想とは充分にうかがへ、私たちの期待にたへ得るとみられる。氏の評論での倫理的な調子の高さは、この作品の基調ともなるであらうし、何よりも滿洲を愛し文學を愛する愛情のはげしさが、すでに私たちをうつのである。そこに、心底から建國十周年を慶祝し得る機緣があるとおもはれる。

ことばの問題には前號でもふれたが、大東亞戰爭の進展につれ、日本語の普及施策が大いに論ぜられてゐるやうである。西尾實氏もいふやうに、それは政治工作經濟工作に含まれるものとして考へられねばなるまい。この點、滿洲でも缺けるところはないか。滿洲では、協和會の諸工作に含まれる獨自の言語施策がなければならぬとおもはれる。さうしてこれに對しては文藝家協會——藝文聯盟が積極的に協力すべきだとおもふ。むろん、圖式的なやり方では、かへつて累を他に及ぼすかも知れぬ。しかし又、そのやうな工作に挺身するところに、作家錬成の道もあるのではないか。

「北窓」が、かつて哈爾濱日日の企てた報告文學の作者たちを育てようと努力してゐるのはいいことだ。菅、加藤、川原の諸家が、ここでいい芽を出してゐるし、この月には、木畑卯一氏の小說がみられる。性急に結果をいふことなく、あれこれの目先の新しさを追ふことなく、一つの企てについては、それを着實に育成していくことが、いちばんだいじなことだといへる。浮き足たつた行動くらゐ見ぐるしいものはない。信念は、いたづらにして語られるべきものではないのである。哈日といへば、諸新聞の藝文欄萎縮のなかに、ひとり氣をはくもののやうである。欄の大小がそのまゝ內容を規定するわけでもなからうが、編輯者の氣組はおのづからにそがれるであらうし、斷片的な仕事しか生れぬやうにもなるとおもはれる。

（仲　賢　禮）

滿洲の「季」について（下）

金丸精哉

四季を斯く裏づける

春　南滿洲——二月三月四月
**　　北滿洲——四月五月**

滿洲で最も溫暖な大連あたりでは、十二月下旬から戶外の池でスケートが出來るやうになるが、二月十一日の紀元節から十五日ごろにかけて氷滑場には危險信號の赤旗が立てられる。

このころから、すつかり春めいてきて早くも三月十日の陸軍記念日には、雜草の下萠を發見することがある。

南滿洲の河川の解氷がはじまるのもこの前後で、明治三十八年の奉天大會戰の時、三月九日に皇軍が渾河の氷上を渡つてしまふと、その翌日には解氷が始まつたことは有名な話である。おもしろいことは、內陸地方は氣溫が急に昇るので、この解氷が、南方の河口よりも、北方の上流地方から先にはじまり、その間一週間乃至十日の差があることである。一方北滿洲の河川はといへば、三月にはまだ堅氷がはりつめてゐて、やうやく四月に入つて解氷するのである。

大連の終霜は三月三十一日、終雪は三月二十七日となつてゐるが、北滿洲の新京や哈爾濱は、それぞれ終霜四月二十九日、五月四日、終雪四月二十三日、四月二十九日となつて居り、標高の高い興安などは終霜六月二日、終雪五月二十二日となつてゐる。

昭和十五年の春、筆者は大連を出發して奉天、新京經由哈爾濱まで旅行したが、その時の旅行記の一節にこんなことが記されてゐる。

——大連を發つたのは四月二十二日の夕方であつた。星ケ浦の櫻はまだ咲いてゐなかつたが、市中の櫻は滿開で、杏の花はもう盛りを過ぎてゐた。

——（註、翌日）奉天の杏の花は五分咲か七分咲といつたところであつた。大連のよりも紅梅を思はせるほどに紅味をおびた花が多く、私は、その花を見て、滿洲建國の年リットン卿以下の國際聯盟調査團一行を迎へたころの奉天を思ひ出した。たしか四月二十一日の夜であつたと思ふ。杏の花が一行の宿所に當てられたヤマトホテル前の中央廣場に咲きほこつてゐたのを今も忘れることができない。

——（註、その翌日）新京で見た杏の花は、まだ蕾が固く一週間やそこらでは綻びさうな氣配も見えなかつた。それでも白楊の並木は、粘々した新芽をふいてゐたのに。

——ハルビンでは（註・四日二十六日）まだ冬の眠りから覺めやらぬといつた風情で、木々は枯死したかのやうに味氣なく立ちつくしてゐるばかりであつた。

——關東州の方では、あれほど新綠が萠えでてゐたのに、北に進むにつれて次第に色褪せ、もう、新京から哈爾濱の沿線には、一つの綠も見ることはできなかつた。

——第二松花江附近は、ところどころ沼池があつて、枯れ葦が鏡のやうに空を映じた水面を緣どつてゐたが、その水面には胡麻をまいたやうに黑いものが點々と浮かんでゐた。よく見れば、それは鴨であつた。この三月中旬であつたか、公主嶺から南下して來た友人が「鴨の群とちやうど千山の邊でぶつつかつた。僕は急いで公主嶺にかへらなきやならん。もう二三日もしたら公主嶺邊りまでやつてくるだらうから」と私にいつた。私は「ほほう」と感心すると、彼は君が知らんとはをかしいね。それこそ、まつ黑になつて川邊に下りて來て、そんな時は棒で毆り殺せるぐらゐ、たかつてゐるものだよ」と話してくれた。その話をきいて十日餘りもたつた三月の末ごろ親戚の男が「錦州から射つて來ました」といつて小鴨を屆けてくれた。雁と鴨をうつて來たのださうだが、時季おくれのため大してとれなかつた、とこぼしてゐた。いま、わが汽車が驀進する沿線の沼澤地にその鴨群が下り、列車の轟音に驚いたものか沼池に浮いてゐた夥しい鴨は飛び上らう

とはせず、水面に水脈をひいて線路から遠くの方へ泳いでゆくのが見えた。私が、大連で友人の話をきいて一箇月あまりすぎてゐるのに、今ごろこんなところに鴨群がうろついてゐたのかと、今更らのやうに友人との對話を記憶に呼び起したのであつた。その夜哈爾濱の客舍で、地元の新聞を讀みながら、四月二十八、九兩日の日曜祭日を利用し、解氷後間もない松花江で新聞社主催の鴨獵會を擧行するといふ記事に私は興味を惹かれた。この三月中旬友人から鴨獵の話をきいた時が、南滿洲に春が動きそめた時であり、今また漸く河氷が啓開して春が兆さうとする北滿洲で鴨獵の話をきくことは、南北滿洲の春の推移と渡鳥の進度とを思ひ合はせて私には、なにかその因果關係が面白く感じられた。云々――

その年、四月二十八日の復活祭に、哈爾濱中央寺院の聖障の上に飾られてゐた花はすべて室咲きのもので、わづかに春の先觸れをしてゐるものは猫柳の芽のふくらみだけであつたが、その翌日、筆者は大連の星ケ浦で滿開の櫻の下で花見酒に浮かれてゐる市民を見て南と北とではかうも違ふものかと驚いたことがある。

とにかく南滿洲の春は早春の感じがながく、四月に入つて杏櫻桃李一齊に咲きそろふかと思ふと晩くも五月中旬までにはすつかり濃綠の葉に覆はれてしまふ。花が咲いて青葉になるまでの過程はまことに加速度的で、晩春などといふ感じは全然見あたらない。

特に北滿洲では早春も晩春もなく、木の芽が出たかと思ふと忽ち繁茂して夏になる。

わけて四、五月の候は氣溫の高低が定めない時で、昭和十五年五月十日の新京の如き午前四時には八度であつたものが午後四時には三十二度(華氏約九〇度)に上昇したことがある。つまり一日の中に冬と夏とが來たわけで、冬から夏へ一足飛びに移行する北滿の氣候もかうした氣溫の變化に左右されるのかも知れない。(以下森鷗外の詩文を引用)

二月

三日 ○こちらの寒さも一月三十日が寒いつめであつたらしい。零下攝氏二十五度といふのだ。けふはもう二十一度くらゐで少し暖になりさうだ。　大東山堡

○老いぬれば轉寝に脫がぬ頭巾かな　同

○鵲や積荷の上のはだれ雪

十四日 ○一月下旬からは始終晝中でも零の下だのにきのふ(二月十三日)はじめて零の上に七分ほどのぼつた。(中略)ひる頃家の南の方に出ると鳩だの雀だのたくさんに來てひなたに遊んでゐる。雪はひる少しとけて又夜になつてこほるのだ。　同

廿三日 ○だん〳〵春に近くなる方でひる中は零度より三度位低いばかりだ。其內零度の上になるだらう。けふは少し雪がちらついたが日が出るとすぐにやんでしまつた。　大東山堡

廿六日 ○蛇穴を出でなんとして下に向ふ　同

三月

四日 ○立つ塵に黃なる日仰ぎ土落ちてくろき渾河の氷をわたる。　渾河

十一日 ○寄生木に榮をゆづりて枯れぬべき老木に似たる國あらばいかに　奉天

廿七日 ○時候がやつと零度より下にさがらないやうになつたがまだ青いものなんぞは少しも目に見えない。風といふ程の風もないのにおもては一めんの土ぼこりだ。　同

廿八日 ○楡の芽のはる遠からじさに塗の喇嘛の伽藍にぬるき雨ふる　同

三十日 ○大車こぐるまむるる糧倉のかどのゆふべに霙ふるなり　同

四月

一日 ○丁度(三月)二十四日頃から一旦暖になつた天氣が又かはつて寒くなつて雪やら霙やらふつてけふはまだ北風がなか〳〵寒い。夜は又零下五度といふやうにもどつたしかしこれでもうおしまひだらう(中略)奉天のまちを見ようとおもつたが北風で顏がいたいやうなのでいそいでかへつてしまつた　奉天

四日 ○めぐむやと庭木の小枝ひき撓め幾度か見しあいなだのみに　同

七日 ○新墓の右に左に高黍のかり株ぬくと里びとむるる　同

十日 ○こちらはだん〳〵暖になる方だがあまり暖だともふ日にはきまつて午から雨になつて夜は雪になるといふ風だ。此二三日は雪のあとで又そろそろ暖になるもやうだ。　同

十五日 ○けふはじめて柳の木が少し青く見える。又草の芽も少し出て來た。　同

○おとろへの秋ならなくに先づ黃ばむ青柳の芽をもてはやす哉

十九日 ○いくさらがそそぎし血しほはだらなる跡よりもゆる草のさみどり　同

廿三日 ○春は來て見つ　海の上に
眠れる波の　底ふかく
沈みし舟の　かずいくつ
いづれか仇の　軍ぶね
いづれかは我　閉塞船

砂振ゆたかに　鷗とぶ
春は來て見つ　野の面に
假の葬を　あらたむと
ほる畑土の　香ぞかをる
仇も味方も　ひと色の
雲と棚引く　空とほし
綠かすかに　柳もゆ（春より）

廿五日　○この頃はこちらも草がだん／＼青くなつて來た。しかし柳に黄いろい芽が出たきりで木はまだ葉が一枚もない。　奉天

○繪はがきや春の朝餉の膳の上
○ながき日をめぐりめぐりぬ幾衚衕
○犁やのどけき畝のゆきかへり

三十日　○おまへさんの手紙に櫻のことが書いてあるがこちらはまだ今年になつて花といふものがない。二十七日に今の支那の天子より九代前の人（清太宗）の墓にまゐつた時たんぽぽとすみれがさいてゐたのがうれしかつた。それは奉天から半みち位のところで奉天まはりにはたんぽぽもないのだ。　同

○春來ても寂しかりけり遠目にはかくろき楡のはなのむらさき

夏　南滿洲——五月六月七月
　　北滿洲——六月七月

滿洲は寒暑が激しい。終霜を五月にまでも持越し、南滿洲より春の訪れが遙かにおくれる北滿洲さへ、六月には、もう立派に夏姿となつて南滿洲と步調を合はすばかりか六、七、八月の三箇月間は日本內地のどの地方よりも高溫となる。

日本內地では、揃つて八月に一年中最高の平均氣溫となるが、滿洲では一箇月早く、すでに七月に最高氣溫を現はすことも冬から夏へ移行する速度の目ざましさと夏の短さを物語つてゐる。

季節風の影響で、夏は雨が多く、海洋に支配される南滿洲の沿海地方に比し、海から遠い內陸地方、つまり主として北滿洲の奧地になるほど氣溫が急激に上る。

これまで觀測された最高極氣溫は一九一九年七月二十三日北滿洲扎蘭屯に於ける四二・六度であつて、日本では絕對にない記錄ださうである。また南滿洲のいはゆる蒙古寄りの鄭家屯でも、一九二〇年七月一日に三九・八度といふ高溫が觀測されたことがある。

これは、夏季大陸旋風が興安嶺を超えて北滿洲の平野に吹き下ろす時に生ずる熱風即ち風炎によるものと見られてゐる。

このやうに、南・北滿洲とも夏は暑さが酷しく、特にこの季節は大陸的氣溫の變化もやゝ緩和してゐるので、七月の等溫線圖に照らして見ても、南・北ともほゞ共通の季節を持つてゐるといつて差支へない。

このころになると、三月四月によく黄塵をまいて吹いた南西からするいはゆる蒙古風も吹き絕えて、南滿洲地方では南東風が卓越し、北滿洲では南風が吹きそよぐ。

雨の少い滿洲ながら六・七・八月の三箇月間は雨季に當り南滿洲では年降水量の約六〇パーセント、北滿洲では七〇パーセント强がこの時期に降つてしまふ。

これと反對に、日照時數を見ると、やはり夏が最もながくこの時期に限り、北滿洲の方が南滿洲よりは槪して日照時數が多く、夏至の日など黑河の如きは大連よりも一時間半も日が永い。また日本內地の等緯度の地と比較すれば年に一千時間以上も滿洲の方が天日に惠まれてゐることになる。

五　月

四　日　○こちらは今が春の初と春の中頃と一しよに來たやうなぐはひで桃だの杏だの李だの皆花がさく。（中略）○丁度去年五月八日にこちらに上陸したのだつた。あの時とくらべて見るとこの邊は少し寒いやうだ。　奉天

六　日　○高き低きかはそひ柳川やなぎ絲ふた筋空にたなびく　榮家屯

○春風や種蒔く器叩く人

七　日　○山のつかさの　淺茅が中に
さくや叢々　むらさきの花
貴妃の亡骸　巻きし茵か
はた將軍の　垂るゝ印綬か
おきな草てふ　名をな咎めそ
美人英雄　誰かは老いぬ（滿洲翁草より）　同

十五日　○雨はけふ　やみぬれど
雲晴れぬ　いぶせさに
榻移す　門の外の
ほの暗き　夕まぐれ
ゆくりかに　聞え來る
黑川の　とほ蛙（蛙より）　慶雲堡

○こちらも此頃は杏の花が雨でちつてしまつて野原は眞青になつた。もう程なく夏になるだらう。例

の蟲（註・南京蟲）がそろ〳〵出たのできのふの晩から又簞笥の上にねる。

廿五日　○こつちは春が短い間でもう少しづゝあつくなるやうだ。雨の日にはうらは川で蛙がなく。　同

三十日　○時候は青葉がしげつてだん〳〵あつくなるばかりだ。　同

六　月

一　日　○おきな草翁進ひたり中三十日ながきは老の我身ひとゝせ　同

○南山の裾野小道にこぞ見つる馬藺はさきぬ鐵嶺の北に

四　日　○扨其おきな草だが此頃出て見たらもうこんなにほんとのおきなになつてゐた。花をとつてからまだ三十日にはならないのに。　同

九　日　○この土地も今頃の時候はあまり暑くもなく凌ぎ好いが支那人の家がきたなくて蟲にさゝれるにはこまるよ。　同

○中空にかゝると人の見し船のあととめかねしわが恨かな（註・人の蜃氣を見しと聞きて）

十八日　○むれとまる蠅なかりせばうすものの窓にみる雲めでたからまし　古城堡

○うまき餌をむさぼる蠅のたかどのにこもりて餓ゑて死にけるかな

十九日　○こちらは丁度東京の暑中くらゐにあつくなつて閉口だ。　同

○えりきらひ白き扇を買ひにけり　奉天

○人前を賑々として團扇かな

廿四日　○枕邊にあるじまうけの花柘榴あかきこゝろをめでて寢にけり　鐵嶺

廿七日　○此頃は夕立が來てむしあつい。そして蠅が多くなつてこまるが紗をまどにはつたのでよほどへつた。蚊が一ぴきもゐないのは仕合せるよ　古城堡

七　月

一　日　○こちらは今も毎日少しづゝ雨がふつてうるさいが朝夕はすゞしい（中略）汗の出るのはひるなかちよひとくらゐだ。然し今月は一度あつくなるだらうとおもふよ。（中略）こちらは蠅がうるさいばつかしで蚊のゐないのは結構だよ。まだ一ぴきも蚊はゐないよ。　同

六　日　○青空のもとに露けき黍畑やあさひ浴み立つ黃牛ひとつ　同

○朝日さす畑の高黍まだ低きなかにくさぎる紺靑のひと

七　日　○馬藺の晩花　しじまる野を
鈍色ごろもと　夕おほふ
おもはずよ　人のかげ
垂るるくろ髪　ふさやかに
かこめり月の　淡き面（あこがれ・より）

八　日　○此二三日あつくてこまつたが今朝から雨でけふ一日はよほどすゞしくていゝ心持だ。そのかはり道はぬかるみで大へんだが用事がないから出ないでゐる。いまこれを書いてゐると螻蛄といふむしが庭で澤山ないてゐる。東京あたりでもゐなかではなくかもしれないが少しも氣がつかなかつた。こなひだ掘つて見たので螻蛄だといふことがわかつた。　古城堡

十四日　○むらさきの渦雲ちらし段雲のうへに朝日ののぼりたるかな　同

○南風木末ゆるがす午空のちぎれ白雲よれつもつれつ

十六日　○こちらはきのふから大雨であつさはしのぎよくなつたがものが皆しめつぽくてちやうど東京の梅雨の時のやうだ。　同

廿一日　○こちらは土人の話に今月一ぱいで暑さがおしまひだといふからもうしめたものだ。東京よりは八月はらくだらう。　同、

廿九日　○あまの川澗れてみそかに夜ごとあふ星のはぐらん雨かとぞおもふ　同

○此頃は毎日々々雨で一寸晴れることがあつても道がかわかない内に又降るのだ。けさは起きた時はどしやぶりだつたが又一寸やんでところ〲は雲が見えてゐる。晩までには何べん天氣がかはるやらわからない。

○相かはらずさゝげときうりとをたべてゐる。

秋

南滿洲——八月九月十月
北滿洲——八月九月

滿洲の夏は雨が多いが、八月になると、雨の日は寒冷をさへ覺える。そして、一雨ごとに冷涼の氣が増してくる。大連を除いて、他の各地は七月の平均氣溫が最も高いが、八月に最高を示現する大連でさへ、立秋の八月八日ごろには流石に秋めいてくる。そして、毎年八月中旬の日曜日を最後として近郊の海水浴場もめつきり淋しくなる。

八月に秋を感ずるのは、やはり滿洲の方が日本內地よりは顯著である。

殊に北滿洲にあつては、日中はひどい暑さを覺えるが、夜

の秋冷は一入である。八月末にもなれば、哈爾濱のタクシーの露人運轉手など毛皮外套を用意してそれを着るほどである。

そして興安嶺以西の興安、海拉爾、滿洲里等は九月の上旬から中旬には初霜が降り、興安の如きは八月末に降霜を見ることすらある。南滿洲の各地は概して初霜は十月に入つてからであるが、哈爾濱、克山、齊々哈爾、黑河、索倫等は九月下旬に降霜があるのが例となつてゐる。そして木々は紅葉する遑もなく落葉する。

かうして、束の間の春を持つた北滿洲は、また一瞬のうちに冬にかけ込み、興安の如きは九月末に初雪が降る。

八月

四日　○蟲干や朱の色あせし節はかせ
　　　○青麻刈りて種つみすてし畠かな　古城堡

六日　○こちらは二日ほど雨がやんで少し涼しくなつてゐる　同

十日　○こちらはけふは少しむしあついがもう朝晩のやうすが少し秋らしくなつた。東京よりは早く涼しくなりさうだ。　同

十二日　○病める王あさとぶらふと道芝の露わけゆけばこゝろも冷えぬ

十三日　○こちらはひる中少しあつい日もあるが朝晩はもう大ぶすゞしくなつてどこか秋らしくなつて來た。夜は月がさえてむしのこゑが畠一めんにする。(中略)たべものはたうなすがあるが水つぽくてだめだ。茄子が奉天から北に來たら少くなつてめつたにたべられない。　古城堡

廿五日　○こちらはもうまるで秋びよりだ。それでもひる中外に出てあるけばまだ少しはあつい。朝ばんはひやひやする。　同

九月

一日　○今日は大雨の中を六里ほどあるいたのでくたびれた。　古城堡

七日　○隱沼にふみこみし足えもぬかで草はむ駒をにくみけるかな　六家子

八日　○秋びよりであつくも寒くもないから毎日あるいても苦にもならない。　古城堡

十七日　○此二三日急に寒くなつて東京の十一月頃の天氣のやうだ。しかし雨が少いのでいつも空がすみきつてなか〳〵いゝ心持だ。　同

廿一日　○その後もやはり天氣はよくつてちと寒すぎる日があるとおもふと又ぬくい日があるといふ工合だ。　同

廿二日　○魂を招くこと遠からず秋の風　達連豪

廿九日　○高粱といふものは馬にのつた人の頭より高く出來るのだがこの頃それを皆刈つてしまつたのでそこらぢゆうががらんとしたやうになつた。少しづつ寒くなつて來る。しかしまだ霜も氷も見ない。　古城堡
　　　○西瓜黄なる核は瑇瑁の黑斑かな
　　　○鬼灯やおとうと呵る姉の口　同

十月

三日　○まだ寒さもあまりひどくはならない。冬服にシャツ二枚で丁度いゝくらゐだ。毛皮の胴着はまだ一度しきや着ない。けふなんぞも晴れて風がないからいつものとほり小春日和のやうないゝ天氣になるのだらう。　古城堡

七日　○やどり木や高きに居りて末枯るる
　　　○何窩棚何屯黄なるもみぢかな　長嶺子

九日　○まだ霜も氷も見ない　古城堡

十五日　○こちらは昨日から時雨といふやうな雨で寒くなつたから又去年の毛皮外套を出してきた。　同

十八日　○去年とは寒さのぐあひがちがつてきのふやつと霜と氷とを見た。木の葉は四五日のうち皆おちてしまつた。　同

十九日　○唐突や初雪やがて初ふぶき　同

廿五日　○此頃二日つゞいてこちらは南風のひどいのがふいたのできのふは急に又あたゝかになつて午は十五度十六度(攝氏といふ分の寒暖計で)になる。しかし曉方には零以下になるのだ。又北風になるとずつと寒くなるのだらう。　同

卅一日　○けさは氷が大ぶあつく張つて外に出ると耳たぶがいたむくらゐだつた。その時の溫度は零下五度半といふのだ。だん〳〵冬らしくなつて來る。　同

冬

南滿洲——十一月十二月一月
北滿洲——十月十一月十二月一月二月三月

滿洲の冬はながい。それは北滿洲ほど著しい。

北滿洲は世界最寒の地として知られるシベリヤのヤクーツク地方を眞北に控へ、それに朔風を防ぐべき高山もないので寒風がそのまゝ吹き通すので寒氣凛烈である。

それも、北方ほど寒いといふのではなく、中部の平原地方よりは西部の大興安嶺山脈や東部滿洲の鮮滿國境をなす山岳地帶に於て特に甚しい。一九二二年一月十六日大興安嶺麓の免渡河では零下五〇・一度といふ低極が觀測されやはり同年一月十五日に零下四九・三度を示したことがある。

南滿洲でも開原など零下三六・六度を示したことがこれまでに二度もある。

寒氣の最も酷しいのは南・北滿洲とも一月であつて、南滿洲では一月下旬の寒さが底を割ると間もなく春めいてくるが、北滿洲では例外なしに三月まで平均氣溫は零度以下にあり、依然寒威嚴烈である。

累年の平均氣溫が零度とある日を調べて定められた次の採暖期間を見ても、南滿洲と北滿洲との冬の長さがほゞ想定できようと思ふ。

南滿洲	安東地區	十一月五日―三月二十日
	奉天地區	十一月一日―三月二十五日
北滿洲	新京地區	十月二十六日―三月三十一日
	哈爾濱地區	十月十六日―四月十日
	齊々哈爾地區	十月十日―四月二十日
	海拉爾地區	十月五日―四月三十日

初霜も最も寒い興安嶺以北の地や中部平原地方の北滿洲地方にあつては九月上旬から下旬にかけて殆んどその洗禮をうけ、南滿洲の熊岳城、鞍山、奉天、錦州等は十月上旬、大連旅順近傍だけが十一月に入つてからであつて、旅順の十一月十三日が最も晩い。

併し、空氣の乾燥した滿洲であるから、初霜を見る以前にすでに氣溫が零度以下を示すところも少くなく、蒙古寄りの鄭家屯、洮南の如きは最低氣溫零度以上の日は無霜期間より十一日乃至十二日も短い。從つて、初霜以前にすでに冬の襲撃をうけるものと見ることができ、初雪は初霜より稍おくれるのが例である。

北滿洲の松花江水系は、十月にはすでに流氷を開始し十一月には殆んど例外なしに結氷してしまふが、南滿洲の遼河など、十二月末に結氷を見ることは珍らしく、先づ一月に入るのが通例であつて、ここにも南・北滿洲の冬の消長が見られると思ふ。

とにかく、冬に入らうといふ滿洲の十月ごろは、春の四、五月の候と同じく氣溫の高低が最も發達する時期なので、冬から何時の間に夏となつたのかわからぬやうに、夏から冬への推移もまた目ざましい。

なほ、滿洲の各地は一年三百六十五日の中、先づ百日內外の快晴日數を持ち、決して「曇りがちなる旅の空」ではない。特に十、十一、十二、一、二、三月等は快晴の日が多く、各地いづれも一箇月の中十日乃至十五日ぐらゐ快晴の日があり、單に天日に惠まれるだけでなく、この時季に限つて濕度

が高く、且つ風速も弱いので、寒氣も緩和され氣溫表で見るよりは遙かに快適な冬である。

十一月

六日　○こちらはおひ〱寒くなつて今朝は零下十二度五分といふのだ。ひる頃も零まではのぼらない。　古城堡

七日　○飾おろしし　頭のさまか　同
いづくも同じ　苅迹の野を
南より來し　まらうど風に
そそのかされし　そぞろありきよ
黄なる七射る　眞晝日映ゆし
地隙にわたす　土橋を過ぎて
しばしたたずむ
汝にわかるる　地隙に臨み
岬のごとく　せばまり出づる
丘のつかさに　楡の木立てり
秋にあらがひ　くろみし青葉
木枯にこそ　かつて鳴りしか
見よ馴鹿の　角めく枝の
そそり立てるを
楡のもとには　わがふる里の
土ぐらに似て　ややちひさなる
城隍廟ぞ　いつかれにたる
乾ける磚瓦　多の日を浴む
ふとさし覗く　龕のうちには
塑像はあらず　風ふきいりて
木の葉からから
（古城堡・より）

九日　○けふはきのふあたり南の風がふいたのですこしあたたかい。あたたかいといつても零の上に出るか出ないかといふ位なのだ。　同

十八日　○こちらは此二三日も日中は零の上を三度から六度まで位のぼるからまだひどく寒くはない。天氣もいゝ方だ。　同

卅一日　○乘りいるる川の渚のうすらひの碎くるおとに駒ぞいざよふ　開原

十二月

一日　○入海の氷のうへの日の出かな　旅順
○水鳥や閉塞船の艫にうく

四日　○日のぼるや多の山山かげひなた　大連
○山開けて汐さゐ寒く沖にたつ

六日　○多の夜や出稼の妓宴に侍す　營口

九日　○十二月七日の晩賀古のところ（註・遼陽）にねて夜手水に出て見ると霧が一ぱい立つてゐたが入日　古城堡

の朝は久しぶりの雪であつた。そのうち雪がやんでごくむかしの古家のあとを見にいつた。

十六日 ○いよいよ零下二十度がつゞいて金ものが手にひツつくやうになつた。 同

廿二日 ○此まへの手紙を出してから雪になつて一晝夜ふつたのでめづらしく四五寸つもつた。それから寒が零下二十三度くらゐになつた。スウプを勝手から茶わんに入れてもつて來るのが途中でにこごりになつてしまふ。實にをかしいやうだ。 同

廿八日 ○短日やかしこう詰めし行李かな 同

卅一日 ○きのふからは中々の寒さで此手紙を書くのに半行書かないうちにインキがこほつてしまふのだから針のやうな氷を一々ふきとつて又書くのだ。 同

一月

四日 ○一日から妙にあたゝかになつてひる中は零度の上が四度位だから此二三日は東京の多とそんなにかはつた事はない。毎日晴天で雪はちつともふらないたゞ夜中から朝まで寒いので東京とはちがふのだ。 十里河

十五日 ○一月になつてから十二月よりは餘ほど暖でしあはせだ。朝の霜は雪のやうで木の枝には花のやうに氷がついてゐるがほんとの雪は一月になつてからふらない。 同

廿四日 ○こちらは一月になつてからあまりあたゝかで二十二日に雨になつたところが夜雪にかはつて二十三日半日雪がふつて今日は急に零下十六度七分といふ寒にもどつた又ペンの尖のインキがこほつて此とほりボテボテになる。こゝが滿洲のところなのだらう。しかし二月十日頃までしのげばまづ安心だらうとおもふよ。 同

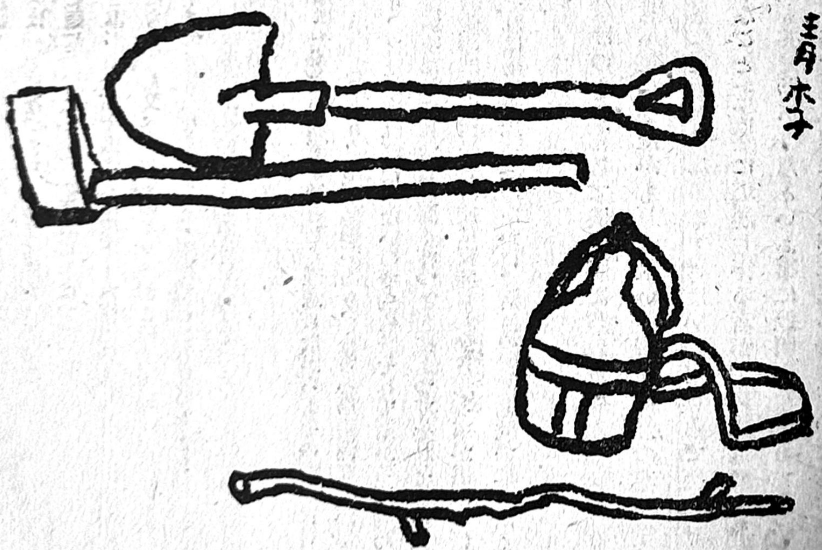
廿八日 ○きのふ（中略）丁度雪の日ではじめて雪の中の行軍をやつた。毛皮をきて馬にのつてゐれば寒くはないが外套のえりの内がはの毛と髭とが一しよにこほつてくつついてしまふにはおどろくよ。（中略）けさは雪はもうやんでゐる。一たい此邊は寒いばかりで雪はたんとはふらないのだ。積るのも二寸たらずだ。しかしけさなんどはすきぐしをつかつて一寸おいてあとで其櫛のさうぢをすると櫛の齒のあひだから氷の針のやうなのが飛び出すにはあきれてしまふ。 同

卅一日 ○うゐ雀こごえ小雀野におちて雪にはぶくを犬のみいでし 大東山堡

印度洋海戰

梶原寅次郎

ベンガルの雲砲口に灼けたらむ
灰色の印度となせる彼等撃つ
かの自治の青芽摘みてし者を撃つ
耕氓の枷うち切らすために撃つ
釋迦牟尼の裔をあなどるやから撃つ
勝利の渴（かつ）一氷片を欲しけむ
赤道に向き一兵に手紙書く



歴史的觀點の意義 〔文化時評〕

桐　天　吉

　四月八日附の哈爾濱日日新聞で山田清三郎氏が滿洲文學の行方を論ずるに當り、大東亞文學と滿洲文學の關係に就て觸れてゐる。

橫の理想と縱の理想

　私が大東亞文學といつたのは便宜的な名稱であると共に、もちろんそれには一定の理念を伴はせたものであるのはいふまでもない。大東亞建設の精神を根柢に含み、ひろく大東亞共榮圏の諸民族に讀まれ、愛されるやうな文學の總稱を、私は、大東亞文學と假にいつたのだつた……しかしさうはいつても、それがために、各國の國民文學乃至民族文學の獨自性や特殊性が、そのなかに解消されると考へたり、また解消すべきであるとするものが、假にあるとすれば、それは誤りも甚しいもので、いひかへるならば、大東亞の建設をひとしく理念しながらもそのなかに日本文學あり……中國文學あり、南方文學があり、もちろん滿洲文學があるべき筈であり、またなければならないのである。そして斯かる區別乃至特徴を、各自がゆたかに且つ匂ひ高く持つことによつてそれぞれの文學は、ひろく共榮圏内の各國民と民族に支持され愛される事が出來るばかりでなく、それは更に世界文學のなかに、獨自の光芒を放つにいたるのである。

　これがこれだけのものとして僕の眼に觸れたのなら、それ程僕の關心を惹かなかつたかもしれない。實に當然の事が當然なる用意に於て言はれてゐるにすぎないのだからである。所がこの當然なことを當然に理解し得る者が、文化人の上層部に於てすらも甚だ尠いのだといふ事に近頃また更めて氣づかされたので一筆蛇足を加へるの要を認めるに至つた譯である。

　最近ある美術家の會合で「我々は今日の任務に應へる事も勿論重要であるが、だが又明日の美術を建設するといふ、より重要な使命がある。從つて今日の我々の仕事を若し宣傳美術的なものに局限して仕舞ふ事は、明日への建設の道を歪め去る虞れがある」といふ意味の事が強調されたと仄聞する。この短い言葉から尠くとも三つの重要な藝術論上の問題が抽出されてくる。

一、今日の任務と明日への建設とは同一線上にあるか、併行線上にあるか。

二、國策藝術と宣傳藝術との同異。

三、國策は藝術の領域を局限するか。

　而もこの問題は三者何れも密接に關聯し合つて居り、一つが徹底的に究明されゝば他も自ら氷解すべきものである。

　山田氏が大東亞文學の建設といふ理想を、箇々の各國各民族の特殊的な文學建設そのものの中に實現しようとしてゐるのと同じ意味で、明日の藝術の建設といふ理想も、今日の任務の完遂を通じてのみ達成され得べきものである。今日に代つて明日があるのではない、今日そのものが明日に向つて流れて行くのである。明日は今日の否定ではなくてその發展である。而も發展の契機は常に今日そのものの中に含まれてゐるのである。

　今日と明日とを機械的に切り離さうとする考へ方は、多くの場合今日に於ける藝術家への國家的要請と藝術家自身の內面的藝術欲望との對立もしくは併立から生れてゐるものだといふ事を剔抉しておく必要があらう。國策藝術とは當面的なもの、自己本來の意欲は永遠的なもの、さうした觀念を前面に強調することの蔭に、實は未だに淸算し切れない藝術的個人主義が橫はつてゐるのだ。

　對象への感受性を研ぎ、內容の構成と表現の技術を磨くといふことは、今日の任務を完遂せんとする努力の中に充分統一せられ得るし又しなければならぬ。我々が今日の任務にさへ後れないならば、今日そのものが明日に流れてゆくやうに今日の藝術がそのまゝで明日の藝術を築いてゆくであらう。明日を築き得ない藝術はすでに今日の藝術ですらあり得てゐないのである。

國策藝術と宣傳藝術

　國策藝術を當面的なものとする考へ方は、それを簡單に宣傳藝術と同一視してゐる輕率さからも來てゐるやうだ。美術

でいへば色々な政治的なポスター若しくはその意味の强いものを書く事である。もしポスターを象徴美術の範疇に入れうるとするならば、ポスターは國策美術に違ひなからう、併し國策美術はすべてポスターばかりでないこと勿論である。國策といふものを綱目のまゝ抽象的に受取り、それを性急に藝術に直譯しようとするところから、美術だけでなく一切の藝術がポスター化してしまふのだ。藝術は常に具體的なものである。この具體的なものでなければならぬといふ至上命令が藝術の道を困難にしてゐると同時に、それだけに又藝術の力を强大なものとし、國民總動員運動の組織者としての有力なる役割をも荷ひ得しめてゐるのだ。「儲金をしませう」といふ一句のポスターよりも儲金なき生活が如何に悲惨であるかを描き、わけても現時に於て儲金の要請が惡性インフレーシヨン防止の必須課題として取り上げられてゐる所以を、例へば二十年前のドイツに於ける恐るべき生活破壊の惨禍を通じて描き、又は儲金のために、個人生活と國民生活の統一的向上を目ざして努力してゐる者の美しい精進振りを描く、とか言つたやうな藝術作品が、どれだけか强い效果を有してゐるものであるかは論を俟たないところである。

國策といふものは全國民の全生活を離れては存在しない。從つて縱令その掲げてゐる綱目は簡單であつても、それの國民生活に於ける現れ方は實に複雜多様な筈だ。往々にしてといふよりも實に屢々「國策に即應するといふことは藝術の活動範圍を狹く局限するものだ」といふ叫び又は呟きをきくが、それは國策が藝術を局限するのではなくて、その藝術家が國策を局限的にしか理解しないからである。而もこの認識を局限するものは、單なるその藝術家の觀念の能力的限界なのではなくて、國策を自己の全生活の上に正しく受取つてゐないといふ、國民的實踐の質量的限界なのだ。國策の抽象的な各項目を、廣汎な全生活に具體的に滲透させ、行住坐臥、擧手投足の末端にまで流露すべきものとして、いはば生活的に翻譯することこそが實に藝術家の任務なのである。

無慈悲に剔り出すところ、現代程市民生活の表裏を二重にしてゐるものはない。にも關らず今日の藝術家達はこれを殆んど描かない。時局の壓迫に喘ぎ、惱み、往々にして蔭では仄かなる怨嗟をさへも持ち乍ら、表面ではすつかり順應し切つてゐるかの様な美しげな顏をつくり、その空々しさに堪へ得ない者は强ひてさうした問題に觸れることを避けてゐる。如何なる場合にも藝術は眞實を描く事を要求してゐるのに、今日程眞實の描かれることの尠き時代はないのである。玆に

今日の藝術的萎靡の最も根本的な理由があるのではないか。

藝術家に對する時局の束縛は、殆んど總ての場合、その素材を局限するものではなくて、その素材の扱ひ方を指定するにすぎない。從つてそれは束縛ではなくて方向づけであり而もその方向づけたるや「聖戰完遂、大東亞建設」といふ實に一般的なものである。これをしも「束縛」と感ずるのなら、それは聖戰完遂の大目的そのものに反撥を感じてゐるからだといはれても仕方がない。束縛を束縛でなくする道は、それを斷ち切るべからざる時は、束縛するものを自分自身の意志內容に完全攝取してゆく外にはない。即ち我々は國策に徹底順應することによつてのみ國策の束縛から解放されるのである。

國策に順應しきれなくて、ともすれば漏れさうな愚痴や怨嗟を根絶し得ないならば、正直にそのことを書いたらよいではないか。誰人にせよ、さうした凡夫らしい弱さを自他に對してはづかしいと思はないではゐられないであらう。そしたら自分は愧かしいと書けばよいではないか。愧づべきことを愧かしいと書く時、それは自らにとつても眞實であり、また國家に對しても立派な御奉公の藝術となるのである。いくら立派さうなことばかり書かうとしても、それが嘘であつては力强い藝術になり得る譯がないし、まやかしものの藝術的破綻だけが氾濫する時は所謂國策藝術への輕蔑を生み出し、時局便乘の惡名も被せられ、結局は神聖なる國策への冒瀆となり叛逆となりをはるの外はなくなるのである。今日の藝術家達はどんな意味で素材領域の狹隘を歎くのか、國家に對し、兵隊さんに對し、すまぬ愧かしいといふことを書くだけでも實に多種多様、材料はあり餘つて困る程ではないか。

歴史的といふこと

最近「歴史的」といふ言葉が屢々使はれてゐる。歴史的入城式とか歴史的臨時議會とかいふ場合は單に青史に記錄さるべきといふだけの意味であるが、大東亞戰爭の歴史的意義とか、世界新秩序の歴史的進行とかいはれる場合は、世界進展の客觀的必然性といふ意味に迄深められてゐる。即ち日獨伊三國を樞軸として洋の東西に展開されてゐる未曾有の大戰が、從來の帝國主義的恣意に基く侵略戰と全く本質を異にし、一方には個人主義的民主主義體制の打破、他方には植民地、半植民地の解放、而して廣域共榮圏の編成による高次の平和體制建設といふ聖圖を、新しき歴史哲學の體系づけに於て理論的に武裝せんとする試みの表れである。而もこの新しき歴史哲

學の歴史的特徴は、それが倫理的色彩を强烈に匂はせてゐるといふ點に見出される。四月の雜誌で目についたものだけでも中央公論には「東亞共榮圏の倫理性と歴史性」と題する座談會があり、滿洲では北窗が前田鷹衞氏の「世界史の問題」を載せてゐる。（就中前田氏の論策は甚だ眞摯なものであり一般的論理として剴切なものを多く含んでゐるが、問題の大きさに比して紙數が制約され過ぎてゐるため、緻密な具體性を缺き、この儘では隨處に論理の飛躍をさへ感じさせてゐるので、この檢討は重要ではあるが後策を待つて他日を期する外はない）

所謂「複雜怪奇」を極める世界事象の慌しい繼起、非常時を常時とする嚴しい國內體制の急速な再編成に伴ふ國民生活の各面に於ける壓迫・犧牲といふものを、世界新秩序進展の客觀的必然といふ一本の綵に結びつけて一貫的に解明しようとする努力は、勿論絶對的な意義を持ち焦眉の急を要する課題に違ひないのではあるが、この必然性と合理性の究明を急ぐあまり、歴史的といふ言葉の濫用が却つて非歴史的な獨斷に陥らうとしてゐる例をぼつぼつ見受けるのである。

必然とは原因から結果への内面的展開の法則をいふものである。而も今日の結果に於ける昨日の原因は、同時に一昨日の原因に依る結果に外ならぬ。この法則を無限に遡る時、過去に於ける一切の原因は、原因である前に先づ結果だつたのであり、その結果は各々すべて歴史的必然として現れたものである。

大乘佛敎の大成者として銘記される印度の龍樹は、二千年前、純粹理性に於けるカント的二律背反を明快に剔抉してゐるが、その代表作「中論」の中で原因と結果に對して次の様な事を言つてゐる。

原因も結果も存在しない。もし結果が原因の中に有るものだとすれば、既に有る結果を更に生むといふ事は意味がない。もし又結果が原因の中に無いとすれば、無いものを原因は生み得ない。

是は原因と結果とを別箇のものと考へる機械的思惟に對する批判である。原因が先づあつて、そこから結果が生み出されるのではない。ヘーゲルが道破した様に「原因そのものが自己を結果に向つて運び去る」のである。從つて歴史を無限の原因と結果との空間的時間的集積として觀る事は誤りで、それは久遠の昔に於ける原因が永刧の彼方なる結果に向つて自己を運び去るところの無限不停滯の流れに外ならぬ。歴史を斯る客觀的必然性の内面的展開の一貫性に於て把握する時は、過去と現在と未來とを觀念的に區分する事は不可能となる。かくて我々は次の樣な事を反省せしめられる。

我々が現在國家の總力と尊い血肉を擧げてたゝかひつゝある世界新秩序再建の聖業の歴史的意義が、現段階に於ける世界共榮の理想達成方法として最も合目的な點にあり、その倫理性の追求のために個人主義的舊體制の禍惡を徹底的に芟除しなければならぬといふ事は論を俟たないとしても、個人主義體制＝それは政治的には民主主義となり經濟的には資本の自由競爭主義となつて現れた＝の何もかもが、その發生から現在までの過程一切が、唯單に不合理で害惡以外の何ものをも有しなかつたものであるかの如くに貶斥し去るといふことは、自らの據つて立つ歴史的方法自體の否定となるのである。我々は、封建的身分關係の固定された不合理さから人間を解放し、ギルド的生産關係から偉大なる生産力を解放して、今日の産業と文化との輝かしい遺産を作り出した個人主義諸體制の歴史的な役割を過少評價してはならない。この段階を經る事なしに、封建的秩序そのものの上に今日我々が築かんとしつゝある世界新秩序を一足飛びに建設することなどは出來なかつたのである。恣意的利潤追求とか、自由競爭主義に基く無計畫無統制の生産活動とかは、今日に於てこそ社會秩序の破壞的契機となつてゐるけれども、その當時に於ては明かに社會的生産力と國力增强の推進力となつてゐたのであり、今日の新秩序建設の構想なるものもその舊秩序の偉大なる遺産そのものの上に築かれんとするものである。即ち我々の世界新秩序＝當面的には大東亞共榮圏＝建設の仕事が、遙なる肇國精神に基礎づけられ、その理念の輝く展開であることは勿論乍ら、この肇國精神が明治大正の時代に歴史的展開を中斷されてゐたのだと考へる事は誤りであり、寧ろ肇國以來不斷に生成發展して來た日本精神が、明治大正時代に於ける歐米的秩序の日本的攝取を通じて、今日の新しき秩序へと自己を運び去りつゝあるのだと考へねばならない。舊秩序否定の倫理性も亦この舊秩序自體の中から生れたものである。而して、經濟と文化との驚くべき發展が、全世界を不可分に結合し、地理的分散性を統一し、實感距離を著しく短縮した事により、自らを運びゆく肇國精神は、時間的な質的な展望だけでなく、全世界を光被せんとする空間的量的な展望を現實的に持ち得る事となつたのである。

今や世界は、世界の舊秩序自らが新秩序に向つて自己を運び去らうとしてゐる過程の陣痛に苦悶しつゝある。米英はその舊秩序に於ての支配的特權者の恣意によつて歴史の齒車に抗はんとしてその自滅を早めつゝあり、われら樞軸陣は歴史の齒車の起動點に立つ事によつて燦たる巨歩を進めつゝある

神武天皇御卽位の際に宣明し給へる八紘一宇の聖旨は今や名實共なる世界的顯現への現實的段階に達し、日本精神はそれの本質的な發展に於て今や大東亞精神となり、地球を貫く世界精神とならうとしてゐる。この日本的理想の世界的達成と、世界秩序自體の發展段階が斯くの如き全さに於て統一され得てゐる時代に生れ合せた歴史的光榮に勇躍する一方、今日のこの歴史的偉業の主導權を日本民族が執り得た必然性を既に二千六百年前の昔宣明し給へる御英旨を欽仰し奉ると共に、この現實的諸條件を成熟せしめてくれた舊秩序一切の遺産を歴史的に評價し、正當なる感謝を惜しんではならない。

固より是は、禍悪の根元芟除への手を緩める事を意味するものではなく、寧ろその手を一層嚴しく勇敢にすることとこそが、舊秩序自體の歴史的脱皮過程に順應することに外ならないのであるが、唯、歴史的意義を强調しながら歴史的意義の歴史性を忘れ去るといふ愚に墮ちないやう注意したいのだ。これは藝術上の諸問題にもそのまゝ當嵌るのである。

民族問題の内容も、日本に於てあつた大和民族のみに卽しての學的體系は、五族協和の上に立つ新興滿洲國の中ではそのまゝには通用しないし、なほまたこれとは別箇にあつたソ聯的民族主義、國際聯盟的民族主義等といふものを、それの發生した時代と環境との具體性から切り放して、現在の歴史的觀點から平面的に比較考究し、どれが正しいとか誤りとかいふことも正しいとはいへないのである。我々は眞理といふものが時間と空間とに超絶して存在するといふやうな妄想から解放されなければならない。眞理もまた歴史的なものなのである。これを忘れた妄想に憑かれてゐる限り、我々は我々の主觀的條件を超えた歴史の目まぐるしい進展に飜弄されて、舊き「眞理」を護り貫くための苦しいコヂつけに草臥れ果てねばならないのである。

美しき言葉の刺繡

本誌五月號は二篇の後期ロマン派的な小説を載せてゐる。

檀一雄氏の「魔笛」は美しき言葉と、美しき哀愁との室内樂である。「魔笛」といふよりも「靈笛」といつた方がよろしい。但しそれは靈妙の靈ではなくて幽靈の靈である。この笛吹きは足を持たない。どこに立つてゐるのか、どこへ行かうとしてゐるのかわからない。宙に浮んで、たゞ美しい音をたてゝゐるだけである。

玆では「兄」と呼ばれる悲劇的な幸福にみちた天才の追憶が、限りなき尊敬と盡きざる愛慕の抒情詩として、纎細な感覺といふよりも寧ろ巧緻なイメージの構成技術に於て、いともあてやかに繰り展べられる。我々は屢々そのイメージを飾る言葉の刺繡に陶醉されかけながらも、遂にマスクの上から接吻されてゐるやうなもどかしさに焦立たざるを得ない。作者は「亡兄の巨大な夢の追跡」について、具體的には何も語つてはくれず、登場してくる人物の生活も思想も環境も何もかもが漠として摑めず、哀愁にみちたロマン自體を抽象的に追求してゆく、宙に浮いた詩情の無意味な交響があるばかりだからである。

新京には、テーマの追求と、感情のニュアンスを無視した、種々の樂器の音を交響させるだけの音樂團がある。圖案畫もまた藝術であるとすれば、音の圖案畫ともいふべき其の種の音樂＝實は音だけあつて樂はないのだが＝も藝術であらうし、勿論イメージのカンバスに言葉を刺繡した檀一雄氏の「魔笛」も美しい傑作であるに違ひない。

桐原信生氏の「復活」も似たやうなものである。「あるたましひの歌」とあるから、どうやら「あるたましひの復活」を書かうとしたもののやうであるが、その或魂が如何樣に窒息したかも具體的には解らず、從つてまた魔法にかけられて眠つてゐた魂が眼をさますところも、本人がさういふだけの事で僕等には解らない。だがそんなうるさい文句を離れて、これを北滿の冬と、春への遷り變りを描いた風物詩としてみる時は、恐らくは滿洲だけが生み得る文學としての一つの高き稜線をゆくものと言へるであらう。

カガシベーラム
（最高のフケ取り香水）
カガシ名香ポマード
カガシ植物ポマード
カガシウエービングローション
カガシオーデコロン
東京　滿洲　大阪
カガシ化學研究所
カガシ化粧品本舗

長白山の歴史

村山醸造

長白山を思ふとき、甚だ解決し切れぬものが身近に迫る。それは神秘といふ言葉のみが盛り得る感じである。科學するものにとつて神秘などといふ觀方が許されぬ事かも知れない。然し乍らあの山は事實さういふものを發散して居るとしか思へないのである。夫は單に傳説や歴史から與へられたものではない。皇紀二千六百年の調査計畫が發表された時、吾々一同非常に強い關心を以てひき附けられ當事者の豫想に數倍する專門家が應募したのもその爲である。己がじゝ科學者を以て任じて居る六十七名の人々が黒く又灰色の亂雲に包まれて山頂に立ち、強い横しぶきを受けて居た時の顏もさうであつた。一寸の雲の切れ目から天池がほの見えた時喚聲を上げてかけ下りて行つたものは三十人を下らなかつたのである。其一と時吾等に觀察測定及び批判の餘裕を與へなかつた力は何であらうか。私は之をあ意味での神秘であると言ひ度いのである。現時に至る迄科學が宇宙からかきとつた眞理の數は全體に對して何億何兆分の一であらうか。吾々の前には未だ無限に近い神秘が横はつて居るのである。長白山の歴史を考へるとき實に此神秘と之に對する禮讃の連續に他ならざる事を見るのである。

そも〳〵地球の年齡は、地殼生成以來二十七億五千萬乃至三十億年と算出せられて居る。其中原人の顯はれたのは最近の五萬乃至十萬年と考へられて居る しかも人文史に現はれるものは最近五、六千年である。此悠久なる宇宙にあつて、長白山は如何にして生れて來たか、それが小宇宙と言はるる人類頭腦の裏に如何に育つて來たかを考へるとき實に天池の如く底知れぬ興味を覺ゆるのである。灼熱の地球が冷却して表皮を生じ次第に收縮しつゝ褶曲斷層噴火を繰返す間、滿洲も時に沈降し時に隆起し、海とな

り陸となり二十數億年を經て白堊紀に至り大陸と決つても猶局部的には造山運動を續け、遂に滿洲蒙古の兩地塊を成したことは地質學の敎ふる所である。吾々が滿洲の地形を見るとき、長白、興安の二大山脈は東西に並び何れも北東より南西に向ひ東に急に西に緩に傾いて居ることを知る。此方向は支那方向又は滿洲方向と呼ばれ、白堊紀以後に表はれたものである。之等の突兀巍峨たりし山々の基岩も、櫛風沐雨永年の削磨作用を受けて次第に平坦となり、所謂老年期の地貌を呈した高原となり、其岩屑は低きに運ばれて淺海を埋め又平地を作り、こゝに大體現時見る如き地形を作つたものであらう。かくして此時代の終り第三紀の始めには、今の長白山地方には既に一大森林が出來て居たものの如く、撫順の數百米に上る炭層は夫等の樹木が洪水に運ばれて堆積し炭化したものと考へられて居る。又此頃から地面の一部は更に上昇を始め、高さを增すにつれて遂に南北の方向の龜裂を生じ、此裂目を通じて熔岩を噴出して白頭火山脈を作つた。其山脈中最高最大のものは長白山であつて、始めは鏡餠の形をした一兀であつたものが、冷却するにつれて頂上が落ち込み、こゝに水を湛へ初代の天池が出來たのである。然るに古第四紀に基盤の處々にある裂目から驚くべき多量の玄武岩が噴出して流れ、高原一帶に擴がり、廣大な火の海を現じ長白山其他少數の峰が點々孤島の如く見えた事と思はれる。此玄武岩平原の面積は實に宏大なもので、北の方遙に密山に及び東は雪嶺西は濛江盆地全體に延び其面積四萬平方粁以上と稱せられる。然るに其後長白山下底の罅隙に沿ふて流紋岩漿が上昇し來り上部より沈下し來る天池の水と會し、茲に水火は相激して多量の瓦斯と水蒸氣を作り、一大爆發を起し岩漿は浮石となつて四散し、山體を覆ひ全山白色を呈するに至つたのである。嘗て蓊欝たりし森林と饒多の動物はかくして燒却埋沒せられて死の世界は擴がり、只火風雨雪があれ狂ふた事であらう。本來かゝる熔岩や浮石の上には草も木も動物も暫らくは近寄らないが、やがて周圍から次第に胞子や種子が送られ、始めは地衣類や下等の生物が來り、岩の隙間に塵埃の樣に溜つて居るが其處に草木の種子が根を下し、低い灌木の林が出來、鼠、栗鼠が匐ひ寄り小鳥が訪ね來り、次第に風では運べないナラやクルミの樣な木迄生える樣になる。斯ういふ進行狀態は五大連地火山で現在行はれつゝあるのを見ることが出來る。之に就て調べた處、噴火後森林が出來始むる迄に、少くとも百八十年はかゝつて居る事がわかつた。長白山は現在深い森林で蔽はれて居り、又廣い御花畑が出來て居る。此樹木を調べると年齡は二百年位のものである。從つて噴火後少くとも三百八十年は經つて居なければならない。然るに今から二百六十五年前に、淸朝の內大臣武默訥が登山して居るが、其當時の記錄によれば、既に今と同じ狀態の森林がわかるから吾々の登つた地方には、少くとも六百四十五年以來噴火降灰はなかつた事になるのである。朝鮮王宮の記錄には二百八十年又は三百四十年前北鮮に噴火降灰のあつた事があり、夫を以て直に長白山の噴火とした斷定もあるが、夫は明かに誤と言はなければならぬ。只前述大噴火の後にも玄武岩の湧出もあり、又浮石の飛散もあつたのは確であつて、吾々一行もその以前の人々も現在の林地の下に燒け埋れて居る森林を見出し、其下にも浮石がある事を認めたのは其證據である。此燒損林は到底六七百年前のものでない。かふいう風に長白山を繞る自然史を調べるならば、幾千萬年間の事も次第に

明かとなり興味津々として盡きぬものがあるのみならず、直に以て今後荒廢地の更生に利用し得るものであるが、今は轉じて人類との交渉に目を向け樣と思ふ。

人類が地球上に現はれたのは第四紀の始洪積世と名づくる時代であると信ぜられて居る。滿洲もさうであらうと推せらるゝのは豆滿江の沿岸の洪積層からハイエナや、鹿や、犀や、マンモス等の化石と共に人類の加工したと認められる骨片が出たことである。かゝる遺品は哈爾濱附近及熱河赤峰附近から出たものと似て居るので、滿洲各地に亙つて原人が住んで居たと思はれるのである。何れにしても長白山の出來た頃は、人間が既に住んで居たものと思はねばならない。併し有史以前の委しい事は未だ明でない。支那の歷史に現はれた所によれば四、五千年程前には既に長白山地方に、强力な民族が住んで居た樣である。即ち肅愼なる種族が弓矢に秀で狩し戰つたと思はれる。帝舜の頃に弓矢を獻じ、孔子の頃、陳國に飛來した隼に此種の矢が貫いて居た事が記されて居る。肅愼族は時代により消長があり、北より南に移動した事があり、名稱も變り挹婁となり、靺鞨となり、又渤海となつたが、古代に於ては主に白山黑水の間、即ち長白山と松花江乃至黑龍江の間に本據を置いて居たものと見られる。即ち唐時代に出來た晉書に東夷傳があつて「肅愼氏一名挹婁不咸山北去夫餘可六十日行東濱大海、西接寇慢汗、北極弱水」とある。此不咸山は古く三代（夏、段、周）の頃の作と言はれる山海經にもあつて、其中の大荒北經に「大荒之中、有山名不咸、在肅愼之國」とあつて、此不咸は即ち後の長白山の事であり、蒙古語の神の存在を示す語であると言はれる。すれば長白山は數千年の昔から神として崇められた事が知られるのである。尙其當時此地方の狀況が如何であつたかといふに、後漢書の東夷傳に挹婁之國は廣大で物產は豐富、山は嶮岨で人民は勇壯で君長といふものなく言語は種々あり、森林の中に住み又五穀麻布あること等書いてあるのを見れば農業も行はれた樣であるが、とにかく長白山地帶は古代に於ても森林が深く狩獵民族を住はしめ、從つて動物類も多かつた事がわかるのである。戰があり、農業を行はれる以上は土地が燒き拂はれ、又耕された事も相當にあつたであらうと思はれるが、併し再び森林に歸つたと見え、其後金、清の時代になつても密林の深き事が記されてゐる。長白山地方の如き一樣廣大な土地は燒却、掠奪、農業を事とする民族の浸入せざる限り、豐富な林木と動物と水源とをなすものである。古代より此地方の三寶と言はれた人蔘、貂皮、珠玉は多く產し、海東靑と稱する名鷹も多く、溫泉が湧き花園が展り其中心には白衣觀音の如き白い峯が裕々聳えて居る。誠に之地上の天國であり、エデンの園であり、極樂淨土と思はれた事であらう。されば呼稱は變遷して漢時代には單單大嶺となり、蓋馬大山と呼ばれ魏の代には從太山、太白太皇と言はれ、南北朝には從太山と言はれ、唐以後は白山、太白山、長白山と言はれ、金、元、明、清を經て現在に及んで居るが、何れの時代に於ても最上の崇敬の意を表はして居るのである。從つて此山に關する傳說は極めて多く、山中の珍獸、奇木、玄妙不可思議な事象の各書に現はるゝもの枚擧に遑ない程であるが要するに之等は畏敬尊崇した心理の永年の堆積と見るべきものであらう。かゝる依存崇敬の念は結ばれて遂に神の存在となり、神と認める事は當然の理であつて四五千年前の不咸の思想は連綿として續き、金の時代になつ

て祖先發祥の地とし帝號を奉り、官吏を派遣して衣冠捧物を供するに至つてゐる。即ち金史によれば金國の世宗大定十二年（西曆一一七二年）には長白山神を封じて興國靈應王とし、廟を建て大祭を行ひ、大定十五年には更に封册儀物を獻じ章宗の明昌四年には更に開天宏聖帝に追封した事が記されてゐる。此大祭禮拜は金の後裔を以て任ずる清朝に至つても繼續實施せられ、特に其御先祖發祥の地として最も敬虔の念を以てせられたのである。然るに其の世祖順治元年（一六四四）の北京遷都後は滿洲人の北京に移住するもの多く、長白山の實體を知れるもの皆無となれるを慨し、康熙帝は其十六年（一六七七）內大臣武默訥を派遣して實相を看驗し祭祀禮拜し長白山を領域內に入れ境界を明にせんとせられた。武默訥は命を畏み其年五月初旬　北京を發し吉林に至り案內者を求め、食糧を運びつゝ松花江本流を遡り、訥蔭地方今の漫江上に至り、密林の中に前方を探り、鶴聲に導かれ鹿の足跡を辿つて遂に六月十七日山頂に達し、拜禮を行ひ非常なる感激に滿されて往路を引返し、吉林に到り寧古塔を訪れ、八月二十一日北京に歸り途中困難の狀況等詳細復命した。此看驗長白山記は長白山の實相を語る唯一の文獻として、爾後多くの叢書遊記に引用せられて居る。

かくの如く東北滿の靈山として神山として古來之を繞る民族に神侍されて來たのであるが、清朝康熙帝の尊信は內大臣を派して看驗祭禮せしめたに止らず、漢人信仰の的たる泰山も長白山の一支が伸びて、山東に現はれたものであると宣せらるゝに至つた。其眞摯敬虔なる態度は、金清正史の祭告文中に如實に現はれて居るのである。かの乾隆帝に至つては、其豪華妍爛の詩嚢を傾けて多くの禮讚の詩を賦され、佛蘭西の詩人ウォルテールをして東洋の詩人皇帝と讚嘆せしめた、盛京賦にも錦玉の句を連ねて長白山の由來と偉容とを述べて居られる。

かくの如き信仰的の關心を他にしても長白山の登山及之に關する記事は史上少からぬものがある。即ち後漢明帝の頃（西紀前三七）東明が高句麗國を長白山附近に建てたのはもとより唐の玄宗の頃（西紀七一三）には粟末靺鞨の大氏興つて長白山の周圍五千里を倂呑した事が見え、契丹の興つた頃（西紀九一六）には長白山の東西に幾多の半獨立國が出來て居て、其長は夫々遼に對して授爵を要求した事が遼史に表はれて居る。遼の聖宗の頃（西紀一〇〇〇年頃）には後の金國の祖先昭祖が部民を率ゐて白山に遠征した事が記され、金が遼を滅すや（西紀一一二五）遼王天祚を捕へて長白山の東に送り城を築いて居らしめたことが大金國史に見えて居る。金が亡んで元の世となつては長白山周圍の女眞の勢力は著しく充實し來り、明初に於ては元の將軍納哈出が孤忠を立てゝ金山に據り、長白山東西の女眞人を委撫して明に對抗した事が記されて居る。其後女眞は益々增强して活動し數部に分れて相鬪ひ又附近を侵寇した。就中建州女眞は北方の野人女眞に壓迫せられ、頭目李滿住に率ゐられて南下し、松花江上流より分水嶺を越えて佟佳江に移り高麗を侵したが、其討伐を受けて渾河の上流蘇子河の赫圖阿拉（興京附近）に移り附近を靡かし遼東を侵掠した。かくして建州女眞は長白山を離れたが、ヌルハチ出でゝ兵を起すや先（一五九一年）長白山鴨綠江部を征し平げて居る。其兵が明兵を破つて愈々遼東危くなると明の守將は背後攪亂を策して毛文龍をして鴨綠江を上り、長白山を超えて東界を襲はしめて居る。之は天命九年（西紀一六一五）頃である。後、清の天下

となり都を北京に移して、後は滿洲には滿洲人の人口が愈々少くなり種々の方法を以て移民增殖を講じたが益々減少し、徒らに漢人の潛入する許りであつた。かくして長白山附近は再び原始的狀態に歸り人煙稀少密林鬱茂し野獸增殖し剽盜橫行する樣になり、長白山は深く其裏にかくさるゝに至つた。只明初より上貢を命ぜられた人蔘は摩天嶺、吉林附近のものが採盡され採蔘者は太子河上流より蘇子河流域に入り、更に納陰地方より長白山に及び明末より金匪木匪が入つて長白山の東西に亙りて事業を行ひ夾皮溝の如き山中の都會を作り、隱然たる小王國を現出したものがあるに過ぎない。かくの如く暗黑の狀態となつた爲に武默訥が特派せらるる必要があつたのである。其後淸朝に於ては益々邊境を重視し、駐防協領勅出等をして長白山の形勢を相せしめ、佛人學僧レヂス、ジャルトウ等を遣して測量せしめ、更に朝鮮人の越境殺人せる事件を機に烏喇總管穆克登をして朝鮮官吏と立會の上、境界を調べ山上に定界碑を建てしめた。此定界碑の文句は後百年淸韓兩國の爭を惹起し兩國人官吏の數次に亙る立會調査があり、長白山も一しほ著名になり從つて此地方に往來するものも頗る多數に上つた此以前より北境から滿洲に侵入して來た露人は淸國の衰頽と共に愈々橫行し出し、長白山附近にも及んだ。

此頃になつて信仰的政略的登山の他に地理學的乃至學術的目的を以て、登山調査するものが出て來た。就中有名なのはジェームズ・フルフード・及ヤングハズバンドの一行である。之は淸の光緒十二年（西紀一八八六）の事で遙に印度から長白山を訪ね來り營口、奉天、興京、臨江、老嶺、湯河口、漫江を經て摩天隅に達し、天池を眺め山高を測り、湯河口に引返し松花江に沿ふて下り吉林に出でチ、ハル、三姓、琿春を廻つて北京に出て居る。其調査は五百餘頁の著書となつて現はれ地理、歷史、風俗、動植物等に亙つて記述せられ武默訥以來の多く引用せらるるものとなつて居る。

此事あつた翌年にも猶鮮滿官吏中には境界問題の論爭を續けて、決する所なく、間島には鮮人が愈々多く侵入して森林を燒却した。其後調査登山は愈々多くなり光緒十九年（一八九三）にはカーペンデイッシュ氏同二一年（一八九五）には露人ストレウイッキイ氏、英人ヤングハズバンド、アダムス兩氏、同二三年（一八九七）には露人アーネルト、コマロフ、ウォルコフ三氏、翌（一八九八）には露人ミハイロフスキー氏別に鮮人金應龍氏（今だに定界碑問題の爲）同二七年（一九〇一）には露人リソフスキー氏同三一年（一九〇五）には露國士官一行といふ工合である。光緒三二年（一九〇六）始めて日本人にてこゝに登山するもの出で太田銑太郎氏及林大尉、翌年には（一九〇七）大曾根誠二、中原佐三氏等、翌宣統元年（一九〇九年）には太田篤一氏一行、翌年（一九一〇）には今川唯市氏等がある。淸國人では光緒末年（一九〇八）に孫菌芳氏一行の測量調査がある。かくして民國以後は毎年二三組以上の登山あるに至り長白山の實態は科學的にも闡明せられて來た。其主なるものは中井猛之進博士の植物調査（一九一四）吉岡林學士の森林及地形調査（一九一六）古海理學士の植物調査（一九一七）筆者の害蟲調査（一九一九）朝鮮教育會の動植物地質調査（一九二六）フッツ氏の天池の深さ測定（一九三〇年之によつて最深部三一二・七米なることが明になつた）京都帝大旅行部の冬季登山（一九三四—三五）獨逸のラウテンザッハ氏（一九三三）及フホッヒラー・ホーケ氏（一九三五）の地

理學的調査等である。之等は多く朝鮮側の惠山、茂山の二路よりせられたもので其明かにした區域も長白山東側斜面で全體の四分の一にも達せぬ範圍であり、滿洲側の大部分は依然として治安不良の爲に知るもの少く僅に南側よりジェームズ一行、北側より西側へのアーネルト氏一行によるもの位であつて其他に就ては殆んど不明と言つてよい位であつたが一昨年の綜合調査によつて稍明かになり始めたのである。

尙長白山は常に白衣と綠林とを以て記述せられ人筆をとれば即ち千古斧鉞を入れざる密林と書く。しかし此林はしかく無變化に續いて來たものであるとは考へられない。現代の林が五六百年此方に始まつたものでない事は既述の通りである。しかし吾々の見た如く森林の最も良い部分の内に天與の御花畑が所々にある。深綠の林にとりかこまれて一本の木もない平な芝生、中を流るゝ小川、西向のスロープ、其形と位置とは確に牧場か部落の跡である。此處に至る迄も小規模な無木草生の圓い土地があつた。之は明に人蔘作りの跡である事は案内人も言つて居り、現に此形の人蔘畑が東崗部落にあつた。噴火による全林の燒失は、最近數百年なかつたであらう。しかし多數の民族部落の住民の爲に局部的に燒失された事は幾度あつたかしれぬ。又幾度か伐採された事があらう。現に元の世にも長白山の美材なることを建言して盛に佟佳江及其上流から伐出したことがあり、明末淸初にも冬季卡倫官吏の引上を待つて木匪が伐出した事が記され、日露役前に露國軍人を社長とする木材會社が通化に作られ、盛に旅、大、天津方面の用材を伐り出した事がある。彼の熊遊び虎吼ゆる通化奥の密林をして現在の如き赤土の禿山を顯出するに至らしめたのである。間島は四十年來鮮人の侵入により世界無比の密林は完く消失し、荒廢崩壞して地隙百出の狀態となつて居る。一度此狀態に陷つた土地は荒廢民族を全く却けて六七百年を經なければ如何に天象地質のよい此地方と雖も、自然力にては現在の森林狀態に戻らないのである。靺鞨渤海の時代の龍宮城の美觀を夢にも畫き得ないのである。人類による森林の壞滅の他に天然力の破壞もあつて山體の現在の林は浮石の上に立つて居る。そして其下には木炭となつた林がある。其燒損林の土地の下には、更に埋れた林があるかも知れない。之は今後發掘を試みなければ實證は出來ない。然し乍ら天地開闢以來（眞實は白堊紀以後であるが）連綿たる森林であると言ひ得ないのみならず千古斧鉞の入らない林と斷定し得ない事は確實である。只吾々は長白山の自然力が蒙古のカラコルムや平地松林の地方に比して恢復力が旺盛なるを認めねばならないのである。

長白山の天地を眺め其歷史を省る時無限の興味と問題とを見出すと共に此處に働いて居る一種神秘の力を認識するに至るのである。されば一武官ヤングハズバンドも其著「大陸の心臟部」の第一章に長白山を記し神秘の語を繰り返し山頂の天池と山麓の樹海とに對し能ふ限りの讚辭を呈して居る。ジェームズの「長白山」にも同樣である。淸漢人の長白山禮讚の詩賦祭文の記事の多い事は言ふ迄もなく、吳兆騫の詠じた長白山賦の如き美辭麗句一三五八字を費した長篇の如き其尤なるものである。文人の麗句は勿論としても事實登山視察した日、支、英、鮮の人々均しく讚嘆の辭を惜しまざるを見れば、長白山の偉容麗姿と神秘を否むに由なく古來國民の心理に結ばれ傳統の内に生き續けた事は誠に宜なるかなと思ふのである。

抑々秀麗なる山岳の人心を高揚し淨化し、一國民をして正純高邁ならしむる神秘の力は、東洋の各地之を認むることが出來る。我日本國の祖先が霧島に於て祖母山に於て養はれた精神は常に高山俊峰の憧憬崇拜となり、八紘一字の精神となり、富嶽の端麗は國民の儀表となつて居る。支那の五嶽、印度のヒマラヤ又此類である。國民全部の精神を作るの貴さは何ものにもかへ難いものである。之等の秀峰峻嶺は國民精神高揚道義心の純化鍊成の奧院として始めて天與の貴さを受け入るゝのである。

此最高至善の利用を許らずして僅かに數百萬乃至數千萬圓の年收に眩せられて、靈山を開拓し荒廢するならば其禍は其國民自ら受けなければならぬのである。長白山の四圍の廣大なる豪地樹海が急速に破壞荒廢され、既に清末の美林の半は無殘にも不毛地と化しつゝあり、更に急速に山體近くにも迫りつゝあるを見、遂には天池の水を涸しても電力に用ひんとするもの出づるに及んでは、滿洲の民族精神の高揚も傳統も遂に遠き過去の語草と化するも近きにあるを思はねばならない。かくならば建國の精神は如何にして作興し、友邦日本の赫々たる戰果を產みし精神力は何によつて培ふことが出來るであらうかと思ふのである。今は使ひ古した千古の美林、無限の樹海の讃辭を繰返し・單なる調査に時を過すべきではなく、何よりも第一に最も適切なる保存利用の方策を樹立して實行に入るべき時と思ふのである。

長白山の自然を調べ歷史を省みて到達するところは此一事に他ならぬのである。（カットー天池）

（筆者は鐵道總局產業課囑託・林學博士）

關屋牧著

支那農村物語

B・6判 三五〇頁 價二・二〇 送・三二

素朴な、鷹揚な、愛すべき支那の農民や、美しい歷史の刻印によつて積み上げられた古い農村の姿、この純朴な汚れのない農民の姿を描き、民族と民族の協和交歡、歷史の建設に邁進せんとする著者の意圖の下に描かれたのが本物語である。

新文化講座 第壹卷

新文化の理論

日本文化の再編成　新明正道
文化哲學　岩崎勉
文化と政治　船山信一
文化政策　木村龜二
文化と技術　樺俊雄
日本語と日本文化　高倉テル

B・6判300頁 上製函入美本 定價二圓五十錢 送料三十二錢

東京・神田・駿河台 振替東京七三一一八 **刀江書院**

るかも知れない。しかしお利口さんの果園主は、せつせと肥をやり蟲を取つて、先々でのより多くの收穫を待つにちがひない。また、前の癇癪さんと雖も、三年經たないうちから果實を得んとしてゐたのではない。世間通説の三年を待つた後での癇癪である。

親の收入を助けようとして、子供を小學校だけでやめさせ、給仕かなんかに出す親がよくある。これでは、究極のところ親は大損をし、子供は、得て不良になる。政府の出資會社は、いはば政府の子供さ。大學まで出しておやりよ。そして先々ウンと稼いでもらひな。

「父ありき」といふ映畫がある。親一人、子一人でも、どんなに別別に住んで苦勞でも、とにかく大學を出した、そして息子から「昔はお父さんに貰つたけれど、今日は私がお父さんにオコヅカヒあげませう、少いけれど――」と初月給の裾分を貰ふ。その時の父は嬉し涙で、おしいたゞくのだ、政府の大官はあの映畫を御覧なさい。きつとためになる。

脊に腹は代へられねエ、と申されるかも知れぬが、そこが、それ辛抱でさアね。

威信とポカン

これは奉天での話だが、或る夜したたか酩酊した一日本人が大通りを歩いてゐた。したゝか酩酊した日本人なら、あに奉天のみならんや、全滿到る所を歩いてゐて、少しも奇とするに當らないが、話はこれから先にある。さて、その酩酊氏の前を同じ方向に進む二人連れの若者があつた。酩酊氏は、これは醉つぱらひによくある例でまだ飲み足りないかどうかで、前の二人に「よう」とか何とかの誘ひの言葉を掛けたのである。時にその二人がこれまた醉つてゐれば「やア」位で片附くこと、常連の習慣であるのだが、どうしてどうして、その二人醉つてゐるどころか、全然の素面で、しかも大東亞戰に於ける皇軍の勞苦や、さては印度の向背などを極めて熱心に語りつつ歩いてゐたのだ。「よう」と呼ばれて一度は後を振り向いたが、態のない醉どれなので別に返事もせず、語り續けてゐる。酩酊氏は返事がないので、やけにからんで「よう」、「ようといふのに返事をせんのか」なんかんといひつゝ小走りに追ひついて「この野郎、なぜ返事をせん」と、臭い息遣ひ。あまりうるさいので二人は二言三言挨拶をいふた。ところが、この二人鮮系の青年だつたので言葉が少々――。それと見て取つた酩酊氏は「なアんだ、朝鮮かッ」と吐き棄てる如くいひ、かさにかゝつて一層うるさくつきまとひ、いつかな離れさうにも見えぬ。果ては二人に向つて手をかけたのである。そして一人は相當に撲られ、他の一人も撲られんとしたとき、この時早く彼の時おそく、矢庭に立ち直つた鮮系青年はポカンと一つ酩酊氏を撲りつけ「お前は日本人だらう、僅かな酒に醉ふな！馬鹿野郎、時局をわきまへろ！」ポカン、ポカン――。

×

も一つは新京での話、屬官級の官吏三名が、東亞の指導者としての日本民族の威信といふことに付て話をしながら、南湖附近を家路に向つてゐた。話の結論は、南方にしろ、北方にしろ、我々はいゝ住宅に住み、いゝ衣服、いゝ食物に惠まれた高等生活をすべきだ、かゝる衣食住生活はそのまゝ指導民族としての無言の政治だ、これは決して贅澤でもなく搾取でもないのである、時に我等官吏の住宅は、マレーに於ける米英人住宅の如く堂々たるものでなければならん、今日の狀態で、何の威信ぞやといふにあつた。さて、一同、うんさうぢや、さうぢやと相槌うつたる眼の先に、建築場で焚付でも拾つたらしい日系官吏夫人が現場の苦力に追つかけられながら逃げて來たのである。これには今の今までの三人、口を揃へてポカンー。

前線の住民と住居

今井一郎

私達は三月初、冬の奈勒穆圖を訪れた。奈勒穆圖は三河の最も大きな部落だ。部落の人はいくらか暖くなつたと云ふが、私達にはとても寒い、丁度その頃の名物である吹雪に會つた。半丁先が全然見通しが出來ない程猛烈な奴だつた。私達の鼻面が今にも取られやしないかと思ふ程寒さは身を切る。

その日、私はあるカザックの農家を訪れた。通された客間は春の如く、暖かで、青々としてゐる。窓ぎはの植木が水々しく育つてゐるのだ。荒れ狂ふ吹雪の邊境で、私達には思ひもよらない事だつた。

私達は詳細に屋内を見た。四角な家を四つか三つに仕切つて、寢室、客間玄關、臺所と云つた風に構成し、外には庭があり、物置、厩がある。

木を組んだ壁の厚さはさほどでも無いが、充分に防寒の用をなしてゐる。煖房は壁ペーチカで、白樺の薪を焚い

てゐる。壁ペーチカの火はパンを燒き料理を作る事が出來る。客間の卓子の上はサモアールや人形や寫眞で飾り、二重窓の窓と窓の間に造花や、人形で色彩を加へ家人の細心な氣の配りは、室内を豐かな情操で一杯にしてゐる。

三河一帶は凍土地帶である。そして一年の中、半年以上は冬の生活であり、太陽に惠れる日は何日あるだらうか。

彼等は夏は農作に學校も休業、全家全村を擧げて一年の働きをするのだ。山野に北風が吹き始めると、又永い冬眠生活に入る。だから彼等の住居は、數十年の生活的體驗によつて、北邊の不自由さと、極寒を征服して築いてゐる。滿洲に居る日本人は大いに彼等先人の良いものを取り入れる必要があるのではないのだらうか。

ソ聯を追はれて來た彼等は赤色ソ聯へ歸らうとしない。滿洲國で安居樂業を心からいそしんでゐる。

（繪はカザックの家族だち）

航空の新展望

内海二朗

一

悠久五千年、人類の歷史は古く、航空の歷史は餘りにも新しい。飛行機の發明後僅か半世紀にも滿たないが、然し人類征空の夢は數千年の昔から幾多の傳說、物語を生んでゐる。有史以來人間の空に對する關心、空を飛ぶといふ欲望は極めて根强いものであつて、かの精神分析學者として有名なフロイドは夢の分析に於て人類の「飛翔本能」を說き、又心理學者スタンレー、ボールは「習性遺傳說」を以て之を說明してゐるのである。その說く所の意は、人類が單に鳥類の模倣に憧れたといふが如き簡單な好奇的心理から飛行を望んだものではなく、實に航空は人間の根本的な心理に根ざす遺傳的本能であり、從つて人間の欲望は單に空を飛行することのみで滿足するものでは無く、實に人間は空をも制覇せんとする本能を有するものであることを明にせんとした點にその意義を認め得るものであると思ふ。かくて人類征空の夢の實現はかの文藝復興期（ルネツサンス）の天才レオナルド・ダ・ヴインチの科學的飛行の研究に始り、その後數世紀を經て遂に西紀一九〇三年、飛行機發明の榮冠ライト兄弟の頭上に輝いたのであつた。飛行機の實用價値は第一次歐洲大戰に於て發揮せられ、大戰中異常なる進步を遂げ早くも次の時代を象徵するものと確認せられ、「灰燼の中から羽ばたき上る鳳凰」の昔語りは硝煙消えやらぬ戰火の中から起上る近代科學の華、航空機を產み、全世界擧げて之が研究に沒頭するに至つた。かくて航空機の進步は文學通り「天馬空を行く」が如く、果しなき大空の道に止まる所を知らぬ發展振りを續けてゐるのである。

二

航空機の發達の歷史は暫く之を措くも、飛行機發明以來僅に四十星霜に滿たぬ今日の進步の狀況は、假に之を汽船（西紀一八〇四年）の百三十有餘年、汽車（西紀一八二五年）の百十餘年の進步と比較するも如何にその飛躍發展の急速なるかに驚嘆せぬ者は無いであらう。今日の最高記錄を、その出現當初と比較すれば、速度に於ては四四粁時が昭和十四年七五五粁時に、航續距離（直線）に於ては二六米より昭和十三年の一一、五二〇粁餘に、又高度は當初の一一〇米より同じく昭和十三年一七、〇八〇米に達す（氣球は二二、一〇〇米、觀測氣球は三五、〇〇〇米に達す）るといふ眞に明日を測り知れぬといふ急速な發展振を示してゐる。航空機の出現によつて距離は既に粁數や里數に非ずして單に時間の問題に過ぎなくなり、大陸たると大洋たるとを問はず全地球上如何なる場所も航空機の制壓せざる所は無く、一方飛行機の性能の進步や、所謂航空に關する諸施設の整備と相俟つて民間航空の發展も著しく、今次大戰前には全世界の總粁數は延七十餘萬粁に達し、實に地球赤道の十數倍に達して居り、又航空事故の如きも當初は墜落等の危險が多かつたのであるが、機體竝に航空路施設等の改善と相俟つて今日に於ては極めて安全であり、之をアメリカの統計に見るも自動車事故は四百粁に一回の割合に對し飛行機は實に八萬粁に一回、死者に於ては自動車は一萬六千餘粁に一人の死者を生ずる割合であるが、飛行機は六十餘萬粁を飛んで一人といふ如く極めて安全化されてゐる。此の他飛行機製作技術の進步は著しく、特に「フラップ」翼の如きはその速度增加に與へた影響極めて大なるものがあり、プロペラに於ても操縱、安定性等に好影響を與ふべき二重反轉（コントロ）ペロペラの如きが研究されつゝあり、又航空發動機にあつても輕量高馬力となつて、當初の十四馬力は今日では實に二千馬力を超え、之が燃料自體にも研究が加へられ、高オクタン燃料は同一發動機の馬力出力を增大せしめ著しくその性能を向上せしむる等貢献極めて大なるものがある外、間接的には航空を一層安全ならしめる諸施設、裝置等例へば航空用諸計器類、附屬機器、無電裝置の如きを始め、陸上諸施設として完整せられた飛行場設備、無線通信嚮導、盲目着陸裝置、或は航空燈臺、標識その他夜間の照明施設等の進步も極めて著しいものがある。特に航空の重要問題たる氣象に關しても、前大戰當時迄は全然氣象は除外され極めて安穩な天氣に飛行を試ることのみが考へられたに對し、航空機の發達と相俟つて航空氣象觀測の必要性が痛感せられ、その爲之に必要な航空專用の觀測諸施設も整備擴充せられ、氣象研究の撓ゆまざる努力が續けられ、單なる航空事故防止に止まらず、更に之が積極的利用の研究が進められ、一方航空醫學、心理學も獨立的に研究され航空人の保護に當る外、落下傘その他搭乘者の保安用器材、施設に關する等凡ゆる部門に亙る研究が遂げられたのであつて、實に此等の綜合的發展によつて今日の輝しい航空の發展が齎されたものであることを銘記しなければならない。扨然らば斯樣に發展をとげた現在の航空機の當面の課題は何であるか。當然從來の發展方向は持續され航續距離、搭載量、速度等の增加が要求されること論を俟たない。就中航空機の生命とも云ふべき高速性の要求に對しては現在の航空機の構造からは先づその限度は音速の八割邊りに止まることが、（物理學者は時速九百粁邊りを「空氣力學の壁」と稱し、速度の限界を此の邊りに示してゐる）技術者によつて想定されてゐるのであつて之が打開策として目下研究されてゐるものは「ロケット」飛行機であり又更に次に述べる成層圏飛行機がある。「ロケット」は曾ての月世界旅行の如き空想より次第に實用的に移行して着實な構想の下に研究が進められて居るのであるが、目下そのエネルギーの問題、即ち燃料の問題に於て未だ解決されざる部分が殘されてゐるのであつて、今後一般の研究の結果を俟たねば遽にそ

の豫測を下し得ないのであるが、既に最近新聞紙上に傳へられる「イタリー」のプロペラ無し飛行機の出現は此ロケット式の應用として注目されてゐる所であり、又現在の航空機その他にもロケットの利用は相當進められ既に獨逸空軍には過荷重された飛行機の出荷時のプロペラ推力を補ふ爲矢張り之が利用されてゐると云はれてゐる。

之と關聯して、更に尙氣象上の惡條件に煩はされることを避けんとして今日最も大きな課題を與へてゐるものに成層圈用飛行機がある。成層圈は大體一萬二千米以上の高空（その頂上は四萬八千米と云はれる）を指すのであつて此處では對流圈に於ける如き氣象の變化なく從つて安全な飛行が出來る上空氣密度の減少による（抵抗の減少）高速度が豫想されるのである。既に着想は可成り以前から爲されてゐるのであるが、かゝる高空の氣象的條件の恩惠を受ける爲には空氣密度の減少せる高層氣象狀態に於て十分な性能を發揮しうる發動機や又氣壓氣溫の低下から乘員を保護する機體を如何にして得るかが問題となるのである。之に對し今日の發動機は過給機の取附けによつて可成の高空に於ても、否寧ろ四・五千米の高度に於てこそ最大效率を發揮するやう設計されてをり更に一層之が進步を計つて成層圈に於て自由に飛行しうる樣な研究が進められてゐる。即ち既に出現せる亞成層圈用飛行機が之であり日本に於ては朝日新聞社の高度長距離機、米國ではボーイグストラトライナー、フランスではサントル亞成層圈用飛行機等、ドイツ（成層圈用としてユンカース四九型の試驗）その他の各國に於て着々試用せられ機體は完全氣密室によつて內部に低壓低溫を受けず適當に酸素の補給せらるゝ樣設計されて居る、世界新秩序建設に對する盟邦との一層迅速緊密なる結合が可能となり之が更に一層の進步を遂げ實用化されて成層圈飛行が出現した曉に於ては今日の航空も亦必然非常なる變化が起ることと思はれる例へばその高速性によつて東京＝伯林は僅に一日で連絡せられ或は又空襲に於てもかゝる高空に達する高射砲は現在ないのであつて又地上からは恐らく音も姿も見えぬ所から無數の爆彈を受けるといふ脅威に曝され空中戰にしてもかゝる高空且非常な高速を有する飛行機同士の戰爭は到底現狀の如き空中戰術は間にあはなくなるであらうと云はれてゐる。何れにせよ今日の亞成層圈飛行機の出現は成層圈飛行機に對する一指標たることは疑なき所であつてそこに重要な意味が見出されるのである。

更に航空機の社會化といふ樣な方面から之を吾人の日常生活に完全に取入れることが望まれてゐるのであつて今日の定期航空の飛躍的發展或は所謂自用輕飛行機の普及を圖る等の外更に恰も自動車の如く各人の門前から自由に飛行し得る樣な航空機の出現も要望されてゐるが、之に對してはオートジャイロ、ヘリコプター等が研究せられつゝある。前者は實用化の見込にあり後者は最近アメリカで「ヴオート・シコルスキー」が滯空一時間半に亙る新記錄を出してゐる、垂直上昇下降や空中停止等の可能な點に於て特殊の實益が齎されるのであるが未だ實用には供されてゐない。

此の他汽船のフオート・シュナイダーのプロペラと同一原理による輪翼飛行機があり、多

數の翼を回轉せしめ前後方向と垂直方向の力を發生せしめ、之によつて上昇下降は勿論前後進共自由となるべき筈であるが、（ドイツのロールバッハの特許あり）之亦未だ實驗の域を出ないのである。

次に航空機の軍事的價値は益々增大すること茲に喋々を要する迄もなく、航空機自體の性能は固より、武裝、裝備の問題も目下の主要研究對象とされてゐる外、無音飛行機の如きも將來の一課題とせらるべく（發動機の消音は可成り成功してゐるが、最も大きなプロペラの消音には未だ確實な方法は無い模樣である。）又無線操縱によるロボット飛行機の如きもその實現は左程遠い將來の事では無いことと思はれる。更に又航空機の陸海戰略、戰術に齎した影響こそ誠に至大なものがある。空軍は戰車も、要塞も戰艦をも擊破し、爆擊亦急降下爆擊に、集團爆擊にその威力は眞に恐るべきものがある。

「空にはジブラルタル無し」と言はれる如く、空襲の道には之を遮ぎる要塞は無いのである。就中「空軍か、海軍か」の問題は長い間の宿題であり、獨逸のモイレル將軍をして「大戰艦か空軍かの問題は今や迷路を彷徨しつゝある」と嘆かしめた所であるが、今次大東亞戰に於ける皇軍荒鷲の世界を驚倒せしめた大戰果はかの獨逸の北海作戰の空軍の海軍に對する威力も遙に之に及ばず、實に多年の宿題を一擧に解決すべき重大な鍵を與へたものであつて、今後も我航空機の前には戰略も戰術も兵器も凡てに亙つて重大な變革を餘儀なくされるに至つたことは疑ふべくもない所である。

又「グライダー」に關してはその實用化について今日着々と研究が進められて居り、二十人乘五十人乘超大型「グライダー」の出現と相俟つて所謂「空中列車」の發表も注目さるべきであり今次大戰には獨逸によつて一部既に實現してゐる、更に之と關聯して奇襲電擊作戰の花落下傘部隊の活躍も我日本のパレンバンその他への降下によつて愈その眞價を表し（日本の落下傘部隊は獨得の訓練によるもので、獨逸等の所謂落下傘部隊と「空輸部隊」とを混然併用した列國の追隨を許さゞる獨自のものでその技術その效果等にはナチス空軍將校も讚嘆を惜しまざるものがある）斯樣な特殊空中部隊の出現こそ航空の特殊性を愈發揮するものと云ふべく天から降つた我大和魂の權化を土着住民が「天降る神兵の到來」と稱したことは後に述べる我國肇國の歷史に鑑み眞に宜なる哉と肯かれるものがある。斯樣にして飛行機に準ずる航空機も將來は各々一層その特殊性を發揮して獨自の航空手段としての發達が期待される。

最後に一言すべきは航空路の發展である。航空路の象徵する意義は國家の意圖を最も端的に表現せる點に存する。既に今次大聖戰開始の直前に於て世界一周航空路の開設を見んとする情勢に在つたのであり、然も之が實現を着々企圖しつゝあつたのは恐るべきユダヤ世界主義アメリカ航空路であつたのである。その飽くなき自由主義的世界制覇の不當の意圖は今や完全に絕滅された。今後來るべき新世紀の航空路こそは先づ亞細亞に於ては東亞共榮圈各國の鞏固なる紐帶としての航空路、歐洲に於ける獨、伊を中軸とする航空路の整備、次いで樞軸提携の連絡路より、日本の八

紘一宇の大精神を全世界に滲透せしむべき紐帶としての地球一周航空路の開設である。かくて「凡ての路は東京に通ず」ることとなり、次代の世界指導者、日本の大理想は航空路を通じて脈々として地球の果に至る迄流れて已まぬ永遠の活躍を續けるであらう。

航空の進歩は周知の如く歷史的事實によつても明な樣に、眞に止まる所を知らないのである。何人も實現を豫想しなかつた事を現實化して來たのである。航空機の將來はこの偉大な悠久の自然と、人智の限りを盡した科學が、如何なる點で妥協するかによつて定まる。誰か之が明瞭な想定を下すことが出來よう。吾人は既に前大戰中の著しい航空の躍進を見た。當に豫想さるべき今次大戰に於ける航空の飛躍的發展を考へ、今日の航空科學の進歩の狀態を熟視するならば、「今や世界は曾て人類の歷史の想像も及ばなかつた革新を齎すべき前夜に在り」と云ふことが出來るであらう。

三

扨吾人は過去の歷史的事實を振返つてみて、航空の人類生活に於ける意義を正しく究明して本稿を終ることとし度い。

コロンブスの大陸發見迄の數十世紀の間を陸上文化時代と稱するならば、之以後今世紀に至る十世紀間は海上文明を包含した所謂陸海文化時代と稱することが出來るであらう。然して本世紀に入るや世界は空間領域の支配による正にコペルニクス的大轉換を爲しつゝあるのである。之迄の人類のもたなかつた眞に新しい歷史の一頁が現在である。人類が單なる好奇心から空に憧れたものでないことは之を人間不能なりとし、或は遺傳的素質なりと云ふ說明については既に述べた。それは然し所詮西洋學者の說く所に過ぎない。今や航空の時代、陸海空の立體的新文化を開く時代に於て吾人は實に生れ乍らにして航空民族たりしことを十分に悟らなければならない。吾人は日本建國以來の歷史を顧て肇國の始より我々大和民族こそ今日以後の航空時代を指導すべき民族たることを認識し、この肇國の大精神が今や脈々たる活動を始めねばならぬことに深く思を致さなければならない。建國の始め、「天孫降臨」と云ひその後裔を「天孫民族」と稱する日本古代史は新世紀の息吹を浴びて再び吾人の胸中に深く甦つて來るのである。果して「天孫」の二字は空虛な神話的言葉に過ぎなかつたであらうか。此言葉の眞の意味を生かすも殺すも航空に對する吾人の今後の航空に對する態度如何にかゝつてゐるのである。航空こそ我民族凡てが自己のものと爲さねばならぬ宿命を有するものと云ふことが出來るのである。

我建國の昔、武御雷神（鹿島神）經津主神（香取神）を助け參らせ給ひ、天空を翔け、蒼海を廻り「伏ろはぬ」者共を「伏ろはしめ」給ひたる天鳥船神（鳥之石楠船神）は我陸海荒鷲の守護神として今日千葉縣神崎町に祀られますのであるが、吾々は建國の始に既に斯樣な世界に比類なき海空神を戴いてゐるのである。古事記には天孫降臨に當り「爾に天津日子番能邇々藝命、天の石位を離れ、天の八重棚雲を押し分きて、いつの道別きて、天浮橋にうきじまりそりたたして、筑紫の日向の高千穗の久士布流多氣に天降り坐しき」とあり、誠に堂々たる御威勢を以て、天道を押開

き天降りまし、茲に陸海空を併せ支配し給ひて我國土を治め給ふたことが示されて居り、日本書紀には、「饒速日命の天磐船に乘りて大空に翔行りて、この國を睨りて降り給ふ」とあり、「有下乘二天岩船一飛降者上」以て六合の中心を定め給ふた如く既に三千年の昔航空日本建設の大使命を明示し、正しき航空の眞義を示し給ふてゐるのである。その後幾多の御事蹟を始め、萬葉集その他の古典より、近代に至る諸々の文獻繪畫等には何れも空に關する記錄の見えざるものは無いのである。單に空に關する記錄は日本のみならず、歐洲諸國にもあり、又近く支那にも、例へば禮記「萬物本二於天一人本二於祖一」或は史記「天者人之始、父母者人之本」とか幾多「天」に關する思想は古くから表れてはゐるが、之等は何れも單に抽象的な敬天思想の表れであつて 我日本の如く雄渾極り無き至高至大の航空思想には及ぶべくも無く、かくも尊き世界無比の我歷史に徵すれば今日皇軍荒鷲の無敵の大戰果は正しく當然の結果とも考へることが出來るであらう。のみならず航空こそは日本に課せられた最も重大な先驅的使命と謂ふべきであつて「八紘を掩ひて宇と爲さむ」との肇國の大精神は今こそ航空がその先驅となつて全世界に滲透せしめ得るものなることも右に述べた史實に徵し明であらう。

次の時代を指導すべき我民族精神の一は有史以來の民族精神即ち實に「和」に存する。「和」とは「結び」であり、即ち萬物生成發展の基たる「產び」である。我國家發展の基本精神は「和」にあることは我古典の示す所に見るも明である。然も茲にも航空思想の重要意義を明に示されてゐるのである。即ち天孫民族と先住民族との和合の道程を見れば、指導者としての天孫民族は「天津神」と呼び、先住民族は之を「國津神」と云ひ、然も此二神は同格に於て相結合し、相融合し給ひて大和民族發展の基底を作らせ給ふたのである。この「和」は滿洲建國精神に於て「民族協和」となり今日の日本の世界指導精神として「萬邦協和」となつて表れてゐる。然りとすればこの「和」の實現に於て我國古來の思想たる抽象的「天」と具體的「地」の結合手段として、同時に天孫民族として航空の使命が如何に重大なるものであるかは論ずる迄も無いのである。「結び」によつて發展止まる所を知らぬ我古代史にはその「產び」の中心を示すに殆ど凡て「天」の文字が冠せられてゐる。再び古事記を引用すれば「天地の初發のとき高天原になりませる神の御名は天之御中主神次に高御巢日之神、次に神產巢日之神、この三柱の神は皆獨神成りまして身を隱し給ひき。」とあり、此一條は天地創生に關して、物質の發展する本質は「神」にありとする比類なき宇宙觀を示すと共に、陰陽二元の統合神は之即ち太極としての天之御中主神なることを示し、以て「和」の實現に於ける中心は「天」にあるべきこと――和の實現の指導的手段としての航空（天の思想は世界各國に見られるのであるが、天を具體的に吾人に結びつけるものとして、その手段たる航空に迄及ぶ思想は我國獨自のものであらう。）――を示唆し給ふてゐるのである。吾人はこの「天」の意義を以て航空の眞義なりと觀ずるのであり、又更に古事記の神代紀にある「天津神、諸々の

命以ちて伊弉諾岐、伊弉諾美命二柱の神々、この漂へる國を修理り。固成せと詔りごちて天の沼矛を賜ひて、ことよさし給ひき。」とある如く動亂、混沌の世界を修理固成して、八紘一宇、萬邦をして各その所を得しむべき大精神の貫く新世界の創造に當り、「天の沼矛」たる使命は正に我日本の航空に課せられた比ひなき大使命でなくして何であらうか。

今次の大東亞戰爭に於ける我皇軍落下傘部隊の出現を「天降る神兵來る」と、欣喜之を迎へた原住民の讃嘆は將に來らんとする第三次元的新世紀創造の神話の一である。航空の手段は成程海の彼方の異國に發明せられたのであるが「航空機は全く日本人の爲に發明せられた樣なものである」（西原少佐）と云はるる如く、眞に之を活用し航空の正しき使命を發揮せしめるものは世界に於て日本を措いては他に無い筈である。之こそ非現實的なる傳說的神話に非ず、正しく現實の科學であり、文化である。吾人は目下の戰爭遂行中に於ては固より一切を擧げて武力戰に動員しなければならぬこと當然であるが單に兵器としての航空機にのみ目を蔽はれてはならないこと勿論である。吾人の運命的責務として何人たるとを問はず、航空人となつて綜合的な航空國力を培養し、航空の軍事的使命の外に更に廣義の文化的使命を達成せんことに心掛けねばならぬのである。歷史の示す所既に陸海文化時代は過ぎ去りつゝある。時間と空間の克服によつて人類生活は局部的・靜的なものより、更に一層全體的・動的となり、世界の一體化に向ひつゝあるのである。茲に生れ來る新世界は八紘一宇、萬邦協和の大精神に貫かれた全く新しい世界なのである。此時代に於ける世界の中心は日本にあるべきことは今更茲に繰返へす要も無い。假に之を地政學的見地より論ずるも海洋性と大陸性とを兼備し、常に地政學の所謂圓形的發展型態をとる日本、然も世界の今後は亞濠大陸と太平洋にあるべきことを指摘すれば、世界の根軸としての日本の立場は何人にも理解される所であり、又かかる世界最大の大陸と大洋との有する地政學的隔離性を除去し、その障害を排除して、大陸と大洋と無數の島嶼との地政學的結合性を產み出すべきものは實に航空を措いては他に考へ得ざる所である。

此來るべき新世紀の建設の爲今や日本は大東亞戰爭の遂行中にある。然して既に全世界の知る如く戰爭に於ける陸海空立體作戰の妙は十分に發揮せられ赫々たる戰果を擧げてゐるのである。軈て次いで來るべきものは文化建設である。茲に陸海文化、東西兩文明を眞に融合した立體綜合文化の建設が無ければならぬ。然も此綜合融和を計り、「新なるもの」を產み出すことこそ航空の使命でなければならぬ。航空こそは進んで已まぬ發展の象徵であり、我民族精神である。航空こそは有史以來の新世界觀を作り、更に之を發展せしめ人類の新宇宙觀を創り出すべき根元であると謂はねばならない。

以上極めて概略的な航空發展の敍述を試たのであるが、或は簡に過ぎて理解し難く、或は文意を盡さずして了解に苦しむが如き點無きを保し難い。他日是正の機あるを期して、今回は一應之を以て本稿を終ることとする。

（康・九・三・五記）

（筆者は交通部航空司長）

演劇近事

建國十周年記念の第一矢として、四月十日より四日間、大同劇團の「林則徐」大公演が行はれた。劇團結成以來の大成果をさめた。ひきつゞき東北滿十大都市及び北京、天津大公演が決定準備中である。建國以來最初の藝文華北進出は大いに注目される。

同劇團の演劇工作隊は熱河省で第一線工作を終へ四月十日歸京し、同二十日四十日間の日程にて東北滿一線地區に出動した。

※

奉天協和劇團は錦州、熱河省移動公演を終り、目下奉天市內巡回公演準備中である。

※

寂しい日系劇團の中にあつて、劇團牡丹江が一人氣を吐いてゐるのは賴母しく嬉しいことであるが、半面言ひしれぬ寂しさが濃い。佳き歳の今こそ專門日系劇團の結成が望まれる。それも間に合はせの場當り式なものではいけない。國民と共にあり得る根を張つた健全な組織のものが欲しい。——結成されんとしつゝありといふ噂はあるが、中途半端な噂の實現は困る。

※

各地の劇團が一樣に惱んでゐることは依然として、劇場の問題である。幕もなく照明の設備もない舊い小屋では、どうにも致し方がない。日本には如何なる邊陬の地にも一應演劇し得る劇場がある。劇場と演劇の發達とは不可分の關係にあるのは言を俟たぬことである。滿洲に於ては一つの劇場が、集會場として如何に多くの役割を果すかを考へなくてはならない。演劇はつけたしと考へて貰つても良い。とに角演劇もし得る會場の設備が目下の急務なのである。——映畫の面では各地に滿映直營館を建造してゐるが、この直營館も演劇もし得る樣に建造出來ぬものであらうか？——劇場が、國民集會場が、欲しい〱。

※

新生新派が來演したことは好劇家ならず共大いに期待したことであるが、新生新派は私達に何を教へてくれたであらうか？——成程新派は新派としての生命があるかも知れぬ。しかし花柳章太郎亡き後の新派はどうなるであらうか？といふ悲しむべき現實をまざ〱と見せられた。一つには脚本の選定を誤つたことが原因と思はれるが……未だ日本は滿洲の日系に對して如何なる認識にあるかの證左とみられ遺憾千萬である。

（藤川研一）

開拓地の衛生對象

秋月正一

(一) 滿洲開拓の重要性

最初に考ふべき事は滿洲開拓の重要性如何と云ふ事である。開拓、殊に北滿に於ける開拓事業には幾多の困難が伴ふのであるから、其重要性を感ずる程度によつて困難に對する意氣にも自ら相當の差異が生じて來ると思ふので、先づ此點に觸れて見度い。

醫師の立場から見てもアメリカの開拓史とか、我國にしてもカリフォルニヤ、ブラジル、ハワイ等に移住して其他に農業を營むのと、滿洲開拓と云ふのでは、其企圖する所には根本的な差異があつて、滿洲開拓といふ事は所謂移民と云ふ觀念とは全く異つたもつと國策的なものを持つてゐる。否全く國策的立場から出發したものであつて、我國の將來の發展、皇國の理想の實現の爲には滿洲の地に大和民族がどつしり根を下して多數定着する事が絕對に必要である。國防的見地や資源の問題のみならず、人口の數並びに質の問題を考へて見ても、出生率に最も堅實なる步みを示すものは農村であり、質に於ても優秀なる人物をどんく出してゐるのである。

我國の市部と郡部との出生率を比較すると、昭和十一年人口千につき市部二五・一、郡部三一・四であり、市部では出生率は既に限界値まで低下してゐるに對し、郡部は健全な數値を示して居る。又農村に於ては經濟的に豐かな者の方が子供が多いのに、都市の俸給生活者では俸給多き者、教育程度の高き者の方が學兒が少いのである。即ち都市に於ては人口の質に於て所謂逆淘汰なる憂ふべき現象を示してゐる譯で、之は實に重大な事である。而かも郡部から都市に人が流れる爲に、不健全な都市の人口はどんどん增加するが、農村の人口は夫れ程殖えることはない。其故都市居住者に正しき人口對策を認識せしめ堅實な步みを取らしめる事が必要なのは言ふ迄もないが、一方是非國民の一定數が農村に安住し農の有する國家的意義の重大性を認識する必要があるのである。

然し內地の耕作面積には自ら限度があり、現在既に飽和狀態に達してゐるので、我國將來の發展の爲には是非とも海外に多數の健全な農民を安住せしめる要がある。其第一着手は滿洲國開拓地であり、滿洲に多數の農民の定着する事が我國の發展の爲にも、滿洲國の發展の爲にも絕對に必要となつてくる。

之が即ち國策として滿洲開拓の必要を痛感する理由であり、此意味に於

て都市計畫に對しても國家的に十分の統制を行ふ必要があると考へるのである。

(二) 開拓に於ける衛生問題の重要性

開拓の成功、不成功には種々な要素が關係する。土地自身の影響、拓士の決心如何、氣候風土、產業の種類等色々の事が關係するが、保健問題は殊に重大な關係を有するものである。保健問題といつても狀況により、例へば一定の產物があり食糧に不足せぬ場合、食糧の生產其自身に惱む場合等、北滿の如き極寒地の開拓等で其重點は夫々違ふであらう。歷史を見てもマラリヤの猖獗により移民に大なる支障を來し、又他の急性傳染病により全滅の悲運に際會し、或は食糧の不足により慘害を蒙る等色々あるが、兎に角開拓事業に於ては先づ健康な身體が資本であり、萬一疾病の多發等があれば醫療の設備に乏しく、經濟的餘力に乏しい開拓民にとつて開拓は極めて困難なものとなる。

滿洲の開拓に當つても同樣であり、國策として開拓を行つてゐるのであるから、是非衛生施設を充實し、人的資源不足の際一人の力も無くせぬ事と、不幸疾病に犯され又は遺族をのこして死亡せる者に對しては國家的に相當の待遇をなすべきである。

(三) 滿洲の氣候

滿洲開拓に於て保健上第一に注意すべき事は滿洲の氣候である。氣候といつても主として冬期の寒さである。滿洲は南端大連が大約北緯三九度で秋田縣、岩手縣と等しく黑河が五〇度餘りで樺太の中央に相當し、氣候は所謂大陸性で冬期の寒さが酷しいので、其間の生活こそ保健上最も大切なのである。

我國は一般に氣候溫暖に食物も亦豐富で水利にも惠まれてゐるので、單に生きるのみならば、生活に對して特別の考慮を必要としないが、滿洲は煖房のみにも相當の負擔を必要とする。一箇月を通じての平均氣溫の最も低い月は、奉天一月零下十四度、新京一月零下十七度、哈爾濱一月零下二十度、滿洲里十二月零下二四度、海拉爾十二月零下二六度で內地とは雲泥の差である。

然も夏季に於ける日中の暑熱は相當に强く、最高は三五度にも達する。但し夜半には急に溫度が降るので暑さは凌ぎよく、一箇月平均氣溫の最も高い月は七月で、奉天二五度、新京二三度、滿洲里、海拉爾二〇度である。

氣候の關係上滿洲の農耕は夏季半年の收穫で一年の計をなし、夏季は極めて繁忙で、冬季の半年は寒さの爲に業務も自ら制限される。

之等の點を考慮に入れつゝ保健上重要な左記の點に就て述べてみよう。

生活一般
一、住　一、衣　一、食　一、水

疾病
一、結核　一、急性傳染病　一、乳幼兒死亡　一、其他の疾病

(四) 生活一般

〔住〕 氣候溫和なる內地と異り、滿洲の冬季は大連近郊を除くの外、奉

天以北は特殊に設備せられた住居と煖房なしにこれを防ぐことは至難である。故に滿洲に於ける保健の第一義は住の問題にあると言つても過言ではない。然るに一般に日本人は、此の點極めて無關心で、滿鐵の社宅すらも採煖と言ふ意味から見れば、誠に不完全なものである。

開拓地に於てこれは一層甚しい。入植の場合、多くは春の初より初夏までに渡滿し住居の營みをなしつゝ農耕を行ふのであるが、晩秋乃至初冬に至つて辛うじて不完全な住居が出來上る程度である。從つて屋內は著しく濕氣を持つてゐる。しかも大多數の拓士は、寒地の生活に全く未經驗なので、採煖方法が下手で濕氣のとれる間がない。室內の溫度は非常に低く、健康上極めて惡く、感冒その他種々の疾病の原因となつてゐる。

最初訓練所を巡廻した時、私は、この住居の不備、採煖の拙劣な事を最も痛切に感じたのであつた。或る訓練所では、私の枕元が零下十五度となつて蒲團の襟に結氷し、生活の庭舍も、炕、ペーチカに終日薪をくべても最高五―六度にしかならず、注射器の中が直に凍結するといふ有樣であつた。又或る訓練所に於ては炕の上の土が濕つてゐて、終夜さながら蒸風呂に入つてゐる如きものであつた。內地は冬期でも外氣溫は高く零下數度に過ぎず、室內の氣溫によつて火燵、火鉢等で暖を採るだけでも凌げないことはない。然るに滿洲の冬の外氣は零下數十度になり、外出する際は寒さが身の內部に喰入つて痛感をさへ伴ふ程であるから、室內の溫度によつて調節せねばならない。その平均溫度を、十度―十五度とし、それによつて室內作業能率の向上に資し、亦冬期の健康法として最も大切な外出を喜んでなし得る狀態に、常に身體に保溫しておくことが出來る。

入植當初より住居を第一に考へ、防寒の見地より完全な住居を建てることは最も肝要であり、即ち將來の發展を助けるものである。

住居の合理的な點では寒地の生活に馴れてゐるロシヤ人の建築に學ぶべき點が多い。

採煖方法として炕、ペーチカのいづれを採るかと言ふ點になると、一長一短で一概には決しがたいが、その用ひ方に十分工夫を凝らし、懇切な指導を與へることが必要である。

尙ほ濕度の點について一言附け加へたい。

滿洲は空氣が乾燥してゐて咽喉を痛め易いと言ふので、室內で蒸氣をたてゝゐる人を多く見かけるが、これは間違ひである。外氣溫が低い場合には濕度が高いと窓に凍りつき、ために室溫が低下する。外氣が零下三十度以下になつても比較的凌ぎ易く、防寒具さへ完全に着ければ零下十度位が散步に氣持よく感ぜられるのは空氣が乾燥してゐるためである。これを咽喉に感じるのも、渡滿して一冬馴れゝば何ともなくなる。故に、特に蒸氣等たてず、室溫を一程度に保つことに努め、時々戶、窓をあけて換氣するのがよろしい。

〔衣〕　日本人の服裝が滿洲の如き寒地に適當でない事は誰しも認むる處である。

男子の服裝に就ては現在滿洲で用ひられてゐる洋服乃至支那類似のものでよいが、女子の和裝は寒地には不適當であり、保溫上、保健上、寒地に適したものが是非とも考案普及されなければならない。所謂モンペ型から改良したもの、支那服や洋裝の改良型等色々の立場より改良が行はれて居

る大勢で考へて保健的に完璧を期さなければならぬ。

寒い土地では寒さに馴れて段々抵抗力を得てゆく事が一面に於て是非とも大切なことである。滿人等非常な薄着で平氣でゐる者もあるが、夫には自ら限度があり、日本人は寒地の生活に馴れてゐないのだから、その眞似をしては勢ひ非常に無理をする事になる。薄着のまゝ防寒具を着けずに出步き、或は厚着をする事を恥と思ふやうな人があるが、零下二十度以下の外氣中でなほさういふ考へでゐるならばもつての外のことである。

寒さに對しては一定の防寒具で防備し、且つ保溫する事を考へねばならぬ。外に出て身體にさ程の寒さを感ぜぬ程度の服裝をするならば、外出そのものがそれ程苦にならなくなる。

中でも手、足、耳等特に寒さにさらされるやうな箇處に氣を附けなければならない。之は保溫上にも凍傷豫防上にも必要である。又最も大切なことは頭を露出することによつて冷さぬやうにする事である。開拓地に於て若い人にさへ既に神經痛やリユウマチの如き病氣が澤山あるのは寒さに對する防備の不完全なところに原因があるのである。頭は人體の最も重要な器官であるにも拘らず、內地同樣むき出しにして寒さにあてゝゐる人を多く見かけるが、これが後日重い障礙となることを思へば寒心に耐へない。

〔食〕　開拓地の農民は元來食糧は自給自足すべきであらうが、實際全部を自給する事は困難であつて、どの程度までを自給にし、どの程度まで食糧の購入をなすかが問題である。之は殊に主食に就てであつて、例へば何處でも米が出來るわけではない。其場合主食をどうするか。麥、高粱、包米、粟、稗、ジヤガイモ、パン等を主食として行くべきかどうか。水田の作り得る處は作るとして、水田にするには甚しく費用を要する。又はどうしても出來にくい場合の主食に就ては相當の考慮を要すると思ふ。現在開拓地では米を購入して主食として居るが、私は出來る丈其地に出來るものを主食としてゆく、少くとも混食して行くべきものと考へてゐる。

次には食餌の內容に就てであるが、誰でも云ふが如く、動物性蛋白質が非常に少いので、是非牛、豚、鷄其他の畜產を奬勵して時々之等のものを食膳に上すやうにせねばならぬ。魚は川魚の獲れる處、養魚の出來る處以外は購入するより途はない。

特記すべきは滿洲の如き寒地に於ては食物の配合に脂肪を多量に攝取する必要のあることである。殊に動物性の脂肪ではなく、植物性の脂肪、例へば豆油でも、落花生でも何でもよいから脂肪の消費を多くする方がよい。滿洲の國民食基準は滿人の脂肪攝取量が一日平均五〇瓦、同じく日本人が三五瓦となつてゐる。之はもつと日本人の脂肪量を增すべきで、五〇瓦以上にせねばならぬ。但し現在は豆も油も肉も統制配給されて居るので、奉天で我々が現在食べてゐる脂肪の量は恐らく一日二〇瓦以下になつてゐる。拓地では自給し得るのであるから、もつと豆其他の植物性油や、牛、豚の脂の利用を考ふべきである。

滿洲に傳染病や寄生蟲が多く、なまの食物に對し注意すべきは勿論である。

〔水〕　多くの開拓地には水の問題がかなり多い。洗濯用のものを除いて飲料水、風呂、洗濯の水が何處でも非常に少く、水質も惡い。石灰分を多量に含んでゐるものや、鐵分の非常に多い處があるので、飲料水に對して

は簡單な濾過裝置の如きものが考案さるべきだと思ふ。住居を作る場合、井戸水と云ふ事に必ず關心を向けて欲しい。

兎に角滿洲に根を張つたしつかりした開拓を行はんとするには、滿洲に於ても愉快に生活出來る條件をつくる事が大切なのであるから、何よりまづ拓士の生活それ自身に於て考慮されねばならない。そのためには滿洲に於ける生活を科學的に裏附け、寒地に適した衣食住の法をとりいれることであり、これが即ち根本的な保健對策なのである。

(五) 疾　病

〔結核〕 最近全國的に注目せられてゐるのは結核の問題である。日本には結核が極めて多く、殊に靑年層に多い。滿洲は日本内地より更に著しく多い。

開拓地はどうか。

滿洲に結核が多い最も主な原因は感染の多い事と日本人の生活法が不適當であると云ふ事である。然るに開拓地に於ては人里離れた邊境の地に居り、又滿人との接觸も少いのだから、第一の感染は非常に少い筈であるが若し感染があるとすれば仲間よりの感染である。實際義勇隊訓練所の如き集團生活をしてゐる處で、其中に誰か一人結核菌を出す人がゐると、他人に移して多數の結核發症を來すのは當然である。私が廻つた處にも或訓練所に一小隊五十人中四人の結核死亡者と多數の結核感染者とを出してゐる處があつたが、恐らくは一人の開放性患者より始まつたものと思はれる。

最近は内原に於て、渡滿前相當精密な身體檢査をし、結核未感染者には「BCG」の豫防接種をして來るから、このやうな被害は追々尠くなるものと思ふ。

又潛伏結核をもつてゐるやうな人は渡滿後、生活の變化、氣候の變化により身體に相當の無理がいくので、發病して來る事が多い。之等の人が他への感染源となる。

然し元來感染を蒙る機會はある筈であるから、渡滿前に精密な健康診斷を行ふことゝ現地の衞生施設が整ひ、生活法が改善されゝば、滿洲に於ける結核は未然に防げるものと思ふ。

從來、内地で充分の身體檢査をせずに渡滿してゐる者が多く、渡滿後も相當の過勞を重ねて居るので、結核發症は比較的多く、死亡者もかなり出て居る。訓練所に就ては死亡者の半數は結核で、其死亡率は内地の同年齡の者より高くなつて居る。

若し結核に罹患した場合には、結核が非常に長引くので經濟的負擔は極めて大きく、其の終末は悲慘であるから、滿洲内に開拓民の療養所を作り且其醫療費に對して充分の考慮をせられたい。

〔傳染病〕 傳染病は今迄の處比較的少いのである。熱帶地方への移民であると大部分色々の傳染病に惱まされて居るが、滿洲開拓地では都市より却つて少い程である。其中最も多いのは赤痢で、訓練所も開拓團も入植當初相當の罹病者を出して居る。

然し元來滿洲は内地に比すれば傳染病は遙かに多いのであるから、豫防接種の普及や傳染病に罹らぬ注意は必要である。

開拓地に傳染病の少い事はこの上もない好都合な事である。

〔乳幼兒死亡〕 どこの開拓團でも乳幼兒の死亡が非常に多い。このことは開拓民にとつて非常な重大問題である。滿洲に來て數年の苦心の後、略々生活の安定を得、内地より花嫁を迎へ、子供は出來たが、どちらも若いので子供の養育に經驗がなく、折角の子供を死なせて仕舞ふといふわけである。乳幼兒の死亡は親の育て方如何で非常に違ふのであるから、衞生知識の普及と保健婦等の配置が必要である。

〔其他の疾病〕 其他の疾病には、滿洲獨得の疾病で學問的に興味の深いものとして、マラリヤ、カシン・ベック氏病、克山病、地方病、性甲狀腺腫、ペスト等澤山あるが其等に就ては省略する。

(六) 開拓地醫療制度の問題

滿洲開拓を國策として取上げ、どしどし發展せしめんとするならば、是非とも其衞生に就て深甚の考慮をせねばならぬ事は前述の通りであるが、然らば其醫療制度をどうすればよいかと云ふ事は非常な問題である。

滿鐵の訓練所に於ては當初は其近くの滿鐵醫院の醫師が月何回か出張する事にしてゐたが、實際問題として醫院より相當の距離にある處まで出張する事は非常に困難なので、現在では滿洲醫大より指導醫を派遣して貰ひ其等の方が一人で數箇所の訓練所を受持つて巡回衞生指導をして居る。が之は過渡的のもので、やはり訓練所や一定數以上の開拓團には醫師の配置が欲しいのである。其爲に現在諸所に開拓醫學說が設けられ、開拓醫の養成が行はれて居るから、之等の醫師が各地に配屬せられるやうになれば、開拓地の衞生は餘程向上するものと思ふ。

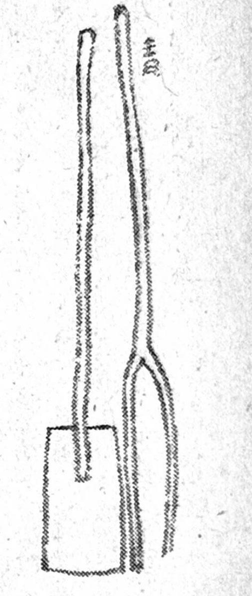
尚又醫療の補助手としての保健婦と、姙産婦に對する助産婦であるが、之等を是非大勢必要であるにも拘らず、非常に尠いので、現在は開拓民や訓練生の中から適當な人を選拔して、開拓醫、保健婦、助産婦の養成をすると同時に、最初から開拓地に來る覺悟を有するものを内地より募集して短期間養成する必要がある。

然し之等衞生業務に携はる人は現在直ちに必要なので、暫く後の優秀な者より、現在直ぐ少しでも役立つ人の方が欲しいのであるから、開拓民の中から適當な人を出し、極短期の講習を受けさするのも效果的だと思ふ。

以上極めて雜駁な事のみ申述べたが開拓事業の成否には、衞生問題は極めて重大な意義を持つて居るのであり、現時の如く人的資源不足の折柄には一人の無駄をも省き、一人の力をも有意義に用ひる事が大切なのであるから、徒らに開拓民に艱難辛苦をなめしめ、多數の患者が出すよりは、住宅や醫療施設に意を用ひて人力を有效に使ふやう一層の努力が拂はれる事を希望してやまない。

(筆者は鐵道總局保健課勤務　醫博)

―治淋内服薬―
ギーユーサイド
純潔を護るは近代人の志向……であり、また如何に速く不純から脫却し得るかが、切實な要望であればこそ、本劑の持つ效果と使命が果される譯です。
二四錠入



東京の七日間

楳本捨三

あまり突然に思ひたつたことで、旅裝を調へる暇もない位だつた。東京は甘いものがない、食事も旅行者など切符がないと喰べることも出來ないときかされてゐたので大急ぎに、羊羹や、砂糖豆や、餅までつかせたりして、ボストンにつめ込んで十日の終列車に乘り込んだ。

恰度、まる三箇年目の歸京である。

三年目も、渡滿して新京に着いたのが四月十日の夜だつたから、まるで判で押した程正確に滿三箇年目の歸京だつた。

大體三日間から一週間の豫定でないと、連載もの二つかいてゐる關係上、どうも不安心だつたが、さて、久しぶりに東京へ歸る——と考へると、あの友だち、この友だち、と腦裏を往來する友人知己劇團關係者の顏が泛んで、これは、どう短かくとも一箇月は滯在することになるんぢやないか——その時は仕方がないから、から——と車中で連載ものゝ對策を講じたりするのだつた。

畫家の本田君が畫の資材購入の爲美術家協會と生必から日本に派遣されるので互に列車を無理をして一緒にした。本田君の知己であるダイヤ街の丸石の御主人の石黑さんも一緒で、下關まで退屈をしない旅をした。下關驛では特急の急行劵を驛で無理をしてもらつて東京に着いたのは十三日の午後であつたが、叔父と大陸科學社の專務の川口君が迎ひに來て呉れてゐたが、生憎ホームへ入れないのだといふことを豫め知つてゐなかつた爲、ホームを二三回探がして、諦めて出口へ出ると叔父と川口君が首を長くして待つてゐた。

流石にまる三日間の雜沓の旅は綿のやうに疲勞してゐたが、久しぶりで、叔父の家に旅裝を解くと、叔母や家族と到頭十二時頃まで話し込んでしまひ、寢についたのは一時頃だつた。

喰べものがないときいてゐたので、何となく氣兼ねしながら喰べてゐると叔父は早くもそれを察して笑ひ出すのだ。最初の夕食は、すき燒だつたし、米は白くていゝ米であるし、どうも、滿洲できいてゐた極度の不自由といふ感じが少しも出て來ない。列車の中でも、さうだつたが、米など東へゆくに從つて美味くなるし、尤もコロッケの中味など少々代用らしい味をしてゐたが、話が大袈裟なせゐか、反つて、內地のものゝうまさ豐富さに一驚した。

下關でも、一寸時間があつて、本田君と町をぶらついてみたが山陽ホテルのグリルでも時間外だつたが十分の食事も出來たし、店頭のショーウインドのなかなどの品物は人の噂さとは遙かに遠い。

ドイツとかイタリー、更に、それにまして、反樞軸國家などの現實に比べたならば、どれ程、物質も豐か——と僕は、心から安堵したのである。

日本の表情の美しさに、ゆとりに僕は心から打たれた。

第二日目の朝、疲れにも拘らず、かた苦しい叔父の家に泊つてゐる爲か朝七時に目がさめた。

洗面を濟ますともう家族たちは食事のすんだところなので、大急ぎで食事をして叔父とともに日本橋の事務所へ出かけた。

晝食をアラスカでしやうと約束があつたので川口君に電話をかけて、味の素ビルへ出掛ける。叔父と三人で仕事の打合せをする。

立派な定食ぢやないか——と、ここでも僕は滿洲での話に不審をもつた。

數年にわたる事變と戰爭を續けて來てゐる日本の首都が、これ程豐かであらうとは、實は考へてもみなかつた。

物はなく、人々の表情も意氣を缺いてゐるのではないか——と祕かに想像してゐた僕自身を恥ぢたのだ。

流石、日本は立派だと感じた。これが世界の大國を相手として戰爭をしてゐる國家の表情であらうか——と、しみじみと欣しかつたのだ。

それにつけても、滿洲に入つてくる內地のニュースはどれもこれも歪められてゐるのはどうしたものであらう。

寧ろ、僕は、銀座を歩いてみて腹立しい位のおちつきを感じたのである、しかしその腹立しさは少し冷靜に考へてみると、これでこそいゝのだ、銃後のおちつきも附燒刃であつてはかうはいかないのだ——と私は考へ直した程だつた。

アラスカから叔父の事務所へ歸つて、中央公論社のポン友たちにちよつと電話してみようと思つてダイヤルを廻すと、出たのが出版部長の藤田君だ。「新京からか?」「新京からか」と何度も向ふで叫んでゐる。「日本橋からだよ。」といふと、びつくりして、「何だつて、東京に來てて寄らないことがあるか? いつ來たの?」といふので「昨日夕方着いたのだ、不意に來たので、いづれ近日寄る」といふと、「今すぐ來い——」といふわけでとうとう四時前後に中央公論社へ行く約束をする。

ぶらりと銀座へ出ると、フジアイスの前に恰度、新國劇の二葉早苗君に會ふ、ずゐ分おばあちやんになつたなア——と思ふ——滿洲から今ついたのだといふとびつくりした顏をしてゐた。

急いでゐたのでそのまゝお茶ものまずに別れて中央公論社へ寄る。皆出て來て、又の日の夜を約束して家に歸る。

第二日目は、叔父が、よかつたら今夕中央亭で「南方建設座談會」があるが出てみないかといふので川口專務を誘つて、臨時會員として出席させてもらつた。

これは、南方から最後の船で歸國した人々ばかりで、二十年三十年、スマトラや、ジャバや、タイ國に住居して身一つで歸國した人たちだつた。

それに、出淵元大使とか、矢田部元駐泰公使などの顏もみえてゐた

し、南洋局の成田節男などといふ人々も出席してゐて、なか〱活氣のある面白い座談會だつた。

「物資交流と華僑の問題」といふのがテーマになつてゐたが、南方の華僑問題に關する熱烈な討議は、よその座談會ではみられない程眞摯なもので、旅行者の僕たちには飛んだ拾ひものゝ感があつた。

川口君が歌舞伎をみたいといふので、叔父に頼みなか〱とれない椅子をとつてもらつて本田君も誘つて歌舞伎座の團菊祭を觀に出かけた。

（一）　道行初音旅
（二）　義經千本櫻
（三）　天衣紛上野初花

といふ演しものであつた。

老齢益々、味を加へて來た羽左の舞臺に愕いた、あの年で、一人舞臺の感ある活動振りには一驚した。

「天衣紛上野初花」などといふ狂言を今時、しかも「大口寮」まで許したといふことも、とくに團菊祭であり、羽左だつた故かも知れない。仄聞するところによれば、もうこれは上演を禁止するさうだ。

僕たちのみたこの日は、幸四郎病氣休場で、羽左が代役したが、この方がきつとよかつたに違ひない。

めつきり圓熟した羽左の力量といふものは比べものがないやうな氣さへした。入谷の蕎麥屋へ雪をはらつて入つて來る直侍が火鉢のそばへよつて股火をするしぐさなど、まさに逸品だつた。たしか、あそこは「あゝ寒」といふセリフがあるところだが羽左は寒さうに股火をして「ぶるぶる……」と聲をふるはさせた。定評ある場であるとはいへ「大口寮」の色つぽさは、時が時であるだけに美しい歌舞伎の濡れ場をみるといふより多少グロにさへ感じた。これなどはもうやめた方がよいと思つた。

十八日は、快晴だつた。

朝いつもの如く叔父とともに家を出て、日本橋の事務所にゆく。中央公論の藤田君、川口君、叔父の四人でする約束が出來てゐたので、事務所を十二時前に出る。

街の辻々には防護團の人達が團服で立つてゐる。アラスカの入口である味の素ビルの前など物々しい。

「東京までやつて來て防空演習か？今夜は町は歩けないな」と心で思ひながら、八階にエレベーターで登ると、もう藤田君が來て待つてゐる。

川口君を待つ間に食事の註文をして雜談を交してゐる。藤田君の言葉では今朝「警戒警報の發令」があつたといふ。演習だと思つたのは、本ものの警報の故だと分つて、大きな聲をしなくてよかつたと思つた。

その頃空襲警報の發令をみた。

これで三度目なんだね――と僕が話しかけてゐるところへ川口君がやつて來たので、テーブルについて食事をする。

僕は藤田君に、銀座が少しも變つてゐないのに愕いたといふ感想を率直に語つた。三年前渡滿した時と一寸も變つてゐない。人々の表情も街の姿も、この歴史的大戰爭を敢行してゐる國家のものとは思へぬ程だ。

物が不自由だとか、無い――といふことは考へられない――若しそんな時があつたとすればそれは物が無いのではなくて制度の變改に伴ふ一時的現象だつたのだらう。「偏在」にすぎなかつたのだらう――といふと、叔父も藤田君も滿洲には話が大業に傳へられてゐるやうだと肯定した。

實際、旅行の途中から、東京へ下りてからも、若し、これをものが無いと考へるものがあれば、それ自體が非國民であるし、又、これが不自由だと宣傳するものがあれば、それ自體の行爲が謀略行爲といはれても仕方がない――と僕は思つた。

これは洵に「戰爭の顏」ではない。豐かで、落ちつきがあつて、流石日本であると僕は感動を新たにしたのだ。

食事が濟んで、控室へ戻つて、コーヒーをのんでゐると、どうも窓際が騒がしいので、僕は、三人をおいて、人々の食事をしてゐる間を縫つて窓際へ寄ると、高射砲が中空に炸裂してゐるではないか。そして、その間を大型の飛行機が逼げまどつてゐる。

これは變だ――と感じたが周圍が餘り落ちついてゐるので、僕は不審に思ひ乍らも控室の三人を呼びに戻つた。

高射砲が、實彈であることは僕にもはつきり分つた。

「敵機だ――」

といふ聲、

「小癪な奴だな」

「あッ、擊墜されたぞ」といふ聲に、のび上つてみると黒い尾を曳いたものが遙かなるビルの谷へ落ちていつたのだ。

皆を呼びに戻つたほんの瞬間の戰鬪だつた。

流石に擊墜をみた人々はほッと息をつめて昂奮してゐた。

ビルの屋根が重つてゐるのでよく距離は分らないが、相當遠方――に思へた。落ちたのは市中から離れた海上だらう。

藤田君は、社に必ず緊急の用件が出來てゐるだらうといつて急いで歸社した。叔父も新橋の方にゆくところがあるといつて別れたので、川口君と大陸科學社の支社へ一まづ落ちつく。

こゝでも今しがたまでうつてゐた高射砲の話に花が咲いてゐる。が案外に皆おちつき拂つてゐるのには愕いた。

防護團員は勿論モンペイの婦人連中さへ悠然たるもので、その持場持場を整然と守つてゐるさまは全く力張いものだつた。

僕は銀座裏の昔、行きつけの理髪屋へ髪をかりに入つたが、その前に立つてゐるモンペイ婦人隊の會話をきいてゐると、アメリカの飛行機なぞすつかり、女子供にさへなめられてゐる。

敵の企圖した神經戰もかう上下擧げて神經が太くてはお氣毒といふ外はない。日本の隣組の隣人愛の美しさは、滿洲にゐる僕たちには一寸想像の外にあつた。

敵が落して行つた〇〇方面も〇〇方面も大體、男子は外へ出てゐて、留守をあづかつてゐた女子供乃至は、老人や病人が、身一つで消し留めたのだから、全くその沈勇ぶりと、日頃の猛訓練の效果といふものゝ偉り難さを痛感した。

しかし、こゝにもつとも憤慨せざるを得なかつたアメリカ機の仕打ちは、皇軍の陸海空軍が絶對に、軍事施設以外の地域とか非戰闘員に對して投彈又は掃射などをしないのに反して、アメリカ機は、對空防禦陣の完備した危險なる軍事施設などには寄りつきもしないで小學生を殺傷したり、地方の小さな漁村の民家を機銃掃射をしたことだ。

皇軍はあらゆる敵の對空防禦の熾烈なる彈幕をおかしても、軍事施設しか爆擊しないのに反して、これは、なるべく、安全な民家ばかり狙つた。

深夜二時に再度の空襲警報が發令されたが、この時も眞暗の屋敷町で隣組防火群が整然と待機する力强い限りだ。

自主的に部署々々を守つて寸分の隙もない。

十八日の敵機の醜體の爲に、アメリカ機はすつかり、見くびられてしまつたらしい。

尤も、あんなだらしのない盲爆ぶりでは女子供にまで莫迦にされるのも無理ではない。翌十九日の白晝の空襲警報の時なんか、物干し臺の上の中學生と母親の會話にもなめられたアメリカ機の姿がはつきり現はれてゐた。

「ね、下りていらつしやい。いつまでそんなところにゐたつて二度とアメリカの飛行機なんか來られるものですか。ちいちやんをみてやつて頂戴」とお母さんが物干しの中學生に呼びかけてゐる。

「あゝ、どうも來られないらしいね、母さん。竹竿で叩き落してやらうと思つてゐるんだけど」

と中學生が母に昂然と答へてゐる。

ノース・アメリカンB二五型爆擊機先生も中學生の竹竿で狙はれるやうになつては少々心細い。

ルーズヴェルト君が狙つた神經戰は、折角遠路おつかなびつくりやつて來たのに、逆に日本國民老幼男女の敵愾心を煽つたにすぎないのだ。

復讐を逆に怖れて戰々兢々としてゐるなど滑稽の極みである。

東京に燒夷彈の十箇も落したら、忽ち、大正十二年の關東震災の如き燒野原となると考へてゐた米國側にとつて、これは全く豫想がはづれすぎて米國人の顔がみたいやうな氣がする。

十二月八日の緒戰に、とつときの太平洋艦隊の、否、米國御自慢の戰艦初め有力な艦艇をあつさり擊沈大破されたアメリカが、折角、遥々、日本の空へやつて來て、女子供にまで莫迦にされてしまつたといふことは、今日まで、ドルの威力だけで世界をこけおどしにおどして來た面の皮をすつかりひんむかれてしまつた形だ。

空襲警報下の東京で、中央公論の湯川君や藤田君、小暮君等と久闊を語りあへるのも日本なればこそだ。

美味いものをかはるがはる御馳走してくれるのはいいが、やはり滿洲できいてゐたことが耳についてゐて氣兼ねでならなかつた。

僕はたつた五、六日の滯京中に、いろいろの體驗を得たわけだ。そして、そのなかで日本の豐かな表情に接し得たこと、銃後の立派な姿、非常時に對する國民の、しかも婦人や少年の頼もしい姿をこの機會に摑み得た倖せは何にもましていい土産だと考へる。

日本には立派な武士道がある。いついかなる戰の時も決して日本の將兵は、われわれの祖先の遺産たる武士道に背馳するやうな行動はしないのだ。

しかし、彼等には、武士道はない。寧ろ、我に武士道あることをいい氣に、彼等は彼等の非人道主義を露骨に示してゐるやうだ。

僕は、相手によりけり、又、相手が幾度も幾度も、非人道的な行動をした場合、一應我々の武士道を包んでおいて、手酷しく叩きつけてやつていゝと思ふ。そうしてやらなければ、彼等のやうな個人主義の奴等には骨身にこたへないのだ。

今度の空爆で火事を出した家は、いひ合せたやうに留守の家が多かつた——と正確な調査をした人からきいた。警戒警報發令中なのだから、家さへ留守にしてゐなければ、恐らく、殆ど燒ける家もなかつた譯だ。

非常に弱い性能の燒夷彈を敵は使つたらしいが、これは、日本獨得の木造家屋を計算にいれて突き破つて疊までゆかないで、天井裏に留まるやうに工夫されてゐたといふことだ。

だから留守にしてゐた家が多少この災害からまぬかれなかつたといふことも頷ける。

歸宅の日が二日後に迫つてゐたので、久しぶりに丹羽文雄君に會ひ度いと思つて、目白の家を訪ねたら、生憎、一昨日仕事が出來ないので、旅に出た——といふ所だつた。手紙を出してゐたやうですとの奥さんの言葉に會へないのが殘念だつたが、どうにも日取のやりくりもつかず諦めてバスに乗る。

七年程前住んでゐた目白附近の風物も、たいした變化もなく、驛の賣店や、市場などにも古い憶出がしみついてゐるやうな氣がして、しばらく、驛の側の喫茶店に入つて少年のやうな感傷にひたつた。

省線で澁谷驛に下りると、又、空襲警報だ。誰一人慌てるものもなく靜かに驛の階段を下りる。

僕は、家もさう遠くないので、急ぎ足で叔父の家に向つた。

蒼く高い澄んだ空を爆音が壓してゐる。

キラキラと光る銀翼にはつきりと日の丸が眼にしみる。遂に敵機は再びわが國土へ近づくことは出來なかつたとみえ、間もなく警報解除のサイレンが鳴り響いた。

暗中の
視力を護れ

「空を制するものは國土を制す」…日本空軍の敵地空爆の成功は、軍の作戰上大きな成果を收めたことは勿論ですが、戰は長期戰です。敵機の來襲もあるべく燈火管制の强化……作業能率低下…など幾多の災害が豫想されます。戰時燈管下にも暗中の視力を護り夜間の作業能能を落さないやうにするには、體内に榮養特に脂溶性ビタミンを充實することが先決で、この目的に旺んに利用されて居るのがハリバです。毎朝二粒、服用にも手數がかゝりません。

ご家庭には五百粒入がお徳用

滿洲文學の二十年（六）

大内隆雄

前回、「滿洲短歌」が昭和四年に創刊されたことを書いたが、短歌雜誌としてはこれより先き、昭和三年に西田猪之輔氏らの「合萌」が創刊されてゐた。

昭和六年末頃に調べたものに依ると「合萌」を刊行した滿洲短歌會の會員の顔觸れは次の通りである。

西田猪之輔 外川よしみ 松山みそぎ 木村いおり 淺野高俊 池淵鈴
江 佐藤鐵之助 高尾雄峰 西島貞子 西澤流 河上知風草 末野稠
寺本初音 近藤銀子 長内澄 出舟水尾 安藤英子 荒川石楠花 永原
いね子 深山幽明子 志賀折夫 鈴木澄秋 秋森淸子

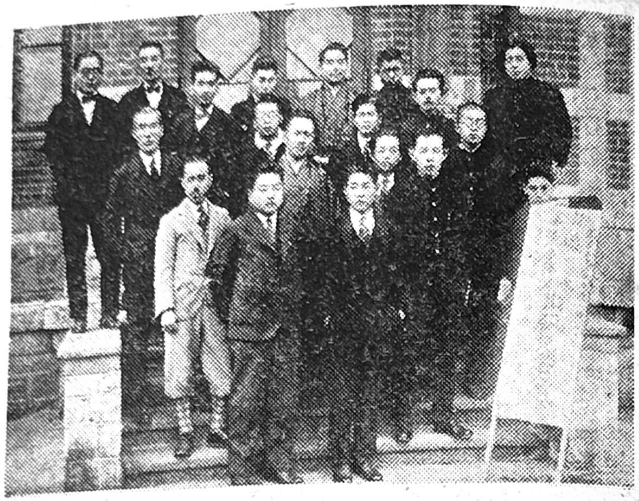
この内、西田猪之輔は最後は滿洲電々の幹部として先年病逝した。歌集「み空ゆく」がある。當時は滿鐵にゐたと思ふ。恰幅も良いし、宛然「合萌」の頭領といふ印象を私達は受けてゐた。「合萌」はこの西田氏のもとに良い輔佐役がゐたのであらう、會の組織などはなかなかしつかりした運營が行はれてゐたやうである。作品では私は西島貞子氏のものに敬服してゐた。滿鐵沙河口工場の幹部の方の夫人だつたやうに記憶してゐる。後年歌集も刊行されてゐる。永原いね子は醫師で繪を描く永原織治氏夫人、若い連中を可愛がるいゝ小母さんで、私も一度お正月かに某女性に誘はれて遊びに行つたことがある。後年、歌集「鍵盤」を出してゐる。

池淵鈴江の後年の「作文」同人としての活動は知る人も多からう。

高尾雄峰はいま奉天の滿日にゐる高尾憲太郎である。近頃は映畫批評や映畫政策論に力を入れてゐるやうだが、彼、昔は小説も書き短歌も作つたものである。若い頃からでつぷり肥えた豪傑型の體格だつたが、それでゐてなかなかの感傷家であつたのだ。一方、「滿洲短歌」に據つた面々は次の通りである。同人といふことになつてゐるが、必ずしも嚴格に同人組織が確立してゐたわけではないやうである。

八木沼丈夫 城所英一 原眞弓 富田充 河東茂次郎 川邊悌二郎 峰
尾滿久 有吉春雄 靑木實 木田晴夫 河瀨秘三 森厚 三溝沙美 上
村哲彌 香川末光 河瀨みち子 三木靜子 柿本靜江 若林初枝 中島
節子 野中雄次 高崎昌彦 大塚白穗 池野善雄 長谷川兼太郎 太田
廣實 出口王仁三郎

出口王仁三郎とはどうも變だが、この男も實に澤山の、驚くべき量の歌を作つた、ひねり出したといふことは巷間傳へられた噂で、また事實であるらしく、それに滿洲にも來たことはあり、寄附金でもして、同人の末端に加へて貰つたのだらうと思ふ。尤も「滿洲短歌」としてはそんな金などを有り難がつたらうなどとは思はれぬ。その送つて來た歌が面白かつたので、これを載せたといふだけのことであらう。



寫眞＝「逃水」「老子降誕」出版記念會の記念撮影、最前列向つて右が古川賢一郎、左が加藤郁哉、加藤の左後が平野博三、その左後が橋本八五郎、その左後が稻葉亨二、その右が西剣生、最後列和服が西田猪之輔、右端長髮が城小碓、その前看板に倚るのが島崎恭爾、古川の右後が筆者

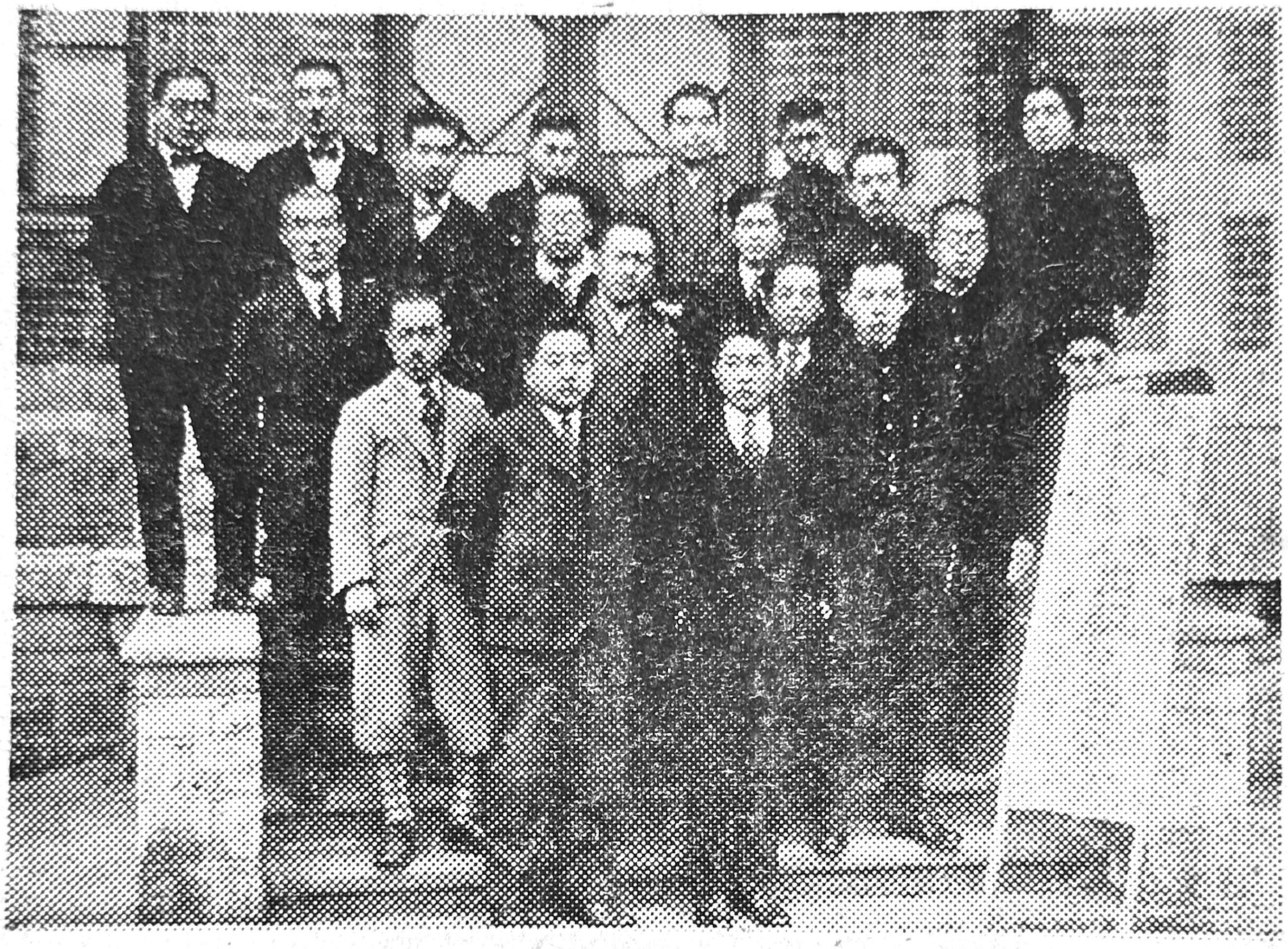
八木沼丈夫については、世人多く周知のところであらう。私個人のことを書くと、彼氏は當時私の勤務した職場で私の直接の主任であつた。あのギロリと光る凹んだ眼玉には昭和四年以來のお馴染なのである。……この間、大同劇團の會の歸りに丸山海介こと磯部秀見と街を歩いたら、彼は支那事變の初期に北京で八木沼と起居をともにしたのださうである。そして八木沼は磯部をつかまへて「おい、少年！少年！」と呼んだものだといふ。（丸山海介も若いよ！と小生思つたことであつた。）

ともあれ八木沼は「滿洲短歌」の御大としても、一家の風格を成してゐた。簡單に言つてみれば、あの長身を首から上を少しそりまげるやうにして、ギロリ眼玉を光らして、悲壯調をもつてものを言ふ、或る點まで來るとワッハッハと笑ふ、おや笑つたなと思つて本人の顔を見ると、苦蟲を踏みつぶしたやうな顔をしてゐる。そんな風な姿態から生れた風格である。右肩を怒らせた風格である。八木沼に何十首かのすぐれた短歌作品があることは確かである。殊にその朗々誦すべき莊重、悲壯の調べは高く評價されてよいであらう。尤も、この莊重、悲壯は一種の詠嘆に通じてゐる。それも觀念だけの空轉のやうにしか受け取れぬ場合さへある。肩を怒らせた彼の姿勢が其處にも出てゐるのである。

その頃の彼の作品を若干書き拔いて見る

やはらかに水すべりゆく吉野川百舌鳴きどほすこゑのするどさ
吉野紙漉けるを見つつ心さへほとほと遠しいにしへおもふに
木の香立つ杉の紅身のしたしさや霧のはれ間を露垂りにけり
山國に子と生れしかば流れよる香立ちしたしくかぎ分けにけり
海こえて十年經にけるむなしさや吾にしくしく沁むおもひあり
陸奥の吾家の山に霜ふりて柿も乏しくなりか過ぎにし

写眞＝「逃水」「老子降誕」出版記念會の記念撮影、最前列向つて右が古川賢一郎、左が加藤郁哉、加藤の左後が平野博三、その左後が橋本八五郎、その左後が稻葉亨二、その右が西創生、最後列和服が西田猪之輔、右端長髮が城小碓、その前看板に倚るのが島崎暴爾、古川の右後が筆者



を作つた、ひねり出したといふことは巷間傳へられた噂で、また事實であるらしく、それに滿洲にも來たことはあり、寄附金でもして、同人の末端に加へて貰つたのだらうと思ふ。尤も「滿洲短歌」としてはそんな金などを有り難がつたらうなどとは思はれぬ。その送つて來た歌が面白かつたので、これを載せたといふだけのことであらう。

八木沼丈夫については、世人多く周知のところであらう。私個人のことを書くと、彼氏は當時私の勤務した職場で私の直接の

天誅組こもりし村に秋陽さし柿あかあかと熟れにけるかも

以上は昭和五年二月號の「大和・山城行(三)」から採つたものである。同じ號に小生のものが八首出てゐる。敢へて新しい形式に據つたものだつた。三首だけを拔いて置く。

胸に思ふ　ことひとつもちハルビンの　多の夜更けの街路を歩んだ
戒嚴令が　十一時に店を閉めさせる　裸形の女の收入が薄い！
醉あげて歌ふ踊り子よ！　ウォッカよ！　汽車の時間だ！　До, свданія

また同じ號に、富田充氏が書いた「歌會記」といふ一文がある。これには私も出席した。こゝに〝滿洲短歌的雰圍氣〟を紹介するためにその一部を書き寫して見る。

「『滿洲短歌』は創刊以來九輯を重ねて來た。みんな步調をあはせて專心作歌に精進してきたので、進境著しいものがあり、各々のゆくべき道もおのづから拓けてきたやうである。

　ところで此際、みんな顏をならべて一日をゆつくりと過したい、未知の人たちと逢ふことは一層親しさを增すであらうし、お湯につかつてお互のしゝむらを眺めることも興があり、食事をして勝手に馬食振りを誇ることも味があり、その上歌の話でもすれば、好きな道だけに日頃の鬱憤を吹きとばして、大いに痛快であらうと思はれたので、懇親會を兼ねて短歌會といふことにし、一月十九日午前十時から、松山臺ラジユーム溫泉の一室に、みんな集つて貰ふことにした。

　當日いろ〳〵準備もあらうと、定刻よりは少し早目に出かけて、松山館の玄關に靴をぬぐと女中さんが「おひとりお待ちで御座います」と云ふ。さても殊勝なお方だと感心して、長い廊下を渡つてゆく。冬枯れの庭土に雪の名殘りはあはれであるが、地に敷く光りは、なんといつても小春日和である。部屋に入ると、魁は鞍山の加藤多滿喜氏であつた。遠路御出で下さつた氏の熱心さがまづ嬉しかつた。そのうちぼつ〳〵みなの顏がそろつてくる。早速お湯につかることになる。お湯好きの八木沼氏が率先してみなに入浴を奬める。風邪氣分の加藤氏や、やせ肉の私（私も同樣風邪の氣分）にまで、奬めること甚だ急である。

　浴後、しばらく寬いだ座談で時を過したが、就中、昨秋旅行された八木沼氏の柿實る大和山城地方の歌趣に富んだ話は、私たちの歌ごころをそそるに十分で、一同熱心に聽いた。ひきつゞいて歌をつくることにしたが、特に題を設けず、席上、自由に無際限につくつて貰ふこととした。

（以下略）

　さて同人中、城所英一については前にも書いてゐる。當時の作品に次のやうなものがある。

むらぎもの心もしぬに畏れたれかたちなき子のいま生れむとす
病院に妻を送りてぬばたまの歸り路を寒く風は鳴りつる
みごもりてふたつき經ぬるさびしさや小寢床に妻の眼の大いなる
鋭心は疲れ果てたり風のをと鳴りのはげしも聽きつつ吾が寢む

——「滿洲短歌」一〇輯より——

富田充の精進については知られてゐよう。當時の作品に次のものがある。

勤務より歸りきたりて部屋ぬちのこもるにほひに息吐きにけり
洋服を着物に換へてころぶしぬ買ひわすれたる煙草を欲りぬ
茶をいれてひとり啜ればひとりなる生活のことに思ひいたりぬ
時すぎし夕餉にむかひうつつなしひたすらわれは魚むしりつつ

——一五輯所載「獨居」より——

　同人中に青木實の名があるのは、最近の彼をしか知らぬ人には奇異であらう。が、青木君は以前には短歌にかなり親しんでゐたのだと思ふ。

　河瀨松三は永い間、滿鐵の「讀書會雜誌」の編輯をやつた溫厚君子人である。のち滿洲國政府に入り、いま國立中央博物館にゐる筈である。當時の作品に次のやうなものがある。

とよもして谿づたひゆく呼子（ふえ）の音やひしひしと寄るさびごころかも
白楊の亙幹（みき）にのこれる光りさへうすれゆきつつ夕ざりにけり

——一〇輯所載「濃霧」より——

　三溝沙美は後に日滿商事に轉じた三溝又三である。短歌人としてより俳人として知られてゐる。

　「合萌」「滿洲短歌」と、その後、甲斐水棹のあかしや會が出來、この三團體が相對峙するといふ形になつた。水甕大連支社あかしや會會員は昭和六年末頃の調査では次の通りであつた。

甲斐水掉　安永廣子　萱村芙蓉　大下三雄　山崎かすみ　谷山つる枝
甲斐慧　山本枝折　濱坂日出男　野口節子　野口靜彥　森節野　宇野節子　角谷靜江　須野憲二　森谷つたお　谷岡智子　安見土筆　春野芳子
山田茂　神場磨須子

この會では主宰者が女性であり、會員にもはつきり女性が多いことが注目される。記憶が定かでないが、一度だけ「合萌」と「滿洲短歌」で合同歌會を開催したことがあつた。私も「滿洲短歌」側の一人としてその會に出席したが、割り合ひ和氣靄々たる會合だつた。言はば他流試合なのだから、も少し眞劍な論爭なども行はれるのかと豫想したのだつたが、そんなことはなかつた。短歌とはやはり大宮人の流れを汲む文學なのであらうか。それとも、日本的文人のたしなみとでも言ふべきものであつたらうか。

　筆者は昭和の初め頃の滿洲の歌人たちについて多くを語り過ぎたやうである。いまは、その頃の詩人たちについて語るべき順序であらう。

　私はいつも思ふのだが、いつの時代、何れの國に在つても、一つの文藝興隆の時期の魁けをなすものは詩——或ひは、詩の運動であるやうである。滿系の文學がつねにさうであるのだが、滿洲の日系の場合に於てもこのことは例外ではなかつた。詩がいつも先頭に立つて來たのである。

　大連で刊行されつゝ、しかも日本の詩壇へまで淸新なものを吹き込んだ詩誌「亞」の活躍についてはすでに前に書いた。詩誌「亞」は北川冬彥、瀧口武士、安西冬衞等を育てて、第三十五輯をもつてその輝かしい歷史を終つた。

　昭和四年、加藤郁哉の詩集「逃水」が出版された。加藤郁哉は永く滿鐵に在り、露西亞語に通じ、「日本詩人」「亞」などに作品を發表してゐたのだが「逃水」出版の頃には大連に歸つてゐた。

　大連では「逃水」と同じ頃に、古川賢一郎の「老子降誕」が刊行されたので、この二人の詩業を祝福する出版記念會が日本橋圖書館で開催された。

その頃、出版記念會など、滿洲ではまだめづらしかつたと思ふ。確か城小確などが肝煎りをやつたのだと記憶する。記念寫眞を見ると、祝はれる加藤郁哉、古川賢一郎を前に、西田猪之輔、橋本八五郎、平野博三、西創生稲葉亨二、島崎恭爾、城小確、それに小生などの顔が見える。橋本八五郎は當時日本橋圖書館長で、萬葉集に造詣深く、後には滿洲文話會の役員として盡力した。武藤弘報處長が藝文指導要綱を日滿軍人會館に於いて發表するや、翌日弘報處に乘り込んで「しかと實行する肚であるか？」と念を押しに行つたといふ好漢である。平野博三はジャパン・ツーリスト・ビューローに在り、隨筆などをよく書いてゐた。稲葉亨二、島崎恭爾、城小確らは當時の若手詩人といふところである。

稲葉亨二、島崎恭爾、城小確は昭和四年に詩誌「戎克」を發行した。

稲葉亨二はたしか大連輸入組合事務所に勤めてゐたと思ふが、詩のほかに版畫をやり、また昆蟲學をやり（彼が「滿蒙」に發表した「ばふんころがしについての研究」は、文献と實態觀察の兩方面から調べ上げた精細な研鑽の成果であつた）支那民族性の研究などもやつてゐる。古川の「老子降誕」も確か、彼が裝幀をやつたのだと思ふ。「戎克」の表紙も彼の描いたものであつた。

島崎恭爾は滿鐵沙河口工場に勤めてゐた。旋盤工で一日五圓稼ぐさうだなどと若い連中が噂してゐたが、背廣を着て會合などに出て來る彼はおとなしい、しつとりとした人物であつた。

城小確は一風變つてゐた。「僕、ジャンクのジョーです！」

「逃水」と「老子降誕」の出版記念會の時であつたか、彼は突如立ち上ると、そのやうにブッキラボーな自己紹介をやつたことを私はいまだにはつきりと記憶してゐる。

「ジャンクのジョー」は「戎克」の城であつた。小確をまた正しく讀む人がなかなかゐない。あれは「おうず」と讀むのだらうである。（前後したが、稲葉亨二は「けうじ」でなく「こうじ」と讀む由である。」

城小確は本名を本家勇と言ひ、老虎灘街道にある或る醬油屋に勤めてゐた。稍小柄な身體に長髮をなびかせ、よくベレー帽を冠つて歩いてゐた。

昭和六年、城は詩集「黑麥酒の歌」を刊行してゐる。その前に、彼の編著として「塞外詩集」が出てゐるが　それは古川、稲葉、彼などの作品を集めたものであつた。

古川賢一郎は滿鐵の土地測量などをやる現場の方にゐて、當時はよく滿洲各地へ長期の出張をやつてゐた。彼の支那、滿洲民謠研究、滿人社會觀察などはこの旅と勤勞の間に養ひ育てられて行つたものであらう。後になほ「氷の道」「蒙古十月」「貧しき化粧」等の詩集がある。内地の「詩の家」「幹」「九州藝術」などの同人でもあつた。また滿洲鄕土色研究會員としての活動も注目されるものがある。散文集には「芽柳」がある。

古川賢一郎は佐藤惣之助あたりに師事したのだと思ふが、根は敍情詩人であるやうである。ただその取り上げる題材の半ば以上は滿洲の自然を背景としてゐるために、そしてまた彼の詞句が多くの場合嚴しい、冷徹なものであるために、根本の敍情詩人たることを蔽ひつぶすくらゐのがつちりしたものが出來上つてゐるやうである。「老子降誕」「氷の道」にはその種のものが貫徹してゐたと思ふ。これに比べて「貧しき化粧」には意識して敍情的な作品が集められてゐた。また「蒙古十月」は、民謠調の作品を集めたもので、異色あるものであつた。古川賢一郎はまた支那の民謠や、滿系詩人の作品の飜譯などもやつてゐる。近來招かれて大連の滿日（出版部？）に在り、いろ〳〵な企畫に忙しいやうであるが、詩作や詩の飜譯にも大いに努めてもらひたいものである。

城小確の「戎克」以來の文壇世話人的な役割も注目さるべきものがあつた。「戎克」がさうであつたし「塞外詩集」を出した塞外詩社といふのも城の經營に係るものであつたと思ふ。その後、大連詩書俱樂部を創設し、種々の單行本を出した。G氏賞といふのが久しく匿名に隱れてゐたが、實は城小確の寄附行爲によるものであることも後に明らかにされた。

城の「黑麥酒の歌」の後半に言ふ——

此の一群の浮浪者等は、白晝の大道で賭博に耽つてゐる。彼等は賭具は持たないが、皆同じ樣に軒並に坐つて、向ふ角からあらはれて來るものを言ひ當てるのだ、例へば鳥なら鳥と。無論言ひ當てたものが勝つのに決つてゐる。

次に來るものは、次に來るものは。來るもの來るもの皆彼等の仲間ばかりである。彼等は勝負に對する興味を次第に失つてしまふ。それでゐてやけに聲高々と續けてゐる。

その次に來るもの、その次に來るもの、その次に來るもの、噫來るもの、來るもの皆彼等の仲間ばかり、仲間ばかり……

思ふに、滿洲文學の保姆としての城が、このやうな姿で、次に來るものを待望してゐたのではなからうか。

（未完）

營業品目

鐵鋼類（銑鐵・海綿鐵・鋼塊・鋼半製品・普通鋼鋼材・特殊鋼・線材製品・鑄鐵管・銑鐵製品・合金鐵・屑鐵・粒鐵）非鐵金屬、石炭、骸炭、化學工業製品類、鑛油類、鑛石類

日滿商事株式會社

本社　新京特別市大同大街三〇一號

營業所
支社：東京
支店：新京・哈爾濱・奉天・撫順・鞍山・營口・阜新・安東・本溪湖・大連・京城・大阪・名古屋・門司・北京
出張所：十三箇所
出張員：三十八箇所

美術近事

國展第五回の日本側の審査員が發表された。今年は一部から一名、二部から二名來ることになつた。兎に角內定であるから顏振れだけではわからないが、政府の當らずさはらずと云つた方針がよく見えてさびしい。もつとはつきりした、滿洲の美術を育てる爲の、指導的なものを持つていたゞき度いのだ。畫家の要求と云ふものが、それ程公平でないことは、畫家生活の個人的な立場が之をよく說明してゐると思ふ。これで行けば理想的には一人の畫家に一人の審査員がいることになりはしないか。實際の審査にしたところが、傾向の違ふ人を集めて公平に審査が出來る筈は無いのである。結局お座なりに妥協しか出來ないのではあるまいか。しかも毎年毎年審査員が變つて行けば益々「滿洲獨自の美術」は立ち遲れになるではないか。「滿洲獨自の美術」の爲に政府は美術の指導方針の確立を國展にこそ反映さすべきではなからうか。滿洲側の審査員に就ては未だ發表は無いが、要するに出しても、出さなくてもいゝ、しかしこんな妥協的な審査方法で濟まされることが、我々の理想でないことははつきりしてゐる。滿洲側の審査員の人選の問題にしても、水準を何處に置かうとしてゐるのか、出すことが尙早であると云ふ論據が、現實の水準を飛躍して考察することは、將來への段階を失ふことでもありはしないだらうか。

日本から或る畫家が渡滿して、滿洲の風物を描くことに對して、滿鐵や、政府の要路の人達が大いに支援して、滿洲の風物を世間に紹介することに努力されてゐる。甚だ結構なことではあるが、之等の人には現實の滿洲を忘却してゐはしないだらうか。我々は常にかうした片手落の事實をしばしば見せつけられてゐる。滿洲の畫家を育成する方法を講じないで、滿洲の畫家がはなはだ瘦せてゐるのを他目に、日本から來る肥えた畫家を有難がらうとするくせを甚だ悲しむのである。滿洲の畫家を利用したらどうだらうか。瘦せてゐる畫家を肥らしたらどうだらうか。すくなくとも內職畫家みたいな現在の滿洲の畫家を一年間でものびのびと自由に畫を描かしたら、それこそすばらしい收穫をあげ得る畫家は十指にあまりあるであらうことをこゝから申上げる。

藝文二月に書いた拙稿「戰爭と美術」に對して「北窓」三月の「美術時評」は先人の偉業に對してあまりにも禮を失すると云ふ意味のことを書かれてあつたので一言辯解さしていたゞく。私も無論明治に生れ大正から昭和の初期にかけての美術に育てられた人間であつて、私を今日あらしめたことに決して不幸を感じてゐないし、過去の日本美術の良さを知つてゐると思ふのである。だが私の論旨が戰爭美術の現實をその爲に過去の優れた日本の畫家達を不幸にしたやうなかどが有つたかもわからない。しかしそれはあくまでも罪惡を罪惡とし、功績を功績としたのだが、そこにいさゝか言ひ過ぎが有つたのでは無かつたかと讀み直してみて感じてゐる次第である。

（池邊靑李）

音樂近事

近來、樂壇の樣相は甚だ沈滯してゐるやうである。その主たる原因は、新京音樂院が解消し、新たに新京音樂團が結成された過渡期的現象にあるのであらう。又吾人はそれが過渡期現象に止ることを願望する。新音樂團が活動を開始する時、不活潑な空氣を一掃して欲しい。新京音樂團は、新京に於けるあらゆる樂團を統合して一元化し、演奏に放送に錄音に又圓盤に强力な動きを見せんがために企畫された新組織である。それがはたして期待に沿ふ活動を見せるかどうかは後日の問題に屬する。これに依つて、樂壇の旋風は、表面は一應凪いだかに見かけられる。

何としても文化面の動搖は甚だ好ましくない。文化の指導民族たるべき日本人間に於て無思慮な動搖を續けるのは、滿洲國では、われ人と共に强く三省して愼しまなければならない。われ等が深憂するのは一にこの點にかゝつてゐる。爲政者も樂人も、音樂本來の使命を想ひ、音樂を愛して、總てを處理すべきである。

混亂した樂壇の狀態にもかゝはらず、こゝに一つ悅ぶべき又敬服すべき仕事を紹介する。それは前の音樂院に附屬してゐた滿系の樂員養成所のことである。市場幸助氏がこの仕事に獻身的に努力してゐる。養成所員は國內の各地から選ばれた滿系の善き靑年達十五六名であつて、南關の孔子廟の一角を教室及宿舍とし、嚴重な軍隊式の規律の下に、音樂の精神を學びとらうとしてゐる。今迄は殆んど樂壇からは忘れられ、ジャーナーリズムも一度としてこれをとり上げたことはない。ところが何ぞはからん、これ等靑年達は、實に滿洲の國民音樂を樹立せんとする大望を抱いてゐるのだ。市場氏の指導も眞劍である。斯樣に隱れた所にこそ、眞實の音樂の「道」が究められようとしてゐるのであつた。當局も是非とも此處の仕事に着目せられ、一般も亦この仕事に關心を持たれんことを切に希ふものだ。かゝる基礎的な仕事こそ最も健實なこの國の音樂の實を結ばせるに重要な役割をはたすのである。

五月三日。滿洲新聞社と馬政局の主催で愛馬デーが擧行された。馬魂祭には豫ねて募集中の「愛馬に捧ぐる歌」が演奏された。

五月十八日からは建國十周年慶祝動員大會が催され、全國の音樂團體總數七百名以上より成る大演奏が催された。二十二日には市中行進夜は、大同公園音樂堂に於て、祝典事務局協和會主催の吹奏樂大會が盛大に行はれた。

五月三十一日。第二回合唱祭である。昨年より催された合唱祭は本年も二十團體の參加を獲た。專門團體或ひは職場のそれを問はず、一堂に會して心を一にして歌ふ。意義ある催しといふべきである。

（鳥羽亮吉）

資本金　貳千五百萬圓
滿洲畜產株式會社
社長　濱田陽兒
本社　新京特別市大同大街康德會館

大東亞戰爭川柳日誌（3）

居平洞學人

〇二月一日

△**マーシヤル**群島方面にて航空母艦、甲巡、驅逐艦等より成る敵艦隊を撃退、甲巡一隻に火災を生ぜしめ敵十一機を撃墜

命中の率を米英割切れず

〇二月二日

△海鷲は正午**コロバンカ**海峽にて敵商船三千噸一隻を撃沈

餌をあさるやうに海鷲飛んで來る

〇二月三日

△陸軍では德川義親侯、永田秀次郎、村田省藏、砂田重政の四氏を現地要職に就任せしむることとなる

南洋に殿樣がいり人がいり

△**フキリツピン**臨時政府の行政部其他各部幹部に日本人指導官、輔佐官、顧問七氏就任

着々と役者が揃ふ新政府

△海軍航空部隊は大編隊を以て二回に亙り星港を大空襲、輸送船一隻炎上二隻を大破、又**ジヤワ**島基地を猛攻敵八十機竝に敵船二隻を撃破

星港も**ジヤワ**も寝てゐるひまはなし

〇二月四日

△海軍航空部隊は驅逐船艦を伴ふ敵艦隊主力を**ジヤワ**海**カンゲアン**南方に發見、戰鬪數刻にして蘭巡**デロイテル**を撃沈、米甲巡一、蘭巡二隻を大破

東郷が幾人ゐるかと敵不思議

〇二月五日

△**ジヨホールバル**よりの星港攻撃愈々熾烈を極め**ジヨホール**水道一帶は凄愴の氣漲る

星港へまだか〱の彈が來る

〇二月六日

△陸軍航空部隊は**スマトラ**南端部**バレンバン**飛行場を急襲敵十三機を撃墜地上の十五機を大破

悠々と數をかぞへて引揚げる

〇二月七日

△陸軍航空部隊は前日に引續き**ビルマ**、**ミンガラドン**飛行場を空爆敵十一機を撃破

戰はぬ間に十一機煙となり

〇二月八日

△海軍航空部隊は**バンカ**島と**ビリトン**島の間**ガスパル**海峽に於て敵大型商船を撃沈

ガスパル海危險な場所が又殖ゑる

〇二月九日

△**マレー**方面軍最高指揮官は山下奉文中將と發表

鬼の名が知れて感念の臍を極め

△海軍特別陸戰隊は**セレベス**島南端**マカツサル**並に**ニユーブリテン**島**ガスマタ**占領、又蘭印首都**バタビヤ**を大空襲

占領の旗が足りない日本軍

〇二月十日

△山下最高指揮官は**シンガポール**敵軍に對し降伏を勸告

一應は武士の情けの**ビラ**を撒き

△**ビルマ**方面部隊は**サルウイン**河右岸**マルタバン**を完全占領、又**ボルネオ**方面部隊は島南の要衝**バンジエルマシン**占領

日の丸へ熱帶の風もうなごみ

〇二月十一日

△**シンガポール**攻擊第一線兵團長牟田口中將は**ブキデマ**附近にて戰傷を負つたが依然陣頭に立つて指揮す

鬼將軍敵彈ぐらゐに負けてゐず

△山下最高指揮官は皇軍**シンガポール**突入直後午前八時半敵司令官に對し再度降伏勸告文を空中より投下す

勸告文手に敗將の胸のうち

△海軍航空部隊は**バンカ**海峽に於て七千噸級商船一隻五千噸級一隻を攻擊出火せしむ

荒鷲は射的稽古のつもりなり

〇二月十二日

△**マレー**方面陸軍航空部隊は前日に引續き星港要衝貯水池周邊の大殲滅戰に協力、敵艦船一萬噸級一隻擊沈、其他十隻に命中彈を與ふ

星港へ死出の土産の亘彈くる

△戰功多大な藤村機は不幸敵彈を受け壯烈なる自爆を遂ぐ

藤村機今殉忠の**アドバルン**

〇二月十三日

△**ジヨホール**水道**コーズウエー**橋は工兵隊不眠不休の努力で再び復舊完全渡橋開始

工兵隊渡橋を待ちて汗をふき

△陸軍航空部隊は戰爆聯合を以て二回に亙り**スマトラ**島**バレンバン**飛行場を攻擊五機を擊墜四機を爆破

バレンバンあなたのまゝに任かせきり

〇二月十四日

△海軍部隊先遣隊は拂曉**イギリス**東洋艦隊根據地**シンガポール**島**セラレター**軍港に進入英鎭守府を占領

大石もゐず受取つた敵の城

△陸軍落下傘部隊は**スマトラ**島**バレンバン**に奇襲降下飛行場油田地帶占領に成功

天兵が降り**スマトラ**に慈雨が降り

〇二月十五日

△**シンガポール**攻略軍は午後七時遂に**イギリス**東亞の牙城**シンガポール**敵軍をして無條件降伏せしめ午後十時停戰す

大東亞今黎明の鐘が鳴り

敗戰へ**チヤーチル**は只腕を組み

日の丸へ大英國は午後となり

〇二月十六日

△大元帥陛下には陸海軍幕僚長を召させられ、南方方面陸軍最高指揮官竝に聯合艦隊司令長官に對し勅語を賜はる

聖恩へ將兵の血は又たぎり

△星港攻略軍は午前八時より**シンガポール**軍要建築物に對し日章旗を掲揚す、又星港全軍港は降伏處理委員會に於て完全に接收す

星港へ昨日の旗と今日の旗

〇二月十七日

△大本營は**シンガポール**島を自今昭南島と呼稱することに決定

更生へ先づ看板を塗り替へる

△海軍航空部隊は**チモール**島**クーパン**を空襲し敵砲臺及倉庫二十棟を擊碎敵船三千噸級一隻を擊沈

百發百中**チモール**島は眼を塞ぎ

國産ワニト
新時代の強壯劑
美味芳佳
服用容易
從來の强壯劑と異り：
細胞の活力を根本から昂
進する綜合エキスとも
稱すべく、めきめき食慾
を增し、神身の疲勞を
醫し、赤血球を增殖す
ビオトーク
液
一五〇瓦
五〇〇瓦
二・〇〇〇瓦
四・〇〇〇瓦
植村製藥株式會社
京城・東京・天津・青島
滿洲植村藥品株式會社
奉天市大和區浪速通

寫眞近事

▲四月初旬關東軍報道部主宰の下に戰車隊見學に我寫眞藝文界から五名の參加を許された。從來に於いてもこの種の企畫は軍報道部によつて數次にわたり報道演習としておこなはれ、これに寫眞家が參加せしめられたことは勿論であるが、その大部分は所謂ニユース、カメラマンとして新聞部門から選拔されてゐた。しかるにこの度一般の藝文寫眞家から特に參加をもとめられたことは、軍においてその必要性を痛感されたこともあらうが、又一般寫眞家のこの種の問題に對する熱意を反映したものとしてその意義はまことに深いものがある。

寫眞のもつ獨自の效用が今日ほど有效に發揮され同時にまた世人から認識せられたことはない。眞珠灣空襲の寫眞、マレー沖海戰の寫眞、その他續々と引きつづき發表せられる寫眞は、實に日本民族のみならず東亞諸民族のたましひをゆすぶらずには措かぬものであり、他面敵性諸民族ないしは懷疑的な態度にあつた民族に對するこの上もなき實證として、きはめて有效に働いたことは瞭らかである。これらのことは、ごく手近かな所では、最近行はれた大東亞戰爭寫眞展において特に滿系に多大の感興を釀生せしめたことにみても言ふことができる。

寫眞の使命は今次大東亞戰を楔機として一大飛躍の時機にあるとゝもに、寫眞家の態度も今日程意義を加へたことはないであらう。

▲新京特殊會社寫眞聯盟がその第一回展を新京三中井に開いた。同聯盟が昨年十二月結成されてより僅々四箇月を經た今日この展覽會を開催するに到つたことは、その會員諸氏の熱意に對し敬意を表する次第である。希はくばこの頭初の意氣が年とゝもに沈衰する從來一般の型を破つて益々充實發展せられんことを。

作品內容については玆に餘り觸れる餘裕を持たないが、唯その聯盟結成の趣旨としての職場藝文の發揚を一層顯著ならしむる方向を採つていただきたい。

▲同様三中井において新京寫友會の寫眞展が開かれた。作品は概して內容に充實したものを見せ、特に感歎させられるもの二、三あつたが、一般的に見ていさゝか過渡的なものゝある感を呈した。同會の從來の傾向に對しこの度の發表展ではその傾向に著しい變移をきたし、したがつてその作品において過渡的なものあるを免れず、作者の抱懷する意圖は判るがこれを作品に十分表出し得てゐない感があつたと思ふ。

▲滿日文化協會刊行民族圖錄「ロマノフカ村」を見た。本圖錄は勿論報道寫眞集の如きものではないが、寫眞の扱ひが如何に活かされてゐるかを示す好箇の例であると思ふ。內容は寫眞と解説とが巧にマッチして白露民族の生活や住居について觀者をして興味深く了解せしめて行く點、寫眞の持つてゐる重要なる一機能として參考してよいものと信ずる。

（加持正範）

ランドンウヰスキー

滿洲のメイン・テーブルを圍む人々（4）

雅本秀敏

經濟部次長　青木實氏

昨年十一月十五日、總務廳次長增員により經濟部次長古海忠之氏が新總務廳次長に就任する旨の辭令が發表され、その次に當時の企畫處長青木實氏が古海氏の後を襲ふ辭令が見受けられた時、一般の世評は至極當然な人事として之を受け容れた。

經濟擔當の總務廳次長ならば各部次長中否その他のポストに於ても古海氏以外の適任者はなく、又古海氏の後任として經濟部次長の重責を擔ひ得るものは青木氏以外に適當な實力派はなかつたといつても過言ではない程である。

今日、經濟部次長の重責にある青木氏は古海氏等と共に滿洲國官吏中の最實力派組の一人である事は疑ひを容れない。

ある人が、『ベテラン青木』と評した事がある。

言ひ得て、誠に妙である。

青木次長の渡滿は星野、古海、松田諸氏より遲れる事、三年、從つて滿洲に於ける實力涵養には幾分のハンデイキャップはつけられたが、今日の青木次長は完全にこのハンデイキャップを取り戻してゐる。

古海氏の如き天馬空を行くが如き機敏を持ち合せてはゐないが、逞しき粘着力と生來の研鑽力とは今日、青木次長をして完全に實力派の領袖に加へてゐる。青木次長が渡滿した康德二年一月は既に「建國大藏組」が三箇年にわたる過去の苦闘によつて各方面にその地位を固めてゐた時でもあり、又青木次長が示現してゐる篤實色は未だ草創の氣、消えやらぬその當時としてはあまり效果を表はす事が出來ない狀態にあつた。

事實、渡滿直後、就任した理財司國有財產科長、企畫處參事官、稅務司長時代はその鋭鋒を認められなかつたのである。

青木次長が滿洲國政の上に大きくクローズアップされる樣になつたのは滿業成立により、財務擔當の理事として轉出した田中喬氏の後を受け、康德四年十二月、金融司長になつてからの事である。

稅務司長時代まではあまりパッとしなかつた青木次長も金融司長になつてからの後は持前の俊英を示現し、企畫處長を得て今日の重責にすわつたのである。立上りは遲かつたが實力の保有者丈に一度、調子に乘れば順風に帆をあげる。現在、古海氏と比肩し得る地位

にあるのも宜なる哉である。

稅務司長迄の青木次長が何故、人々に膾炙されなかつたといふ事は、當時、來滿後の實績に於て優つてゐた幾多諸先輩があつた事や、又科長時代が國有財產科長といひ、參事官時代の企畫處が今日程の權限を保持してなかつたのや、司長時代も稅務司長といふ地味なポストのみを廻つてゐた事等の履歷も原因の一つに擧げられるが、なんと云つても大きな要素は青木次長の持ち味にある。

青木次長は酒を飲み風論を談發し、スポーツを好み、人に問はれゝば口を開く、決して消極的と思はれる部面はない。しかし、古海氏のごとき縱橫機略は感じられないし、又一つのものと組んで彼の考へ方、粘着性は決して積極性といふものを人には與へないであらう。

「ベテラン、青木」の評はこの點で十二分に青木次長を云ひ盡してゐる。

青木次長は本年四十二歲、大正十三年、東大政治科を出て、直ちに東京稅務監督局に入り、本省主稅局屬をやつた後、外局に出て橫濱稅關事務官補、一度、大藏省に歸つて再び和歌山、東京市西神田橋稅務署長、と地方に出て、銀行檢查官となり、滿洲國入りをしたといふのが青木次長の來滿前の履歷である。

學校を出ると直ちに大藏省に入つて地方の現業を廻つた青木次長は好むと好まざるとに拘はらず、コツ／＼と實力の涵養を餘儀なくされたと推察出來る。

大藏省の現業で植ゑつけられたのか、それ共、先天的な習性かわからぬが兎に角青木次長は學者的な態度で現在の滿洲國の經濟問題と四つに組んでをり、滿洲國行政の下部にまでその實力を侵透してゐる。古海次長とは別な意味で、即ち青木次長の如き粘着性と研鑽力の強い官吏は現在、滿洲國が要求して切なるものがある。

實力を尊ぶ部面からすれば誠に青木次長は滿洲國の至寶であると稱しても決してほめすぎではあるまい。

滿洲に進出して來た「大藏組」は大部分、明け放しな性格を感じられるが青木次長は決して陰性ではなくとも、「明け放し」なものを感じられない。

線がふとくて、しかも細緻といつた感じである。かういふ形の官吏が一日も早く滿洲の首腦部に充滿して貰らひたい。研鑽力の少ない、大言壯語形も困るが、理論鬪のみの青白きインテリ官吏も滿洲の現狀にはそぐはない。

青木次長に要望するものは今後「滿洲官場陣」建直しのために青木タイプを率先して養成して貰らひたい事である。それには自己の道のみを進む事ばかりを心掛けず、次代官吏養成のため力を割く事である。

今後の青木次長の使命は正にこの點にあらねばならない。

滿鐵副總裁　佐藤應次郎氏

建國十年、現在の滿洲國は過中の懸案を解決し盡してゐるが、まだ大物が二つ殘されてゐる。「關東州問題」と「滿鐵と滿洲國との關係」である。兩者共差當つて何等表面上の障害が見えるものでもなく、殊に後者の「滿鐵と滿洲國の關係」に至つては附屬地行政權の移讓、滿鐵の重工業部門切離しによつて滿鐵は鐵道プロパーになり　二十餘萬社員が滿洲國産業開發上の大動脈たる鐵道運營のため孜々と盡力してゐる現狀を見ては何を世迷ひ言ぞと思はれるが、筆者の云ふ「滿鐵と滿洲國との關係」とは滿鐵の有する力を十二分に現行産業開發上に活用するための懸案事項として採り上げてゐるのである。この見地より見れば「滿鐵と滿洲國との關係」は懸案事項たり得ると確信する。

事變前に滿鐵が鐵道以外に産業部門や行政部門を擔當してゐたのは理の當然であるが、滿洲國成立以來は滿洲國建國の本義に基き、鐵道運營一本主義は勿論、滿洲國法人に變格すべきであるといふ意見が一部にある。この意見はタイミングを忘れた論で、日滿共同防衞の見地から滿系を全部、皇軍に編入せしむべしといふ樣な理想主義と同じであつて、今日、日本が滿洲に教育及神社行政權を所有してゐるのと同じく、滿鐵の日本法人は決して不合理ではなく、この問題はまだ〳〵檢討し得る餘地がある。

しかし、現實の問題として、滿洲國內丈の鐵道運營に當たつてゐる滿鐵が滿洲國政府の指揮を心良く受けて虛心坦懷に仕事をしてゐるか、日本法人をかさにきて「親の心、子知らず」の態度が見えやしないか。

滿洲國政府は日本の子供である、滿洲の産業開發權を滿洲國政府に委任してある以上、例へ親たる日本の直系の血を引いてゐる滿鐵であつても滿洲國政府の指揮を或る程度受けなければならないであらう。

この關係が圓滑に行つてゐるであらうか。もう少し滿鐵が謙虛になつたら、又政府も滿鐵の實力に對して禮節ある待遇をしたら、滿洲産業開發上の大動脈はもう少し力を示現出來るのではないであらうか。現實と將來とに二別して滿鐵は勿論、政府も「滿鐵と滿洲國との關係」につき意識の統一を計るべきである。

一例として、滿鐵調査部の問題がある。鐵道プロパーの現業主義よりして滿鐵が非現業部門たる調査部に相當の力を割いてゐる事は一見、不可解に思へるが、滿洲及將來の大東亞建設に對する調査部門の重要性からして、又今迄、實績を有してゐた滿鐵がこの部門に力を入れるのは當然である。

しかし、この調査部問題も今迄の實績からして滿鐵にやらしてゐたのが現實の問題としては好策であるから、滿鐵がやるといふ過渡的辨法なのであるのか、又は調査部門は鐵道部門と併立した方が最も效果的であるから未來永劫、滿鐵が把握してゐるのか、この點が甚だ不明確である。

もし「一日にして調査部門は成らず、しかも調査の必要、今日に若くはなし」といふ過

滿洲のメイン・テーブルを圍む人々

渡的辨法ならば、何も滿鐵は現在の調査部門を誇示する必要もなく、又一方、他の部門に調査力の擴大を養成し、徐々にその力を移讓するといふ態度に出なければ鐵道プロパーは完璧化されない。以上の如く、具體的に何等の障礙は見えないが、もし滿鐵の力をより明朗に滿洲産業開發上に活用するとしたら解決しなければならない事項が多々あると思ふ。

前置きが永くなつたが、佐藤副總裁に要求されるものゝ中にこの命題が加へられてゐる、鐵路と共に三十五年、佐藤副總裁は滿鐵マン中、最上の滿鐵履歴を有してゐる。

明治四十年、東大土木工學科を出て直ちに創立草々の滿鐵入りをし、安奉線の建設工事から鞍山、撫順を育成して來た生拔きの滿鐵マンたる副總裁、しかも非現業部門育ちのお偉ら方と違ひ、土木工事といふ現業に身を投じて來た副總裁丈に滿鐵を骨の髓まで體得し、又滿鐵の長所も短所もよく熟知してをり滿鐵をこよなく愛してゐる者であらう。「滿鐵と滿洲國との關係」のより良き改善は中央側たる日本に於てなさるべきではなく、滿洲現地から盛上つた切實觀からなさるべきであり又さうでなくては拔本的な改善策は完成しない。

以上の意味で、滿鐵と滿洲國のより良き改善は副總裁の如き人物が進んで當らねばならないし、又眞に滿鐵を愛する者として之が打開に當る事が滿鐵マンとしての道であるし、より良き改善へは滿洲國政府より積極的に出る事が政治的手段としては不利な點があるのを見受けると尙更、この感を深くする。

佐藤副總裁は本年六十二歲、學校を出るや直ちに滿鐵に入り、運輸部建設課勤務より累進（中途、山東鐵道靑島保線事務所長として山東に轉出）、鞍山工務事務所長、交通課長代理、撫順炭礦土木課長、古城子探炭所長、鐵道部次長、鐵道建設局長を經て、昭和十年、理事になり、十四年三月、現大村總裁の後を受け、副總裁、鐵道總局長になつて今日に至つてゐる。一見重厚、無口の感を與へるが、仲々恬淡味のある風論談發組で土木系統特有の親分肌を持ち、今日、大村總裁を援けて滿鐵の輿望を集めてゐる。

副總裁になつてからは從來の技術者肌から政治性活動への進展を餘儀なくされてゐる、大村總裁が風流味のある天性を堅持してをり、前佐々木副總裁が主として資金調達といふ外的連繫に重點を置いてゐた關係からして、例へ技術者上りの佐藤副總裁とは云へ、社員が滿鐵の代表者として滿鐵の統轄權や外部に對する政治的活動を要請したのはうなづかれる。

正に好機である、佐藤副總裁たるもの過去三十五年、自分を培つてくれた滿鐵へ對して最後の奉仕として、現在の地位を藉りて滿鐵の力を今後の滿洲國産業開發に十二分に明朗に、發揮させるために「滿鐵と滿洲國との關係」につきより良き改善を斷行すべきである。

節米と糯黍の食用に就て

これまで滿洲國では國內で水稻や陸稻が產せられる上に、國內の生產量で足りない分は年々日本や朝鮮や其の他から輸入して來た。そして米にこと缺くといふことはなかつた。然し既に家庭の臺所を預つてゐる主婦達が身を以て經驗してゐるやうに、米屋に米を持つて來て吳れといつてもなか〳〵持つて來て吳れぬし、滿鐵の消費組合のやうに家族の員數に割當てゝ配給してゐるところ等もあり、と に角最近になつて米に不自由を感じ、窮屈を感ずる樣になつて來た。どうしてこんな風になつて來たかと云へば、勿論需要量が供給量より多くなつて來たからである。では何故需要量が多くなつたかと云へば、先づ第一にこれまで餘り米を食べなかつた滿人が、小麥や小麥粉の品不足と値上りのためにその代りとして米を食べるやうになつて來たこと、第二に內地人が潮のやうな勢で入滿して來たこと、第三に戰時下特殊な方面の需要が增大して來たこと等々が原因となつてゐる上に、元々國內生產量が不充分であるのに、これまでの主なる輸入先であつた日本內地でも長期戰下の食糧政策として出來るだけ米の輸出を手控へるやうになつて來たのである。

米は東洋にあつては、文化程度生活程度の一つのバロメーターといはれ、滿人の生活が安定向上して來てゐる今日、米の需要は今後共減るどころか增える一方であり、日本內地人の入滿も增加の一路を辿るばかりであつて、而も長期戰下の今日としては何を措いても軍需の確保は必要不可缺である。滿洲國政府としてもかうした需要の增大を見込み、外に賴らずなるべく不必要なものを抑へて自給自足出來るやうにするために積極的な增產計畫を樹て、着々これを進行中であるが、かうした積極政策と共に、一面どうしても節米して需要と供給のバランスをとる政策も必要になつて來るのである。

◇

今迄、內地人特に都會生活者は瑞穗の國に生れ豐富な米を見て來てゐるので、米の有難さと云ふことに鈍感になつてゐるが、米の一粒一粒が國民生活の源泉であることを思へば、あだやおろそかには出來ない筈なのである。

米の有難みをしみじみと感じ、勿體ないと感じたならば、今までのやうに、金さへ出せば捨てゝも構はないといふやうな誤つた考へは、この際棄てなければならないのである。

古來戰爭の最後の勝利は兵糧を餘計持つた方に占められ、食糧が豐富である國はきつと强大になるといはれる。殷鑒遠からず、一九一四年から一八年にかけてのヨーロッパ戰爭で獨逸が敗北したのも色々の原因はあるが、最大の原因は國內が食糧飢饉に陷り思想不安が濃くなつたからだといはれてゐることに徵しても、東亞新秩序の今日に於ては、國民の一人々々が國家の食糧政策に協力し、官民一致擧國一體となり、一糸紊れず食糧の需給を圖るといふことは、何よりも大切なことなのである。さうした國民の心からの眞劍な協力がなかつたならば、戰時の食糧政策の遂行といふことは期し得られない。であるから國民全部が國家の食糧政策に協力するといふことは、結局その國の興隆の原因であり、これに反對したり或ひは消極的にサボタージュしたりすればその國の力を殺ぐといふ結果にもなるのである。

一體に主食といふものは永年の習慣の惰性もあり國民的な傳統的嗜好もあつて、一朝一夕でこれを變更するといふことは至難なことである。これまで米だけ食べてゐた國民に、米を全然食べてはいけない、高粱か粟を食べろとか、一日三回を二回にしろといふのは無理かも知れない。しかし、餘り贅澤な食べ方をしてはいけない、米を節約する意味でこれまでの主食たる米に多少の混ぜものをして我慢しろ、といふことは今日の米穀事情、食糧事情から云つて決して無理なことではないのである。

◇

我が滿洲國に於ては、此の五月一日より、節米の具體的對策として、愈々糯黍の配給を實施した。糯黍は、日本に於ては神代より、支那に於ては堯舜の頃より黍稷と云はれ、五穀の頭として既に庶民の主食とされたものである。今回主食の代用として配給され、其の成績も却々みるべきものがあるのであるが、糯黍の榮養價及び食用法については、尙一層、一般人の認識を高めて貰ふことが必要である。

左に簡單ながら糯黍の榮養價及び食用法に關して記してみる。

一、榮養に就いて

成分／名稱	水分	蛋白質	粗脂肪	炭水化物	灰分	熱量
精白黍	一五・〇五	一二・一六	一・三七	六七・七七	〇・七七	三四八
白米	一四・六八	八・〇〇	〇・九三	七五・〇九	〇・九一	三四九

右表のやうに、榮養素として最も重要な蛋白質は白米より遙かに優り、熱量も略等しく、又本表中には現れてゐないが、ビタミンBを米以上に含有して居り、食品として決して米に劣つて居ない。尙、食品の榮養價を決定する重なる要素と云はれる消化率を他の穀類と比較してみると、左表の樣に略等しく、米の代用品として榮養的に決して劣つて居ないのである。

消化率の數字は、含有榮養素を百としそれに對する百分比である。

（消化率比較表）

養素／品名	黍	米	小麥粉	粟	玉蜀黍
蛋白質	八四・三九	六四・八六	九三・六	八七・四七	七五・六八
炭水化物	九七・四〇	九九・五〇	九九・三	九八・四三	九六・九六

二、食用法に就いて

（一）混雜物の除去　滿洲產の黍は、農家の調製法不良なる爲に小石、稗の混入することが多く、又精白の際往々脫皮しないものがあるが、これは黍が小粒の爲に除去され難いのに因るので從つて家庭で調理前之等の石や夾雜を取除く必要がある。

（二）洗ひ方　飯、粥に不拘、米の場合より丁寧に洗ふこと。

（三）水浸時間　炊飯前豫め黍は五、六時間位水に浸けておくとよく炊けるが、夏期は腐敗に注意して時間を適宜短縮するか、又は水浸けしない方がよい。

（四）炊き方の種類

イ、米黍混合炊飯、ロ、黍飯
ハ、黍粥、ニ、米黍混粥、ホ、黍餅

黍は、粒が小さい爲に米より早く煮へることゝ、粘着性があることに注意せねばならない。從つて混合炊飯の場合は、米のみを水から炊出して、その沸騰後、糯黍を上部に入れるか、他の場合も適當な心得が肝要である。なほ家庭に於て種々研究して、より有効な食用法を實行されたい。

また黍は、小粒ではあるし、特に米との混合の場合など、咀嚼を念入りする必要がある。然して此れを機に、食物を凡てよく咀嚼する習慣をつけて頂きたい。

（民生部厚生司・興農部糧政司・滿洲農產公社發表）

阿片戰爭

棋本捨三著

池邊青李裝幀

（六月上旬、全滿各書店一齊發賣）

近刊

藝文社處女出版

（四六版四百餘頁・定價貳圓）

貪婪飽くなき米英の東洋への點火は實に廣東香港澳門を中心として捲起された『阿片戰爭』であつた。小説『阿片戰爭』は豪放なる氣魄比類なき情熱をもつて史材文學の領野に新しく逞しい巨歩を占めつつある棋本捨三氏の問題作『成吉思汗』につぐ第二の巨彈である。祖國の急に一身の利害も聲譽をも棄てて顧みなかつた林則徐の人間悲劇を周到綿密な史料に依據しつつ飽くまでも深く掘り下げ綴つたこれは一大叙事詩である。

老獪なる英國貿易監督官サー、チャールス・エリオットを相手として闘ふ林則徐、敵味方に分れ、宿命的争ひをつづける相愛の兄弟を配してその物語を昂奮の坩堝に投入れるあたり流石戲曲家として圓熟せる技法を驅使し、しかもその比類なき史眼はこれを單なる興味中心の讀物にとどめず、あくまで藝術的香り高い歴史小説にまで高揚せしめ、米英が東亞に描いた惡虐の足跡を烈々の正義感もて冷徹に剔つてゐる點新しい國民文學として、裨益するところ大である。

今や大家中堅の諸作家或は中國の作家など競つて同じ題材を取上げてゐる際、哈爾濱日日新聞に連載既に一年も以前に在滿作家がその先鞭をつけ、堂々六百枚の大作をなしてゐることはわが滿洲藝文界の誇りたるばかりでなく非常時局國民必讀の書として、又藝文社の輝やかしき處女出版として聲を大にして江湖にお薦めする所以である。

發行所 藝文社

大凌河

戈禾

大内隆雄譯

一

春の大凌河は、一條の餓ゑ切つた腸のやうに、疲れて原野に横はつてゐる。沙漠の風が砂塵を混へて狂暴に吹いて來る。この活きてゐる水は、永劫に緩かに流れてゐる。

兩岸に樹は幾らも無い、雜草がバラバラに長く伸びてゐる、太陽は朝の露を蒸發させて居り、草の葉から淡く水氣が騰つて、灰色の蒲團が痩せ衰へた胃腸病患者を掩ふてゐるかのやうである。

小鐵子（シアオティエヅー）は例によつてその背中の剝げた牝牛を腿絆にゆはへると、枯れた楡の樹に倚りかかつて、居睡りを始めた。朦朧たる中に、心中ではまだ牝牛の腿絆よ解けるな、烏どもよ來て騷ぐな、小鐵子（シアオティーエヅー）をようく眠らして吳れと念じてゐた。

彼はほんとに睡かつた、ゆふべもまた南京蟲に食はれ通しだつた、父さんの咳はいつもよりもひどかつた、その上猫が屋根の上で妙な鳴聲を出し

て暴れた。一昨日劉大娘が話してくれた物語の中のお化けが、闇の中で彼に向つて眼を剝いてゐるやうな氣がした。怕さ、不安、騷がしさが彼を包圍してゐた。どうしてゆつくり眠ることが出來たらう？だから、朝早く起きて見ると、頭はフラフラし、眼の皮は突張り、全身咬まれた痕が痒かつた。

今彼は睡つてゐる。大凌河の胸に抱かれ甘え睡つてゐる。

微風が襟を搖り、鼾聲と流水が交響してゐる。

陽が昇り、陽光が落葉した木の枝の間から射して來、小鐵子の瘡頭を照した。むづ痒く何百匹もの蟻が爬つてゐるやうな氣がした、彼は神經質にゴシゴシと搔いた、黄色い瘡蓋がボロボロと衿に落ちて來た。彼はキツト眼を開け老牝牛がゐるかどうかを見ようとした。突然傍に二人の人間の足音がした。

二人の人間は話しながら歩いてゐる、背の高い痩せたのがしやがれ聲で言つてゐる。

「あの窪地の田が一番都合がいゝ、あれ以外には、もう好い場所はない」。

もう一人の肥えた髭のある方が、續いて何か言つたが、その聲は猫の鳴聲みたいで、小鐵子には聞えなかつた。

「地勢から言ひや、大凌河の水を引くのはさう面倒ぢやないだらうな？」

痩せたのが尋ねた。

「うん……」

猫の方が鼻聲で言ひ、威張つた風である。

「私の測量した所ぢや、大體三十畝ばかりです、それにあの中にある墓幾つかを移したら、池を四枚は充分作れますよ。」

「……………」

「池四枚として計算すりや、一年に少くとも三千斤の鮮魚は獲れますよ」。

脚音は漸次近づいて來た、小鐵子は眼を細くして盜み見た、下の方には四つの黒く光る皮靴が歩んで來る、中の方は短い服である、何と言ふのか名を知らぬ服を着てゐる、上の方には光る眼鏡があり、眼鏡の中からは四つの人を脅かす眼光が射出されてゐる。

小鐵子は敢へてそれ以上見ようとしなかつた、彼は小さな時から眼鏡を怕がつた、色のあるのでも、無色のでも、彼は總じて眼を硝子の奥に藏ふのは、怕ろしかつた。そこで、彼は下を向き、素知らぬ振りをして、手で衿に落ちた瘡蓋をつまんでゐた。

「おい、子供！」痩せたのが、ステッキで左の方を指した。「あの窪田は、何處の家のだい？」

小鐵子はほんとは彼等の相手になるまいと思つてゐた。しかしその窪田のことを聞かれると、關心を持ち威張つて立ち上つた。

「あの窪田かい？俺ん家のだよ！それを聞いて何するんだい？」

「おう、お前の所のか？お前は何て言ふんだ？」

「王つて言ふんだ。」

「お前の父さんは王何て言ふんだ？」

「王老本だ、人に聞いてみな、凌河村の者なら誰だつて知つてらあ。」小鐵子は威張つて頰を膨らませた。「俺等は山に來て土地を耕したんだよ！」

その痩せたのが笑つた。

「ぢや、俺達をお前の家へ連れて行つておくれよ！」

「いやだい！」小鐵子は直ぐ拒絶した、心の中で、お前らは俺等の親戚でもねえ、何しに俺の家へ行くんだ？近頃は肚黒い外道どもが隨分殖えた、十人のうち八人は好くない奴だと考へてゐた。

「只で連れて行けとは言はん、二十錢がと杏を買つてやるぜ、どうだ？」痩せたのが二枚の白銅貨を取り出し、指で敲いて閃かせた。

も一人のずうつと默つたきりの髭男も、うなづいて同意だといふことを示した。

「いや、俺あまだ牛の番をせにやならん。」小鐵子は瘡頭を搔き、小さな眼をキラキラと動かした。手を額にやり、あたりを見廻した。

「ワア！俺の牛が河を渡りよつた！」

相手があと何を言つたか耳にも入れず、痲の鞭を拾ひ、河の中に飛んで行つた、胸はドキドキ跳ねてゐた。

二

小鐵子は河の砂地に、暫らく蹲つてゐた、あの二人が姿を消すまで見送つてゐた。それからやつと大きな息をし、自分で自分の鼻の頭を指し、罵つた。

「チエツ、瘡頭、しよげやがつて！」

老牝牛はもう充分に食つたらしい、河水を幾口か飲み、砂地に横たはり、毛の無い背を磨りつけてゐる。

小鐵子はますます面白くなかつた、片手で手荒に瘡頭を搔いた、心の中で、あの二人は親爺に貸しのある人間かも知れんと考へてゐた。本當だ、親爺に貸しのある人間は隨分澤山ゐる、病氣で倒れる前には、一日にどれだけの人間が家に

來て喧しく言ひ立てたかわからない。今ぢや、親爺は病氣で倒れ、毎晩あんなにひどい咳をする、若し其處に來られたら、逆上して、どんな騷ぎをやらかすかわからない。一番いいのは、親爺に早く報せて、何か手立てを考へさせとくことだ、だがまだお晝過ぎ頃だ、こんなに早く歸つたら、親爺は怠けると言つて怒るだらう、好し、どなられてもいゝ、どなられる方が、親爺がひどい目に遭はされるのよりはいゝ、さう考へると、キツと立上り、老牝牛の背を鞭でひつ敲いた。

老牝牛はもぐもぐ反芻してゐたが、厩の鞭が鳴るので、重重しい蹄を運び、のそのそと歸り出した。

家に着くと、小鐵子(シアオテイーエツー)はこつそりと老牝牛を藁小屋につなぎ、忍び足で戸の所にやつて來て母を探さうとした。頭を突つ込んで、とたんにびつくりした、何と先刻のあの痩せたのが部屋の中に立つてゐて、あの髯に向つて、父を紹介してゐたのだつた。

「こちらは城内の魚業組合會會長田(テイエン)さんで。」

その髯は甚だ傲慢に、名刺を出して渡した。父は起き上つたが、咳ばかりしてゐて、相手にならない。肥えた男は少し面白くないといふやうに、名刺を父の枕もとに置いた。

「田(テイエン)會長はお前さんに大事な御相談があるんだ。」

父はもう咳を止め、疑ひの眼で、その痩せたのの口を見てゐる、痩せたのは言ふべき時だと感じ、反問した。

「お前さん窪田を三十畝(ムウ)持つてるさうだね、大凌河の西岸に？」

「へえ、持つとります。」父が答へた。「あの窪田は、私病氣をして、手が附けられず、もう荒れてしまつとります。」

その髯が痩せたのに向つて、喜んだ眼附を向け、痩せたのはニコニコして言つた。

「でも田(テイエン)會長はちやうどそのお前さんの窪田が氣に入られたんだよ、お前さんから買ひ取りたいと仰言るのだ。」

父は首を振つた。

「私申したぢやありませんか、あそこは荒れてて低い土地で、幾らも作物穫れはしませんて。」

「何か作らうといふんぢやないのだ、少し外の用に充てようと思ふのだ。」

「何になさるんで？」

痩せたのが默つて髯の顏を見た、髯が彼に向ひ何か眼で言つた、續けさまにうなづき、實際を言つたらいいといふ意を示した、そこで痩せたのが口を父の耳もとに持つて來た。

「わしら、養魚場を作らうと思ふのだよ。」

大凌河

「養魚場？」父はびつくりして、又咳をしはじめた。

「さうだよ、ぢやが、この商賣はとてもさう儲けは無い、だがあの田を遊ばして置くのもつまらん、荒れさしてな、若しわしらに賣つて呉れりや、こりや廢物利用だ、それに、値の方は、うんと出すつもりだ。」

父はまだ咳をしてゐる。

「今の相場から言ひや、あの田は一番高くても一畝(ムウ)二三十圓だ、しかし、會長さんはお前さんみたいな貧乏人につけ込むやうなことはなさらん、うんと出されるよ。」

痩せたのはこれで言ふだけ言つたといふやうに、金緣眼鏡を手に持ち、良い返答を期待した。

父はもう咳で顏中をあからめて、何の返事もしなかつた。

「若し何なら」痩せたのが言ふ、「何もお前さんの方ぢやせんでいゝ、たゞ地劵を出して呉れりや、それと取り換へにお金を拂ふよ。」

髯の方もうなづき微笑して、期待した、だが長いこと返事は無かつた、ただ次々と劇しい咳をするだけだつた。

「どうだね？返事をしておくれよ！」痩せた方は少し焦つてゐる。

父は自分の拳で腰をたたき、重々しい聲で言つた。

「いやです——！」

髯男はびつくりした、痩せつぽもびつくりした。

「値段のことなら、言つてくれよ、何とでも相談に乘るから！」

父は續けざまに首を振つた●

「私や、賣らん、賣らんのですて！」

二つの顏は忽ちに笑ひを斂めた●

「何だつて？あの田を殘しといて、何にするんだね？」

「旦那、あなた方も多分見られたでせう、あの窪田には墓があります、私の、祖先が其處に葬られてゐます、七代になります、私は、私は祖先の骨を、賣ることは出來ません……

それに……。」

「そりや何でもないぢやないか、墓一つ移すには十圓もありやいゝ、お前さんも知つてゐよう、稻田を作る者は、みなさうやつてゐる、しかし、わしらは、もつとそれ以上出していい、十五圓でどうだね？お前さんが賣つてくれるんなら。」

「私は賣ることは出來ません、倘更墓を移すことも出來ません、死んだ者に引越しをさせることは出來ません、田は先祖が殘してくれたもので、血と汗とで出來たものです、私は貧乏して、餓死しても、賣れません、旦那、どうか別な人間

からお買ひなさい！」

瘦せつぽは少し困つた、顏を眞つ赤にし揉み手をした。

「聞いておくれ、これは組合會の事で、まあ公けの事なのだよ！」

父は黃色い痰を吐き、冷ややかに、

「公けの事やら私の事やら私にはわかりません、でも、田は私のものでして。」

尊嚴が傷つけられた、瘦せたのが怒つてどなり出した。

「お前さん等、大凌河の者は、みな馬鹿だ！」

「さうですよ、旦那。」父は息を切らしてゐる。「私らはあの河の濁つた水を飮んどるので、みな馬鹿になつたのですよ。」

「貴樣！」

瘦せつぽは怒つて、額の靑筋をピクピクと動かした、グツと眼鏡を外し、深く凹んだ眼が露出し、ますます怕かつた、小鐵子はびつくりし、舌を出し、こつそり水缸の後に隱れた。

それからその黑髯が、瘦せつぽの耳に何か囁き、瘦せつぽは少しくだけた苦笑した顏になつて、

「まあいいよ、病氣してて、頭もあまりはつきりせんのだらう。まあ、今日はこれで歸らう、お前さんもよく考へてくれ、又日を改めて相談に來よう。」

父は返事をしようとしたが、それは濁つた痰に塞がれた。

二人は父の咳聲の中を去つた。

三

小鐵子の父——王本は、まだ四十幾つの人間だが、身體はひどくいけなくなつてゐた。炕を輾轉すること、すでに半年以上になる、全身、ただ荒れた皮膚が殘つてゐるだけ、それが瘦せこけた骨を包んでゐる、兩の頰は落ち窪み、眞つ赤な眼をし、よく苦しげに大きく瞪る、咳をする度に痰が出る、晝間はいらいらしてやりきれない、夜は力が無く盜汗をかきよく眠れない。醫者は、骨がどうかなつてゐると言ふ、半ばは若い頃の過勞から、半ばは遺傳からである。

彼は自分で、この病氣は快くならないことを知つてゐる。三十年前に親爺がやはりこの病氣で死んだのだつた。臨終にしつかり彼の手を握つて言つたのを覺えてゐる。

「お前、俺はお前に濟まん、お前に嫁も貰つてやらなかつた、でも先祖が三十畝の田を殘してくれたから、お前を餓ゑさせもすまい、お前、しつかりやつてくれ、先祖や俺が安心出來るやうに、あの窪田はしつかりと守つて行けよ！」

その時、彼はまだ二十何歲だつた、がつちりとした身體は

牛のやうに達者だつた。高く出た顴骨、濃い眉毛の下には、まるい大きな眼、その射るやうな眼が投げられると、どんな女でも、心を燃やした。

田舍の老人たちはよく彼の後から言つた。

「奴は野馬ぢや！」

彼は眞に野馬のやうに、自在に暴れ廻つた、博奕が好きで、牌九を見るともう外のことには手が附かなかつた、年期働きで得た金も悉く、これに消耗した。

早春になる、大凌河の氷面に水が動く、冬を越した杏樹は枝いつぱいに蕾をつけてゐる、南風が吹き人々は胸が熱つぽくなつて來る。

王本は陳旦那の所で、春三箇月働く話を定め、白く光る銀貨十八圓を持つて、孫麻子（譯註—麻子はあばた。）の賭場にやつて來た。

入つて行くと、ちやうど親が賭けを求めてゐる所である、彼は臂を張つて入つて行き牌をつかみ、

「俺あ十八圓賭ける！」

「十八圓？」孫麻子はびつくりして立ち上つた。「王本、冗談は止せよ、今日の場は、よそから來た方が多い、みんな福の神がついてて——借りは無しだよ。」

「わかつとるよ。」

王本はもう牌を混ぜ、ポケツトから銀貨を取り出し、チャラリンと蓆の上に出した。

銀貨には靑白い輝きがある、賭博者たちの眼がギラギラ光り出した。

「みなやつて下さい！」孫麻子は直ぐに笑ひ顏になつた。

「牌九ぢや、王本は凄腕だぞ。」

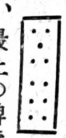
そこで三つの門に、銀貨や札がいつぱいに置かれた。

「骰を！」

「それ八だ。」

王本は自分の牌を手に取り、見もせず、ポンと蓆に出した。

「こんなんぢや、そつちが勝ちだらう！」

「おう！　虎頭配花九、黑鬼子の都入りだ！」（原註—虎頭は 、花九は 、この二札を黑鬼子と言ひ、最上の牌である。）

見物人が見、騷ぎ出した。

「こりや天　九王が出來たつて駄目だ！」（原註—天九王は大天と花九、牌九の第三位。）

兩側で牌を撫でる手が、みな顫へて退いた、額の汗が、鼻

の窪みへ流れてゐる。

孫痲子は何かおいしい物を嚼んでゐるかのやうに、口をもぐもぐさせた。

「ヘッ！　王本、調子がいゝなあ、酒手を忘れんやうにな、どうも、これまであまりくれんからなあ。」

王本は腕を曲げ、三方の錢を一しよに搔き集めた、それから次の回を始めた、このやうにして、三回やつた。

周圍の賭博者たちは、息を詰め、鼻先に大粒の汗を出し、眼をまるく見開いてゐる、まるで火が出さうだ。

王本は錢を數へた、元手を別にして四十二圓の銀貨、それに澤山の札がある、彼はそれを懷にねぢ込み、立ち上つた。

「止めだ！」王本は人群から出て來た「今日は氣持があまり好くない、又何れ！」

賭博者たちの悵然たる視線が、その勝利者の後姿を、部屋から送り出した。

王本は歩きながら、好奇心でその銀貨を取り出し、二つづつぶつつけた、それによつて澄んだ金屬音が出た。

淡々たる斜陽が、西側の杏の林から射して來る、黃色い砂地に淡紅色の光を反映してゐる、鴉が微風に隨ひ一群一群と飛んで行く。

王本は心が輕く飄々としてゐるのを感じた、高粱酒でも飲んだやうである、脚は輕快な歩み方だ、手では銀貨の交響樂を鳴らしてゐる。

高粱稈の垣と二枚の板のついた門の所を廻つた。

「王本！」

ふと後から女の呼び聲がした、柔しい婉囀たる聲で、鶯の音みたいであつた。振り返ると、窈窕たる腰が閃き、戶の中に逃げ込んだ、外側には白い顏が半分出てゐるだけ、水のやうな眸、手が下顎を掩ひ、手掌を外に向けてゐる、眞つ赤な小さな爪が齒をくじり、何か言はうとして止めたやうで、この上もない柔しさで凝視してゐる。

王本は彼女を知つてゐる、彼女は周六の女房だ、彼女は非常に若い、とても綺麗である、何でも「水仙花」といふやうな綽名が附けられてゐる、彼は綽名のあるやうな女はきちんとした代物ではないことを知つてゐる、この狐狸の精みたいなのは、ひどく浮氣つぽいやうだ、彼は咽喉から痰を出し、慌てる彼女に吐き掛けてやりたいと思つた。

彼が口を開かぬうちに、その女は突然全身を出し、彼を手招きし、つつと笑つた。

それから、尻をゆすり、すうつと庭に驅け込んで行つた。

王本は痰を吐くこともせず、呆然とし、グウツと今の誘惑と一しよに呑み下した。顏が熱し、胸も熱つぽくてやりきれず、もう銀貨を敲く餘裕もなく、三歩を二歩に家に走り歸つた。

夜、濃い露が杏の蕾を潤はした、大凌河の水音が、微風によつて傳はつて來た、憩へる者のために子守唄を奏するかのやうに。

屋根の上で一匹の牝猫が鋭く鳴いてゐる、その聞き辛い鳴聲が、王本を夢から醒めさせた。眼を開けて窓を見ると、一輪の上弦の月が淡い光が、窓の隙間から射して來る、そして壁に貼つた「老媽回家」（譯註―お婆さんが田舍の家に歸り皆に迎へられてゐる圖）の正月繪を照してゐる。彼はどうも先刻夢を見てゐたやうに思つた、それはのどかな氣持のいい夢だつた、手を胸にやつた、まだドキンドキンと躍つてゐる。彼は又眼を閉ぢた、夢の甘味をもう一度味はうとした、しかし、その夢は再びはやつて來なかつた、眼前に閃くのは、曾つて見たもの、あの水のやうな眸、白い顏の半分だつた。彼はぼうつとなり、頭を搔いた、胸は一層烈しく躍つた、身體の或る一部が、熱してゐるやうだ、胃は渴し、ひもじいやうで、もうそれ以上眠れなかつた、もう部屋にぢつとしてゐることも出來なかつた、そこで、彼は服を被り下に降り、戶を開けて外へ出て來た。顏をあげ月光を眺めた。月光は神祕的に笑つて彼を周六の所の庭に引き込んだ。

四

雄雞が三遍啼いた、茅屋の屋根からは炊煙が昇つてゐる。風は無い、靜かだ、陽光が窓の隙間から射し込む、炕の下の二つの鞋を照してゐる。一つの鞋が裏返しになり、もう一つは紅緞子の花模樣を刺繡した鞋を壓へてゐる。

燕はとつくに大凌河畔から黃泥を啣へて來、軒先に飛び歸つて巢を造つてゐる、その鳴聲が王本の夢を醒めさせた、首に卷かれてゐた白い腕を推しのけ、身體を飜へし起き上つた、傍の水仙花もそれで眼を醒ました、睡さうな眼で彼を呼び止めた。

「何を慌てるの、もつと寢てたらいゝに！」

「見ろよ、もう窓の所まで陽が照つとる。」

彼は彼女の手を推しのけ、服を着下に降りた淡紅色の光線が、彼の顏を照してゐる。彼は殺人をやつた犯人みたいに、些か後悔してゐた。

水仙花も薄桃色の袷を着て下に降りた。

「少し掛けといでよ、顏洗ふ湯を沸してあげるから。」

眞つ赤な上衣、青褲子
出て行つた周六は嫌ひとさ、
やさしい王本さんが好き、
氣立てはよくてお金持、
夜半に外をうろついて、
垣根越しに、呼び入れた、
犬はびつくり、ワンワンワン、
おやおやおや、好か好か好か！」

五

黄梅節（譯註―夏至の日。）が過ぎて程なく、百姓は田の仕事に忙しかつた。ほの明るくなつた頃、王本は戰ひに敗れた勇士のやうに、疲れた身體を、周六の家から亂石山へ向つた、途中、田にはもうかなり人が出てゐた、空には一群、一群、鴉が飛んでゐた、若草の中には、蠕動する黄牛の背が見えた。

王本は陳家の門を入つて行つた、主人が、怒つた顔でどなつた。

「王本、お前成つてゐないぢやないか！」

王本は内心愧ぢ、哀願する様子を示した。

「旦那、相濟みません、家で一寸用がありまして、それで歸りが二日遲れました。」

「用があつた？」主人は冷笑した、「あの淫らな事ぢやろが！うむ、お前も今仕事が忙しいことを知つとらう、一日五十錢出したつて人は雇へん、お前は四五日も怠けた、何てことだ？」

王本は返事をしなかつた、鋤を持つて出て來、蹲つて涙を擦つた。

主人はます／＼怒つてゐる。

「春の三箇月、ちやあんと十八圓も出しとる、それをそんな風ぢや、お前良心といふものを持つとるのか？」

「それでも、何處の家でも用事はありますもので。」

「用事があつても、金の掛つとる身體なんだぞ！」

王本も少し怒つた、鋤を持ち立ち上つた。

「金ですか、私や働きますよ、力いつぱいやりますよ、が身體をすつかりあなたに賣つたわけぢやありませんよ。」

「何ぢやと？ まだ屁理窟を言ふのか？」主人は憤りに鬚をおつ立てた。「よその飯を食つてりや、言ふことを聞くもんだ、お前はわしのために働いてくれにやいかん。」

王本は冷笑した。

「旦那にいくらお金があるからつて、人間は人間らしく扱

つて下さいよ！」

「その金があるからこそお前ら貧乏人を養つて行けるんだからな。」

「俺ああんたに使はれるのは嫌やだ！」王本は鋤を抛り出した。「俺あ辭める、そしたらあんたもどうにも出來まい。」

「よし、手向ひするんだな、好いとも、好いとも！」

王本はもう相手にもならなかつた、袖を振り、門を出た。

主人が後で息を切らして喚いてゐる。

「叛きやがつた、叛きやがつた、貴樣、肚黒だぞ、うん好し、好し、貴樣の保證人と掛け合つてやる、うう、十八圓も出したのに！」

王本は淩河村に歸つた、彼がびつくりしたのは、何箇月かの間に、この村の空氣が變つてゐたのである。

村人はみな彼に對して冷淡だつた、直ぐ近くの隣人でさへ、顔を合すと、鼻で「あゝ！」と言ふだけで去つて行つた。娘や女房どもは、化物を見て怕れるやうに、彼の姿を見掛けると、コソ／＼と隱れてしまふ。彼が何處の家の前を通つても、その家の中で騷ぎが起り、窓や戸を閉める。あの五十何歳の馬五後家さへ、きつい身構へをし、彼を見ると、隱れる、彼が彼女を取つて食ひでもするやうに。

王本はそんな妙な現象に面する度に、心中厭惡感が充滿し、憎々しげに唾を吐く。

「老妖精め、何て素振りだ！」

相手も返答を寄越す。

「チエツ！恥知らず！」

そして急いで逃げて行く。

それと違ひ、子供たちは彼に對して別な態度である、隱れない、逃げ去らない、反對に塊まつて取り圍んで來る、後さきになつて唱ふ。

「眞つ赤な上衣、青褲子
おやおやおや、好か好か、
垣根越しに、呼び入れた、
犬はびつくりワンワンワン！」

「どけ！ 小僧ども！」

それを聞いた王本は些か怒り、どなりつけた。

みんなはワツと聲をあげて散つて行つた。

失業後の王本は、ますます色と賭の二つの漩渦に沈溺した。晝間は、時間を賭場で過した、夜は水仙花の胸に投じた、この放浪の生活は、深く彼の心を魅惑した。彼は何とも形容出來ぬ快さと滿足とを感じた、彼は自分はいま眞の人

生の甘味をつかんだと思つた、彼は自分を死んだ父に比較した、父は餘りに愚かだつたと思つた、一生を血と汗で勞苦し、筋骨を疲れ切らして、血を吐いた、ずうつとさうだつた。

彼はまた父を自己に比べた、これは何といふ幸福であらう！このため、時に、彼は夢を見て、よく滿足げに笑ひ聲を出した。

だが、時は過ぎ、やがて彼は生活に漸く空虚を感じて來た。

賭場では、運がひどく惡く、數日間に、何十圓と負けた、水仙花は又媚びを振り撒き、あれが欲しい、これが欲しいと言ひ、彼の懷をからつぽにした、雇工にも行けない、陳の奴が到る處で彼の惡口を言つて歩いた。當面、彼は手許にひどく空虚を感じた、經濟の脅威が時に彼を憂鬱にし面白くなくした。だが彼は思つた、これはたゞ一時のことであらう。彼はなほ過去に執着し、未來に憧れ、すべての心情をこの放浪生活の漩渦に沈溺させてゐた。

六

秋雨が數日續いた、大凌河が突然怒り出した、曾つては凹んでゐた河床が今は水びたしになり、久しく餓ゑてゐた肚が一旦食を貪つて胃を壞したやうに、それら嘔吐物と排泄物――洪水が泥砂に混つた。氾濫し下流の方へ流れた。

同樣に、この數日、王本も憤怒してゐた、彼は常に疑ひを抱いて獨り言ちた。

「近頃は、力仕事も金にならんのか？」

彼は疑ひ、そして憤つた、陳の野郎の流言は、彼の牛みたいな力を、廢物にしてしまつた、多くの富裕な連中は、度を越えて彼等の耳を信じてゐる、流言を聽いて、彼に對して同じやうに憎惡し、齒に衣着せぬ、彼は勞賃を最低にまで下げると言つたが、彼等はやはり冷笑して答へた。

「私の所ぢやもう人は雇はんのだ。」

白眼、冷酷な顏は、彼を恨ませ、憤懣させ、怒つて家に歸つた、心氣が大凌河の水のやうに澎湃と肚に充滿した。

彼の恨みは極點に達した、何度も炕の下に跪いてもう生涯雇工にはならんぞと誓はうとした、奴らの田を荒れさせてやる、力の方が流言よりも大事なことを思ひ知らせてやる。其處まで考へると、眼前に澤山の長衣大袖の地主たちが、彼の脚下に匍匐してゐる姿が見えるやうで、彼は思はず狂笑一番、心は直ちに隨分とのどかに快くなつた。

だが、一刹那に、眼の前のそれらいやらしい黑影は一つの

白い顏に變り、水のやうな眸が哀願して言ふ。

「母さんの病氣は、どうせ快くならないわ、葬式をやるには、少くとも六七十圓は要るわ、ねえ、助けて下さるのはあなただけだわ！」

水仙花の願ひに、あの時、彼はもう毅然とした應諾を與へたのだつた、この應諾はその時には最も痛快な、最も麗しい微笑だつた、今や、この微笑は漸次に一塊りの黑い鉛と變じて、重苦しく彼の胸を壓し、殆んど息がつけぬぐらゐだつた。

彼は長いこと躊躇し、終に已むを得ぬ急を救ふ法を考へ出し、急いで蓑を被り、村へ出掛けた。

雨はまだ小降りになつたり烈しくなつたりして降つてゐた、彼は泥濘を踏み、足を滑らせながら楊家へ入つて行つた。

楊二爺は今朝飯を濟ました所で、銀製の楊枝で黄色い齒をくぢつてゐた。

王本は腰をかがめ、呼び掛けた。

「二爺」

二爺は答へず、まだ楊枝を口の中で動かしてゐた。

王本は少し困つた、用意出來てゐた次の言葉が、咽喉の中で轉がり、出て來ない。

楊二爺はゆつくりと楊枝を取り、それから脣の上の鬚を撫で、一句一句言つた。

「王本、この大雨に何しに來たのか？」

王本は急いで又腰をかがめ、ちやんと用意してゐた次の文句を言つた。

「折入つて二爺にお願ひに參りました！」

「わしに？」楊二爺は神經質に頭を振つた。

「わしの所ももう人は雇へんぜ。」

王本は辛かつた、強ひて笑顏をつくり、

「いえ、年期働きのことで參つたんぢやありません、二爺に何十圓か借金のことでお願ひしたいのでして。」

「金？お前、借金の手續を知つてるのか？」

楊二爺は輕蔑して笑ひ、二本の指を伸ばした。

「一つは保證人だ、も一つは抵當だ。」

王本はおづおづと賴み込んだ。

「そりやい〻、しかし、抵當は？今時、ただ空に話しは出來んからな、立派な地劵が無きや、借金しようなんて思ふなよ。」

「地劵ですか？」

「さうだよ、お前は何十畝かの窪田を持つてゐるちやないか？………」

晴天の霹靂みたいに、王本の胸は震へ、ひどく動氣を打つた、額には汗の玉がにじみ出た、耳許で父の聲が響くやうな氣がする。

「お前、どんなことがあつてもあの窪田は守つて行くんだぞ！」

楊二爺は彼のその躊躇してゐる様子を見、思はず狂笑し出した。

「お前結局借りるのか借りないのか？　若しあの窪田を抵當にするつもりなら、俺お前に手傳つてやる、うちの奥さんがちやうど何十圓か自分の金を持つてゐるんだよ。」

王本は笑聲にハツとした、心中では二つの意志が正面衝突を演じてゐた、一つは父の遺言で、一つは水仙花の媚びた笑ひである、まつはりつき、ぶつつかり、彼を茫然とした苦しみの漩渦に投げ入れた。終に、後者が前者に勝ち、當面の困つた場合の解決をつけるために、多くを顧みず、そこで、彼は苦笑した。楊二爺は又笑ひ出した。

「ただ利子を幾らにするか、これは先きに定めなくちやならん、まあ最初面倒でも後で紳士的にやれるやうにな。」

「そ、それはあなたの方の御自由でいいですよ、幾らでも好いんです。」

「うちの奥さんが遊んでる金を外に貸してるのは、七分や八分と色々あるんだ、しかし、王本はしつかりしとるからな、私の面子もあるし、あれに六分の利にさせよう、それでどうだね？」

王本は何にも言はず、ぼんやりとしてうなづいた、口の中に苦い物が澤山あるやうな氣がした、彼は我慢して、悉く肚に呑み込んだ。

「私は今言つただらう、先づやかましく後は紳士的にだ、取つ換へにな、地劵と、錢とだ。」楊二爺は冷笑し、妙な眼附を投げて寄越した。「一番好いのは、お前が直ぐに持つて來ることだ、近頃ぢや錢の足が速くてな、遲くなると、他人に持つて行かれんとも限らん。」

王本は斯うしてぼんやりと出て行き、又ぼんやりと取つて返した、二度目に楊二爺の所の門を出た時には、胸に澤山の銀貨の音を響かせてゐた。彼はます〳〵ぼんやりとし、その夜は、水仙花と一しょにぼんやりと一夜を過した。

七

賭場はおしまひになつた、もう太陽はとつくに出てゐた、

儲かつた連中はみんな興奮して出て行つた。ただ王本一人が殘つた、鼻の頭に汗を出し、ぐつたりして窓に倚り掛つた。手を荒つぽく擦り合せた、時にはひそかに齒を食ひしばつた、胸底に冷水を浴びせられたやうで、寒氣を感じ、空虚、失望の悲哀が蛇のやうに盤踞して、彼の全神經を完全に苦痛の深淵に陷れた。

彼は出掛けようとした、だが身體がだるく、窓邊に倚り掛つて暫らく休む外なかつた、眼は無意識裏に自分の鼻先を見てゐた。

孫麻子はのんびりと炕に横になつて阿片を焙つてゐた、たにし型の煙泡をこさへ、煙管にあてがふ、煙管を取つて、勸めた。

「おい、王本、一口どうだ？」

「いや、お前さんどうぞ！」

王本は眼を火の點いてゐる阿片ランプの方に向けた。

孫麻子は一口吸つた、煙がゆらゆらと昇つて行つた。

「王本、お前近頃、手の運びひどく惡いなあ、一回毎に負けるばかりぢやないか。」

「さうなんだよ。」

「だが、俺は泣き寢入りはせん、負けりや負けるほどやるんだ、何處まで俺が負けるものか見てやるんだ！」

王本は溜息を吐いた。

「負けるのが嫌やならよせなんて、誰がそんなつまらんことを言つたんだ？」

「女の方の運がいいからかも知れんな？」

孫麻子は笑つた、部屋の中は煙でいつぱいだつた。

王本は答へなかつた、しかし顏を赤くすることもなかつた、それは彼と水仙花のことはもう公然たる祕密となつてゐたからである。凌河村の人間で知らない者はなかつた。

「博奕は勸めても女遊びは勸めるな、女遊びを勸めりや兩方立たなくなる、」孫麻子は一字一字言つた。

「しかし、女遊びをするのはどうしたつて世間知らずの坊つちやんだと思ふなあ！」

王本は返事をしなかつた、彼が一人で言ふのを聞いてゐた。

「錢持つてたら、手なぐさみをやつたがいゝ、勝負は時の運だ。」

王本は笑つた。

「自分の商賣に都合の良いことを言はんでもいいよ。」

孫麻子は首を振つた。

「さういふわけぢやない、昔から言つてある、「食へば身になり、着物は飾れる、賭けは半分、女はすつからかん」とな、さうぢやないか？わしの考へぢや、女遊びはすつからかんどころか、若し悪い女にでもぶつつかりや、それこそひどい目に遭はされてしまふ！」

「もういゝ、もういゝ、」王本は後を聞きたくなく、下に降りて、外へ出た。

孫麻子は失望し、阿片煙管を置き、その頑强な後姿に向つて、大きな溜息を吐いた。

夜、突然空模様が變つた、稲妻が閃き、續いて雷が鳴り、狂風は急雨を混へ、慌ただしく人々に吹きつけた。王本は夢から驚き醒めた、身體は冷えてゐた、眼を開けて見ると、窓の下方が狂風で吹き破られてゐる、雨滴が窓框から浸入して來、蒲團はもう水に濡れてゐたのだ。屋根も水洩りがする、水滴がポトポトと落ちてゐる。

王本は濕つた蒲團を推しのけて坐つた、心では水仙花のことを考へてゐた、この暴風雨の夜、彼女はどんなに怕がつてゐるか知れない？ 屋根は漏り、家も倒れるかも知れぬ、若い女に何が出來よう？ 其處まで考へると、心中に草でも長く生えたやうに、構ひなく、外で雷がどんなに鳴つて居り、風がどんなに狂ひ、雨がどんなにひどからうと、蓑衣を引被り、暴風雨を冒して、周家の庭に驅け込んだ。

彼は窓を敲こうとして、ふと中で人聲がするのを聞きつけた。

「この大雨で、好都合さ、誰も來はせんだらうな？」

大きな聲で、どうも楊二爺の口調のやうである。

「勿論よ、あなた楊二爺の外に、誰が來るもんですか？」

水仙花は淫らがましく言ふ。

「まだあの王本が居るぜ！」

王本は胸がドキンと打つた。思はず、窓を敲こうとした手を引込め、身體を垣根にくつつけた、軒端の雨水が、堤を切つたやうに、彼の右肩に流れ注いだ。

中にゐる水仙花は、狼狽してチェツと言つた。

「あいつのことを言つて何するのよ？ 私あんな貧乏つたれちつとも好きぢやなかつたわ、でも、あの時は……今はあなたがおいでゞせう、私あんな男、抛り出しちまふわよ！」

王本の身體は雨に打たれ、續けさまにくさめが出、胸はカアツとなつた。

「ほんとに振り棄てられるかね？」

「出來ますとも、何も私のほんとの子や孫ぢやあるまいし。」

「よからう、お前がさういふ氣持ならそれでいいさ、お前が振らんでも、あいつ自分で逃げ出すよ。」

「どうしてなの？」

王本も耳を窓際に持つて行つた。

「お前に訊ねるが、少し前に、お前あいつに金をねだつたらう、あいつ寄越したか？」

「くれたわ、七十圓呉れたわ。」

「さうだ、お前その金何處から來たか知つてるか？」

「私わかりはしないわ！あの人も言はないもの。」

「あれは俺があいつに貸してやつたんだよ！」

「あんたどうしてあの人に貸したの？」

楊二爺は笑つた、その聲はひどく得意げだつた。

「それがわしの計略なのだよ、わしはあいつに金を貸してやるのに、あいつの窪田を抵當に入れさせたんだ、あいつが金を返せなきや、あの田は俺の物になる、あいつはやがて田もなくなり年期働きも出來なくなる、それぢや高飛びするほかなくなるぢやないか？」

水仙花は淫らがましく笑つた。

「ほんとに好いやり方ね、何て言つたつて二爺、あなた方本をお讀みになつた方は考へ深いのね。」

「ハハハハ」楊二爺は得意げに狂笑した。

王本の胸には、憤怒が溢れた、眼からはまさに火が出さうだつた、身體が暴風雨に襲はれてゐるのも忘れてゐた、手を伸ばして長鎌をつかみ、窓を蹴開け、狂つた野獸のやうに、炕の上に飛んで行き、憎々しげに楊二爺の腕をつかんだ。楊二爺はびつくりしてしまつた。

稲妻が、王本のびしよ濡れの身體を照らした、兇悪な顔、ピカリと稲妻に鎌が光つた。

水仙花はアツと聲を立て、力をこめて王本の右手をつかんだ、王本は返す刃で、左脇に突つ込んだ、水仙花はアイヤと一聲、身體は炕の下に轉げ落ちた。

楊二爺はそれを機會に、けんめいに腕を振りもぎ、窓から飛び出した。王本が鎌を拔いた時、楊二爺はもう通りに逃げて叫んでゐた。

「人殺しだあ、助けてくれ、助けてくれえ！」

王本は門まで追つて出た、其處ら中の犬が狂ほしく吠え出した、風雨の中に通りを走る多勢の足音が聞えた。

王本はプンプンして鎌を投げ棄てた。

「逃げやがつたな、豚犬め、何年か後お目に掛らあ！」

彼は家に歸る間もなく、びしよ濡れのまゝ、北方へ逃走した。

稲妻毎に霹靂が伴ひ、狂風は暴雨を混へ、騒然と、凌河村全體を擾亂させた。

八

六七年の時が、飛ぶやうに過ぎ去つた。この頃兵馬の騒ぎに亂された凌河村は、大凌河に洪水が出た以上に騒がしかつた。人々の心中には、無形の爆薬が籠められたやうで、晝間顔を合せれば顔と耳とを近寄せて何か語り合ひ、夜はしよつちゆう譯も無しに騒ぎ立てた。

このやうな時に、王本が突然故郷に歸つて來た。それに女を連れて來た。三十前後の年頃、痩せ細つた身體、肚がはつきり凸出してゐる、瓜實顔、少し黒い皮膚の色、容貌はさう惡い方ではない、しかし白い翳のある左の眼が突出してゐるのは顯かに醜い。それに、彼女の動作も遲鈍で、言葉は拙く聽き取り難い、これらのことは彼女が愚蠢な女であることを充分に證明してゐた。王本はどうして彼女を好きになつたのだらう？彼女を見掛けた者はみなさう疑つた。

だが實は、現在の王本が、以前の彼とは違つてゐた、僅か六七年の間に、彼はずつと老けてゐた、まるく大きかつた眼は落ちくぼみ、二つの顴骨ははつきりとひどく高くなつてゐる、バラバラに亂れた髮と鬚が一しよに混り合つてゐる、元氣は衰へ憔悴してゐる、歩くときは、身體を折りまげ、左手は習慣的にズボンのポケットに入れてゐる、ズボンのポケットにひどく硬い品物を藏してゐるかのやうである。このため、凌河村の者は、みな彼に對して用心した。この脅威と懼れが、へつらひのごまかしと變り、顔を合すと、顔に嘘笑ひを浮べ、うなづき腰をまげて、

「あゝ、王老本、今日は？」

意外にも、王本の方は冷淡でただ鼻で、フンといふだけで、相手の恐怖心に、一層ヒヤリとしたものを感じさせ、吉凶が測り知られず、各人みなひそかに戰慄した。殊に楊二爺と水仙花の二人がさうである。

楊二爺は日が暮れると、もう家を出ようとしなかつた、何度も誰かに頼んで王本と話をつけ、交際を取り戻さうと思つた、しかし適當な機會が見附からず、自分で言ひ出す勇氣は無かつた。水仙花は自分の左脇の傷痕を撫で、終日ビクビク慄へてゐた。だが、王本は以前のあの事を忘れたかのやうに、根つから何の意思表示をもしなかつた、ただ金を楊二爺に返しあの窪田を贖け戻しただけだつた。

王本がその金を出したことで、凌河村の者はます〳〵疑ひ戰慄した、その眞つ白い銀貨を見て、彼の過去六七年間の職業を推測した、かの怕るべき職業！

だが一體、過去六七年間の王本の職業は怕るべきものであつたらうか？それは彼だけが知つてゐる、それらの往事は、怕るべきものと言ふより、むしろ苦痛なものであつた、彼自身すらが再び思ひ出したくなかつた。今の彼は、傷ついた野獸のやうに、自分の巣に逃げ歸つて喘いでゐるのだ、生活の痛い創が彼の以前の迷夢を醒ませた、無形のうちに、彼は轉變した、彼は一箇の冷淡な、平凡な上にも平凡な人間になつてしまつた。

孫麻子は王本が歸つて來たこと、それも金を儲けて歸つたことを聞いた。彼も外の者と同じに、かなり恐怖を感じた、がその外に一部分喜びを感じた、そして或る日朝早く、王本の家にやつて來た。

その時、王本はちやうど地面に蹲り鎌を磨いてゐた、眼の凸起した女房は灶を燃やしてゐた、孫麻子は中に入ると、先づしつかりと王本の手を握つた。

「あゝ、兄弟、お歸り、もう、六七年になるなあ！」

「さうだとも！六七年になる！」王本も感慨を持つて言つた。

「お主婦さんを貰つたさうだな、きつとよそでは良い暮ししてたんだらう？」

「良いことなんかあるもんか！」王本はさう言ひながら眼の突出た女房を呼んで、孫麻子に紹介した。

「これ孫大哥だ！」

眼の突出た女房はおどおどと腰を折つた、凸起してゐる肚が顫へてゐた。

「歸つて來てさ、何でわしの所に遊びに來んのだね？」

孫麻子はチラと見て、嫌やな氣がした、で話題を變へた。

王本は笑つた。

「濟まねえ、田が忙しくてな、何處にも行つてゐねえ。」

「お前は知るまいが、兄弟、この數箇月、賭場は又賑つてるぜ。誰だつて憂さ晴らしがしてえ、世の中はどうなるかわからん、金なんかその內何にもならなくなるかも知れん、で持つてりや、遊ばうつて氣になる、胸をカラリとさすのさ、家でビクビクしてちつとしてるよりずつとましさ。」孫麻子はさう言つてから、あばた面を向けて尋ねた。

「兄弟、お前もさう思ふだらう？」

「まあさうだな。」王本は冷やかである。

孫麻子は機會を藉り、進攻を開始した。

「兄弟、お前はよその土地で六七年暴れて來て、賭博道も、きつと巧者になつたらうな、この機會に、何で一つやつて見んのだね？ うまく行きや、八百や千は儲かるぜ。」

王本は相手のその興奮して誘惑性を帶びたあばた面を見て、少し滑稽に感じ、返事をするのを忘れ、ただじつと聞いてゐた。

孫麻子は期待を持つて、

「どうだね？ 行かうよ！」

王本は笑つた。

「ほんとのことを言はう、俺あ六七年博奕はやらなかつたのだ。」

「何でだね？」聲には訝しみがあつた。

「俺の氣持が變つたからだよ。」

孫麻子は少し失望を感じた、だがそれで甘んぜずに言つた。

「俺には信ぜられん。」

「そりや信ぜられんのも無理はない、ただ、この六七年の暮しの苦勞が俺を變へちまつたんだ、俺あもう馬鹿なことは出來ん、俺あ、分に安んずる人間にならなくちやならん。」

「分に安んずる人間？」孫麻子は又疑ひ出した、みんなが王本に對して抱いてゐる恐怖と彼が家に歸つてからの氣持を考へ、これはてつきり嘘を言つてゐるのだと思つた。

王本は説明して言つた。

「俺にはもう女房がゐる、その内には子供も生れる、俺はあの窪田を贖け戻した、俺にはまだ力が殘つてゐる、俺はこの殘つた力で田に出て働きや、一年一年、食ふのに困りさへせねば、俺あそれで滿足なんだ、昔は、あゝ！」彼は悲しげに、「昔は夢を、でたらめな夢を見てゐたのだ。もう、あんな夢を見ようとは思はん！」

彼は悲しみに殆んど涙を流さんばかりであつた、相手を見ると、同じやうにうなづいてゐる、そのあばた面は、同情から失望に變り、失望から又安心に變つた。

それ以後、凌河村の者は、無形のうちに、恐怖は消え、みんなが或る安心を覺えた。途中で、王本にぶつつかつても、彼は左手をやはり習慣的にズボンのポケットに突込んでゐたが、人々は意に介しないやうに眺め、もう作り笑ひをし彼に呼びかけることもしなかつた。

九

作物が刈られると、田舍は漸次平靜になつた。凌河村でも

他の處と同じに郷團（譯註——半官的な武裝自衛團）が出來た。最初に團董（譯註——團の長）には、みんなが楊二爺を推した、それから三四十名の團兵が出來、村中は保障が出來たやうに、安堵を覺えた。

或る夜、秋風が狂つたやうに吹いてゐた、星も月も黒い雲の中に隱れてしまつた、ただ黄色くなつた落葉が、砂塵を混へて、半空を舞ひ飛んだ。

王本は夢を見てゐて傍らの呻吟の聲に驚き醒め、うなづいて石油ランプを點けた、眼の突出た女房が肚を押へて炕の上をのた打ち廻つてゐる、慌てて隣りの劉大娘を呼んで來、産婆を呼ぶ用意をした。

外の風は、一層猛烈に吹いてゐる、二枚の門の板が、ゴトンゴトン音を立てる、王本は不安な氣持を抱いて下をうろついた、女房の呻吟と喘ぎを聞くと、心中に草が生えたやうで、喜びとも焦燥とも恐怖とも定められなかつた。

飯を食ふだけの時間があり、突然子供の鋭い泣聲がした。直ぐ續いて劉大娘がニコニコして叫び出した。

「王本、おめでたう、男の子だよ！」

王本は胸が烈しく躍つた、口からは自然な喜びが流れ出した、身體を炕の縁に寄せ、中を覗いた。

暗い石油ランプの焔の下に、痩せこけた、生れたばかりの子の身體が、躍動してゐる。

「少し痩せてるけど、とても元氣だよ！」劉大娘は子供を指して言つた。

「顔がよくお父さんに似てゐる。」

王本はニコニコして再び自分の妻を見た、眼の出た女は長くなつて炕に寢てゐる、顔は黄色い表紙みたいで、疲勞にぼおつとなつてゐる。

ふと、外で銃聲がし、彈丸が窓紙を貫き土壁に突き入つた。王本はびつくりして外を見た、外の銃聲は、續けさまに響いた、除夕の爆竹のやうに。窓から聞えるガヤガヤ聲、子供の泣聲、ともにはつきり聞えなかつた。

王本は機敏に石油ランプを吹き消し、女房と子供を炕の下に抱へて行つた、劉大娘はもう恐怖に身動き出來ず床にへたばり、何にも言へずにゐる。

銃聲はます〳〵烈しくなつた、家全體がそれに撃たれ塵が飛び揚つた。

王本は憤怒し門口に爬つて行つた、屋外の暗の中の火光に向つて、叫んだ。

「おい、何處の筋の仲間だ？ こつちの顔も立てろ！」（譯

註—何處の筋の仲間、原文「那條線上的朋友」は匪語で「どの組の仲間か」の意。）

黒い影の中で、一つの圓い大きな頭が高く上り、命令した。

「あいつだ、あいつだ！みんな氣を附けろ、前後から圍んで、逃すな！」

よく聞き慣れた聲だつた、拳銃の火線が一閃し、その顏の怕ろしげな鬚を照した、まさに郷團の團董、楊二爺（ヤンアルイエ）だ。怒りの火が、王本（ワンペーン）の胸に攻進した、彼は跳ね上り外を指して大聲に罵つた。

「お前らは郷團だな、何で、何で、騒ぎを起しやがる？……
……………」

言ひも終へぬうちに、一つの拳銃の彈丸が彼の右足を打つた、彼は劇しい痛みにぶつ倒れた。

「よし、楊（ヤン）め、覺えてやがれ、私の恨みを役を笠に着てはらすなんて！」

外の黒い影の中の楊二爺（ヤンアルイエ）が、又命令した。

「射止めたぞ、がまだ死んぢやゐねえ、みんな氣を附けて進め、野郎は强いからな。」

銃聲は漸次靜かになつた、澤山の黒い影が四方から前へ爬ひ寄つて來た。

「窓はふさいだか、奴が跳び出すのに氣を附けろ！」楊二爺（ヤンアルイエ）は垣の下に爬ひ寄り、その銹の生えた洋刀を打ち振つた。

「馬二虎（マーアルフウ）お前先きに行け、生捕りにしたら褒美が出るぞ！」

一つの魁偉な黒い影が、垣の壞れた處からよぢ上つて來た。

「お前らも一しよに登つて行け！」

澤山の黒い影が、蛇のやうに、おづおづと前方へうごめいた。だんだんと爬ひ寄り、漸次家の戸に近附いた。

王本（ワンペーン）の創口は、火に燒かれるやうに痛んだ、彼は齒を食ひしばり、ウウムと鼻でうなつた。澤山の黒い影はびつくりして後に退いた。

「畜生、碌でなし！進め、何が怕い！」

楊二爺（ヤンアルイエ）は憤怒して罵り出し、その銹の生えた洋刀を揮つて、思ひきり崩れた垣の上の方を斬り拂つた。

澤山の黒い影は又おづおづと前方へうごめき出した、一人比較的機敏なのが、遠くから言つた。

「王本（ワンペーン）、俺らは恨みは無え、これは公け事だ、お前手出ししちやならねえ！」

王本（ワンペーン）は强ひて痛みを我慢し、冷笑した、聲は顫へてゐた。

「上つて來い！俺は手には何も持つてゐないんだ！」

前方の黒い影は、まだ信じないらしかつた、ゆつくり前方へ出て來た。

別な一人の機敏なのが、窓から爬ひ込んで王本（ワンペーン）の後に廻り不意打ちに、王本（ワンペーン）をしつかり縛りあげた、楊二爺（ヤンアルイエ）は事すでに成れりと見て、やつと垣根の所から出て來、他の團兵數人に命令した。

「詳しく調べ上げるんだぞ！」

役立たずの團兵どもが、家の中を引つ搔き廻したが、何にも出ては來なかつた。

楊二爺（ヤンアルイエ）は失望し、

「引き揚げろ！　團に歸れ！」

そこで、王本（ワンペーン）は刑に臨まうとする豚みたいに、連中に擔がれて行つた。

劉大娘（リウターニャン）は大分經つて落着き、やつと爬ひ起きた。その頃、窓のあたりはほのかに明るくなつてゐた。先づ子供を炕に抱いて行き、それから眼の突出た女房を呼び起した、彼女は呆然としてゐて、暫くしてやつとおづおづと言つた。

「こりや夢見てたのか知ら！」

劉大娘（リウターニャン）は彼女のために心配に堪へなかつた。

「夢なもんかね、バカなお主婦さん、お前さんの御亭主は郷團に引つぱられて行つたんだよ！」

眼の突出た女房は驚いてウオーウオー泣き出した、反對に、生れたばかりの子供は小さな眼をぱつちり開け、壞れた屋根をぢつと見てゐた。

翌日の早朝、凌河村全體が騒ぎになつた、郷團の前には、何百人といふ人間が集まり、みんなが首を伸ばし、眼を瞠り、中の騒ぎを覗いてゐる。朝から晝過ぎまで掛つたが、審問は何の結果も得られなかつた、みんなは失望して散つて行つた、歩きながらお互ひヒソヒソ話し合つてゐる。

「しつかりした男だなあ、あんなに責められても白狀せん。」

「白狀したつて殺され、白狀せんでも殺される！」

「何でも明日縣城に送るさうだ。」

「縣城に送られたつて殺されるのさ！」

「これからは凌河村も太平になる」

「ハハハ！」

程なく、城内から消息が傳へられた、王本（ワンペーン）は死ぬほどひどい目に遭はされたが自白しなかつた、又證據も見附からなかつた。その結果、六年の徒刑を宣告された。

楊二爺（ヤンアルイエ）は充分に滿足するまでには行かなかつたが、壁に懸

つてゐる賞狀を見て、怡然と自ら慰めた。

十

悠長たる歳月は、愁ひ苦しむ者の心には、蝸牛のやうに、重たい殼を背負つて、ゆつくりと進んで行く。殊に雨降る黃昏、或ひは雪の夜、一滴、一片、一秒、一分が堪へ難い思ひである。

眼の突出た女房は、子供を引きずり、この悠長たる、愁苦の歳月を、六年過した。小鐵子(シアオティーエツー)はもう七歳になつた。瘦せて小さな身體、黃色くしなびた顏は、營養不良であることをよく示してゐる、それに瘡のいつぱい出來た禿頭、誰もが嫌惡して傍に寄らうとしない。

性質は、反對に母と違ひ、父親に似てゐた、小さな眼をグルグル動かし、氣が利き、賑かな氣質で、子供たちと喧嘩してやられても泣かない、よく頰をふくらまして家に駈け戻り母に尋ねる。

「みんなが俺の父ちやんは鐵砲で擊ち殺されたつて惡口言ふよ、本當かい？　母ちやん。」

眼の突出た女房は拙い嘘を言ふ。

「みんなはでたらめ言つてるんだよ、嘘だよ。」

「ぢや父ちやんは何處に行つたんだい？」

眼の突出た女房は少し太刀打ち出來ずおつ〳〵と言ふ

「父ちやんは町に行つたんだよ。」

「何で長いこと歸らんのだい？」彼は進んで尋ねる。

「もう直ぐ、近い內に、歸つて來るよ！」

果然、程なく、王本(ワンペーン)は獄から歸つて來た、彼は全く人間が變つてゐた、瘦せ細つた身體が佝僂になり、髮をバラ〳〵にし、それが黃に瘦せた顏を蔽ふてゐる、氣を附けてその重苦しい聲を聞かねば彼だとはわからぬくらゐである。

家に入ると、眼の突出た女房は彼の胸にすがつて泣き出した、王本(ワンペーン)は咳をするばかりで、何にも言へない、やがて、彼は血の混つた痰を吐き、すこし氣持がスウツとし、傍の小(シアオ)鐵(ティーエツー)子の瘡頭をたゝいて、眼には辛酸と喜悅の淚を浮べた。

「おゝ、お前、大きくなつたなあ！」

「さうだよ、俺七つだよ、父ちやん。」

小鐵子(シアオティーエツー)は無邪氣に躍り上つた。

「お前この父ちやんがゐて嬉しいか？」

「嬉しいよ、ほんとに嬉しいよ、父ちやん見かけがよくないけど。」

「ぢやお前何で好きだ？」

「父ちやんだから好きだよ！」

「ハハハハ！」王本(ワンペーン)は笑つた、それは六年來未だ無かつた痛快で嬉しい笑ひだつた、その笑ひ聲には無限の愉しさと希望がこめられてゐた。

王本(ワンペーン)が出獄してから、凌河村では又騷ぎ出した、みんなの心中に、復讐、流血の出來事が幻として映つた、だが村は依然として平靜だつた、王本(ワンペーン)はそんな災難には遭はなかつたかのやうに、毎日田で働いた、彼には今怨みもなかつた、憤りもなかつた、悲哀もなかつた、ただ遼遠な希望を七歳の小鐵(シヤオティーエ)子(ツー)に掛けてゐるだけだつた。

この遼遠な希望は、彼によく未來の夢を見させ、心をこめてこの衰落した家庭を復興させようとした。だが、ひどい傷を受けて殘つた精力は、もう彼に節制のない使用を許さなかつた、僅か一年の間に、彼は病氣になつて倒れた。元氣が無く、盜汗が出、熱が出た、咳をし血を吐いた、このやうにして二年病み、彼はもう息だけをしてゐる骷髏と變り果てた。

彼は何も死の恐怖と悲しみのためでもなく、また殘念さからでもなく、胸の希望はなほ熱く躍動した。彼は子供と窪田を自分の生命よりも大事に思つた。ひどく熱が出ると、彼はよく囈語を發した。

「俺の一生は駄目でも、しかし、俺には息子がゐる、息子には窪田がある、將來、無事で暮して行くことが出來よう！」

不幸にも、その後程なく、その窪田で又問題が起つた。田(ティエン)會長がその窪田に眼をつけ、ぜひにも買はうといふのである。組合は公け事だ、どうあつても賣らなくてはならぬ。これは彼に大きな脅威と苦痛を感じさせた。あの時は、彼はあんなに頑固に拒絕したのではあつたが。

窪田を賣れば、子供は乳を失つた羔羊のやうにならう、あてどもなく、孤獨に、流浪するであらう、飢餓、疲勞、貧窮自分がこれまで經て來た怕るべき生活、苦痛の桎梏が、眼のあたりこの天眞な無邪氣な子供に遺傳されて行く……。

彼はもうその後を考へやうとしなかつた、ます〳〵恐ろしいことだ、彼は炕でのたうち廻り、三四日食物も咽喉を通らず、病勢は日一日と重くなつて來た。

外部の消息は、一層緊張して來た、凌河村の到る處で喧しく噂した。

「田(ティエン)會長はきつとあの窪田を買ふぜ！」

「楊二爺(ヤンアルイエ)に賴んだんださうだ。」

「それぢや、大變な事が起る！」

「組合は公けの事だ、賣らなきや處罰される！」

「さうなりや、また何年かの徒刑だ！」

眼の突出た女房が、それらの驚くべき噂をどうにか聞いて來て王本(ワンペーン)に話してやると、彼は眞つ赤になつた眼を見開き、狂つたやうに跳び上つた。

「あの田は俺のもんだ、俺は賣ることは出來ねえ、奴らが無理に買はうつてのなら、この俺、この俺を殺してからにするがいゝ！」

忿怒の焰が、眼から噴き出した。恨み重なる奴らの黒い影が、眼の前を嘲りつゝ動き廻るやうな氣がした。彼はけん命に摸り掛つて行つた、バタンと音がし、身體は地面に轉がつた。

眼の突出た女房は、驚き恐れ聲も出なかつた、おろおろして彼を炕の上に引つぱり上げた、彼はあちらこちらに怪我をし、鼻からはドグドク血を出してゐる、呼吸は微弱でもう知覺を失つてゐた。

夜は、靜かで、星も無かつた、月も無かつた、風も無かつた、小さな部屋の中では石油ランプの弱い光が、王本(ワンペーン)の身體の上で搖れてゐた。眼の突出た女房は、脚もとに伏して啜り泣いてゐた。小鐵子(シャオテイーエツー)もぼんやりと眺めてゐた。

やがて、王本(ワンペーン)はフーツと息を吐き、

「俺あもう駄目だ！」

眞つ赤な眼が、漸次小鐵子(シャオテイーエツー)の上に移された、小鐵子(シャオテイーエツー)は怕くて顏を背けた、痩せ細つた手が突然搐頭を拍いた。

「お前！ あの窪田を手放すんぢやねえぞ！」

傷を受けた野獸の呻吟のやうに、沈痛に、悲憤したのだつた。小鐵子はびくびくして顏を上げた。炕にゐる王本(ワンペーン)は、顏色がもう蒼白になつてゐた、口もとには血が噴き出し、呼吸は急速になり突然停止した。

眼の突出た女房は愚蠢に泣き出した、反對に小鐵子(シャオテイーエツー)は泣きもせず、小さな眼を瞠り、炕の上の屍體を凝視した。

夜は、靜かで、星も無く、月も無く、風も無かつた。ただ大凌河の流水だけが怒り吼えてゐた。

――完。

治淋內服藥
チーユーサイド
二四錠入
大陸感染！
こぢらせてはダメ！
發賣元 株式會社 滿洲柳韓公司
大連柳韓洋行

鶯

晶埜ふみ

幕があくと、舞臺は洋支折衷の廣い客間で、一面の黒い垂れ幕に、胡粉のやうな感觸の朱色で窓枠や柱があしらつてあり、その色調は何より異様にはではでしてゐた。

瑞枝はかすかにときめくやうなものを感じながら、眩ゆい舞臺に眼を注いでゐた。

「群鶯亂飛」といふ上海で書かれた四幕劇で、映畫撮影所の俳優が撮影の餘暇に稽古をはげみ、けふはその第一回公演であるといふ。黄昏に似た光の中を見まはせば、眼に入る限り滿人がおしつまつてゐて、瑞枝は氣紛れのやうに、まぎれこんでゐるのであつた。

壯介にこのことを書きおくれば、よくまあ元氣を出して芝居など見に行つたもんですねとおどろくだらうと、ふと思はれた。選りに選つてこの種類のものを見に來て、身內の者へ、あたたかく通ふものを感じてゐる。壯介はもう前に、暫くこれに似たある演劇研究所に働いてゐた。

瑞枝は大方は床の中で春節にも遭つた。この二三夜は街のあちこちに爆竹がおうら、おうらときこえ、あかりを消した部屋の窓がさつと白んで、思ひがけぬ間近さに爆けたりした。不意をうたれて動氣がどきどき早くなる。裏庭の滿人の木工小屋で、太鼓と銅鑼のはやしが一しきり單調な旋律を繰返してはしやぎ、それがはたりと伏せたやうに止むと、また數知れぬ爆竹は空に木靈し、あけ方まで歇むことがなかつた。何の關聯があるのだらう、それは深更に動物園からきこえるといふ、獸のうらかなしい吠え聲を思はせた。瑞枝はくらがりの中に眼をあけて、公けの仕事を休む日數の長さに身をよぢり、また魚のやうに呆けたあきらめを抱いて平安でもあつた。

さて舞臺では、厚化粧に明るい綠色の褲子をはいた、山雀のやうな下女が、黑い顏にじみな褲子の、これは牛のやうに肥つた下女と、長い臺詞のやりとりをした。その間に、申譯のやうに花瓶にからふきんを掛けたり、額緣の塵を拂ふ所作をした。

意味は解らず、滿語のせりふをはじめて聽くといふことであたたまつたやうな耳朶は、言葉の旋音を、二枚の無心な貝殼のやうに受け流した。音標文字で捕へることも困難なほどに甲高く、それは殆ど身を揉む叫びの連續であつた。

一しきり長い科白もあつて、顏が正面に振り向けられると、風を得たやうに聲が大きくなり、橫向きにしなをつくると、また風に乘つて去るやうに遠々しく弱まつた。首振り扇風機の唸りに似て、とぼけた面白さがあつた。

そのとき、つかつかと小柄な大學制服の靑年が登場して、中央の椅子にかまへた。二人の下婢は、その傍に交る交る小走りに近づいては、最初からのやうに何かしやべりはじめた。新しく口を切る每に、「三少爺」「三少爺」と唄ふやうにやさしい節をつけて呼びかけた。

蘇州の黃といふ官吏の家に、たまたま此の三男が歸省して、女中らの口うらに、亂脈した家の一切の近況をさとる。彼は何とかして改善しようと決心し、許嫁の娘ともそれを計るといふあたりらしい。

更談到了這個家的難治、大哥的消沈、二哥的墮落、二嫂

的神經失常、妹々的受不良少年的引誘、皆出於大嫂一人之陰謀、

手にした筋書に、この樣に說明されてゐる人物が賑々しく登場しはじめると、瑞枝にはもはやどれが大哥で、どれが二嫂なのか、とつさの判別がつかず、容易に蹤いてゆけないとなると、却つてさらりと樂になり、恣に目をあそばせた。

一樣に肩からむき出しになつてゐる丸いうでは、多少肌の色がまちまちながら、眩しい照明を受けて、どれもしつとり、柔らかさうな艷をもつた。その裸の腕組を、佛蘭西人めいてぱつと振りほどいたり、また手首をあつめて身をよぢるやうにする身振りが際立つて繰返された。

とりわけ黑い天鵞絨の胸に、上向きのコの字形に憩む一雙のうでは、草花の莖に水氣を充したやうな、羞らひを含んだ美しさであつた。うではうで自身で高貴な矜りをもつてゐた。

大嫂と二嫂と妹々と、三男の未婚の妻と、それだけの女を鶯にたとへるといふわけだらうか。

一家騷亂の陰謀を逞しうするといふ大嫂に扮した女優は、黑天鵞絨に映える白いうでと、切長な眼がきらりきらり光をはぢきかへす情熱と、丸い低音のエロキユーションの快さとで、群を拔いた見事さであつた。

かつて、ある新劇一座が來演して、高名な女形役者が年增藝者に扮した。帶に揃へた指先をさし入れての粹らしい思入れのしぐさのとき、うす黝くよごれの着いた足裏がひらひらし、背景の彩つた幕すらアンペラめいて色褪せ、味氣ない思ひをさそつたものであつた。

それでといふ譯でもないけれど、瑞枝はどことなく貧寒な舞臺や、燃燒するものの不足を漠然と豫期してゐた。だがこれは若々しい眞摯な舞臺であつた。

世に行はれる因數分解のやうな文化論の一こまに關りなく、ここらあたりにこそ、新しいいのちが素朴な頭を擡げるのではないかと瑞枝は思つてみる。

さきほどから瑞枝は、茫々とした遠い日の記憶のやうな二人の若い娘を泛べてゐた。

葉虹、王苓といひ、あれは去年のやはり春節の頃、「女優さんです。道で會つたらついて來るといふものだから」。さう云つて壯介が連れて來た。

日曜になれば、郊外の寮から、のこのこ顏出しする彼は、さあお上んなさいよと脊中に聲をかけ、自分だけはスキー帽と

外套とを勝手知つた釘にかけると、安氣さうに煙草の火を點けた。從兄の息子といへば、等親は瑞枝に一系おくれながら、年齢は瑞枝とおなじである。瑞枝はあわてて鬠めてみせた。

「お客さんなんて、困るのに」。

「そんな人たちぢやありませんよ。氣にしないでも」。

ストーヴで煤けた部屋に珍しい客人たちは、フットボールを包むやうにきつちり頭を抑へてゐた毛糸の頭巾をはぎ取り、急に暖氣に觸れたせゐか、俯いては洟をすすり上げながら、みじまひをした。疊の上にすらりと立つて、指先で衣服の横皺をつまんだりしてゐるのが、日本の女の寸法からすれば、方途もなく伸びた脊丈に見えた。

二人は横ねぢりに坐ると、仲間同志に顔を見合せて、意味もなく頰笑んだ。挨拶らしい言葉なぞ一つも云はなかつた。

「やあ、ひどい種痘ね。」壯介が驚いてみせた。

「葉さん泣いたらう。」

「まさか、これね、田舍にはじめて公演に行つたでせう。あの時の。繃帶して舞臺に出たんですよ。はづかしかつた。」

日本語の自由な年嵩の葉虹は、もう少し肥れば肌理もこまかに、女らしくならうといふ細面に、つり上つた眥すずしく、濃い唇紅のまはりに黑い生毛をおいてゐた。汗かもう一人の娘は、鷹揚に伸び、血色よく肥えてゐた。白粉氣も脂か光つたものが目に見えないほどに浮んでゐて、まだいくらも經ない面立ちであつた。旗袍といふのか、どこにも見受けられる靑木綿のものを着てゐた。葉虹にしても、おしやれとよぶほどの身裝りではなかつた。

女優といふからには、瑞枝は脂粉くさいおとなをも想像してゐた。饐えたにほひの無いうら若さは、何といい氣持のものだらう。

日本から渡つて來る女、來た當座の女には、そこはかとないふくよかさがあつて、瑞枝の鄕愁をしづかにかきまはすのであつた。滿洲の風土の不思議さは、女のふくよかさを惜しげなく奪ひ、ものゝあはれの神髓のやうなものをうばひ、それにとつてかはる何かしらを、厚い垢のやうに積らせるようであつた。そして女たちは、大陸の年齢を馬の樣にかなしく積ねてゆく。日本からきた女が、馥郁と立ちにほふと感じるのは、瑞枝の夢かも知れない。

滿洲の娘たちから、それと似通つた感動を受けるといふのは、生れた國の大地こそ、女を慈しみ、愛撫するのだらうかと、瑞枝はかはるがはる二人の顔をうちながめた。

「まあおどろいた。きれいな感じの人たち女學生のやうで」。

「いいえ」。

素早く葉虹が應對して、早速に露西亞菓子をたべ耽つてゐるもう一人の肥つたうでを小突きながら、男のやうに云つた。

「稱標れん」。

こづかれた方は、熱心な上目になつて、もどかしさうな面持をした。この人はね、わたしが通譯してやらないとすぐ慍るのと葉虹はまづ訴へてから、他說話……と聲をひそめてはじめた。一文句毎にこの煩しさであつた。盲人とその杖引きとの離し難い一對のやうないぢらしい情景だつた。

「けふはね眼醫者に王さんを引つぱつて行つたの。病院は休みでね、仕方がないから歸へるとこでした。うゝん、トラホームです。ほつとくとめくらになるさうです。王さん悲しがつて、もうどうしても病院に行かないんですよ。怖いのねけふは休みだつたから、この人安心してゐます。お金も困るの。王さんは私よりも後で入つて、まだ月給もやすいけれど、私に小遣ひがあるから、誰のお金でもかまはない、それで治しなさいといふのに……」

終りは涙聲になり、おまへは盲目になるのかといふ意味らしいことを叫ぶと、葉は急にすすりあげた。子猿のやうに頭を寄せあつめて、二人はしくしくうつむいて泣き出した。葉虹は二十二といふ。數年前の瑞枝は、人前でこのやうに素直に泣きなどはしない硬い娘であつた。半生の悔がかげのやうにすばやくよぎる。

王荅の眼は、うちみたところ、無傷にみづみづしく澄んでゐたが、女優とトラホーム、これは容易ならぬ災難であらうと、瑞枝は思はず壯介と顔を見合せた。

「トラホームつて氣毒に。」

「このひとばかりぢやないかも知れない。感染もするだらうし、子供の時からだんだん持ちこしたり……さあさあ、泣くと眼に惡いから。治るときは簡單に治るものですよ。そうれそれ、やめなさい。夕方にはみんなで支那料理に行かうや。」

彼は膝を抱いてゐた片手をのばして、あやすやうに菓子皿を押した。客人を壯介にまかせて、瑞枝はぼんやり壁に靠れてゐた。

後壁に豪奢端麗な女優の、左横顔の寫眞が一枚貼つてある。ふり向くまでもなく細かに泛べることが出來た。それは

黒衣で寛やかに胸を掩ひ、塑像のやうに靜謐な眼を伏せてゐた。伊太利のエレオノラ・デュウゼといふ女優で、ルナールは彼女に就いて氣の利いた評言を費してゐる。

デュウゼ。美しさ、氣高さ、聰明さ。彼女の顏は決して凍りつかない。ゴルドニの芝居では才氣のある顏をしてゐる。顏で才氣めかしくするやうなことはしない。

彼女は美しい衣裳を着てゐる。然し化粧品の方で儉約できるだらう。

なかばはこの一節が利いて、瑞枝はルナールの日記本から切りとつておいた。

泣くだけ泣いて、さつぱりと若い面を擧げた少姐らは、まだ舞臺に一二度立つたばかりといふ發芽期にある。どちらかといへば、葉虹の方がさかしげであつたが、底に光澤のある怜悧さとまではみえない。この人がどういふ傾向の演技を好み、またどうやりこなすのか、想像もつかなかつた。葉虹が勝氣さうに眼をきらきらさせて云つた。

「立派な女優になるのには、どうしたらいいかしら、何か言つてみて下さい。誰にでも訊いてみたい氣がするの」。

「さあ、僕は思ふんですがね。そりやいい舞臺を觀たり、たまには外國や日本の映畫を觀て勉强することも大事だらうし、いろんな條件も要るだらうけれど、すれつからしになつたらおしまひぢやないかな。日本でも、眞面目な人柄のひとが、長續きしてるようですよ。いろんな經驗をしなければといふので、身をもちくづしたり、赤ん坊を生んでみたりしちやいけないな」。

「いやあだ。でもね、ときどき噂がありますよ。わたしはね、一人も好きな人がゐない。ほんとうですよ。きたない男は多いけれど」。

「あんなこと云つてる。日本人は」。

「さうね、大てい似たやうなものよ。あなたは別だけど。ほんとよ。でも、日本人だか何だか見分けのつかない顏も、時時ありますね。やまと民族に、あんな顏があるかしらんと……
………」。

灯がつきはじめた頃、四人でぞろぞろ、城内の雜沓に入つて行つた。

こつくりした紫を、日本の女の色だと決めてゐたわけでもないが、瑞枝は滿服に仕立てられた紫の、にほふばかりの花やかさも知つた。

葉虹が次の日曜の午後、紫無地のものを着立てて一人で訪

れて來た。餘分の肉置きがもう少し欲しいからだつきには、女から見ても、妙にちぐはぐな色つぽさがあつた。どこやら味氣なささうな面持で「故鄕」といふ獨逸映畫にさそひに來たのだと云つた。

「玉さんは」。

「喧嘩しました。何だか一人で慍つてるの。あの人日本語解らないでせう。わたしが話せるから、みんなが葉虹、葉虹と話しかけてね、默つてもゐられないでせう。さうすると玉さん機嫌がわるいのね。おまへは段々、滿洲の習慣や作法を忘れてゆく……御飯のときにも叱るのです。まだ子供だから」。

「をんなじところに寢起きしてるんでせうに」。

「部屋がちがふので平氣よ。もうもの云ひません。ね、この色どうでせう」。

葉虹は洒落た紅革の上海靴で、新しい衣裳の裾を一けり蹴るやうにした。赤い沓下をはいてゐた。

「これね、安東のうちから送つてもらつた布です。日本人のやうでせう。ね、ね。……だけどね、私一人つまらない。妹は二人とも日本人の女學校を出たでせう。うちではきやうだいは日本語で話をしないと叱られるの。お母さんは自分では解らないのに・わたしのうちはね、大きい果樹園をつくつてゐます」。

驕慢さがちらちらした。日本語、日本人と躍起になつてゐる葉虹に、瑞枝はくすぐつたい思ひだつた。

「玉さんのおうちは」。

「玉さんは一人です。親もない、きやうだいもない。熱河省のよその家で養はれた」。

「そんな事情や、それから葉さんが早く主演になりはしないかつて、そんなこともあるんぢやないの」。

「それは始終氣にしてるでせう」。

三寸ほど脊丈の違ふ二人は、凍つた足許に注意しながら、そんなことを話した。

「けふは、結婚の披露に招待されたけど行きたくなかつたものだから。行かないとやつぱりさびしかつたものだから」。

「誰の」。

「俳優ですけど云つても解らないでせう。山東から買つて來たお嫁さんです。その男の人のお母さんは女を賣つたり買つたりするしやうばいね。それで一ばん安いのを自分に貰つたつて」。

「いまどきほんたうかしらん。それでしよんぼりしてたのね」。

葉虹は子どもめいたふくみ笑ひをした。
「おひるまではともだちの宿舍に行つてしやべつてゐました。映畫の女優さんです。あそこには日本のひとがゐますよ。馮ばあさんとか。一人で宿舍にとまつて監督をしてゐます」。
「いくつくらゐの方」。
「六十くらゐ、よく解りません。言葉も服裝も全然滿人とおなじです。四十年も日本にかへらないんだつて」。
「四十年もね」。
樣々のことを聞くものだと、瑞枝は一寸の間感慨にふけつた。あしかけ五年歸らずにゐる瑞枝の鄕愁など、四十年日本の風物をかへりみない老女からみれば、一片の感傷に過ぎないかも知れない。
老女、中年の女が、ひたむきに、または田螺のやうに小ぢんまりと身を立てて、强い一筋の根を下ろしてゐる境涯に、いつの頃からか、瑞枝は關心を持ちはじめてゐる。それが精力的な浪花節語りであり、女流畫家であり、提琴の老女教師であり、また馮ばあさんとかのやうな素朴な生活者でもあつたりした。寂しさといへば無限の孤愁、矜りといへば地道な自負。

葉虹は饒舌な日記のやうに遑もなく話しつづける。
「それからね、研究所のひとのうちに遊びに行つたけどいやでした。日本の女は笑ひませんね。奥さんはほんとは綺麗だけど一ぺんも笑はないの。こんな顔」。
さう云ふと、暮れかけた弱い陽がうろうろする街角に立ちどまつて、鬼瓦のやうな表情をしてみせた。瑞枝は自分のことのやうに、虚をつかれる思ひがした。
「さあ、もうその顔おやめなさいよ」。他愛なくどちらも笑みくづれた。
映畫館の廊下に佇んで、次の都合よい切れ目まで待つてゐるとき、葉虹は脣や舌の先についた煙草の粉を、勢ひよく首を振つては吐きとばすのであつた。肩で揃へた髮を采配のやうに振り、落着きもなく煙を吹いた。瑞枝はかるく拍子拔けしたやうな味氣なさをおぼえて云つた。
「壯介さんを誘へばよかつた」。
「ああ、ほんとに。あの人ね、あなたのことをきいたら愛人だつて云つてゐましたよ」。
「いやらしい。からかつたんですよ」。
彌撒の大合唱らしい、量感の割に閑かな歌聲が、ゆたかないづみの樣に廊下まで流れて來た。マグダといふ歌ひ手を演

ずる女優の聲だらう、ゆるやかに、男聲のやうな嚴しさとつよさをこめて、一きははりはりと響き渡つた。
「あなたもこれからですね。うれしいでせう」。
「ええ、まじめにやります」。美しい眼のかがやきだと思つた。
あれから記憶にとどまるほどの交渉ももたず、淡々しい行きづりの人と思へてゐたもう一人の王荅が、其頃短い手紙をよこした。
「二人分別以來」といふ物語的でなさけ深さうな文句が、漂々とした沁みいりかたをした。
インクのせゐで、水色にぴかぴかする四角い文字を拾へば、月給がいくらいくらに上つたと告げ、機會を得て、壯介と瑞枝に、先夜の場所で晩餐を呈したいといふ意味が書いてあつた。
葉虹のやうに勢ひこんでしやべることもならず、飯店でも所在なげに腕ぐみしがちでゐたのんびりと大柄な姿態や、トラホームを悲しんで啜り泣いたことなども、天涯の孤兒としれば、あはれ深いことに思ひ出された。

そのまま二人を忘れるともなく忘れ、また打絶えて消息をきくこともなくて、流れるやうに多くの日數が過ぎた。
瑞枝はすこしのことにも、ひどい疲れをおぼえた。溫容の老醫師は「時々は鏡を見るものですよ」と云つて、額の季節外れの煤煙を冷いアルコールで拭つてくれた。そして丹念に診べあげた擧句、肺門淋巴腺炎といふ長い名の診斷を下した。小雨の多い九月の末であつた。
「生き生きして病氣さうぢやありませんよ。痩せないし」。
或日壯介がいつた。
「さうでせう。私のは人に傳染らないんだつて。さう聞いて淸々してゐます」。
「いさぎよう元氣なこつちや」。彼は鄕の訛りで揶揄した。
「うつるうつらないよりも、根本から治さなけりや。思ひきつて仕事よして、俺のうちに行つたらどう。おつかさんもゐるし。さうしなさいよ。冬になりや、それぢや無理だ」。
「ああ、おそめさんがね」。
櫨の木の色づきはじめたであらう九州に渡つて行く後姿が、影繪のやうに描かれた。
「このままで元氣になりますよ。大袈裟に云はなくても、日本は戰爭で、ぶらぶらしてたら叱られさうな氣がするも

の」。

「それでも、どうしても中心になつて氣をつけてくれる女手がなくちや」。彼は慇れむやうな眼ざしをした。

瑞枝は鼻をしんとつまらせたが、ふとしたものの端をとらへて。

「王苓は元氣かしら。やさしい手紙をもらつたけど」。

「あれはもう居ませんよ。上海とかへ買はれて行つたとか」。

「買はれて、何に。いまどきそんなばかなことあるんかしらん。」葉虹に返答した言葉が思はず出た。

「ぢや葉虹は」

「さうさう、誰かの子どもを生んだとか、生まないとかで、やめて安東に歸つてゐます。」

「それはやつぱり滿人」。

「妻君のある男だとかで、それは北支に行つてるとかいふ噂だけど。よその者だから」。

勝氣に氣負ひこんで、野心ももやしてゐたらしい葉虹が、あつ小一年たたずにへんな身の墮しようをしたといふのは、あつけないことであつた。辛辣に男の容貌の惡口をたたいてゐたのが、果樹園をいだく邸に、切れ上つた背をうつらうつら曇らせてゐることかと、女のからだのかなしさが感じられてはかなくもあつた。

大時代めいて買はれて行つたといふ、のびのびと大柄な年下の娘の方に、あはれさは深かつた。女のうはべの倖せなど信用出來るものではない。まだ若い二人は何とでもして生きなほることだらう。それにしても、

「何でもないことのやうに話すのね、壯介さんは」。

「そだつて、篩ひおとされるものは自然に篩ひおとされて、殘つた少數のすぐれたものでかへつて立派な勉强が出來るんでせう。僕はいちいち身の上にまで興味もつてるわけぢやなし。寶石でも、いいものになればなるほど小さい疵を惶れるといふけど、さうかうしてかへつて無疵なものに育つんぢやないかな。僕たち全體にとつての不名譽とは考へたくないんですよ」。

瑞枝はせまい廚でことことしてゐた。壯介は蒟蒻の白和へを一度たべてみたいものだといふ。道具類でいへば、げて物のやうな料理をほしがるのは、何かといへばソーセーヂやキャベツの生の千切りになやまされる者を、たまに襲ふ鄕愁のやうなものだらう。瑞枝はあかるい聲を擧げた。

「生れてはじめてこしらへるのよ。おそめさんのやうに出

來るかどうか」。

何か耳にきいたやうであつたが、すうと目の前が色を失ひ、コンクリートの床の上に、濡れた紙がたたまるやうに崩れた。コンクリートは冷いなと短い間はつきりして、氣を失つた。

氣がつくと疊の上に寢かされてゐた。下駄が片方疊にあがつてゐた。壯介が荒い呼吸をつきながら。

「ひとのことどころぢやない。氣ばかり立てないで大事にしなさいよ」。

十一貫五百も、ぐつたりすれば重かつたらうと極り惡るげな薄笑ひをして、ひよいと頭をもたげると、また昏々と何も解らなくなつた。

十月に入ると、壯介は仕事をかはつて牡丹江の田舍に行つた。一年來の希望遂げての地方行きに、流行りの言葉で粗雜な大言を吐くでもない地味さかげんで、分別くさいアストラカンの土耳古帽を新しく用意したりしてゐた。

發つ前の晩、彼は羊の毛の美しい敷物を持ちこんだ。疊一枚の廣さの眞紅の地に、眞白い猫がふかぶかと眠り、纖かな蔓草と鳥の連續模樣が、淡い碧色で緣を圍んでゐた。クレイヨンの童畫のやうであつた。單純な色彩でありながら、羊毛は一色一色の顏料をしつとり吸ひこんで、落ちついた底光りを沈めてゐた。

「いろいろお世話になつたお禮に。ちよつと横になるのにもいいかと思つて」。

「お世話なんて姐御みたい」。

「この一年はたのしかつた。僕にはこんな憶えがない」。それほどに親しい心を託されてゐようとは思つてゐなかつた。

「でもこれはあんまり勿體なすぎるのに」。

黑狐や貂の毛皮の店に、これが正札を下げて、子どもの晝寢の夢のやうに吊してあつたのを瑞枝は知つてゐた。

人形とか小鳥に興味がなく、猫や犬を毛嫌ひするたちであつたが、あかりの下の柔らかい長目の毛を掌一杯に撫でてゐると、ふといつかの夕方の氣を失ふほどの疲れが、はじめてへんに應へてくるのであつた。

壯介が牡丹江まで飛行機でとんだ日に、瑞枝は時刻をはかつて、勤め先の屋上に出た。強い風の日で、爆音が風の唸りと共に空にこもりみち、蚊とんぼのやうに五臺六臺飛翔してゐて、どれがユンカースか見當もつかなかつた。編形を整へ

て遠方の空を飛ぶ一隊は、腕時計の針のやうに、チチチチと正確に、目に解らぬほどづつ動いていつた。空は晴れて荒つぽい雲がちらかつてゐた。短い髪の毛が、無茶苦茶に立つたり、きりきりまひして喚をたたいた。

ふと北に向つてみるみる小さくなる一臺があつた。恰度人間一人に翅が生えて、闊達な大空をかけ去るやうであり、壯介がスカールを漕ぐやうな姿勢をとつて、空の一點になつて吸はれてゆくのだと思はれた。

あとで、荒天の爲に出發は二時間遲れるさうだと、飛行場から壯介の電話があつた。彼はさうして新京を離れて行つた。

鈍い銅鑼の合圖につれて、「群鶯亂飛」の舞臺は水底のやうな月夜の庭の二幕目が過ぎ、ふたたび朱の柱の客間になつた。

はじめのほど、ひそひそとして共感を動かすけはひのなかつた滿人の觀衆は、このあたりに愉快な科白が屢々あるとみえ、衝かれたやうにわき立ち、笑ひさざめいては拍手をおくつた。わけても、二哥らしいのが鹽辛い濁み聲で喚きたてると、うれしさうにげたげた笑つた。

滿語になじみの薄い瑞枝には、仔細に納得ゆかぬうちに舞臺がさつさと移つてゆくので、さざなみの中の小石のやうに、顏を綻ばすわけにもゆかないのであつた。

阿英といふ作者は確かな腕らしく、筋書によれば起承轉結といふ段取りに、緊密渾然とまとめ上げられてゐると思はれた。私通、投身、射殺となかなかの大芝居もあつて、結局長兄と學生の三男が生き殘り、「めざめた長兄は弟と共に、現代の新情勢に順應し、東亞の黎明指して、黃家の再建を固く誓ふ」といふ大團圓になつてゐた。

舞臺には一人一人の打ちこんだ情熱が若々しくたちのぼつた。これが葉虹や王荅の切ないほどの希望であつたらうにと、あつけなく頓挫したといふ二人を、またうつらうつら思ふのであつた。

一幕見殘して外に出ると、夕風の吹曝らしに佇んで、夜の開演を待つ黔ずんだみなりの人群があつた。春節のくつろぎに、漫然と催し物をもとめて聚つた人々なのだらう。

曇り空に、黃色い風船が戰捷を祝ふ赤い大文字をゆらゆら引きずつて、はでな海月のやうに泳いでゐた。

快車とよぶ三輪車は、目もあけられぬくらゐに疾く、凍つた向ひ風を衝いてはしつた。瑞枝は顏も足先も胸も、痛い風

にたたかれるままに呆然とまかせてゐた。

寒中の名ばかりの春節が過ぎると、裏庭の小屋では、太鼓や銅鑼にかはつて、夜更けにかぼそい胡弓がかきならされた。

數日經て、或日たそがれても電燈がつかず、それは全市に及ぶ故障といふことで、燈明用の小蠟燭が二本配給された。

瑞枝は先日の芝居の筋書や文庫本を持ち出したが、黃色くすすけた光にもどかしく、墨の大きな字のおそめの手紙を讀みかへした。としよりの牛乳は思ふやうに手に入らず、「私が山羊の乳を、近所をかけまはつて五勺ばつかし貰つて居ります。刻みたばこが切れてさびしさうにして居られます」とあつた。壯介の弟が間食をあてがはれず、一日五回づつ食事を貪ることに就いて「ふとりざかりでいさぎようくひますのです」と說明がついてゐた。日常生活の些細な部分にまで大きなものの影響はうかがはれた。日本は戰つてゐるのであつた。

長期に亙るらしい停電につれて斷水になり、その翌日は一町あまり先の堀井戶から、水運びをした。沓下は濡れて凍りつき、三階までバケツを持上げると、荒い息は容易に治まらず、一時に湯のやうなものが、からだ中にたぎると思へた。がそれは戰爭とは何の鬪りもない不自由な出來事の筈であつた。ほしいままに休養をし、あれこれゆたかにふりそそぐ恩惠をうけて、ぐんぐん明るい快方に向つてゆく。瑞枝は何ともしれぬものへの相すまなさを拜むやうに抱かずには居られない。

二本目の蠟燭を點け、壯介のくれた白猫の睡る敷物をとりだして、つつましい思ひで横になつてゐた。光りはこころもとなくゆらいで圍りの鳥の圖繪も胸も塞がりさうにくすぼつてゐる。指をおけば、一羽一羽電氣に觸れたやうに、次々に生きて飛立つ奇蹟はおきないものか。

外を見ると五日の新しい月があり、低い屋並みや木立は、凸凹のある海のやうに、暗くけむつてゐる。空の方が薄明りを湛えて明るんでゐた。その空に續く遠さに、一點赤茶けた乏しげな灯がある。風に吹き消されさうである。

茫々として不思議な、見てゐるとその方へ心を引張つてゆかれさうな景色であつた。長く見てゐるうちに、幾羽とない小さい鶯が、鐵い月の下を翔けめぐる幻想を描いてゐた。鶯らは月の色にけむり、漂渺とうすあかりの虛空をとんだ。

（完）

藤澤發賣元
富士山牌

悪疫猖獗に備へて

アドース

强力新吸著劑

日英米佛特許

哈爾濱・滿洲國立東北防疫處長
醫學博士　星崎相陽氏實驗報告

アドースは各種吸著劑に比し吸著力最も强大、五%にして一時間吸著せしめたる致死量の赤痢毒素を無害ならしめた。大體赤痢の如く大腸下部に至るに從ひ病變强度を增加するものは注腸によつて効力を發揮するが故に余は主に一乃至二%アドースリンゲル液三〇〇乃至四〇〇竓を用ひて良好なる成績を得てゐる

【適應症】一般下痢・醗酵性下痢・鼓腸・急慢性腸カタル・胃酸過多症・胃壊瘍・慢性便秘症・疫痢赤痢・コレラ・腸チフス・食餌中毒・毒物中毒其他各種中毒症等

粒狀　五十瓦入・百瓦入・五百瓦入
錠劑　百錠入・五百錠入・一千錠入
糖衣錠　十五錠入・五十錠入・百廿錠入

奉天市加茂町
大連市山縣通七　株式會社　滿洲藤澤友吉商店　天津日界常盤街
上海密勒路八號

編輯後記

△日本文化への覺醒と再認識はやがて高次の日本文化止揚への前提である。今次世界大戰ほど世界各國の文化をそれぐ\ありのまゝの實力に於て曝け出した機會はない。その結果に於てわが日本文化の優秀性を確認したのは獨りわが國民のみであらうか、單に戰果の顯著さをのみいふのではない、これを擔ひこれを遂行しつゝあるわが日本民族の文化力こそ、今次大戰によつて始めて實證されたる世界驚倒の事實である。今までは日本人自身さへその持つもの、偉大さを知らなかつた。否知るものが尠かつた。然るに大東亞戰はこれを全國民に知らしめた。今までわが家を忘れ外を彷徨してゐたわれく\は元來歸るべき所に復歸し、持つべきものを判つきりと知つた。これが日本文化への覺醒であり再認識である。今やこの日本文化は更に高次の文化に止揚されんとしつゝある。東亞否その必然的過程にある。東亞新秩序から更に世界新秩序への移行は、その指導的地位にある日本文化の外延的のみならず内包的方面に於て必然的に發展を招來せずには熄まぬであらう。何んとなれば新世界史の指導理念は最早決して英米文化ではなく、それは日本文化であり、而も更に世界的に止揚されたる日本文化であるからである。玆にわれく\は將來日本文化が如何に發展するにせよ、その眞髓を的確に把握する必要があるであらう。それは何んであるか、即ちわが冠絕せる國體觀念であり、肇國思想である。即ちこの絕對國家觀こそあらゆる日本文化發動發展の根元をなすものであつてこれなくしては既に日本文化は存在の意義を無くするであらふ。わが滿洲國は既にこの日本精神の外延的發展體として建國し又發展せんとしつゝある。この秋に當り哲學的論理的國家觀の確立闡明は根本的緊急事であつて、森信三氏「現代の國生み」(六十枚)はこれへの眞摯なる一大勞作である。

△田川博明氏「思想戰主體としての協和會」は大東亞戰に直面した滿洲國家に於ける協和會の使命を最も論理的に明快にせるものであり「國民編成の討議」は聖戰完遂のための國民編成に關し各部門に亙り專門的に研究しつゝある建國大學國民編成班の八教授を總動員せるものであつて、謂はゞ新しい型の大學エキステンションとして本誌が讀者に贈る良心的企畫であり、その專門的內容に至つては時局的にも讀者の必讀をお薦めする次第である。

△其他武藤富男　山本守、村山釀造、坂口數雄、北小路功光氏等何れも異色ある讀物である。

藝文　第一卷第七號　六月號
定價八十錢（郵稅三錢）
康德九年五月廿五日印刷
康德九年六月一日發行
發行人　小原克巳
編輯人　石河潔
印刷人　太田信三
印刷所　太田信三商店

誌代
一箇月　八十錢　郵稅三錢
半年　四圓八十錢　郵稅共
一年　九圓六十錢　郵稅共

新京西七馬路一四
發行所　藝文社
電話二一―六九〇五番
振替新京一五一番

配給元　滿洲書籍配給株式會社
全滿、日本、北支各書店にて販賣

○廣告掲載方御用の向は直接本社へ御電話下さい、係員を早速參上致させます。